2017 年度

ペルシア語母語話者の儀礼的相互行為
―日本語による接触場面と母語場面の比較―

千葉大学大学院

人文社会科学研究科

博士後期課程

アキバリ・フーリエ

目次

第 1 章　研究の背景と目的

1.1　研究の背景 ……2

1.1.1　ペルシア語の言語的背景 ……2

1.1.2　ペルシア語における儀礼的場面とターロフ ……4

1.1.3　日本における在住ペルシア語母語話者コミュニティー ……6

1.2　論点と課題 ……10

1.3　研究の目的 ……12

1.4　本論の構成 ……14

第 2 章　先行研究

2.1　儀礼とフレーム ……17

2.2　儀礼的コミュニケーション ……18

2.2.1　待遇表現 ……20

2.2.2　ポライトネス ……24

2.3　ペルシア語母語話者の儀礼的コミュニケーション（ターロフ） ……25

2.3.1　インターアクション研究で見られるターロフの立ち位置 ……29

2.3.2　ターロフと異文化コミュニケーションの研究 ……30

2.4　接触場面研究 ……31

2.4.1　言語管理研究 ……32

2.4.2　儀礼的な接触場面研究 ……36

2.4.3　接触場面におけるペルシア語母語話者の儀礼的コミュニケーション ……37

2.5　本研究における立場 ……38

第 3 章　調査概要と分析の枠組み

3.1　調査概要 ……40
3.2　フィールドワーク ……41
3.3　調査期間と手順 ……42
3.3.1　調査の期間 ……42
3.3.2　調査の手順 ……43
3.3.3　文字化の要領 ……45
3.4　母語場面の概要 ……46
3.4.1　母語場面での録音データの収集 ……46
3.4.2　母語場面での協力者と場面紹介 ……47
3.5　接触場面の概要 ……54
3.5.1　接触場面での録音データの収集 ……54
3.5.2　接触場面での協力者と場面紹介 ……54
3.6　分析の枠組み ……57
3.6.1　儀礼的フレームと会話構造 ……58
3.6.1.1　儀礼的フレーム全体の構造 ……61
3.6.1.2　儀礼的フレームの会話内の構造 ……63
3.6.2　儀礼的発話の分析(分類と量的分析) ……66
3.6.3　接触場面における儀礼的逸脱の分析 ……67

第 4 章　儀礼的発話機能の特定と分類

4.1　発話機能の表出とターロフ場面での儀礼的発話機能 ……70
4.2　基本的儀礼的発話機能 ……72
4.2.1　基本的儀礼発話機能の特徴 ……73
4.2.2　各基本的儀礼発話の定義と分類 ……74
4.3　追加的儀礼的発話機能 ……99

4.3.1　追加的儀礼発話機能の特徴 ……99
4.3.2　各追加的儀礼発話の定義と分類 ……100

第 5 章　儀礼的発話機能の分析

5.1　母語場面における儀礼的発話機能の分析 ……111
5.1.1　母語場面における基本的儀礼発話機能表出頻度 ……111
5.1.2　母語場面における追加的儀礼発話機能表出頻度 ……116
5.1.3　会話構造における母語場面での儀礼的発話機能の出現の位置と会話事例 ……120
5.1.3.1　母語場面における社会文化行動の前後に見られる儀礼的行動 ……120
5.1.3.2　母語場面におけるスピーチ・イベント内の連鎖から見られる儀礼的行動 ……129
5.1.3.3　母語場面における儀礼的発話ペアによる儀礼的行動とその他 ……140
5.1.4　母語場面における考察 ……150
5.2　接触場面における儀礼的発話機能の分析 ……156
5.2.1　接触場面における基本的儀礼発話機能表出頻度 ……156
5.2.2　接触場面における追加的儀礼発話機能表出頻度 ……159
5.2.3　会話構造における接触場面での儀礼的発話機能の表出の位置と会話事例 ……161
5.2.3.1　接触場面における社会文化行動の前後にみられる儀礼的行動 ……161
5.2.3.2　接触場面におけるスピーチ・イベント内の連鎖から見られる儀礼的行動 ……167
5.2.3.3　接触場面における儀礼的発話ペアによる儀礼的行動とその他 ……176
5.2.4　接触場面における考察 ……181

第 6 章　接触場面における儀礼的な逸脱の分析

6.1　母語場面の分析から見られる接触場面での儀礼的な逸脱 ……187
6.1.1　スピーチ・イベントにおける逸脱 ……187
6.1.2　対人関係における接触場面での逸脱 ……194

6.1.2.1　初対面場面における逸脱 ……194
6.1.2.2　社会的役割関係の理解認識から表れる逸脱 ……195
6.2　接触場面で独自に表れたストラテジーから見られる逸脱 ……197
6.2.1 日本語母語話者の儀礼的な応答達成の期待から表れる逸脱 ……197
6.2.2 依頼場面に表れる儀礼的な逸脱 ……199
6.3　第三者評価からみた接触場面での儀礼的な逸脱 ……203
6.3.1　第三者評価者のデータ概要 ……203
6.3.2　第三者評価の分析結果 ……204
6.3.3　第三者による逸脱の評価と規範 ……205
6.3.4　逸脱の分析 ……207
6.4　考察 ……214

第 7 章　結論

7.1　各章の要約とテーマの相関 ……219
7.2　考察の結果 ……220
7.2.1　儀礼的な母語場面における傾向 ……220
7.2.1.1　ペルシア語母語話者の儀礼的言語行動の機能の特徴 ……220
7.2.1.2　会話における儀礼的言語行動の調整ストラテジー ……222
7.2.2　儀礼的な接触場面における傾向 ……225
7.2.2.1　接触場面におけるペルシア語母語話者の儀礼的発話機能 ……225
7.2.2.2　接触場面でのペルシア語母語話者の逸脱と管理 ……227
7.3　本研究の応用 ……230
7.4　今後の課題 ……232

《参考文献》 ……235

謝　辞

本稿が完成するに至ることができたのは、多くの方々のお力添えがあってのことです。ここにより厚く御礼申し上げます。

まずは、工学系の学部に所属し、接触場面研究の世界を知らなかった私を暖かくお受け取り頂きました指導教官の村岡英裕先生に心から深く感謝申し上げます。先生には、新しい研究の扉があることを気づかせて下さり、本研究テーマの段階から、研究の進め方や論文の書き方など長い時間にわたり、未熟な私にひとかたならぬご指導とご助言をして下さいました。研究を進めていくにあたって、心が折れそうになった際には先生の貴重なご指導やお言葉がいつも私を「前向き」な姿勢にしてくれました。どれほど言葉を尽くしても足りないほど、感謝しております。最後まで本当にありがとうございました。また、副指導教員であった高民定先生には、いつも明晰かつ厳密に、そして丁寧で温かいご指導をいただきました。謹んで感謝申し上げます。審査委員の先生方、吉野文先生、そして西阪仰先生には、本論文の完成にあたり、御専門のお立場から、多くの的確なご助言を賜りましたことを御礼申し上げます。日本語教育合同ゼミの佐藤尚子先生、西住奏子先生には日常の議論を通じて多くの知識や示唆を頂き心から感謝申し上げます。

本研究を遂行するにあたり、いつも有意義な議論および親切にアドバイスしていただいた院生の先輩（雛暁依さん）や仲間（崔英才さん、ミラー成三さん、孫ミナさん）をはじめとしたゼミの皆様に深く感謝申し上げます。論文の日本語校正を引き受けて頂きました海田皓介先生と大塚萌先生には、日本語の支援のみならず研究に対する貴重なご助言もして頂きましたことを心より感謝申し上げます。

博士論文を書き上げられたことに対して、これまで協力して下さったみなさま、日本での留学生活をつねに暖かく見守ってくださり、支えて下さった友人の方々に改めて謝意を表します。

最後になりましたが、私の研究生活を理解し背中を常に押し続けてくれた父と母そして夫

に感謝したいと思います。彼らの支援がなければここまで来ることはできませんでした。本当にありがとうございます。

アキバリ・フーリエ

第１章

第１章　研究の背景と目的

1.1　研究の背景

本章では、本稿全体の研究背景と研究目的を明確にする。本研究はペルシア語母語話者の儀礼的なインターアクションに注目する。彼らの母語場面での儀礼的な言語行動に焦点を当てるのと同時に、日本語母語話者との儀礼的な接触場面も見る。そこで、本章では、本論での研究対象であるペルシア語母語話者の言語的背景や彼らの儀礼的行動の背景について概観する。また、簡単に接触場面の対象者である日本在住のペルシア語母語話者のコミュニティーも紹介する。こうした前提を踏まえたうえで、本章の最後において本稿全体の流れと構成について記述する。

1.1.1　ペルシア語の言語的背景

ペルシア語(ペルシア語、ペルシア語: فارسی‌پارسی Fārsī, Pārsī)は、イランを中心とする中東地域で話される言語である。ペルシア語、ファールシー語、パールシー語とも言われている。言語学的にはインド･ヨーロッパ語族－インド･イラン語派－イラン語群に分類されている。

おもにイラン・タジキスタン・アフガニスタン及びウズベキスタン・ロシア・コーカサス地方・バーレーン・イラクの一部でも話されており、母語話者は 4600 万人を超えるとされている。イラン、タジキスタンでは唯一の公用語とされ、アフガニスタンではパシュトー語とともに公用語とされている。

ペルシア語での名称である「فارسی(ファールシー)、日本語での名称である「ペルシア語」、英語での名称である「Persian」は、いずれもファールス地方に由来する。

10 世紀以降に中央アジアを支配したテュルク系民族は、ペルシア語を行政用語とし、ペルシア人の官僚を使用した(坂本 1996)。

フェルドウスィー(イランを代表とする詩人)の頃のペルシア語(10 世紀)にはアラビア語の影響は少なかったが、時代が下るにつれてアラビア語からの借用語が増え、また文語と口語の間の差が大きくなった(جزظری(jazayeri)1999)。

イラン地域での方言

現代のイラン社会では、国の様々な地域でルーツの異なる民族が暮らしている。もちろんイランに暮らしている限り、彼らにとっても公用語はペルシア語であるが民族により異なる方言が話されている。以下は現代ペルシア語の様々な方言である。

(1) イラン中部方言

(2) カスピ海地方方言

(3) 北西部地方方言

(4) 南西部地方方言

(5) 南東部地方方言

(6) クルド方言

(7) ザザラやグーラー二語(クルド語方言の一種)

(8) バローチ方言

(Rezaei bagh bidi2009)

従って、日本在住のペルシア語母語話者もイランのどの地域の出身であるかによって、その出身地域の方言を使用していることが考えられる。特に、テヘランの下町に住む商人などは北西地方方言話者であるトルコ系が多く、彼らの共通語としてトルコ語が使用される。80年代後半に日本に移住したペルシア語母語話者は、テヘランの下町の少年や青年が多かったため、彼らの間では北西地方の方言で会話が交わされていることが多い。

しかし、本調査者のように、いわゆるトルコ系ではなく、トルコ語を理解しないものに対しては、共通語であるペルシア語で会話が交わされる。

このように、イランのどの地域出身であるのか、どのような方言を母語としているかは、儀礼的場面で重要とされる社会言語的な部分(タールフなど)には影響を与えないと考えられる。

1.1.2　ペルシア語における儀礼的場面とターロフ

ペルシア語を母語とする発話者の形式化された言語・非言語行動が期待される場面を、ペルシア語母語話者の儀礼的場面として定義づけたい。そこには、一定の秩序立てられた行動が起きている。その秩序立てられた行動には、規則性があり方略があると考えられる。

またその儀礼的場面には段階性が存在している。例えば、2 人の発話者のみで作られる電話場面においても、儀礼的行動がある。あるいは、大人数の参加者から成り立つパーティー場面においても適切な行動が期待される。儀礼的場面の段階性とは、同様の場面であろうと、会話の参加者同士の関係がどのようなものであるか、またそこでの話題がどのようなものなのかにより、インターアクション内の儀礼のレベルが左右されると考えられることを指す。

一般的に儀礼場面において、各社会に共通する普遍的な特徴がある中で、その社会特有の儀礼的言語行動も存在する。それが、ペルシア語母語話者にとっては「ターロフ」であると考えられる。社会的連係につながるターロフの使用は、社会的な上下関係を強く重視する(Willber(1976:121))。 相手への気遣い、心遣いを言葉の中に示すことこそが、ペルシア語母語話者の相手の発話者への儀礼である[1]。

ターロフのコミュニケーション機能

どのような社会においても、フォーマルな場面と比較的緊張感が少ないと考えられるインフォーマルな場面がある。この両方の場面において、会話の参加者は異なったコミュニケーションスタイルを見せる。また、各社会においてはどのような場面でも円滑なインターアクションの維持が期待される。その期待に応えるために、人々はそこの社会に合った、自分たちの独特なコミュニケーションスタイルを作るようになる。

日本社会において相手に対し敬意を示すことが期待される儀礼的な場面では、慣習的な挨拶、お世辞、社交辞令を述べるなどの独特のコミュニケーション・ストラテジーが現れるが、

[1] ターロフに関する詳しい詳細は、第 2 章を参照。

これはペルシア語母語話者の社会においても同様である。ペルシア語母語話者の社会では、こうした独特な言語行動・非言語行動を含んだ社会的言語行動を「ターロフ」(تعارفTaarof)と呼ぶ。日本語には「ターロフ」に直接相当する語彙は見当たらないが、دهخدا(dehkhoda)(1947: 80)は、これについて「互いを知る/認める、今日では、対面の際の歓迎の挨拶/親交や機嫌伺いの表現、パーティーに招待する、また贈り物をする」という説明を付している。また黒柳の『ペルシア語辞典』(1998)では、「ターロフ」を「儀礼的な挨拶(言葉)/儀礼、贈り物、おべっか/お世辞/追従」と定義している。

ターロフはペルシア語母語話者同士では重要なコミュニケーション機能を持っている。この機能と特に 関連が深い要素として、吉枝(1994:93)は以下の点 を挙げている 。

(1) 使用場面および伝達内容

タアーロフ[2]では、相手とより良い関係を築いていくことが重要視されており、必ずしも情報の伝達に重点が置かれているわけではない。このため、タアーロフは相手とのコミュニケーションが特に重要視される場面や、談話における opening, closing, turn-taking などの箇所に頻出する傾向がある。

(2) 地位差

タアーロフでは何らかの尊敬 ・謙譲表現によって地位差が示される場合、実際の地位差と比べ、話し手側はより下位に、受け手は上位に置かれ、強調された地位差に対応する表現が用いられるという特徴がある。このため、地位差が小さい二者間では、本来と逆転した地位差が表される。

本研究において、儀礼が見られる接触場面で問題が発生する主な理由がこのターロフ習慣の存在にあると考える。本稿はこの点に鑑み、ターロフが見られる場面を対象に詳細な分析を行う。

[2] 吉枝による Taarof のカタカナでの記号（タアーロフ）は著者のターロフと異なるが同一の単語である。

1.1.3　日本における在住ペルシア語母語話者コミュニティー

一般的に、コミュニティーとは社会の中において「(財産、権利、趣味、思想などの)共有、一致」「社会的交わり」といったある状態を指す一方で、このような状態にある人々の集まりを意味する(中村 2008:26)。法務省(2015)の報告によると、イラン人のコミュニティーは、ムスリムが多数派を占める国の出身者の形成するコミュニティーとしては日本第 5 位の人口を持つ。

そこで、日本在住のペルシア語母語話者を、彼らが経験している日本の社会的背景の影響を考え、彼らの来日時期により大きく 3 つのグループに分類した。実際にデータ収集のためにフィールドワーク調査を行った際には、ペルシア語母語話者のコミュニティーの種類には、来日時期が大きく影響していることが明らかとなった。

以下に、この 40 年間にわたるペルシア語母語話者の来日傾向を概観する。イランと日本の両国政府機関の関係やそれぞれの時代の社会的背景や問題などに大きく影響され、彼らの来日の傾向には波があることが分かる。

日本在住イラン人のコミュニティーを来日時期により、以下のように分類する。

(1)　イラン革命(1979 年)以前

(2)　1980 年代半ばから 1990 年代半ば(東京上野公園でのイラン人の時代)

(3)　2000 年代以降(学生や研究者の増加時代・イラン人高学歴化時代)

(1)と(2)の時期に来日したペルシア語母語話者の中には、(3)のグループが来日した時期にも継続して日本に滞在している者も多い。ここから、それぞれの段階で来日したペルシア語母語話者の言語使用が、次世代に影響していることが指摘できる。

(1)　イラン革命前

イラン革命(イスラム革命とも呼ばれる)は、イラン・パフラヴィー朝において 1979 年に

起こった、イラン史上最大の革命である。この革命の特徴は、「イスラム共和制」(吉村1995:175)をメインとする国家が樹立されたことである。

そのような背景から、革命前の王政期に日本へやって来たペルシア語母語話者の多くは、革命以前の王政を支持している。その中には、大使館職員などの政府関係者や貿易、石油関係に携わるビジネスマンも多くいた。筆者は都内で行った現地調査にて、革命前から日本で絨毯のビジネスに携わっていた、ある絨毯屋のオーナーと話をしたが、彼は反政権派であり、現在のイラン政府を批判していた。このように、政治的な理由で日本への永住を選択した者が多い。

40 年近く日本で生活している彼らの中には、本研究のインタビューデータから判断する限り、いまだに日本語の読み書きに不安を抱いている者もいる。

彼らは日本人と親密な関係を築いているが、前述のペルシア絨毯のオーナーの場合、高度な日本語力が必要とされる場面では、自社の日本人社員に全てを任せているようであった。さらに、彼らは商売のため、高い言語能力より高いコミュニケーション能力を重視しているようである。

(2) 1980 年代半ばから 1990 年代半ば(東京上野公園でのイラン人の時代)

日本におけるイラン人の数が急増し、来日者の人数が増加してきたのが 1988 年のイラン・イラク戦争休戦後のこの時代である。また、イラン人コミュニティーが一般的に日本社会で知られるようになったのもこの時代からであると考えられる。日本の良好な経済状態についての話がイラン本国にいる人々の間で広まり、ビザ相互免除協定を利用して来日し、職を見つけ居住するイラン人が増加していった。

イラン人コミュニティーの集う拠点として最初に利用されたのは公園である。もっとも利用された場所は上野公園と代々木公園であった。彼らは日曜日ごとに公園に集まり情報交換などを行っていた(梶田(1996:22))。

同様に Morita(2003:160)は、時間の経過とともに在日イラン人コミュニティーにおける公園の重要性は失われたと述べている。

1990 年から 1994 年の 5 年間における在日イラン人の総数については、法務省入国管理局から公表されている超過滞在者の推定数の統計から以下のような内訳になる。1990 年 7 月の時点ではわずか 1000 人にも満たなかったが、約 10 ヶ月で 1 万人を超え、さらに 2 年後の 1992 年には最多の約 4 万人へと急増した。この事態に対応するため、政府は 1992 年にイラン人来日者急増の一因となったイランとのビザ相互免除協定の停止に踏み切った。その結果、イラン人の新規入国は激減した。

また、梶田(1996:103)は、経済的動機によって移動するという意味で彼らを「経済的人間」と呼んでいる。しかし、同時に彼らは「社会的・文化的人間」でもあると述べている。外国人が特定の国で労働し生活するためには、何よりも言語の理解が必要となる。なぜならば、言語理解の程度によって労働の範囲も大きく制約されるからである。従って、外国人が日本で最初につきあたる問題は、日本語の難しさであり、それを克服することが大きな課題となる。

1990 年代の傾向としては、短期間で何万人もの人々が来日し、そしてある時期に彼らが急速にイランへ帰国したことが挙げられる。現在 20 年以上日本に長期滞在しているペルシア語母語話者の大半はこの時期から日本に居住している。彼らの多くは日本で結婚しており、永住権を持つ者も多い。彼らの主な仕事としては、ペルシアレストラン・スーパーマーケットの経営者、絨毯関連の営業職、または日本の企業で働くビジネスマンなど幅広い。来日当時 20 歳代であった彼らは、現在 40 歳代後半、50 歳代半ばである。

(3) 2000 年代以降(学生や研究者の増加時代・イラン人高学歴化時代)

この時代は、イラン革命や戦後の不安定な状況とは一変しイラン本国の状況が安定してきたのと同時に、人々の暮らしが再び豊かになった時代である。イランの高学歴化が非常に高く評価され、多くの若者が世界各国に留学へ行く傾向を見せた。その波に乗って、アジアへ

の留学を目指すペルシア語母語話者のイラン人学生の多くが先進国である日本への留学に関心の目を向けた。

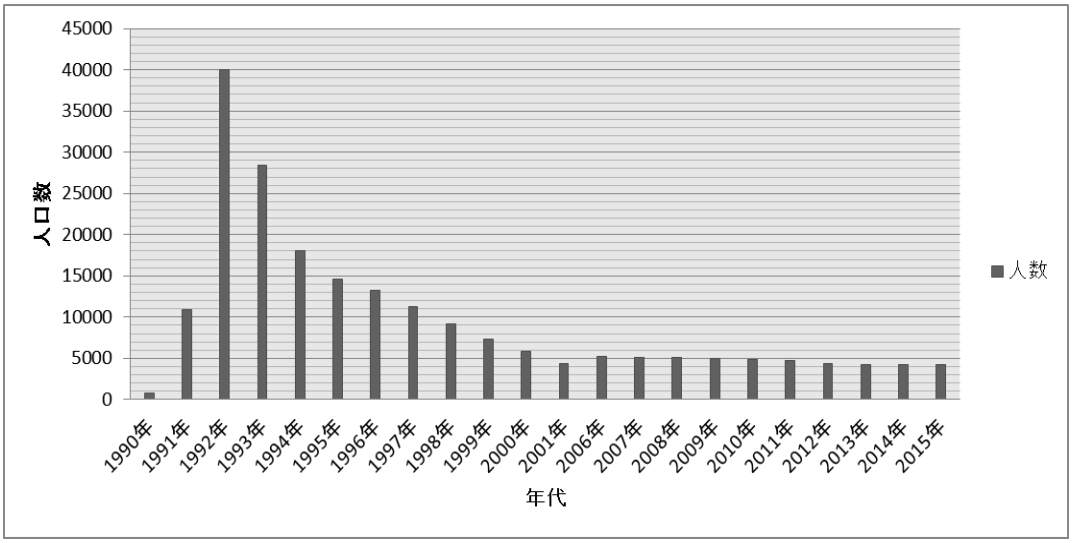
2015 年の政府統計の調査結果によると、その時点まで登録された数だけでも、220 名のペルシア語を母語とする留学生が日本に在籍している。また、59 名の教授と 11 名の研究者が在職している。学生・研究者グループのコミュニティーは、彼らが私費による留学・滞在であるか、国費によるものであるかに大きく影響されていることが、本研究の調査結果から明らかとなった。また、国費留学生の場合においても、イラン政府からの国費留学生であるか、または、日本の文部科学省からの国費留学生であるかによって分かれる。

彼らの日本語習得に関しては、文部科学省の国費留学生である場合、半年から 1 年間の期間にかけて日本語指導教育期間が設けられる。一方で、イラン政府の国費留学生は、帰国後、イランにおいて研究に従事することが取り決めてられていることから、言語習得より先端技術に関心を持ち、学位の取得に重点をおいている。そのような背景もあり、イラン政府からの国費留学生は独自のコミュニティーを作っている。

現在イラン人留学生の最大のコミュニティーとして、「イラン学術協会(ASIJ)」が挙げられる。2009 年頃設立された ASIJ は年に一度、分野を問わず日本で研究に励んでいるイラン人留学生や研究者に研究発表の場を提供している。

2000 年代以降に来日したペルシア語母語話者の特徴として、それまでとは異なる点は女性研究者の進出が挙げられる

下の【グラフ 1-1】は、政府統計総合データに基づく、15 年間にわたる在日ペルシア語母語話者数である。



【グラフ 1-1】15 年間にわたる年代別の在日ペルシア語母語話者の人数

【グラフ 1-1】のように、ペルシア語母語話者の来日人口は 1991 年から 1992 年にかけて急増する。しかし、1992 年をピークに 2001 年までは減少傾向であることが見られる。その後、2000 年代からは、ほぼ一定数に保たれている。

1.2　論点と課題

イランは昔から日本と親密な関係を保っている。2016 年 6 月末の日本政府による法務省の統計によれば、日本におけるイラン人合法滞在者の人口は 3,993 人である。一方イランの日本語教育機関(テヘラン大学など)においては、2014 年度の国際交流基金の統計によると 245 人の学習者がいる。イランにおける日本語学習者数[3]は毎年増加しつつあり、彼らは日本語を将来に活かしていくことを期待されている。しかし、両国民の間ではこのように日々交流が行われているにもかかわらず、これまでの研究ではイラン人(ペルシア語母語話者)と日本人(日本語母語話者)の接触場面という観点から両国の問題を分析、考察している例は見られない。

1990 年代後半までのイランの日本語教育では、聞く・話す・読む・書く・訳すの実技のみ

[3] 2016 年度国際交流基金公式サイト
(http://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/area/country/2014/iran.html)参照。

に重点が置かれており、日本語母語話者とのコミュニケーション能力の育成という観点は取り入れられていなかった。しかし近年、日本語教育の目標は、日本文化の文脈に根差した日本語コミュニケーション能力の育成であると認識されるようになった。したがって、日本語母語話者とのコミュニケーションを達成するためには、日本語の文法だけではなく、日本語母語話者の習慣や考え方などの行動様式を学習し、理解しなくてはならないと金本(2009)は述べている。

ここで解決すべき課題は、このように重視されている日本語によるコミュニケーション能力を、どのように日本語を学習するペルシア語母語話者に提示するかということである。またそれ以前に実際の文化間の場面(接触場面)において、どのような問題が生じているのかを検討する必要がある。ネウストプニー(1995)が指摘するように、異文化間の接触場面では、単に文化同士の接触が起きているだけではなく、同じ文化をもつ者同士の場面(母語場面)では見られない特徴が多く見られる。このことは、日本語母語話者と日常的に接触しているペルシア語母語話者に対して筆者が以前に行ったインタビュー調査からも見受けられた。

たとえば、ペルシア語母語話者と日本語母語話者の接触場面において、ペルシア語母語話者同士の母語場面であればターロフが産出されると予想される儀礼的場面において、参与者がペルシア語母語話者と日本語母語話者という文化的背景を異にする話者同士であったために、コミュニケーション上での問題が生じていた。このような経緯から、接触場面と母語場面のインターアクションを分析することで様々な問題点を指摘し、その解決策が得られると考えられる。

一方ペルシア語母語話者同士の会話については、ターロフのような特殊な儀礼的ストラテジーが維持されているにも関わらず、イランの研究者が会話分析の視点から儀礼的場面の言語行動を分析した例は未だほとんど見られない。先行研究においては、ペルシア語母語話者がそもそもどのような場面を儀礼的であると認識しているのか、そこではどのようなコミュニケーション・ストラテジーが働いているのかが主な課題とされてきた。

そのため、まずペルシア語母語話者同士の儀礼的場面での特徴を精密に検討してから、次

に同様の特徴を持つ接触場面において、ペルシア語母語話者と日本語母語話者との儀礼的場面に注目した。

Hymes (1967; 1972)が指摘するように、コミュニケーションにおいては文法的に正しい文を生成する言語能力のみならず、場面や相手に応じて適切に言語を使用する能力が活用されなければならない。本研究の対象のように儀礼が認識される場面においては、相手の会話参加者に気を配り、場面の雰囲気や状況の調和を維持するために、言語・非言語表現の選択に発話者が悩まされることが多くある。これは母語場面ではもちろんのこと、外国人との接触場面になるとなおさら困難になる場合が多い。

1.3 研究の目的

本研究では、特に両国の文化で重視される儀礼的場面を対象に考察を行う。ゴッフマン(1986:xi)によれば、人々の対面状況はそこに共に暮らす人々が状況にふさわしいふるまいをすることによって維持される。さらに、状況にふさわしい相互行為は、人々が場や状況にふさわしくあるための「配慮」(敬意とふるまい)によって支えられており、そのような道徳的な要請のひとつをを保証しているのが「儀礼」である。どの社会でも儀礼は当然存在するものであり、その形式や価値観は文化毎に多少異なることが実状であると考えられる。

本調査では、以下の点を明らかにすることを目的とする。

インターアクションにおけるペルシア語母語話者同士の儀礼的な要素と規範

母語場面に注目することで、ペルシア語母語話者同士の儀礼が産出される箇所はどこであるのか、その場面において、どのような要素が表れるのか、また、各要素の自然会話での産出頻度を検討する。つまり、ターロフを生成する要素は何か、それをペルシア語母語話者はどのようにインターアクションの中で表現しているのかを探ることが目的である。また、儀礼的な要素を明らかにしていくことで、ペルシア語母語話者の儀礼場面におけるインターアクション上の規範が何であるのかも明確になると考えられる。儀礼的な母語の規範がどのよ

うなものであるのかによって、母語規範が接触場面での言語調整にどのような影響を与えているかをよりよく把握できると考えられる。以上のような理由から、母語場面内での儀礼的行為の特徴、儀礼に対する発話者の意識などをインターアクション内において考察する必要がある。

ペルシア語母語話者の儀礼はどのような関係において最も使用されるのか

「儀礼」に対して高い意識を持つ社会の構成員が、「誰」に対して、儀礼的な言語行動をより発話するのかを考察する。会話参加者同士の関係が儀礼の産出頻度、そして儀礼の表れ方にどのように影響しているのかを考察対象とする。その際、先に母語場面における彼らの儀礼的な対人関係を明確にしてから、接触場面においてはどのように対人関係に対する意識が変化するのか、そこでどのような調整が現れるのかを明らかにする。

日本語によるペルシア語母語話者の儀礼的要素の表れと特徴の把握

次にペルシア語母語話者の日本語母語話者との接触場面での「儀礼」に焦点を当てる。まず、接触場面における儀礼的な要素がどのようなものであるのかをインターアクションの中で検討する。それと同時に、ペルシア語母語話者が日本語による日本語母語話者との儀礼的な場面において、どのように儀礼の要素を発話の中で産出されているのかを考察する。儀礼的な要素の考察視点としては､各場面においてどのような頻度で儀礼を産出しているのか、つまり、どの場面で、どのように儀礼が表れるのか、そして、誰に対してより儀礼的な行動を見せるのかを検討する。

接触場面におけるペルシア語母語話者の儀礼的な言語行動の問題

日本語による接触場面においても、ペルシア語母語話者は母語場面と同様の言語の調整をしているのか、また、母語規範からの影響として調整を行っていると判断された箇所においては、どのような問題がインターアクションの中でおきているのかを考察対象とする。

最後に、母語規範からの影響以外にどのような要素がペルシア語母語話者の儀礼的な言語

行動の調整に影響をもたらしているのかを探る。ここでは、第三者の評価も取り入れ、問題を詳細に分析する。

1.4　本論の構成

本論文は 7 章から構成されている。第 1 章、第 2 章では、本研究の主なる分析の前提となる基本の概念を扱う。第 1 章では、本論文の研究背景と論点、研究の目的について述べた。第 1 節ではペルシア語母語話者の言語背景や彼らの儀礼的行動に対する需用を紹介した。それに続いて、日本在住のペルシア語母語話者の言語使用を本研究でどのような視点から考察していくのかを俯瞰した。第 2 節では研究の論点と課題を述べ、そして第 3 節で、本研究の目的についてまとめた。

第 2 章においては、本研究で扱う用語の定義、接触場面についての理論とその主要概念を提示する。第 1 節では、本研究のテーマで重要な役割を担う儀礼とフレームについて、従来の研究者からの視点を導入する。第 2 節では、儀礼的コミュニケーションとはどのようなものであるか、待遇表現とポライトネスに焦点を当て紹介する。また第 3 節では、ペルシア語母語話者の儀礼的コミュニケーションを従来の研究者からの立場で考察する。最後に、接触場面研究とそれに関わる需要な要素と視点を把握する。

第 3 章は本調査のフィールドの背景および調査概要について記述する。データ収集の方法や研究手段、各場面の被験者の紹介を行う。第 6 節では、分析の枠組みについて、儀礼的フレームと会話構造の関係、そしてその詳細を詳述する。

第 4 章では、本研究で大きな分析の枠組みとなる、儀礼的発話機能について言及するとともに、各発話機能の定義や特徴を紹介する。それに基づき、第 5 章と第 6 章では、自然会話から収集したデータについて、質的あるいは量的分析を行う。

第 5 章の前半では、まずペルシア語母語話者同士の母語場面での自然会話による分析を行う。ターロフが存在する儀礼的場面で、実際にペルシア語母語話者がどのように自らの言語をコミュニティーの中で調整しているのかを探る。その分析からは、相手との親密さや付き

合いの長さなどによって、言語調整や言語選択が異なっていることが明らかとなる。また、彼らの会話分析の結果からペルシア語母語話者の儀礼的母語規範を明らかにする。章の後半では、接触場面内において同様にペルシア語母語話者の儀礼的な言語行動について探る。ペルシア語母語話者の儀礼的フレーム内で、どのような儀礼的行動が見られ、誰に対しどう儀礼を発話の中で表現しているのかについて、量的そして質的に分析する。

第 6 章では、本研究の中心課題である、ペルシア語母語話者と日本語母語話者との間の接触場面での逸脱の分析を行う。第 1 節では、儀礼的表現の使用頻度から見た言語問題を見る。それに続いて第 2 節では、母語場面の分析結果を参考にペルシア語母語話者の逸脱をとらえる。そこからは、母語規範からの転移と推測される箇所で逸脱への留意が現れている場合や、接触場面内であるために独特な儀礼的調整が表れ逸脱につながる場合もある。最後の第 3 節では、第三者評価からみた接触場面での儀礼的な逸脱とその評価を見る。

最後に第 7 章では、本研究で行った自然会話分析の結果を基に、儀礼的な言語行動が考察される接触場面での総合理論の構築を目指す。儀礼的接触場面におけるペルシア語母語話者同士のアプローチを考察し、理論化へのモデルを形にする。このような儀礼的場面の「総合論的理論」の構築を試みる点は、先行研究には見られない、本研究の独自のものである。

第 2 章

第 2 章　先行研究

本章では、本研究でキーワードとして使用する様々な術語を定義し、それぞれの規定をめぐる問題点について検討する。まずは、本研究において重要な役割を担う「儀礼的コミュニケーション」について考察する。次に、コミュニケーションが儀礼的になることに影響を及ぼす待遇表現やポライトネスの概念などを見る。そして、ペルシア語母語話者の儀礼的コミュニケーションで重要な役割をもつ、ターロフの詳細とその先行研究について述べる。また、接触場面研究がどのようなものであるのかを概観介した後、最後に本研究立場について考察する。

2.1　儀礼とフレーム

本論では、社会学的アプローチによる Goffman ゴッフマン(1974:21)の提唱した「フレーム」の概念を用いる。Goffman によれば、「フレーム」とは、「人が自ら「いま・ここ」で経験する活動や出来事を組織だった形で理解するにあたって依拠するいわゆる「頭の中」の認知的なスキーマ(図式)だけではなく、同時に人々がコミュニケーション的な道具立てを使い、共同の活動を組織化する際に実際に使われる相互行為的な「状況の定義」である。　その状況でのフレームに対する認識には、一人の参加者のみではなく、場面に参加している参加者同士の同様の理解(今、この状況で自分たちが何を行っているか)が必要とされる。

本調査の対象は儀礼的なフレーム内での相互行為であるが、これを一般の日常会話と比較すると、「マナー」や「その社会における規範」がより強く反映されると考えられる。従って、異文化間コミュニケーションにおいては、それぞれの参加者の儀礼に対する認識が異なる場合、儀礼的という場面のフレームに対する意識のずれが生じ、儀礼行動へ移るスタート時点で衝突が起きる可能性も考えられる。一方で、儀礼的フレームに対しての認識が正常に判断されれば問題の減少が予想される。

2.2　儀礼的コミュニケーション

そもそも、儀礼的コミュニケーションとは何か。儀礼的なコミュニケーションは人類に共通して存在するものである。つまり、「人間とは徹底的に儀礼的な動物であり、社会は徹頭徹尾、儀礼的な社会なのである(今村 2007)」。竹沢(1987)は、宗教的儀礼や伝統的な習俗や祭りから、日常的な挨拶や儀礼作法を含む定型化された立ち居振る舞い全般にいたるまで、人間の生活は一見したところ「すみからすみまで儀礼に取り囲まれている」と主張する。

つまり、過去に定義されていた儀礼とは、宗教的な儀式や儀礼的行いが主であった[4]。しかし、現在においては時代の流れとともに人々の儀礼に対する形式やスタイルも変化してきている。石井他(2003)は日本社会の儀礼について、日本社会の生活様式の変貌が儀礼に影響していると述べる。また、谷口他(2014)は、日本人の一生において、出産祝い、七五三、成人式、長寿祝い、葬送などといった「通過儀礼[5]」に注目している。以上ようなの「通過儀礼」は日本のみではなく、世界各国においても存在しており、その中で行う儀式や行動は多様である。

ようするに、儀礼的行動へのアプローチは、宗教的と非宗教的儀礼の二つの観点から考えられる。しかし、本研究で儀礼として捉えるのは、竹沢(1987)が述べる、「日常的な挨拶や儀礼作法を含む定型化された立ち居振る舞い全般」である。

宗教場面以外に見られる儀礼を、専門的にはファティック・コミュニオン[6]と呼ぶ。たとえば、朝の挨拶の「おはよう」などである。この種のコミュニケーションは繰り返し行われるものであり、それゆえ、「十分に予測でき」、「形式的な意味合いが強く」、「実質的な意味合いは弱い」ものであるという説明が与えられる。倉持(2008;2013)は、情報のやり取りのためではなく、人間関係の構築と保持のための行動である挨拶をファティック・コミュニオン(交換言語)の代表的なものであると捉えた。

---

[4] ゴッフマン(1986:54)は、一般的に用いられ、文化人類学者が考える「儀礼(セレモニー)」は、宗教的情緒が感じられる厳粛なものであると考える。

[5] 民俗学では、人の一生に関わる儀礼を「通過儀礼」という概念(フランスの人類・民俗学者 A.ファン・ヘネップの提唱した用語による)で捉えてきた。

[6] phatic communion とは、英国の人類学者マリノフスキが、情報のやり取りが目的ではない言語行動を phatic communion と名づけ, それを言語学者ローマン・ヤーコブソンが言語の六つの機能の一つと して取り上げることで, 言語学の世界に広まった。

従って、現在では、儀礼的行動を「挨拶」として捉える考え方が強いようだ。しかし、日々おこなう「挨拶」は社会と文化的な違いに影響され変化する。つまり、「挨拶は誰でもできる行為だと思われがちだが、実際には、決して容易なことではない(青木 1988:14)。「挨拶」には、「自分」以外の「他者」との接触をいかにスムーズに行うかという配慮が常に働いている。この配慮は社会生活の中で大きな部分を占めており、それを青木(1988:18)は「人間的な配慮」のみならず、「文化的な配慮」であるとも述べている。本研究においては、相互行為における儀礼、そしてそこから生まれる配慮的行動は、「挨拶」場面のみで現れるのではなく、コミュニケーション上の多様な場面に存在していると考える。

以下では、本研究で儀礼として考えるものに近い定義を紹介する。

社会学者 Goffman (1967;1972)によれば、人間と人間が接触して織り成す相互行為は数々の儀礼行為から成り立っており、挨拶のような行為は「相互行為的儀式」と呼ばれる。

S ・J ・タムバイアは、ラドクリフブラウン記念講演の中で、儀礼(ritual)を次のように定めている。一般的な定義において、儀礼の基本的な意味とは、一定の形式にのっとった規律のある行為・礼法のことである。 Tambiah (1985:128)では、儀礼とは「文化的に体系化された象徴的コミュニケーション」(“a culturally constructed system of symbolic communication”)であると述べている。それに従うならば、我々の日常的な体験の大半は、実は「儀礼的なもの」のカテゴリーに収まってしまうことになる。

そして、清水(1988)は、「形式化されたパフォーマンス」を儀礼的なもの一般として捉えている。従って、儀礼のひとつのキーワードとして「形式的な言語行動」が考えられる。形式的な行動は、長年に渡り文化の中で根付いているものであるからこそ、様々な文化においても相互行為内でその儀礼的な習慣が表れやすいと考えられる。

G. Leech (1975：334)は、人間のコミュニケーション行為を①合理的・技術的行動、②伝達的行動、③呪術的行動の三つに大別し、②と③を儀礼的行動とし、儀礼的行動と日常行動とを区別した。また彼は、「人間のとる形式的行動の多く」を儀礼(ritual)と名付けた。

以上の先行研究の定義から、本研究では、「挨拶」のような形式化された言語行動も含めて

儀礼的な言語行動として定義づける。

各文化の儀礼的行動がその文化独特のものであるとするならば、特定の社会構造の中で生きる社会の構成員は、儀礼を通して社会的アイデンティティを確認、再確認する(Malinowski1922;Radcliffe-Brown1922)。Raymond(1967)も、儀礼は「アイデンティフィケーション」の機能があると指摘した上で、「挨拶」のような行為の特徴を挙げ、そこには、個人が他人と同じ社会交流の枠組みを共有していることを互いに確認し、次の行動へと移ることができるようにすると述べている。

つまり、人々が生まれ育つ社会での儀礼的行為は習慣として日常生活に浸透していると考えられる。そのため、移住先の社会で異なる言葉でこれまでの形式とは違った儀礼的行為をする場合、負担が大きくなる。

以上の諸研究の分析を踏まえると、儀礼的行動の大きな特徴として、その大半は「形式化・パターン化」されていることが挙げられる。そのため、その形式を学べば比較的習得しやすいと考えられるが、異文化間の接触の場合には、それぞれの形式が異なることから問題が表れるのではないかと考えられる。それに加え、実際に儀礼的な形式はどのような要素に影響されるのか、儀礼的なパターンを習得さえすれば問題が発生しないのかなど、様々なことが疑問視される。

そして最後に、儀礼は個人の社会的アイデンティティとしても役割を果たしており、その個人のアイデンティティを守る役割も果たしていることも指摘できる。

2.2.1　待遇表現

儀礼的なコミュニケーションが見られる場面においては、「待遇表現」が重要な役割を果たす。なぜならば、待遇表現の使用は、場面の儀礼度をあげる役割をもつことができる、あるいは、儀礼的なフレームでのインターアクションにおいては、待遇表現が使用されやすくなるためである。つまり、待遇表現は儀礼的要素のひとつであると考えられる。

以上から、本研究では、儀礼的フレーム内で表れる待遇表現が場面の儀礼度合いに影響しているとみられる場合には、待遇表現に注目する。

蒲谷他(2002:15)は、「待遇表現」とは、「表現意図」をもった「表現主体」が、「自分」と「相手の人物」の相互の「人間関係」〈どういう関係にある誰と誰がコミュニケーションするのか〉や「場」(どのような文脈・状況においてコミュニケーションするのか〉を認識し、「表現形態」を考慮した上で、「題材」「内容」〈どういう意味・内容を伝え合おうとしてコミュニケーションするのか〉を選択し、適切な「言材」を用いることによって「文話」を構成し、「媒材化」(音声化・文字化)する一連の「表現行為」であると述べている[7]。

それに対して、尾崎(2004:63)は、「待遇意識」という概念を、「『場面』や『相手』に応じて適切な言葉を選び、待遇しようとするかしないかの『気持ち』である」としている。

主に本論で用いる「待遇表現」とは、蒲谷他(2002)、尾崎(2004)の定義によるものを指す。しかし、これら定義からもわかるように、待遇表現には多様な要素が関わっており、まず「場面」に対する理解とそれに続いて、参加者同士の「関係」への理解から言語選択が始まると考えられる。

森川(1983:143)によれば、「場」の認識とそれに応じた「敬語表現[8]」の選択は、相手との上下関係、年齢関係および仲間関係に分類されるとし、それぞれの関係を「Out の場面(a.上司など、b.初対面者、c.部外者、d.公的な場)」と「in の場面(a.同じ地位など、b.長期的付き合い、c.内部者、d.私的な場)」に区別している。

また、中西(2008:23)は、男女差、職業差、年代差、出身地域差などに応じて、日本語母語話者の間での待遇表現の言語行動に差が表れていることを明らかにした。従って、状況により、待遇表現の言語行動に差が見られると言える。

以上の森川と中西の主張からも、儀礼的場面におけるインターアクションに注目する際は、多様な要素が言語選択に影響をもたらすことを注目すべきである。特に吉田他(2001)の

[7] 川口他(2002)、吉川(2009)も同様のことを述べている。

[8] 辻村(1989: 1)は、「敬語は普通『敬意を表すことば」とされているが、今日の用法から考えると、『改まりの気持ちを表すことば」としたほうが、いろいろな場面での使い方を不都合なく説明できる」という考えを示している。

ように「初対面場面でのことば遣い」が重要であり、より改まった表現(待遇表現)を使わなければいけないという考え方を取る研究者も多い[9]。

最後に、Goffman (1967:56)は、相手についての高い評価を当の相手に対して適切に伝える手立てになる行動を「敬意表現」と定義している。しかしまた、一般的に、我々は敬意表現を自分自身に向けることはできず、他人からそれが向けられるのを求めるしかないと指摘している。

このような考えに対し、ペルシア語母語話者は、日常生活で敬意表現を一般的によく活用し自分にも相手からも求めている。

日本語母語話者の待遇表現

本研究は、接触場面におけるペルシア語母語話者の日本語での儀礼的言語行動に注目することから、日本語における待遇表現がどのような要素から成り立つのかが重要となる。

まず、日本語の待遇表現は「敬語表現」「尊大表現」「親愛表現」「罵倒表現」から成り立っており(アーザルパランド 2010)、この分類の中で、儀礼的な場面を対象とする本研究では、「敬語表現」における言語行動に注目する。敬語表現は、会話の儀礼的度合いを調整するものであり、「尊敬語・謙遜語・丁寧表現」[10]に下位区分される(菊地 2010:49)。

敬語の使用には様々な規範があり、相手との円滑な交流または、会話を儀礼的にするために、どの表現も適切に使用することが望まれる。

---

9 トリアンデイス(2003)、Brown & Levinson(1987)などは、相手との社会関係や親密度が依頼する際の言葉遣いに影響すると指摘している。

10 (1)尊敬語:「相手や第三者について尊敬の気持ちを表すもの」と定義されている。河路(2005)は、尊敬語が用いられる状況を、「人と話す時に、相手や第三者に敬意を払った言葉や表現を使い、相手を高めた扱いにする」と述べているる。
(2)謙譲語:「話し手側を低めることにより、間接的に聞き手や、話題の人物を高める言葉遣い」と定義される(森川(1983:138);李(1993);金子(1994:38)参照)。坂本(1999:78)は、「相手に対する積極的な配慮と同時に、自分の位置を低くすることも日本語では一つの配慮だと言われている」とし、「上下関係で、自分を否定的に表すことも一つの配慮の一方法である」としている。
(3)丁寧語・丁重語:辻村(1989:5)によれば、最近の『国語辞書』では丁寧語を敬語の一種として「相手に敬意をあらわして、ていねいに言う言い方。多くの文の終わりに見られる。」と定義している。

日本語では、「挨拶表現の後半部分に集中して表れる動詞や補助用言の待遇表現性、つまり尊敬や謙譲、丁寧などの意味合いに支えられて、挨拶表現全体に待遇表現性が色濃く備わる」とされている(Malinowski1922:134)。この記述は述語部分に注目した分析と言えるが、他にも沢木・杉戸(1999)、坂本(1999)は、挨拶表現の持つ、「失礼にならないためにはどんな時に、どんな挨拶をするか、何をしてはならないか」という部分までもが研究の範囲に含まれていると指摘している。

以上から、儀礼的行動として定義されている「挨拶」と待遇表現の関係から、待遇表現の使用が儀礼と直接な関係があると考えられる。

日本語非母語話者による日本語の待遇表現の使用

日本語での待遇表現が複雑であることから、日本語学習者(日本語非母語話者)にとって、待遇表現の習得は大きな課題となっている。待遇表現の適切な使用は、場面の儀礼度と影響し合っている。そのため、場面に応じて適切に活用することが求められる。待遇表現は日本語母語話者との会話における問題の一つであるため、それに関する先行研究の数は多い(井出 1986; 生駒・志村 1993;宮岡 2000;他)。

これらの先行研究は、大まかに二種類に分けることができる。一つ目は、待遇表現をどの段階で、誰に、どのように、どこまで習得させるべきであるか、といった待遇表現教育を対象としている研究である(岡野 1999; 坂本 1999;岡部 2001;小川他 2003;北原 2004;金 2005;井上 2007;吉川 2009;林 2011;笠井 2013; 任 2014;山畑 2015;他)。

二つ目は、待遇表現の中でも敬語について、敬語を実用的な場面でどのように使用しているのかという研究である(坂本 1997;金 2004;岡野 2000; 任 2012; 魏 2014; 喬 2015;他)。本研究は、場面をより儀礼的なものにするために待遇表現がどのように使用されているのかという点を分析対象とするため、二つ目のグループに属するものである。

以上のような研究成果から、待遇表現の種類を初級語学の段階で習得し、理解してはいても、実際の場面で活用することは極めて難しいと判断できる。対偶表現を使いこなすために

は、ある程度日本語能力が身に付いた上で、さらに日本の社会で経験を積んでから、それらを発話機能で実践するための教育が必要になってくると考えられる。

2.2.2　ポライトネス

この節では、本研究において重要なキーワードである「ポライトネス」とその概念について考察する。

どの言語であれ、儀礼的な相互行為においてはポライトネスの表現が数多く見られる。会話参加者にはそれぞれ役割意識があり、どのような目的であっても、命題のみが直接的に伝えられることはなく、たいていはポライトネスに関わる言語表現が伴う。ポライトネスの一つの考えとして、「相互行為における摩擦を減少させるための行為」(Lakoff;Leech1983)という定義がある。儀礼的行動は形式的な言語行動から成り立っていることから、そのような決まった表現の使用こそが、ポライトな態度を意識しているものと考えられる。

現在、代表的に知られている「ポライトネス」の理論は、Brown & Levinson(1987)の「対人関係を調整させるための機能」である。彼らの理論の鍵となる概念が「フェイス」(Face)[11]である。彼らは、フェイスには、「自分がよいイメージで他者に受け入れてもらいたい、他者から認められたい、理解されたい」というポジティブ・フェイス(Positive face)と、「個人の領域であるテリトリーを他者から邪魔されたくない、侵されたくない(自由を確保したい)」というネガティブ・フェイス(Negative face)の二つがあると主張した。その考えから、ポライトネスにも「ポジティブ」または「ネガティブ」なポライトネス・ストラテジーがあるとした。

儀礼的なインターアクションにおいて、以上の二つのストラテジーを達成させることが前提にあり、様々な言語行動が期待される。従って、本研究では、相手に敬意を示すことや、相手との関係をより良くするために、このストラテジーが働いていると考える。

11　社会学者ゴッフマン(1967)によると「相互尊重の対人儀礼を守り続けるためには、互いが互いの「顔」をつぶさぬよう、そして他人との地位や場所と比較して、自らの立場をどう扱うかを意識することが重要」であるとし、コミュニケーション上で必要な概念として、「フェイス(Face)」という語を新たに定義した。

Brown & Levinson の主張したポライトネス概念は、文化によって異なっていると考えられる。つまり、相手を褒めるあるいはため口で話すことが場をより親しみのあるものにするという相手への気遣いだと判断する文化に対し(ポジティブ・ポライトネス)、そのような態度は相手に対して、なれなれしい、あるいはずうずうしいと判断する者の多い文化もある。一方、日本社会のように相手の領域に踏み込まないことが儀礼的であり、好まれるポライトネスのパターン(ネガティブ・ポライトネス)であると考える者が多い文化もある。このように、言語行動のほとんどにはフェイスを脅かすような危険性(Face Risk)があり、場面とのその文化背景に応じてその都度ポライトネスを考慮した言語上のストラテジーが選択され実行される。

そのため、南部(2010)はポライトネスを、相手のフェイスに気を配り、言葉を選びながら、円滑な人間関係を構築していくことであると考えている。Deutschmann(2003)は、南部の定義に他者に対する思いやりを追加している。

以上の考察から、相手のフェイスを脅かさないという概念はどの文化にも存在するが、どのような行為が相手のフェイスを脅かすと判断するのか、その基準には相違が見られる。また、各社会における規範は、「マナー」や、「その社会においては正しい」とされるものであり、ポライトであろうとする態度は、必ずしも同じ行動となって表れるわけではない。

2.3 ペルシア語母語話者の儀礼的コミュニケーション（ターロフ）

ターロフには広い意味合いがあり、その中には、待遇表現そしてポライトネスの概念も含まれている。また、ターロフは、ペルシア語母語話者同士のインターアクションでは欠かせない言語行動であるため、2.3 節では、ターロフがなぜ儀礼的言語行動であるのか各要素を詳述し、説明する。

ターロフの存在と意味

Willber.D(1976:21)は、ターロフはペルシア語母語話者同士の円滑なコミュニケーションを構成させる重要なコミュニケーションツールであると指摘している。しかし、ターロフの活用を複雑にする重要な要素として、社会的立場(人間関係や場面への配慮)が言語使用に大きく影響していることを挙げられている(Shayli2003)。

『لغتنامه دهخدا(Loghatname　Dehkhoda)辞典』によれば、ターロフという単語はアラビア語から来ており、その基本的な意味は、「相互認識、互いに分かり合えること」である。しかし、アラブ系の人々のターロフとペルシア語母語話者のターロフには相違が見られる(Basiri2012)。ターロフという概念は中東地域全体に広く一般的に存在するものの、それぞれ異なる言語背景が、ターロフの種類や表現に影響を及ぼしていると考えられる。

従って、本研究ではペルシア語を母語とする発話者のターロフの使用を対象とすることを強調しておく。また同時に、Ohno(1981:166)は、ターロフに一番近い日本語訳として「お世辞」を提案しているが、日本語におけるお世辞と言う概念そのものではないという、ターロフの複雑な意味を強調するものである。

待遇表現としてのターロフ

ターロフは待遇表現そのものあるいは待遇表現の一種として捉えられる。その理由としては、ターロフ表現の種類が、待遇表現の特徴である「場面」と「相手との人間関係」に大きく左右されるためである。待遇表現に属することが、ターロフを儀礼的コミュニケーションの枠組みとして定義づけるひとつの理由である。しかし、一般的にどのような場面において、どのような種類のターロフが産出されるのかについて詳しく考察した研究はまだない。

言語学者はターロフを以下のように定義している。

「謙譲の意思の伝え」(Bateson1977)、「礼儀上行う謙遜」(Beeman1986)そして、「礼儀正しい口頭上の駆け引き争い」(Rafee1992)と簡単に述べられている。またターロフを敬語表現と全く同一のカテゴリーに含め、ターロフ＝敬語表現＝地位差の象徴という図式を前提とする傾

向の考え方もある(Jahangiri1980[12];Moosavi1986)。

Beeman(1986)は、ターロフがイラン人の儀礼的コミュニケーション・ストラテジーであることを明らかにし、ペルシア語には互いに礼儀を示す根本的な思想として、(1)Self-Lowering (日本語の謙遜語・謙譲語のようなもの)、 (2)Other-raising(相手を立て尊敬する行為)があると主張している。Beeman によれば、これら二つの行為は敬語・謙譲語名詞(呼称)、謙譲語動詞、尊敬語名詞、尊敬語動詞というようにペルシア語の名詞や動詞の活用変化に反映され、それぞれが儀礼的な場面で使われるされている。これらのペルシア語待遇表現の例は、どれもターロフが表れると想定される場面で見られる言語表現である。また、ペルシア語の「代名詞」や「呼称」においては、自分から見た相手との年齢差、学歴差、資産規模の違い、社会的役割の違い、職業の違い、性別差などの関係性により異なるとされている(Willber1976:Bateni1975:209;Ghazanfari2010:36)。

ターロフには、待遇表現と同様に場面と発話意図が大きく関係している。Limbert(1987:37)は、ターロフを特に儀礼的な「挨拶」や「褒め言葉」であると指摘している。しかし、すべての「挨拶」や「褒め言葉」をターロフとしてみなしてよいかどうか、特に「実質的」な褒めと儀礼として判断される褒め表現にどのような差が存在するのかについてはさらなる考察が必要であると考えられる。一方で Willber(1976)は、ターロフは相手を褒め、自分を貶す言語形式であると主張しており、本分析ではこの考え方を支持し、実際に褒めることだけではなく、自分を貶すところに、ターロフの特徴があると考える。従って、本論においては挨拶や褒めが見られる場面の相互行為にも注目する。

また、吉枝(1994)は、ターロフとは待遇表現の一種であり、敬語、謙譲表現や定型表現などの言語表現、それに付随する行動としての非言語表現までの幅広い範囲にわたる行動様式であると述べ、何らかの理由でコミュニケーションの必要性が生じた際に使用される行動様式であり、一種のコミュニケーション術と規定することができると述べている。ここでは、どのような理由でターロフが産出されるのかは言及されておらず、ターロフの機能性が論じら

[12] Jahangiri(1980)は、ペルシア語の敬語表現の基本的要素として、(1) General humility と(2)Respect and its relationship to power and solidarity の 2 点を挙げている。

れていない。また、吉枝(1994)は、ターロフはイランの言語規範、社会言語規範、社会文化的規範[13]から成り立っていると指摘し、その習得と的確な使用が、話し手の教養程度を測る一つの基準でもあると指摘する。しかし、ターロフを敬語表現と同じように考えた場合、その活用頻度に社会的環境の影響や場面性も考慮されるべきであると考える。

そこで、アーザルパランド(2010)は、ペルシア語での敬語行動における違いの要因を、(1)性別、(2)年齢層、(3)学歴、(4)出身地の 4 つに分類し次のように述べている。

ペルシア語の敬語表現はイランの伝統的な文化に由来しており、タアーロフやいわゆる「交感的コミュニケーション」は、人物あるいは人物の存在に対する気にかけの動きと考えられる。

日本語を学習しているペルシア語母語話者は、日本語の待遇表現学習においてターロフ場面がないという事を把握はするものの、実際の会話場面においては、発話中のターロフの有無を意識してしまうこともある。

ポライトネスの観点からのターロフ

Goffman (1967)の見方によれば、ターロフ行動をしているペルシア語母語話者はその場面でフェイスワークをしていると解釈することができる。Limbert(1987)によれば、人々が複雑な社会関係におかれる場合、ターロフ行動をすることで、自分の社会的状況とフェイスを保つことができるとしている。また、Matsumoto(1988)は、イラン人のターロフ使用場面の特徴を分析した研究において、日本の社会的文化と近いものがあると述べ、相手に何かを提供すると貸しを作ったような状態になると指摘し、この「貸し」こそがフェイスであるとしている。この研究では、日本とイラン社会の文化がどのように近いのか、その詳細には触れていない。またペルシア語には礼儀とポライトネスを表すために、何らかのストラテジーがあり、それがターロフであると考えられている(Koutlaki 2002;R.Shahragard 2002; Safarmoghadam 2010)。

[13] インターアクション能力を指す。

以上のように、ターロフそのものをポライトネスと考える見方も多い。

2.3.1 インターアクション研究で見られるターロフの立ち位置

ターロフの使用には、社会の構造や社会的価値観の変化なども影響を及ぼしていると考えられる(ターロフの社会文化的な視点)。一方で、発話者の生活する地域や階級、性別などの様々な社会的要因もターロフ表現の言語使用に影響すると考えられる(社会言語的な視点)。

そこで、吉枝(1994)は、社会言語学的視点から母語場面におけるターロフ研究の現状とその問題点を分析している。その分析では、ターロフの持つコミュニケーション的機能と特に関連が深い要素として次の４点を挙げている。

1. 使用場面および伝達内容
2. 地位差
3. 儀礼的定型表現
4. 非言語表現

問題となるのは、以上の 4 つの要素が互いにどのように影響するのかという点である。また、吉枝の分類では地位差がない場合にはターロフが産出されないことになるが、実際に地位差がない関係(親しい間柄)では、ターロフは見られないのかという点も問題点として挙げられる。

また、Beeman(1986)では、イランの社会における相互作用の基本的概念として、(1) internal/external(内面/外面)、(2)equality/hierarchy(非階層造/階層構造)について言及し、ターロフを(2)の階層構造に属する現象と位置づけている。つまり Beeman の考察においても、ターロフ行動の見られるコミュニケーションにおいて地位差の重要性が強調されている。

一方、岩崎(1999)は、社会文化的視点から実際の会話場面をいくつか例示し、様々な民族がイランには暮らしているが、ターロフを社会の共通の文化のシンボルとして挙げている。イ

ラン社会や民族を研究する日本人研究者は、ターロフをペルシアの伝統的習慣として紹介し、「歓迎の挨拶」や「相手を呼ぶ際」に多く見られると述べ、そこに注目し研究を進めている(Kamioka1998:35)。

Koutlaki (2002)は、イランでは、互いの社会的関わりの中に属していることが、社会の一員であるという規範であると主張している。従って、ペルシア語母語話者はターロフ表現や儀礼的な定型表現を巧みに使いこなすことで、社会文化的規範の中に自らが存在し続けられるように努力していると言える。

これらの先行研究からは、ペルシア語母語話者が社会の一員として生きていくために、ターロフがどれほど重要な役割を果たしているのかが分かる。

また、多くの研究はターロフの場面性に注目し、そのインターアクションがいくつかの決められた場面で繰り返し使用されていることを強調している。例えば、Miyakawa(1996)はターロフのインターアクション上での役割を、大きく、(1)相互行為でのターロフ、(2)招待場面でのターロフ、(3)おもてなしでのターロフ(Ejlali2004;Koutlaki2002)、(4)プレゼント提供(Moshiri1996;Shayli2003;Nafisi2004)、(5)運転でのターロフ、(6)言語表現でみられるターロフと分類している。つまり、以上のような場面を考察したところ、儀礼としてターロフが多く表れていたことが明らかになっている。以上のような場面でのターロフの使用に注目した研究の成果に加え、ペルシア語母語話者同士の電話での談話に注目する研究においても、ターロフが多く産出されていることが明らかになっている(Shayli2003)。

2.3.2　ターロフと異文化コミュニケーションの研究

ペルシア語母語話者のターロフに関する異文化コミュニケーションの研究は、大きく二つの傾向がある。ひとつは、ペルシア語母語話者が母語で会話を行うインターアクション(Alirezai2007;Najafi2009;Faramarz2011)を扱うものである。他方は、英語が媒介語となり相互行為が起きている異文化でのターロフの産出の問題(Asaddi1980;Shardad2002; Bakhshi1995; Daneshvar2001; Koutlaki2002;)を扱うものとなる。

ターロフの文化は欧米の習慣とは大きく異なるものの、イランのターロフに興味を示し研究をしている欧米の学者も多い (Beeman1982 , Limbert1987;Campbell2006;英国 BBC の報道記者 JuliyanaWally など)。

また、比較研究においても、ペルシア語母語話者とドイツ語母語話者の電話での挨拶の比較(Carmen2002)やオーストラリア英語とイランのペルシア語話者の間での褒めと応答に関して対照研究(Rezai2012)を行ったものがある。また Salmani(2006)は、英語母語話者にもターロフ的なニュアンスがあると述べ、ペルシア語母語話者と英語母語話者の表面的な誘いの比較をした。英語母語話者以外との比較では、クルド語母語話者(Bakhshi1995)や韓国語母語話者(Safarmoghadam2010) の待遇表現をポライトネス理論の視点から比較した研究もある。

このように、ペルシア語母語話者と非母語話者の相互行為においても、母語規範の習慣に従って会話が行われていることが分かる。従って、日本語母語話者との相互行為においても似たような結果が見られると推測できる。

イランを離れて居住するペルシア語母語話者は、ターロフというコミュニケーション手段がない国々でどのように振る舞うのかについていつも悩まされていることは間違いない。

2.4　接触場面研究

接触場面理論の第一人者であるネウストプニーと、その考え方を基礎としている近代の研究者たちの視点から概観する。

ネウストプニー(1981;1995)によれば、ある文化のメンバーが同じ言語や文化のメンバーとコミュニケーションを取る場面は「母語場面」になるが、他の言語や文化のメンバーとコミュニケーションを行う時には、「外国人場面」、つまり「接触場面」が成立し、その中でのコミュニケーションの方法は、「母語場面」と質的に違うものを含むとしている。また、外国人が言語的に「準母語話者」になるまでには、条件がそろっている場合でも、3〜5 年かかると考えられている。従って平均的な外国人は、長い間、言語・文化的に外国人の特徴を保ち、接触場面の中でコミュニケーションを行うことが予測される(ネウストプニー1995)。以上の

ことから、本研究で対象となる協力者は、みな外国人の枠組みに属し、日本語母語話者との会話は接触場面の環境の中で行われることになる。

会話参加者の間で、会話の規範や社会・文化的な規範が共有されていない(ファン 2003;2006)ために、理解や信用を導く基盤が十分でないこともあり得る。一方、接触場面においては、会話の参加者がそれぞれの社会・文化背景や規範を尊重することも重要であるが、参加者同士が特定の関係に配慮し、各々の認識を共有し、時に調整を行い、個人間において許容される規範的な行為を築くことも必要である(谷 2016:149)。従って、接触場面の参加者はその会話中における互いの言語行動を理解し配慮した姿勢を見せることが重要となる。

近年、接触場面研究は様々な研究領域で取り上げられている。言語管理理論に基づく第三者接触場面研究(Fan2003)や、Neustupny(1985a)が指摘している外来性に関する研究も多く見られる。フェアーブラザー(2003)や村岡(2010)は、社会言語的外来性と社会文化的外来性についても扱っており、学際的な分野になっている。また、接触場面に基づく日本語教育(尾崎 2001;村岡 2003)といった、接触場面を土台とした新たな教育法に対する研究も注目されている領域である。

2.4.1 言語管理研究

ネウストプニー(1997)は、どのような接触場面が起こり、それぞれの接触場面の中で参与者によるどんな管理がおこるのかを記録を必要としている、と主張している。言語管理のひとつの特徴として、言語問題の基礎は個々人の談話のミクロレベルにあるとし、個人レベルやインターアクション行為における言語問題が注目されている。従って、文化的背景の異なりが大きい国の背景を持つか会話参加者の間では、様々な面で会話の中で言語問題が生じていると考えられる。接触場面(Neustupny1985a)研究では、言語管理理論のアプローチから接触場面での言語の生成と管理に注目し、社会文化、社会言語そして言語上の問題に対する言語管理の解明を課題としている。

従来の研究では、様々な手法を用いて接触場面で見られる問題を考察する研究が行われてきた(ファン 1999:2000; Fairbrother 2000:2009; 宮崎・マリオット共編 2003;宮崎 1998 など)。また、接触場面での「言語問題」を言語管理のプロセスから解明する研究も数多く見られる(Fan 1994:村岡 2006:2009; 高 2006 など)。ネウストプニー(1995)は、言語管理の理論ができるだけ多くの問題を取り扱おうとしていることを述べ、異文化接触場面での問題、言語中の性差に関する問題、丁寧さの問題、コミュニケーションネットワークや話題の問題にも焦点があてられていると主張している。また、言語問題は「言語」だけの問題ではなく、対象となる問題をコミュニケーション過程の中で考え、さらにそれを社会の問題とのつながりにおいて見る必要があり、この姿勢が言語管理の中心的なテーゼのひとつであると述べている。

言語管理の理論には、2 つの特徴がある。まずひとつ目はミクロプロセスの重視である[14]。二つ目は、言語管理のプロセスには一定の普遍的な段階があることである。その段階は以下の 5 つの段階にまとめられる。(1)規範からの逸脱 (2)逸脱への留意、(3)留意された逸脱の肯定的/否定的な評価、(4)評価された逸脱に対しての調整、(5)調整の計画と実施の 5 つである。

(1) 規範(Norm)からの逸脱(Deviation)： Neustupny (1985a)は、「規範」を逸脱を図る基準として定義している。つまり、あるインターアクション場面にはそのインターアクションに対する期待が働いており、このインターアクション上に問題が見られた時には、規範からの逸脱を意味していることになる。本稿における規範からの逸脱の定義は、日本語を媒介としたコミュニケーションにおいて日本語の儀礼的な規範から問題が生じた場合を指す。また規範については、参加者の規範の選択領域から、母語話者側と非母語話者側からの規範の二通りが考えられる (加藤 2006)。

(2) 逸脱への留意(Note)： 留意(Note)とは、参加者が自分、または相手の逸脱に気付くということを意味する。

14 ネウストプニー(1995)は、言語管理の理論は「言語計画」との関連で生まれたものであり、その理論からするとすべての言語問題の基礎は談話のミクロプロセスにあるとしている。

(3)　留意された逸脱の肯定的/否定的な評価(Evaluation)：　留意された逸脱は、評価をする側の経験から、その評価が肯定的または否定的に評価される場合がある(Neustupny 1994)。そこで否定的に評価された逸脱は、不適切であると評価される場合と、ただ「言語問題」であると判断される場合がある(Neustupny 1973)。

(4)　評価された逸脱に対しての調整(Adjustment)：　否定的に評価された逸脱に対して、調整が行われる場合とそのまま調整を行わない場合が見られる(Neustupny 1994)。

(5)　調整の遂行(Implementation)：　ネウストプニー(1997)は、評価された逸脱は、多くの場合自己調整あるいは他者調整が選択されるものの、必ずしも積極的な調整を行うとは限らず、ただ感情的に処理することもあると指摘している。

本調査では、以上のような言語管理プロセスの(1)〜(3)の部分を主に分析していく。実際の会話においても、すべての逸脱が上記の調整段階に至るのでなく、途中で終了し、表面化しない場合も想定される。

中間言語

中間言語という概念は Selinker.L (1972)によって提唱された。この概念は、第二言語母語話者がその言語を学んでゆく過程で形成する、目標言語とは様々な点で違った体系を持つ学習者に特徴的な言語のことである。もちろん中間言語は、学習者の習得レベルや学習内容、母語などに影響を受ける。ある言語を母語とする者が話す第二言語には、特定の表現が多く用いられたり、反対にほとんど用いられなかったりと、多くの場合個人によって差が表れる。そのようにある一定の傾向を見せながらも、目標言語とは異なった学習者の言語を中間言語と呼ぶ。

中間言語研究が盛んになる前までは、学習者の誤用から目標言語と学習者の母語との違いを研究する、いわゆる誤用分析が中心であった。しかし学習者の誤りの研究のみでは、回避など誤用以外の問題点を扱えないことから、学習者言語の自律性を重んじる中間言語分析が

注目されるようになった。『新版日本語教育事典[15]』によれば中間言語の特徴として、(1)言語転移、(2)訓練場の転移、(3)過剰一般化、(4)コミュニケーション方略が挙げられている[16]。

中間言語に関する研究はこれまでも多く存在している(Kasper&Blum-Kalka 1993;Hill 1997;フィオナ 2003;他)。本研究においても、ペルシア語母語話者の接触場面における儀礼的行動中にも中間言語の現れが予測される。儀礼的フレームにおいては、中間言語がインターアクションの中に表れるだけで、相手に対して失礼であると捉えられる可能性も十分に高い。また、言語管理理論から見ると、中間言語の産出が逸脱として留意されることもあり、それを調整することもまた、円滑なインターアクションに影響する。それに加え、習慣化された中間言語をどのように学習者に改善させるかも一つの課題となる。

インターアクション能力

本研究のもう一つのアプローチは、「インターアクション能力」への関心である。ネウストプニー(1983)は、「言語」と「文化」の関係を、具体的なコミュニケーションの立場から新たなモデルを提示した。それは、ハイムズの理論をもとにした「社会文化行動」という観点を導入し、「実質行動」と「コミュニケーション」という構図のもと、「コミュニケーション」の中に「文法外のコミュニケーション」と「言語(文法)行動」があるとし、「実質行動」として 2 つの様相を持つところに、「コミュニケーション」の総体があるというものである。ネウストプニー(1991)は、コミュニケーションにおける最終目的は「社会・文化・経済的なインターアクション能力」の獲得であると述べる。

儀礼的行動が期待される場面においては、文化背景の影響が言語に表れ、それが円滑なコミュニケーションへと繋がる。そのため日本語非母語話者に「インターアクションのための

[15] 699 ページ。

[16] (1)言語転移：母語から受ける影響であり、よい影響であれば「正の言語転移」、悪い影響であれば「負の言語転移(＝母語干渉)」といわれる。(2)訓練場の転移：教え方の誤りから、間違って習得してしまったもののこと。(3)過剰一般化：言葉のルールを適用の範囲外にまで拡大してしまったために起きる誤用である。(4)コミュニケーション方略：学習者のコミュニケーションの仕方において起きた誤用である。

能力」が求められる。そして、その「インターアクションのための能力」の内容は、「社会文化能力」「社会言語能力」「言語能力」の各要素からなる「リテラシー[17]」とであるいう考え方が示されている。特に儀礼的場面では、「社会文化能力」と「社会言語能力」の二つの能力が重要となる(鄭 2006;他)。

以上のことから、接触場面ではインターアクションに注目する必要がある。そのとき、言語や文法能力の習得のみが相互行為における最終目的ではないことを考慮に入れる必要がある。また儀礼場面では、社会の構成員が自分の権利を強調できる重要な場として、言語行動調整が注目される。

2.4.2 儀礼的な接触場面研究

日本社会は世界各国の中でも、とりわけ儀礼的な言語行動が多い社会の一つであると考えられる。そのため、日本語母語話者同士の「挨拶」場面に注目した研究(土屋 1998;沢木・杉戸 1999;坂本 1999;中西 2007, 2008)や儀礼的な言語行動の枠組みとして捉えられる「褒め」(丸山 1996;大野 2003)、「謝罪」(山本 2004;佐藤 2001)また「感謝」表現(西原 1994;高田 1998)を対象にして研究も多く存在する。これらはすべて、母語場面研究の枠組みが対象となる。

しかし儀礼的な言語形式が多い社会においては、非言語母語話者が様々な場面で儀礼的な発話機能を正確に把握しなければならなくなる。日本語母語話者と日本語非母語話者の儀礼的言語形式が必要とされる場面を取り上げてきた研究は、数多く見られる。これらの研究のアプローチとしては、両文化の比較研究と接触場面研究という 2 つの視点からの考察が多く見られる。

まず、儀礼的行動が見られる接触場面研究の視点からは、特に日本語母語話者と中国語母語話者の挨拶接触場面が多く取り上げられている(曲 2009;水野 1996;他)。また、日本語非母語話者が日本語話者に対し「挨拶」による言語調整をどのように行っているのかなどについ

[17] 何かを理解し、その理解を行動のために活用できる能力。

て、一連の研究がある(榊原 2001;サジーワニー 2008;他)。他にも、言語管理の視点から、「依頼」の調整を対象にした研究(徐 2007;小野 2009)や、「褒め」では、川口他(1996)や袁(2012)のような、日本語母語話者に褒められた際に非母語話者がどのように応答するのかなどが注目されている。以上のどの場面においても、儀礼的フレームの中で失礼とされない発話が求められる。

また、比較研究の視点からは、日米の挨拶表現を比較した阿部(1999)や、「依頼」場面では日中韓の友人会話における依頼の談話展開に注目した研究(生天目他 2012)などが挙げられる。また、イギリス人と日本人の「感謝表現」の相異に焦点を当てた研究(三宅 1993;1994;他)もある。一方で、中東地域に注目する研究は少なく、アクドーアン他(2008)は、相手に配慮する行為という視点から、日本人学生とトルコ人学生の依頼行動の分析を行っているものなどが儀礼行動の研究として挙げられる。

以上の文献調査を概観すると、これまでの研究においては特に日中韓の間の儀礼的な言語行動に関心が高まっていた。しかし、グローバル化が進む現代において、より多国籍な母語話者の儀礼的な行動に注目する必要性があると考えられる。

2.4.3　接触場面におけるペルシア語母語話者の儀礼的コミュニケーション

これまでの研究において、ネウストプニーの接触場面の概念のとらえ方から、ペルシア語母語話者の儀礼的コミュニケーションに焦点を当てたものは見られない。そこで、筆者はこれまで、ペルシア語母語話者と日本語母語話者の日本語における接触場面の問題に注目してきた。アキバリ(2015)では、ロールプレイを通してターロフの母語場面と接触場面ではどのようなインターアクションが起きるのか、その特徴を考察し、比較を行った。その結果、母語場面では適切に相手のターロフに応答し、発話連鎖が起きていたのに対し、接触場面では期待の応答が日本語母語話者側から見られず、会話が短く連鎖が不自然に起きていた。一

方、アキバリ(2016b)では、接触場面におけるターロフ的な言語行動規範(ペルシア語母語規範)を第三者の評価を取り入れ言語管理の視点から考察し、儀礼的な自然会話に生じる問題を分析した。以上の研究を踏まえ、今後は接触場面を対象とするアプローチから、ペルシア語母語話者の儀礼的問題をより分析することが期待される。

2.5　本研究における立場

2 章では、先行研究をもとに儀礼的な場面に対するこれまでの研究の視点を考察した。

本研究では、先行研究を踏まえ、インターアクションの中で注目する会話の連鎖は、儀礼的なフレームが確認される位置である。その儀礼的フレーム内において、待遇表現の使用が場面の儀礼度を挙げることに影響を与えてはいるが、待遇表現の実態がどのようなものかについては、本論ではその分析に立ち入らない。次に重要で注目すべき点がターロフであり、これはペルシア語母語話者の社会や文化に非常に大きく影響していることが明らかになった。母語場面でのペルシア語におけるターロフの相互行為に焦点を当てることで、その特徴がどのようなものであるのか、または、どのように場面の儀礼度に影響を及ぼすのか、その実態を明らかにする。本研究では、非母語話者同士の儀礼的なインターアクションも検討するため、母語場面のみではなく、接触場面研究の視点からも考える。言語管理理論では、その 5 段階の内、ペルシア語母語話者の日本語母語話者に対する儀礼的な発話からの「逸脱」、それに対して「留意」する第三者による逸脱の判定、そしてその逸脱に対する「評価」までを考慮に入れる。

次章からは、本調査の概要と分析の枠組みを提示する。

第 3 章

第 3 章　調査概要と分析の枠組み

第 3 章では、母語場面、そして接触場面調査の概要や、データ分析の枠組みについて述べる。本研究の特徴は、最終目的である儀礼的な接触場面の考察のみならず、その前提の段階となる、母語による儀礼的場面での母語話者同士の会話分析をも研究の対象としていることである。従って第 3 章では、本研究で使用する分析の枠組みの定義と本研究との関わりについて記述する。

3.1　調査概要

本稿における談話データは、イランでペルシア語母語話者同士の会話を収集した母語場面(952 分)と、日本で行われたペルシア語母語話者と日本語母語話者同士の接触場面の会話(688 分)を録音したものである。その中から儀礼的場面であると判断したすべての箇所の会話を文字化(transcribe)し、そのデータを分析材料として用いた。

会話の収録方法は 2 通りで、ひとつは、調査者(筆者)自身が実際にコミュニティーに参加して調査協力者とともに一定の時間を過ごし、そこで行われた会話を収集したものである。もうひとつは、調査者は実際の場面に参加せず、自然会話を録音するために IC レコーダー(OLYMPUS　V-801)のみを調査協力者に渡し会話を録音したものである。

調査協力者の選定については、できるだけ多様な集団において調査ができるように心がけた。その結果、10 代から 70 代までと幅広い年齢層の、学生、主婦、教師、商人、会社員など様々な職業を持つ男女の会話の収録を行うことができた。このような社会的立場の多様さは、本研究結果の信頼性にもつながる。また各場面の調査協力者の男女の割合は多様であり、会話参加者数にも制限は設けていない。それぞれの場面においての参加者の数は、電話での会話場面など(岡本 1990、今石 1992、熊取谷 1992、ザトラウスキー1993)のような 1 対 1 の相互行為から、8～20 名ほどの大人数のパーティーまでと幅広い。また、相互行為を行う参加者の関係性については、参加者同士が初対面である場合と、長期的な交流がある親しい間柄である場合を選定した。母語場面に関しては、親族間での会話も収録されている。

接触場面でのペルシア語母語話者の協力者に関しては、年齢層や職業・身分関係に多様性があるものの、母語場面の協力者の場合ほどではない。ペルシア語母語話者の日本語レベルに関して特に詳細なレベル測定は行わなかったものの、日本での滞在期間が 7 年以上(中・長期滞在者)であり、日本語での日常会話が十分でき、さらに、日本社会の儀礼的な振る舞い(待遇表現など)に関しても意識あるいは理解を持っている者を対象にした。接触場面での会話はすべて日本語を媒介言語(vehicular language)としている。今回の協力者は筆者の知人であるか、また知人から紹介された者である。

筆者は本研究で自然場面でのデータを収集する前段階において、ロールプレイ形式で 5 つの場面を通して、ターロフが産出されると予想される母語場面と接触場面とで会話分析の枠組を用いた比較研究を行った(アキバリ 2014)。そこから、ターロフが産出される場面において、母語場面と接触場面では相違が見られることが明らかになった。その調査の結果を参考にし、本調査はターロフが見られると予想される母語場面における自然な会話の収集を開始した。

調査にあたっては、録音前後に場面の参加者(調査協力者)の許可を得ている。話題が事前に設定されていなかったためか、多様な話題内容が自然会話において見られる。また、会話内でも儀礼的な会話が行われていると判断した箇所のみ文字化を行った。

3.2　フィールドワーク

フィールドワークとは「現地調査」「野外調査」を意味しており、研究者が研究対象となる地域や社会に行き、その土地の人々と共に生活し対話をすることで、その考え方や生活習慣を理解しようとする社会調査の手法である。社会調査の手法には、フィールドワーク以外にも、アンケート調査や面接調査など多様な手法が存在する。しかし本研究では、場面の参加者のインターアクションを観察する目的から、アンケート調査ではなく、実際に現地に行き両場面の談話を見る必要性があった。それと同時に、フィールドワークは、「場面の様子を見る」、「意識調査を行う」ことができる利点もある。この場合、必要に応じて参加者からイン

タビューをすることも可能である。

そして、フィールド調査において、接触場面のみではなく母語場面にも焦点を当てたのは、これまでの先行研究では、ペルシア語母語話者同士の儀礼的場面の会話を近くから録音し、分析したデータが存在していなかったことから、その必要性が伺えたためである。

3.3　調査期間と手順

3.3 節では、調査の流れから、調査期間を大きく 2 つの段階に分けて考える。

3.3.1　調査の期間

(a) 母語場面段階

本調査における母語場面での談話データを収録するための主なフィールドワークは、イラン国内で 2014 年 8 月～9 月に行ったものである。また、追加のデータ収集として、2014 年 12 月～2015 年 2 月に、日本在住のイラン人コミュニティーでの儀礼や挨拶場面において IC レコーダーによる録音も行った。また、2015 年 8 月にも、再びイラン国内で現地調査を実施した。第 2 の現地調査は、2014 年のデータを補うために行った。

以上の調査から、本調査で適用する母語話者同士の談話データは 4 段階にわたり収集されたものである。この段階は会話のデータ収集のみ行った。その後文字化を行い、必要に応じて協力者にインタビューを行った。

母語場面の自然会話のデータではないが、2014 年の 5 月～7 月にペルシア語母語話者を対象にした意識調査も行っている。

(b) 接触場面段階

本研究の主な対象である接触場面のデータ収集に関しては、2014 年 12 月～2015 年 12 月までの 1 年間を通して現場でフィールド調査を行った。実際に場面に赴きデータを収集した期間は 1 年であるが、その前段階で筆者は知人や知人の知り合いに対し場面のデータ収集許可の交渉を行った。特にレストランのような公的な場において、協力者の許可を得ることは

困難であった。いくつかのレストランのオーナーと交渉をした結果、ひとつのレストランにおいて、調査の許可を得ることができた。また、イラン食材を販売する日本国内最大のスーパーマーケットにおいてもフィールドワークの許可を得られたため、そこでもフィールド調査を行った。

また、接触場面に関しては、儀礼行動に対するインタビューには応じてくれたものの、ICレコーダーによる声の収録などを拒否する協力者もいた。

3.3.2　調査の手順

調査は、まず予備調査から始まり、そして、準備、会話の録音、そしてインターアクション参加者の儀礼行動に対するインタビューと録音データの文字起こしを行った。その手段の詳細は以下の通りである。

(1)予備調査の段階

まず、儀礼に関する 9 つの質問からなるアンケート用紙を作成し、メールで協力者(15 名)に送付した。そこから 2 週間以内に得られた回答をデータとして収集し、これらを参考にペルシア語母語話者のターロフに対しての考察を行った。

(2)データの収集に向かう準備の段階

先行研究の分析と予備調査のアンケート結果を参考に、ターロフが最も多く参照されると考えられた場面を把握した。それから儀礼的な会話が行われると推測した場面に行き、調査協力者に儀礼場面での談話を研究するための調査協力を依頼した。母語による会話場面の協力者は、場面参加者のいずれかが調査者の知人であったため、協力の許可は容易に得ることができた。接触場面においては、研究の理解や協力の許可を得るまでに多少の時間を要したものの、最終的には許可を得ることができた。

(3)本話題での録音段階

フィールドワーカーである筆者が現場に行き、相互行為を観察すると同時に、会話を録音した。実際に自然会話の現場に参加することで筆者もメンバーの一員となったが、これには

彼らがどのような状況で話題を提供したのか、またなぜそこで儀礼的行為と判断される言語行動をとったのかを身近で把握できるという利点があった。そこで、筆者は調査協力者(インフォーマント)の振る舞いや会話の進行方向などに関しては一切指示をせず、会話の中の一員として行動した。使用した録音データには筆者の相互行為が録音されているものも一部あるが、分析データとしては使用していない。また、会話の進行状況や参加者の振る舞いから、調査者である筆者の存在は大きな影響を与えなかったと考えられる。

収録時間に関しては特に目安を設けなかったが、雑談が多い会話場面に関しては、特に母語場面では長時間(3 時間程度)にわたり会話のやりとりが録音されているものもある。

筆者が場面に参加していない場合は、IC レコーダーを協力者に渡し、会話の開始から終了までを録音してもらった。協力者によっては、挨拶などのみを録音した者もいる。その場合、会話の前後の状況が読み取れないデータは分析の対象外とした。

(4)インターアクション参加者の儀礼行動に対するインタビュー(全体的な感想や意識を聞く)

収録前後には調査目的を簡単に説明し、調査への理解を得た。

特に調査後には、彼らの儀礼場面に対する意識や、彼らが日頃会話の中でどこまで自分が儀礼場面に置かれていることを認識しているのかなどを聞いた。また、相互行為の際、会話の相手との関係性や場面性にどれ程留意しているのかについても意識調査を行った。調査対象が自然会話であり、場面の参加者と再び会うことが必ずしもできるとは限らなかったため、全ての協力者に対してフォローアップ・インタビュー(ネウストプニー 1994;ファン 2002)を行うことはできなかった。

言語管理研究では、インターアクションにおける複雑な意識過程を調査するためにフォローアップ・インタビューの方法が使われてきた。フォローアップ・インタビューを行うためには、収録後、的確に文字化を行ってから、場面の参加者にそれぞれ意識調査(対象行動への意識の有無、行動の計画、行動への評価、行動の選択、感情など(ファン 2002:92))をする必要がある。

3.3.3　文字化の要領

会話分析をするにあたっては会話資料の文字化が重要となる。文字化の精密度は分析の結果に影響をもたらすこともあるため、正確な記述が要求される。

今回、資料の文字化には、宇佐美(2011)の「基本的な文字化の原則(BTSJ: Basic Transcription System for Japanese)」を参考とした。BTSJ では、「読みやすさ」を重視していることから、文字化は日本語表記の慣習にしたがって「漢字仮名まじり」で表記されている。

「発話文認定方法」は「発話文番号、ライン番号」からできている。他の欄には話者と発話内容が記述されている。次節で詳細な説明を行う、本研究においては、儀礼的な発話機能の重要性から、宇佐美の表に「基本的発話機能」と「追加的発話機能」という列を追加した。発話機能の列では、そのライン番号において発話者が述べようとしている意思を発話機能として記入する。例えば、「こんにちは、失礼します。」という発話については、「挨拶」というラベルを基本的発話機能の列に記入する。

母語場面の会話はペルシア語で交わされているが、本論ではペルシア文字は使用せず、ペルシア語の発話をローマ字で表記している。各発話の同じ欄に日本語訳を併記した。特にターロフが産出されている発話においては、ペルシア語独特のフレーズや言い回しなどが多数あるため、該当箇所によっては直訳せず、日本語表現的に理解しやすいように訳をしている。

【文字化に用いる記号】

以下に、本研究における文字化に必要な記号を列挙し、それぞれに説明を付す。

。	ひとつの発話文の終わりにつける。
,,	ある発話文の途中に相手の発話が挿入された場合、前の発話文がまだ終わっていないことを示すためにつけ、改行して次の相手の発話を表記する。
、	ひとつの発話文およびひとつのラインの中で、適宜読点をつける。

, ひとつの発話の中に短い「間」がある場合につける。

『　』 視覚上、区別した方が分かりやすいと思われるもの(例えば本や映画の題名のような固有名詞など)を表す。

？ 疑問文につける。

[↑][→][↓] 特記する必要のあるイントネーションを表し、それぞれ上昇、平板、下降の略号として用いる。

《少し間》 話のテンポの流れの中で、少し「間」が感じられた際につける。

《沈黙　秒数》 1秒以上の「間」は沈黙と見なし、その秒数を付記する。

＜　＞{＜} 同時に発話されたものは、重なった部分双方を＜　＞　でくくり、重なった発話には＜　＞の後に{＜}をつけ、そのラインの最後に句点「。」または「,,」をつける。

【【　　】】 先行する話者の発話文が完結する前に次の話者の発話が始まり、結果的に先行する話者の発話が中断したことを示す。

[　] 文脈情報。

＜　＞ 笑いながら発話したものや笑い等は、＜　＞の中に、＜笑いながら＞、＜2人で笑い＞などの説明を付す。

(＜＞) 相手の発話の途中に、相手の発話と重なって笑いが入っている場合は、短いあいづちのように(＜笑い＞)とする。

＃ 聞き取り不能であった部分につける。

「　」 プライバシー保護のために明記できない単語を表すときに用いる。

3.4　母語場面の概要

3.4.1　母語場面での録音データの収集

本研究の母語場面の調査協力者はみな、イラン在住のペルシア語母語話者である。実際に

フィールドワークが行われた調査地域は、イランの首都であるテヘランと第二の都市マシュハドである。自然会話として収録された場面は、儀礼的な相互行為が会話参加者の間で見られることを条件としたこと以外に特別なセッティングをしていない。

以下では会話が行われた場面と協力者の特徴の内訳を紹介する。

3.4.2 母語場面での協力者と場面紹介

＜1＞ 調査協力者

インフォーマントは、ペルシア語を母語とする成人のイラン人である。本研究のインフォーマントの特徴としては、年齢層が幅広く、社会的立場も様々であることが挙げられる。それぞれの場面においての参加者数は、1 対 1 の相互行為(電話をする場面)から 8～20 名ほどのパーティーまでと幅広い。【表 3－1】は、本調査のインフォーマントの数を性別と年齢、また社会的立場から示したものである。いくつかの場面において、何度も参加が見られた同一のインフォーマントは、1 度のみカウントした。

【表 3－1】 調査協力者数とその年齢像と社会的立場

<table>
<tr><td rowspan="2"></td><td colspan="2">性別</td><td colspan="5">年齢</td><td rowspan="2">社会的立場・関係</td></tr>
<tr><td>女</td><td>男</td><td>20代以下</td><td>20代</td><td>30代</td><td>40代</td><td>50代以上</td></tr>
<tr><td rowspan="7">全てのデータ</td><td rowspan="7">58名</td><td rowspan="7">31名</td><td rowspan="7">8名</td><td rowspan="7">16名</td><td rowspan="7">19名</td><td rowspan="7">12名</td><td rowspan="7">34名</td><td>〈医者，患者〉ー</td></tr>
<tr><td>〈店員，客〉ー</td></tr>
<tr><td>〈美容師，客〉ー</td></tr>
<tr><td>〈学生，先生〉ー</td></tr>
<tr><td>〈主婦，親子関係，兄弟姉妹〉ー</td></tr>
<tr><td>〈友人同士〉ー〈会社の同僚〉など</td></tr>
<tr><td></td></tr>
<tr><td>合計人数</td><td colspan="7">計89名</td><td></td></tr>
</table>

＜2＞ 調査場面と参加者関係

本研究の調査は、儀礼場面において、かつターロフが起きていると判断した公的または私的場面を中心に行った。本調査のフィールドワークの場合、主に調査者自身の知人や親族間での自然会話を観察の対象としている。従って、通常インフォーマントはフィールドワーカーを「異人（ストレンジャー）(佐藤 2001)」として見がちであるが、本調査では、そのような事は感じられなかった。その結果、最も自然場面を

そのまま観察できたと考えられる。

本研究では、美容室やクリニックなどでの会話の開始部や、会計場面の相互行為での言語行動も検討の対象としている。また、パーティーへの参加場面などでは、参加者の関係や場の環境状況により、場面の改まり度合いに相違が現れていた。

それぞれの参加者間の役割や関係も場面によって異なる。友人同士や親族関係に属する参加者たちのカテゴリーでは、親密的な言語行動が期待される。一方で、店員と客や医者と患者のような職業的な関係を持つカテゴリーでの相互行為も今回観察の対象となっている。

【表 3－2】は、今回フィールドワークが行われたそれぞれの場面において、主に調査対象の中心になった場面状況と参加者の関係を簡単に紹介している。

【表 3－2】 調査場面特徴と参加者関係

調査場面	場面特徴	スピーチイベント数	参加者関係	各場面での参加者数
パーティー場面	ホストとゲストが会う際の開始部挨拶	14	友人・親族	3～20名
	パーティーを解散する時の終了部挨拶	7		3～20名
	食事が提供された前後と食事中	4		6～30名
	初対面での自己紹介	2		3名
お店	値段を尋ねる・お金の会計	1	店員-客	2～3名
スーパー	値段を尋ねる・お金の会計	1	店員-客	2名
レストラン	会計での談話	1	ウェートレス-客	3名
美容室	会計と質問	1	美容師-客	2名
クリニック	診断室に入る際の開始部挨拶	1	医者-患者	2名
電話	開始部と終了部の挨拶と間の儀礼談話	5	友人・親族	2名
合計		37		

次に、それぞれの調査場面において、場面ごとに会話番号を振った一覧を示す。それぞれの場面はいくつかのスピーチ・イベントから成り立っている。会話番号の順は、データを収集した時期の順に並べられている。

＜母語場面での会話番号＞　　＜場面参加者数＞

【母－会話 1】医者と患者の会話開始部挨拶/自己紹介と謝罪　（2 名）

【母－会話 2】開始部挨拶終了後の雑談/健康についての質問/食べ物提供　（8 名）

【母－会話 3】美容室での会話開始部の挨拶/注文　（3 名）

【母－会話 4】行きつけのスーパーで挨拶/注文/会計　（3 名）

【母－会話 5】知り合いの車に乗る/開始部挨拶/雑談　（4 名）

【母－会話 6】初めての店を訪問/商品についての質問/挨拶 （3 名）

【母－会話 7】友人との電話(1) （2 名）

【母－会話 8】友人との電話(2) （2 名）

【母－会話 9】親戚同士の電話(1) （2 名）

【母－会話 10】親戚同士の電話(2) （2 名）

【母－会話 11】親戚同士の電話(3) （2 名）

【母－会話 12】親族同士との昼食/雑談/食事提供/感謝 （15 名）

【母－会話 13】親族同士の食事会/挨拶/食事提供/感謝 （5 名）

【母－会話 14】親族同士の食事会/次回誰の家で食事会をするか検討/挨拶/感謝/提供 （21 名）

【母－会話 15】親戚同士の久々の再会/挨拶/食べ物提供 （10 名）

【母－会話 16】親族同士の食事会/挨拶/食事提供/褒め/感謝 （21 名）

【母－会話 17】弔意の言葉/誘い （6 名）

【母－会話 18】知り合いとの食事会 （13 名）

【母－会話 19】玄関での開始部挨拶 （6 名）

【母－会話 20】茶の提供/雑談 （5 名）

【母－会話 21】会議での会話 （3 名）

【母－会話 22】レストランでの会計 （3 名）

【母－会話 23】食事終了後の挨拶/終了部挨拶/感謝 （6 名）

【母－会話 24】友人同士の食事中の会話/食事提供/感謝 （10 名）

【母－会話 25】友人の車に乗る （6 名）

【母－会話 26】車で迎えに来る/挨拶/提供/感謝 （9 名）

【母－会話 27】車に乗る/終了部挨拶 （7 名）

【母－会話 28】食事の終了部挨拶/感謝 （7 名）

【母－会話 29】親戚同士の開始部挨拶 （4 名）

【母－会話 30】食事の提供 （4 名）

【母－会話 31】開始部挨拶/料理の褒め/絵の褒め/感謝 （7 名）

【母－会話 32】料理の提供/料理の褒め/感謝 （9 名）

【母－会話 33】知り合い同士の終了部挨拶/褒め （5 名）

【母－会話 34】親戚同士での開始部挨拶/感謝 （5 名）

【母－会話 35】親戚同士の食事場面(1) （8 名）

【母－会話 36】知り合い同士の開始部と終了部挨拶 （15 名）

【母－会話 37】知り合い同士の会話開始部と終了部挨拶 （3 名）

収録の時間は、すべての場面を合わせて 952 分である。この場合の収録時間とは、実際に IC レコーダーが回っている時間のことを指している。パーティー場面のような長時間に渡り会話が行われた場面では、収録の時間が研究対象以外の部分を含んで長くなっていることもある。以上の収録時間のうち、本研究の対象として文字化された会話の時間は合計 369 分である。

【表 3－3】場面の参加者数と参加者関係、録音の内訳

場面種類	会話番号	記号	参加者数	参加者関係	録音時間(分)	文字化時間(分)
パーティー場面	【会話2 】	IR(01)×IR(02)×IR(03)×IR(04)×IR(05)×IR(06)×IR(07)×	8	親戚同士	(約)10	(約)10
	【会話12】	IR(01)×IR(02)×IR(05)×IR(07)×IR(09)×IR(10)×IR(11)×IR(12)×IR(13)×IR(14)	9	親戚同士	76	15
	【会話13】	IR(01)×IR(02)×IR(05)×IR(07)×IR(11)×IR(13)	6	親戚同士	25	10
	【会話14】	IR(01)×IR(02)×IR(05)×IR(07)×IR(10)×IR(11)×IR(09)×IR(12)×IR(13)×IR(14)×IR(15)×IR(16)×IR(17)×IR(18)×	21	親戚同士	34	20
	【会話15】	IR(01)×IR(02)×IR(05)×IR(07)×IR(25)×IR(26)×IR(27)×	10	親戚同士	41	20
	【会話16】	IR(01)×IR(02)×IR(05)×IR(07)×IR(10)×IR(11)×IR(09)×IR(12)×IR(13)×IR(14)×IR(15)×IR(16)×IR(17)×IR(18)×	21	親戚同士	50	5
	【会話17】	IR(01)×IR(05)×IR(07)×IR(29)×IR(30)×IR(26)×IR(02)	6	親戚同士	57	10
	【会話18】	IR(01)×IR(02)×IR(05)×IR(07)×IR(11)×IR(12)×IR(13)×IR(31)×IR(32)×IR(33)×IR(34)×IR(35)×IR(36)	13	親戚同士	42	30
	【会話20】	IR(01)×IR(05)×IR(07)×IR(12)×IR(13)	5	親戚同士	13	5
	【会話23】	IR(05)×IR(46)×IR(01)×IR(47)×IR(44)×IR(51)	6	友人同士	8	8
	【会話24】	IR(01)×IR(02)×IR(05)×IR(44)×IR(46)×IR(47)×IR(49)×IR(50)×IR(51)×IR(48)	10	友人同士	40	35
	【会話30】	IR(01)×IR(02)×IR(68)×IR(69)	4	親戚同士	8	5
	【会話31】	IR(70)×IR(71)×IR(01)×IR(41)×IR(38)×IR(40)×IR(05)	7	友人同士	7	7
	【会話32】	IR(70)×IR(71)×IR(01)×IR(41)×IR(38)×IR(40)×IR(05)×	9	友人同士	1	1
	【会話33】	IR(70)×IR(40)×IR(41)×IR(72)×IR(01)×IR(02)	5	友人同士	1	1
	【会話34】	IR(05)×IR(40)×IR(41)×IR(02)×IR(01)	5	親戚同士	12	3
	【会話35】	IR(74)×IR(75)×IR(26)×IR(01)×IR(05)×IR(29)×IR(37)×	8	親戚同士	98	30
	【会話36】	IR(75)×IR(76)×IR(77)×IR(78)×IR(79)×IR(01)×IR(05)×IR(37)×IR(69)×IR(29)×IR(22)×IR(23)×IR(41)×IR(24)×IR(28)	15	親戚同士	80	20
	【会話37】	IR(88)×IR(89)×IR(02)	3	知り合い同士	2	2
車での場面	【会話5】	IR(41)×IR(44)×IR(50)×IR(51)	4	友人同士	15	10
	【会話26】	IR(01)×IR(52)×IR(53)×IR(54)×IR(55)×IR(57)×IR(58)×IR(59)×IR(04)	9	親戚同士	1	1
	【会話27】	IR(21)×IR(60)×IR(61)×IR(62)×IR(63)×IR(64)×IR(65)	7	友人同士	8	8
会議	【会話21】	IR(41)×IR(42)×IR(43)	3	社長と社員	40	15
玄関先	【会話19】	IR(01)×IR(02)×IR(37)×IR(38)×IR(39)×IR(40)	6	親戚と知り合い	3	3
	【会話28】	IR(21)×IR(60)×IR(61)×IR(62)×IR(63)×IR(64)×IR(65)	7	友人同士	14	14
	【会話25】	IR(01)×IR(52)×IR(53)×IR(54)×IR(56)×IR(57)	6	親戚同士	5	5
	【会話29】	IR(01)×IR(02)×IR(66)×IR(67)	4	友人同士	3	3
スーパー	【会話4】	IR(07)×IR(81)×IR(82)	3	客と店員	3	3
お店	【会話6】	IR(41)×IR(44)×IR(80)	3	客と店員	10	5
レストラン	【会話22】	IR(05)×IR(44)×IR(45)	3	ウェートレス-客	5	5
美容室	【会話3】	IR(04)×IR(83)×IR(84)	3	美容師と客	2	2
クリニック	【会話1】	IR(13)×IR(85)	2	医者-患者	2	2
電話	【会話7】	IR(04)×IR(86)	2	友人	5	5
	【会話8】	IR(04)×IR(87)	2	友人	3	3
	【会話9】	IR(20)×IR(21)	2	親戚	1	1
	【会話10】	IR(10)×IR(05)	2	親戚	2	2
	【会話11】	IR(17)×IR(23)	2	親戚	7	5
合計時間					952分	369分

【表 3－3】では、それぞれの談話における参加者の組み合わせやテーマ、録音時間である。また【表 3－4】は、母語場面調査協力者の内訳となる。

【表 3－4】母語場面調査協力者の内訳

発話者記号	参加会話	年齢	性別	職業
IR(01)	(2),(12),(13),(14),(15),(16),(17),(18),(19),(20),(23),(24),(25),(26),(29),(30),(31),(32),(33),(34),(35),(36)	54	女	主婦
IR(02)	(2),(12),(13),(14),(15),(16),(17),(18),(19),(24),(29),(30),(33),(34),(38),	30	女	学生
IR(03)	(2),	30	女	教師
IR(04)	(2),(3),(7),(8),(26)	28	女	大学院生
IR(05)	(2),(10),(12),(13),(14),(15),(16),(17),(18),(20),(22),(23),(24),(31),(32),(34),(35),(36),	58	男	公務員
IR(06)	(2),	38	男	経営者
IR(07)	(2),(12),(13),(14),(15),(16),(17),(18),(20),(4)	26	男	大学生
IR(08)	(2),	10	女	小学生
IR(09)	(12),(14),(16)	41	女	医者
IR(10)	(10),(12),(14),(16)	40	男	医者
IR(11)	(12),(14),(16),(18)	78	女	—
IR(12)	(12),(14),(16),(18)	82	男	—
IR(13)	(12),(14),(16),(18),(20)	82	女	—
IR(14)	(12),(14),(16)	6	男	—
IR(15)	(14),(16)	55	女	図書館司書
IR(16)	(14),(16)	56	男	公務員
IR(17)	(11),(14),(16)	29	女	会社員
IR(18)	(14),(16)	27	女	会社員
IR(19)	(14),(16)	24	女	会社員
IR(20)	(14),(16)	30	男	会社員
IR(21)	(9),(14),(16),(27),(28)	54	男	教師
IR(22)	(14),(16),(36),(37)	49	女	カウンセラー
IR(23)	(11),(14),(16),(36),(37)	22	女	大学生
IR(24)	(14),(16),(36),(37)	9	男	小学生
IR(25)	(15),	70	男	公務員
IR(26)	(15),(17),(35)	47	女	主婦
IR(27)	(15),	67	女	主婦
IR(28)	(15),	8	女	小学生
IR(29)	(17),(36),(37)	60	男	教師
IR(30)	(17),	60	女	教師
IR(31)	(18),	72	女	—
IR(32)	(18),	64	女	教師
IR(33)	(18),	39	女	会社員
IR(34)	(18),	27	女	主婦
IR(35)	(18),	78	男	—
IR(36)	(18),	40	男	会社員
IR(37)	(19),(36),(37)	61	女	主婦
IR(38)	(19),(31),(32)	45	女	主婦
IR(39)	(19),	16	男	高校生
IR(40)	(19),	43	女	お手伝いさん
IR(41)	(5),(6),(21),(31),(32),(33),(34)	26	女	大学院生
IR(42)	(21),	30	男	社員
IR(43)	(21),	62	男	社長
IR(44)	(5),(6),(22),(23),(24)	31	女	デザイナー
IR(45)	(22),	20代	女	ウエイトレス

IR(46)	(23),(24)	58	男	教師
IR(47)	(23),(24)	57	女	主婦
IR(48)	(24),	80	女	—
IR(49)	(24),	32	男	会社員
IR(50)	(23),(24),(5),	27	男	建築家
IR(51)	(24),(5),	29	女	会社員
IR(52)	(25),(26)	55	男	商人
IR(53)	(25),(26)	47	女	主婦
IR(54)	(25),(26)	23	男	学生
IR(55)	(26),	54	女	作家
IR(56)	(25),	34	男	教師
IR(57)	(25),(26)	32	女	大学院生
IR(58)	(26),	8	女	小学生
IR(59)	(26),	28	女	大学院生
IR(60)	(27),(28)	30	女	主婦
IR(61)	(27),(28)	31	男	大学院生
IR(62)	(27),(28)	59	男	会社員
IR(63)	(27),(28)	53	女	主婦
IR(64)	(27),(28)	32	女	教師
IR(65)	(27),(28)	30	女	大学院生
IR(66)	(29),	19	女	大学生
IR(67)	(29),	19	女	大学生
IR(68)	(30),	41	女	画家
IR(69)	(30),(35),(36),	41	女	会社員
IR(70)	(31),(32),(33)	62	女	公務員
IR(71)	(31),(32)	60	女	教師
IR(72)	(32),(33)	67	男	商人
IR(73)	(32),	50	男	医者
IR(74)	(35),	65	女	主婦
IR(75)	(35),(36)	28	女	大学院生
IR(76)	(34),	54	男	タクシードライバー
IR(77)	(35),	46	女	主婦
IR(78)	(36),	57	女	画家
IR(79)	(36),	30	女	主婦
IR(80)	(6),	20代	男	店員
IR(81)	(4),	50代	男	店員
IR(82)	(4),	30代	男	店員
IR(83)	(3),	50代	女	美容師
IR(84)	(3),	30代	女	美容師
IR(85)	(1),	30代	女	医者
IR(86)	(7),	27	女	会社員
IR(87)	(8),	30	女	会社員
IR(88)	(38),	45	女	主婦
IR(89)	(38),	53	女	教師

調査協力者によっては、会話場面に一度のみ参加する者といくつかの会話場面に参加する者がいる。その理由としては、調査者が IC レコーダーを渡して記録を頼んだ調査協力者が、その協力者自身が参加するいくつもの会話を録音した場合に、多くの場面に同一の参加者として参加したことが挙げられる。「ー」で印されている箇所は、子供あるいは退職している人たちである。

3.5　接触場面の概要

3.5.1　接触場面での録音データの収集

本研究の接触場面の調査協力者はみな、日本在住のペルシア語母語話者である。フィールド調査は日本の関東地域で行った。自然会話を収集する際は、母語場面同様、儀礼的な相互行為が会話参加者の間で見られることを条件としたこと以外には、特別なセッティングを設けていない。

以下では会話が行われた協力者と場面の特徴を示す。

3.5.2　接触場面での協力者と場面紹介

＜1＞ 調査協力者

本調査で対象としたペルシア語母語話者は、筆者の知り合いあるいは、彼らに紹介してもらった知人である。また何名か、場面調査の際に偶然その場面におり、その場で協力を依頼した者もいる。20 歳代から 50 歳代である 17 名の協力者の日本での滞在期間は 7 年以上[18](中・長期滞在者）であり、日本語での日常会話が十分にでき、さらに日本社会の儀礼的な振る舞い(待遇表現など）に関しても意識あるいは理解を持っている者を対象にした(このことは口頭インタビューの結果から分かる）。彼らの来日目的は様々であり、それぞれの来日目的が彼らにとって第二言語である日本語の習得状況に影響していることが観察された。また、日本語能力に関しては、口頭インタビューの結果から、上級・中級と初級レベルに分類した。協力者の中には、会話と読み書きのレベルに差が見られる者もいた。

協力者の詳細は【表 3－5】の通りである。

[18] 1 名のみ例外(PR(09))

【表 3－5】　協力者の詳細

発話者記号	参加会話番号	年齢	性別	職業	日本滞在歴	日本語能力
PR(01)	(8),(9),(11),(16),(17)	40代	男	介護士	20年	話す・聞く：上級, 読む・書く：中級
PR(02)	(19)	40代	男	―	18年	話す・聞く：上級, 読む・書く：中級
PR(03)	(19)	40代	男	―	10年	話す・聞く：上級, 読む・書く：初級
PR(04)	(1),(2),(3)	40代後半	男	経営者	21年	話す・聞く：上級, 読む・書く：初級
PR(05)	(4)	30代	男	英語教師	8年	話す・聞く：初級, 読む・書く：ゼロに近い
PR(06)	(5),(6),(18)	40代後半	男	経営者	25年	話す・聞く：上級, 読む・書く：中級
PR(07)	(6),(7),(9),(10),(11),(12),(13),(15)	50代	女	主婦（バイト）	9年	話す・聞く：中級, 読む・書く：中級
PR(08)	(14)	40代半ば	男	労働関係	23年	話す・聞く：上級, 読む・書く：初級
PR(09)	(14)	40代	男	公務員	2年	ゼロに近い
PR(10)	(20),(21),(22),(23),(24),(25)	30代後半	女	大学助手	10年	話す・聞く：上級, 読む・書く：上級
PR(11)	(29),(30)	20代後半	男	学生 （博士課程）	7年	話す・聞く：上級, 読む・書く：上級
PR(12)	(26),(29),(30)	20代後半	男	学生 （博士課程）	7年	話す・聞く：上級, 読む・書く：上級
PR(13)	(9),(10),(16),(17),(27),(28)	30代	女	学生 （博士課程）	10年	話す・聞く：上級, 読む・書く：上級
PR(14)	(15),(31),(32),(33),(34),(35),(36)	30代	女	研究員	10年	話す・聞く：上級, 読む・書く：上級
PR(15)	(10)	30代	男	会社員	13年	話す・聞く：上級, 読む・書く：上級
PR(16)	(12),(13),(14),(15)	30代	女	学生 （博士課程）	9年	話す・聞く：上級, 読む・書く：上級
RE(01)	(2),(3),(5),(18),(19)	**30代**	**女**	**博士課程**	**10年**	

彼らは母国とは異なる文化をもつ日本で、石井他(2003:43)の指摘する「異文化摩擦[19]」を経験している。外国人であればこうした問題は程度の差こそあれ生じるものであるが、他方では彼らは長期に及ぶ日本での生活を通して徐々に異文化に適応してきている。

この【表 3－5】からも見られるように、協力者は様々なペルシア語母語話者のコミュニティーの経歴を持っている。また、一人の協力者がいくつかの異なる場面の会話に参加していること場合もある。

接触場面での日本語母語話者に関しては、たまたまその場面に居合わせた者が多く、会話に参加しているペルシア語母語話者同士は初対面であったり、または長期的な付き合いをもっていたりと会話参加者の関係性にばらつきが見られた。

＜2＞ 調査場面と参加者関係

母語場面と同様に、接触場面におけるフィールドワークも広く行った。各場面で録音された会話データの総時間は長いが、その中で研究のデータとして使用できるものを、スピーチ・イベントとして取り上げ分析を行った。

19 「異なる文化をもつ人々が接触をして、行動や思考様式あるいは価値観などの違いによって生じる不和や葛藤」

下の【表 3－6】は，自然会話が収録された調査場面とその場面における会話の特徴、また参加者の関係を示したものである。

調査場面の選択方法としては、まずペルシア語母語話者の母語場面において儀礼的行動（ターロフ）が多く見られた場面に比較的近いものを検討した。次にペルシア語母語話者と日本語母語話者が自然な会話をする場面を想定し、協力者に調査依頼を申し出た。その際、彼らの日常生活に密着し、特にイベントの開催や日本人との交流を予定している日程に調査者の臨席の依頼をした。しかし、それが不可能な場合は、協力者にあらかじめ渡してあった IC レコーダーで、日本語母語話者との挨拶や日常会話を各協力者の判断で録音してもらった。

また、都内にあるペルシア料理レストランや食料品販売店（スーパーマーケット）のオーナーにも問い合わせ、収録の許可を得た。収録を許可された飲食店では、フィールドワーカーである筆者が協力者とより親密になるため、または調査者としての負荷を和らげるために、ある一定の期間(3 日間～4 日間)現場に通い、そこでスタッフの一員として接客などの手伝いをした。

インターアクションの参加者数は場面によりばらつきがあり、2 名から 5 名までであった。

録音されたデータのフォーマルさの度合いには、場面によって差があった。それぞれの参加者間の役割や関係も場面によって異なる。特に公的な場面での相互行為は、目標言語である日本社会の規範に合うことが大きく期待される。その中には、言語規範、社会言語規範、社会文化規範といった、様々な面の規範が含まれる。ペルシア語母語話者側が接客をする役割を持つ場合、客である日本語母語話者はこうした規範に適った礼儀正しい対応を彼らに期待すると考えられる。一方、近所同士や自宅内といった非公的な場面における会話では、そのような緊張感は多少減ると考えられる。また、そのような場面では、儀礼を通して、相手との円滑な関係への維持に力を入れているように見られた。大学内の会話では、7 年以上日本での留学経験があるペルシア語母語話者が、研究室で友人や先輩と会話をする場面が録音されている。また、大学スタッフとの挨拶や儀礼的会話のデータも見られる。

本調査では録音された会話の内、合計 36 の会話場面を分析の対象としている。

次に、それぞれの会話の調査場面にデータを収集した順に番号を付す。それぞれの場面は、いくつかのスピーチ・イベントから成り立っている。【表 3－6】には反映されていないが、以下の会話場面では、調査者自身も場面参加者の一員としてカウントされている。ただし、調査者の会話部分は分析対象外となっている。以上のような理由から、各事例の会話の参加者数は【表 3－6】と異なるところがある。

【表 3−6】調査場面データの詳細

調査場面	場面特徴	会話時間(分)	会話番号	参加者関係	参加者数
スーパーマーケット	開始部と終了部の挨拶・値段を聞く	10～15	(2)，(3)	店員 - 客	2名
	レジでの会計中の談話	1～2	(27)，(28)		2名
	食べ物を提供する	3	(1)		3名
レストラン	開始部と終了部挨拶	39	(18)	常連客(店員 - 客)	4名
	料理の注文	3	(19)	常連客(店員 - 客)	2名
		1	(4)	初対面(店員 - 客)	3名
	友人同士の自己紹介	3～8	(6)，(8)	店員－客	3名～4名
	客がレストランスタッフを褒める	3	(7)		2名
	常連客との挨拶	20～32	(10)，(5)		2名
展示会	展示会での値段の交渉	24	(11)	店員－客	3名
フリーマーケット	客が値段を聞き、店員が商品について説明をする	20～60	(21)，(22)	店員－客	2～3名
	ブースを持つ者同士の挨拶と会話	4	(23)	仕事仲間	3名
	開始部と終了部の挨拶，商品の提供	50	(24)	友人同士	5名
	クレームを言う	3	(25)	仕事仲間	3名
クリニック	診察室での会話	3～4	(32)，(33)	医者－患者	2名
近所同士	開始と終了部挨拶・褒め・感謝が表れる	8	(9)	友人	4名
パーティー	ホストとゲストが会う際の開始部挨拶	5	(14)	友人同士	3名～5名
	初対面場面での自己紹介	2～5	(12)，(13)	知り合い	3名
	終了部挨拶	2	(15)		3名
自宅	初対面同士の開始部終了部挨拶と雑談	41～90	(16)，(17)	知り合い	2名～3名
	夫婦同士の会話	19	(20)	夫婦	2名
大学内	開始部挨拶	1～3	(31)，(34)，(36)	学友同士	3～4名
	先生に謝罪	1	(35)	学生と先生	2名
	開始部と終了部の挨拶・誘い	3～18	(29)，(30)	学生と大学スタッフ	3名
	パソコンのオーダー	13	(26)	後輩と先輩	2名

収録時間は全ての場面を合わせて 691 分となる。接触場面の録音においても、収録時間とは実際に IC レコーダーが作動している時間のことを指す。レストランの場面では、長時間にわたり様々な会話が録音されているが、その中でも儀礼的な行動が行われたもののみを対象としている。従って、母語場面とは異なり、接触場面では録音時間のうち比較的儀礼的と判断できる会話場面の時間は長くないものも多い。従って収録時間のうち、本研究が対象として取り上げ文字化した会話の時間は合計 426 分である。

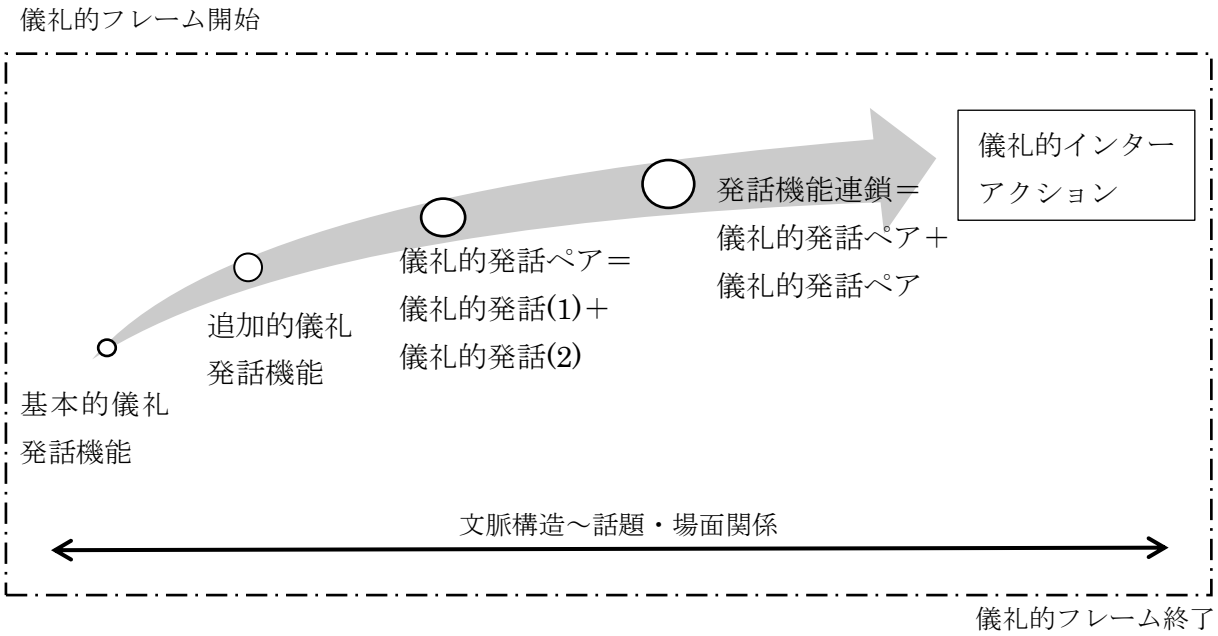
3.6　分析の枠組み

本研究においては、会話分析の手法を分析の大きな研究枠組みとし、母語場面および接触場面での儀礼的なインターアクションに焦点をあてる。分析の枠組みにおいて重要な役割を果たすのが、儀礼的フレームの存在である。インターアクションにおいて、儀礼的フレームが参加者の間でできあがることによって、その場面が儀礼的であると定義づけることが可能となる。そこで、3.6 節では、儀礼的フレームの概念を定義してから、そのフレーム内の会話

構造を見る。次に、会話に見られる儀礼的発話機能のカウントの仕方を説明した後、最後に接触場面の言語問題の分析で使用する、第三者評価の視点を説明する。

3.6.1　儀礼的フレームと会話構造

以下の【図 3−1】は、本研究の儀礼的フレームの文脈構造を示したものである。



【図 3−1】　儀礼的発話の文脈構造

場面におけるインターアクションが儀礼的なものになるには、いくつかの要素が互いに影響しており、それらの条件がそろう必要がある。

まず、儀礼的フレームの全体構造が会話内で表れやすい場所が存在している。まず、儀礼的フレームが表れやすい箇所は、「スピーチ・イベント内の開始部・主要部・終了部」という 3 点であると考察した。次に、それぞれの社会において、文化的に儀礼的行動の現れが期待される場所が存在する。これを「社会文化行動が表れやすい箇所」と定義する。それぞれの箇所については、3.6.1.1 節において詳細を説明する。

また、儀礼的フレームの会話内の構造をみると、様々な要素から成り立っていることが明らかとなった。儀礼的場面において重要な役割を持つものは、「多様な発話機能の産出」と「儀

礼的発話ペアの現れとそこでの発話連鎖」であるという考察を行った。そこには表現として選択可能な要素が多く存在しており、発話者は相手のフェイスを侵害しないための言語行動にいっそう気を配り、言葉を選択していることが明らかになった（アキバリ 2016a）。

儀礼的フレームの会話内での分析の枠組みとして、「儀礼的発話ペア」、「発話機能」そして二つから成り立つ「発話連鎖」の産出が挙げられる。それぞれを詳細に検討することで、儀礼場面での会話の特徴を明らかにすることができると考えられる。

これらの儀礼的な発話機能を「基本的儀礼発話機能」と「追加的儀礼発話機能」と名付ける。各要素がどのようなものか、3.6.1.2 節と第 4 章で詳細を説明する。

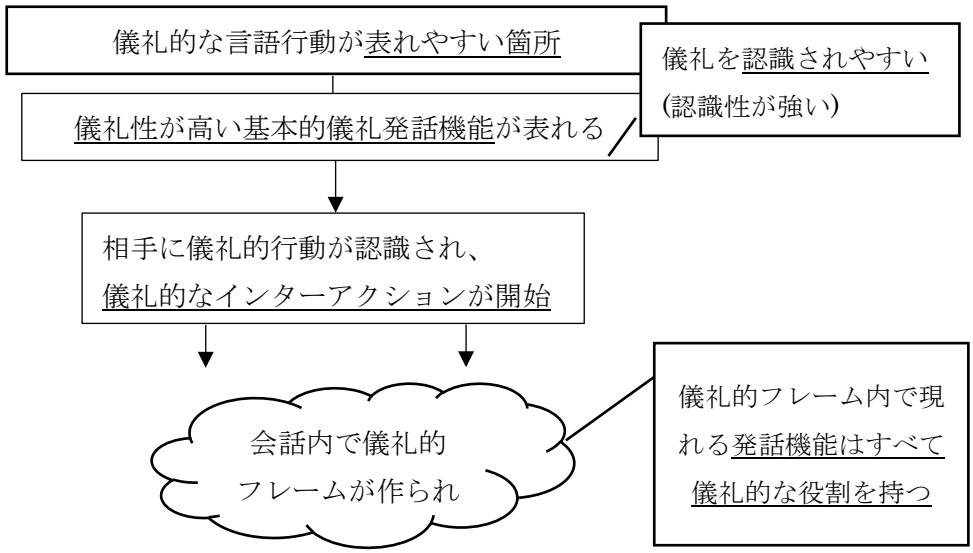
以下においては、儀礼的フレームがどのように作られ、それぞれの要素がどのように互いに影響を及ぼすのかを述べる。

【儀礼的フレームの構造パターンⅠ】

まず、場面や会話内において、儀礼的なインターアクションが出現しやすい箇所が存在する（インターアクションの開始部、状況によっては主要部、インターアクションの終了部/社会文化的行動の前後）。儀礼が産出されやすい箇所において、儀礼性が高い基本的儀礼発話機能[20]が現れた場合、この発話機能は場面を儀礼的なフレームに切り替える役割を果たすことができる（場面を儀礼的にするスイッチのような役割）。ここでもし、インターアクションの相手がこの儀礼開始の合図に反応しそれを理解した場合、そこで「儀礼的フレーム」が作られ、儀礼的なインターアクションが起こる。儀礼的フレームができたインターアクションにおいては、その儀礼的フレーム内で表れる発話機能はすべて儀礼的な役割をもち、儀礼的発話機能として解釈できる。

以下の【図 3-2】は、儀礼的フレームの構造が作られるパターンⅠの解説である。

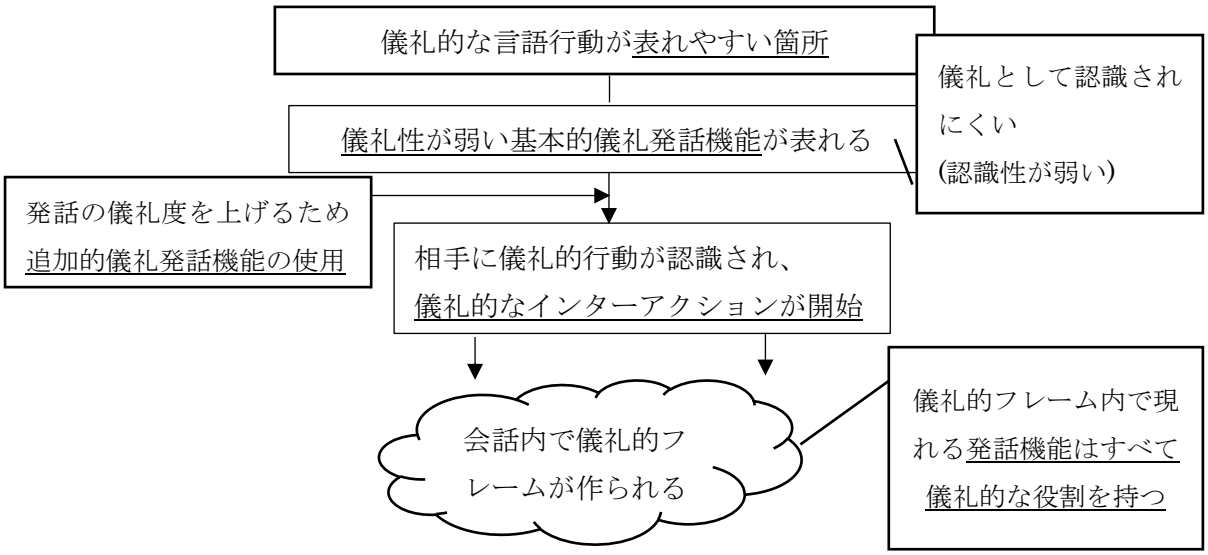
[20] 発話機能の儀礼性の頻度に関しては第 4 章を参照。



【図 3−2】　儀礼的フレームの構造パターンⅠ

【儀礼的フレームの構造パターンⅡ】

もう一つのパターンにおいては、儀礼的な発話が産出されやすい箇所において、儀礼性が弱い基本的儀礼発話機能が現れる。このような発話機能は儀礼性が弱いため、相手の発話者に認識されにくく、儀礼的なインターアクションが容易になりたたない。従って、このようなパターンでは、追加的儀礼発話機能を使用することで、その基本的儀礼発話機能の儀礼度合いを高め(儀礼度を調整する)、相手の発話者に儀礼的な認識をさせる役割をもつ。ここで、相手の発話者によって発話連鎖が続くことで、「儀礼的フレーム」が作られる。儀礼的フレーム内で産出される発話機能はすべて儀礼的な役割をもつ。



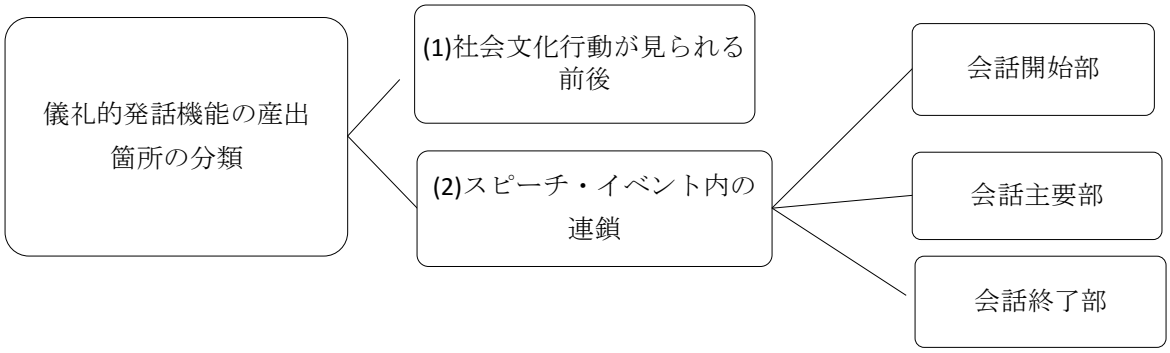
【図 3-3】　儀礼的フレームの構造パターンⅡ

儀礼的フレームが作られる二つのパターンにおいて、(1)儀礼的発話機能が産出されやすい箇所に、(2)儀礼性がある発話機能が現れることが儀礼的フレームを作る条件として挙げられるが、これ以外にも Hymes(1972)の SPEAKING モデルも儀礼的フレームに切り替わることに影響すると考えられる。Hymes は、Setting(セッティング)、Participant(参加者)、Act sequence(トピック)、Key(トーンやムード)、Instrumentalities(チャンネル)、Norm(規範)、Genre(ジャンル)などがスピーチアクトに影響していると述べている。従って、会話がどのような状況でなされているのか、会話の参加者の関係や会話のトピックなどの要素も、場面を儀礼的フレームに切り替えることに影響している。

儀礼的フレームが終了するのは、「発話連鎖の長さ」や「儀礼的フレームから実質的発話に転移するためのシフター」の存在などが関係する。儀礼的な発話の連鎖は、文化や会話参加者同士の関係により異なりを見せると思われるが、インターアクションを行っている発話者同士はその長さを互いに判断できる。また儀礼的フレームを終了させる談話マーカーも、会話中に存在すると考えられる。本研究ではそれらの要素も考慮にいれ、分析を行う。

3.6.1.1　儀礼的フレーム全体の構造

会話中で儀礼的な発話が産出された箇所を検討すると、まず大きく 2 つの視点から儀礼的発話機能の産出を分類することができると考えられる。【図 3－4】における各分類は以下のようになっている。



【図 3－4】ペルシア語母語話者の儀礼的発話機能の産出箇所の分類

(1)　社会文化行動が見られる前後に表出する儀礼的行動

会話内において、ある行動が社会文化行動として留意された場合に、その前後に儀礼的な言語行動が期待される。例えば、食事をする、物を贈る、これらの行動は社会文化的な背景から儀礼的フレームに入りやすく、儀礼的な言語行動を伴う。

特に、ペルシア語母語話者のコミュニケーション場面で、「社会文化行動」につながる活動が見られた場合に積極的に算出される儀礼的行動がターロフであると考えられる。そのような場面では会話参加者が相互に交流し、場面の儀礼性を構築するプロセスが見られると予想される。

(2)　スピーチ・イベント内の連鎖

本論では、儀礼的なインターアクションが出現する場面を特定するため、会話全体をいくつかのスピーチ場面(speech situation)とスピーチ・イベント(speech event)(Hymes 1972)に分類して分析を実施した。

スピーチ・イベントは、Hymes(1974)の言うスピーチ・コミュニティの内部にある、speech situation、speech act(スピーチアクト)に続く下位カテゴリーに属するもので、スピーチ・コミュニティの基本分析単位となる。コミュニケーションの意味は、スピーチ・イベント、発話状況、さらにはスピーチ・コミュニティというコンテクストの中で生成される。例えば、パーティー(speech situation)で、参加者たちによってコミュニケーションの場(speech event)が持たれ、挨拶や冗談(発話行為の連鎖)といったやりとりが行われる(松木 2003b)。

本研究の対象として、ひとつのスピーチ場面(パーティー場面、車での場面、会議、家の玄関先、電話場面など)の選択において重視したのは、儀礼的なスピーチ・イベントの出現の可能性が高いものである。ここで、各スピーチ・イベントの会話における儀礼的な規範が明確になれば、大きい単位でのスピーチ場面全体において、儀礼的な言語行動がどのような基準で進行するのかを場面単位で分析できる。また、母語場面のスピーチ・イベントに注目することは、そのスピーチ・コミュニティの規範をより理解することにつながる。スピーチ場面、そしてスピーチ・イベントという単位によって相互行為の発話を分類することで、分析の結果をより明確に説明できることにつながることも、さらなる利点として考えられる。

スピーチ・イベントにおいて、儀礼的行動の発話連鎖が集中して出現する箇所が 3 つ存在する。スピーチでの「開始部」、「終了部」、そして状況によっては、「主要部」において儀礼的行動が集中して出現するのである。この三つの箇所では、発話連鎖の長さが儀礼度合いの強調と直接関連している。

3.6.1.2　儀礼的フレームの会話内の構造

儀礼的フレーム内の会話の構造を見てみると、分析においては大きく 3 つの要素の関係が重要となる。まずは、場面を儀礼的なフレームに切り替えることに大きく影響する、「基本的儀礼発話機能」の存在である。次に、インターアクションの儀礼度合いを調整する、また場面の儀礼度を上げる「追加的儀礼発話機能」である。最後に、二つの儀礼的発話からできる「儀礼的発話ペア」である。以下では、それぞれについて詳細に説明する。

(1)　基本的儀礼発話機能

儀礼的であるとして定義される場面のインターアクションにおいては、いくつかの機能が明確に産出される。これらを「基本的儀礼発話機能」と定義する。先行研究からも分かるように、場面を儀礼的フレームに切り替える発話機能やそのフレーム内で多く活用される機能は、「挨拶-提供-申し出-褒め-誘い-感謝-依頼-謝罪-願望」の 9 つである。これらの発話機能が儀礼的であるとされる基本的な会話を構成していると考えられるため、本論ではこれらの機能が場面の儀礼性にどのように影響しているのかを論じる。

基本的儀礼発話機能は、儀礼的インターアクションの場面で対人的コミュニケーション機能（Malinowski 1922）の役割を持つ。特に聞き手と話し手の共同的な行為における「社会的つながり」を築く役割を果たしている。「挨拶的定型表現」や「決まり文句的表現」は、この基本的儀礼発話機能を持つものであると言える。それぞれの「基本的儀礼発話機能」の特徴や定義、またその性質については、第 4 章で詳細な説明を述べる。

(2)　追加的儀礼発話機能

儀礼的なインターアクションが見られる発話では、「基本的儀礼発話機能」のみでは儀礼の働きの全てを説明できない場合がある。そこで、本研究では発話ペアの成分を検討するがその上で、基本的儀礼発話機能以外の要素を「追加的儀礼発話機能」と呼び、「感情提示−配慮−謙遜−相手の発話者に対する儀礼的応答」の 4 つに分類する。

ペルシア語母語話者の母語場面で見られた実際の会話から、基本的儀礼発話機能と追加的儀礼発話機能（ここでは「感情提示」）の役割を説明する。以下の 2 つの会話は、開始部での挨拶の発話である。隣接ペア（adjacency pair[21]）の第 1 成分と第 2 成分は共に「挨拶-挨拶」という基本的儀礼発話機能を持っている。

[21] Schegloff & Sacks (1972)によれば、隣接ペアなどの秩序は会話参加者たちが「適切」な会話を構成するために考慮している特徴であり、規範的なものとして位置付けられているという。

（例 1）　発話者 A：Salaam（こんにちは）→　「挨拶」

発話者 B：Salaam（こんにちは）→　「挨拶」

（例 2）　発話者 A：Salaam　*Azizaaam*（こんにちは,ダーリン）→「挨拶」（＋α）

発話者 B：*BahBah*　Salaam　*Khoshkelam.*

（あらあら,こんにちは,私の可愛い子）→「挨拶」（＋α）

例 2 では、基本的儀礼発話機能を持つ「こんにちは」という語句の他に、「ダーリン」、「あらあら」、「私の可愛い子」という語句も見られる。こうした語句は相手に対して肯定的な感情を発話内で示している。つまり基本機能の発話文脈の命題の中に「感情提示」という「追加的儀礼発話機能」が挿入されている。各追加的儀礼発話機能の定義や特徴は、次章で説明する。

(3)　儀礼的発話ペア

発話者の一方が儀礼的な発話を行った際、もう一方がその儀礼に対して儀礼的な発話をする期待が高まる。予備調査(アキバリ 2014;2015)においては、話者交代及び「状況の適切性」と並んで、会話分析者(Sacks，Schegloff，Jefferson 1974)の研究でよく言及される「隣接ペア」が、どの儀礼的発話機能にも目立って出現することが明らかになった。

そこで、本研究では、隣接ペアを基本とした「儀礼的発話ペア」が儀礼的フレーム内の会話で成立していると考える。儀礼的発話ペアは、隣接ペアの役割を持つ物もあれば、儀礼的発話ペアだけを作る物もある。

通常「隣接ペア」は、以下の条件が満たされる時に成立する。

(1)　隣同士に位置する発話であること。

(2)　異なった話し手による発話であること。

(3)　第 1 ペア成分と第 2 ペア成分という 2 つの部分からなる発話であること。

(4)　第 1 ペア成分が第 2 ペア成分を誘発すると判断できること。

実際の進行中の会話を見ると、発話者 X が第 1 成分を発話した後に一定の間が生じ、それから第 2 成分を相手の発話者 Y が発話しなければならないという会話上の規則が認められる。例えば、隣接ペアの種類として、以下の発話が従来の研究で多く観察されてきている(サーサス 1989;他)。

A.挨拶－挨拶、B.呼びかけ－応答、C.情報の要請－情報の要求、D.誘い－受諾、

E.誘い－拒否

従って、隣接ペアは会話の中の様々なコンテクストにおいて頻出する。隣接ペアが成立するためには、発話者同士がお互いの発話の内容を理解し、場面に応じて適切な応答ができることが重要となる。つまり隣接ペアの使用においても、その場面での状況を把握する必要性が重要であると考えられる。

ターロフ場面の儀礼的フレームでは、「隣接ペア」、あるいは互いの発話を完成させる「儀礼的発話ペア」の連鎖が起きる傾向がある。それぞれの発話機能においては、連鎖が継続的に生じる傾向がある。また、ターロフの連鎖が発話者同士の間で適切に続けば、「順序としてのコンテクスト」(sequential context)が起き、儀礼が好ましい形で起きたと見なせる。つまり、第 1 成分に対して第 2 成分による好ましい応答が期待される。

本研究においても、個々の発話での発話機能の産出のみではなく、談話全体の発話連鎖も儀礼行為の重要な要素として捉え、分析する。

3.6.2　儀礼的発話の分析(分類と量的分析)

会話場面がいかに儀礼的であるのかを比較するひとつの基準として、その場面において、儀礼的な発話機能や発話行為がどの程度表れているかが挙げられる。そのため、本論では儀礼的フレーム内の会話構造やインターアクションでの儀礼的行動の理由や傾向を探ると同時に、儀礼的発話機能の会話内での出現頻度も検討する。そのため、ひとつの発話において、基本的儀礼発話機能、あるいは追加的儀礼発話機能が見られた場合、その発話が儀礼的な発話であるとして判断し、それをひとつの単位としてカウントする。

例えば、ある儀礼的な場面のインターアクションで 100 の発話が表れる場合、その中の 30 の発話において儀礼的な感謝が観察された場合、その会話において感謝が 30%の頻度で表れていると評価する。このようにして、個別の会話の中で儀礼的な発話がどれほどの割合で見られるのか、会話全体の割合と比較して分析する。

また、場合によっては、ひとつの発話で複数の儀礼的発話機能が同時に現れることもある(基本的儀礼発話機能と追加的儀礼発話機能が混在して現れることもある)。このような場合では、各儀礼的発話機能として別々にカウントする。

3.6.3　接触場面における儀礼的逸脱の分析

接触場面においては、母語とは異なる言語と社会言語的な規範によるインターアクションが起きることから、常に逸脱として解釈できる問題が起きている。本研究では、接触場面内におけるペルシア語母語話者の日本語による儀礼的な逸脱にも注目する。接触場面における儀礼的な逸脱は、二つのアプローチから分析される。ひとつは、母語場面の分析観点から見られる逸脱の留意と、もうひとつは、第三者評価から見た接触場面での儀礼的逸脱と留意である。

母語場面の分析から逸脱を解釈する手法では、まずペルシア語母語話者同士の儀礼的な自然会話を徹底的に分析することで、彼らの儀礼的な言語行動の傾向を探る。そこから、母語場面での儀礼的行動が儀礼的な母語規範として判断される。接触場面においても母語場面と近い言語行動が産出された場合、状況により、そこでは、母語場面の影響によって逸脱が起きていると判断する。

第三者が逸脱の認定、さらに逸脱の評価を行う手法は、逸脱に対する調査者の客観的な判断を補うために行われるものである。加えて、会話内での規範を同定するためのデータとして、第三者の評価を取り入れた。第三者が逸脱を留意する際には、自己の中で基底規範(Neustupny 1985a）を持っており、そこから逸脱かどうか判断していると考えられる。接触場面の参加者はその場面で適用される基底規範を新たに構築したり、内的場面では起きないよ

うな問題を解決しなければならなかったりと、様々な面で母語話者だけで構成される内的場面とは異なる言語行動をとっていかなければならない(Neustupny1985b）。

第三者による逸脱の認定から、会話参加者であるペルシア語母語話者側の視点からの規範は、自国の母語規範、目標言語規範(日本語接触場面では日本語規範が目標言語規範である)、接触場面規範(接触場面でのみ作られた規範）、中間言語規範(目標言語規範の中間言語的な規範）(加藤 2006)が挙げられた。

第 3 章では、本論の調査概要と調査期間、またその手順について述べた。それに続き、本論の分析の枠組みについて言及した。中でも重要な点として、隣接ペア、あるいはその連鎖から成り立つペルシア語母語話者の儀礼的な発話は、様々な種類の発話機能から構成されていることが指摘できる。この発話機能への注目は、母語場面のみではなく、接触場面においても儀礼的相互行為の判断基準として使用できると考えられる。次章では、実例を通して儀礼的発話機能の特定と分類を行う。

第 4 章

第 4 章　儀礼的発話機能の特定と分類

第 4 章では、まず、儀礼的場面でも分析の枠組みとなる、発話機能とは何か、その定義を行ってから、儀礼的な場面における基本的儀礼発話機能と追加的儀礼発話機能の特徴やそのタイプを考察する。儀礼的な発話機能に注目することで、それぞれの発話機能が、場面や関係からどのように影響を受けているのかを明らかにすることができる。また、各機能が儀礼的な会話構造を成り立たせるために、どのような役割を果たしているのかを説明することが可能となる。本章では、実際の収集データからの実例とともに各内容を説明する。

4.1　発話機能の表出とターロフ場面での儀礼的な発話

発話機能（Speech function）は、「談話」の認定に関わる重要な分析観点であると考えられる(ザトラウスキー 1993）。発話機能に対する注目は、言語形式ではなく文脈の中で言葉がどのように働いているかという言語機能に注目することが可能になる。特にターロフのような言語行動において発話機能に注目することは、相互行為における発話連鎖が長いため連鎖ごとにそのパターン化を説明できるという利点がある。

山岡(2008)は、発話機能を、発話者がある発話を行う際に、その発話が聞き手に対して果たす対人的機能を概念化したものを示す用語であると定義している。また、発話機能は、言語表現のみによっては決まらず、会話参与者間の人間関係や、他にも会話参与者間の利害、能力、予備知識、社会通念などさまざまな語用論的諸要素が統合されて、ひとつの機能が発動されると述べている。それに加え、語用論的要素から見ると、発話機能は、話者(Speaker)と聞き手（Hearer）の二者によって成り立っている。発話機能を規定する語用論的条件の重要な特徴は、話者だけから見たものではなく、聴者もそれを共有していることが前提とされることにある。従って、ペルシア語母語話者の儀礼という特別な場面において、特に当事者同士の親密さや上下関係は重要な役割を担う。

ターロフの発生が認められる場面とは、これらの機能がそれぞれ一般的に談話の中で活用されるのではなく、儀礼的な言語行動としていくつかの条件下で産出された場面である。

以下に、ペルシア語母語話者同士のインターアクションでターロフが表れる典型例をいくつか見る。

①【ペルシア語母語話者同士の買い物場面でのターロフの産出】

A：すみません、これはいくらですか?(Bebakhshid in chande?)

B：あなたの価値と比べて何でもないですよ、どうぞ

(Ghabele shomaro nadare,befarmaid.)

A：ありがとうございます(Daste shoma dard nakone.)

B：500 トマン[22]です。どうぞ、私のおごりで〔これを差し上げるの意味〕

(500toman mishe.befarmaid,mehmune ma bashed.)

A：ありがとうございます、じゃ、これでお願いします

（Kheili mamnunn,pas,hamino lotfan.）

以上の例は、典型的なペルシア語母語話者の買い物場面でのターロフの産出である。ターロフは、自分を謙遜し(上述の事例では：あなたの価値と比べて何でもないですよ)、相手に対して思いやりを示す(上述の事例では：どうぞ、私のおごりで)表現を多く使うことが期待される。従って、お店での交渉場面も通常は儀礼的フレームに入りやすく、そこでは、改まった儀礼的なインターアクションが見られる。

次の事例は、A が B の身に付けているものを褒める場面である。

②【ペルシア語母語話者同士の褒め場面でのターロフの産出】

A：素敵な時計ですね(Che saate zibai.)

22 イランの通貨単位。

B：ありがとうございます、大したものではないですよ、よければあなたに差し上げます(Mamnunam,ghabele shoma ro nadare,age eshkali nadare baraye Shoma)

A：いや、これはあなたにお似合いの時計です(Na,in saat barazande shomast.)

B：本当に、どうぞよければ貰ってください(Vaghean befarmaid,baraye shoma.)

A：いや、ありがとうございます(Na,daste shoma dard nakone.)

相手の持ち物を褒めることがペルシア語母語話者の社会文化的行動とされ、褒めを行った発話者に対する儀礼的な行動として評価される。そこでは褒めがきっかけとなり、儀礼的なフレームが作られる。そこから、ターロフの産出として自分の持ち物が大したものではないと謙遜をし、相手への想いを示すためその物を差し上げるという、儀礼上のインターアクションがおこる。

以上のように、ターロフ場面では、1．高い儀礼行動やポライトネスが相手から期待される、2．一つの話題についてのターン交換(会話のやり取り)が長い、3．相手への思いの伝達が様々な発話行為を儀礼的な形で用いることで行われる。

ターロフ場面では、発話機能はすべて、儀礼的発話ペアの(拡張)連鎖が確認されたところで、ターロフが順調に進んでいると判断できることになる。また、談話の中で拡張連鎖が長々と継続することもあり、ペルシア語話者同士の相互行為の談話時間は同じ状況における他言語の場合と比較すると、比較的長いことが一つの特徴として指摘できる(アキバリ 2015)。

4.2　基本的儀礼発話機能

本研究においては、インターアクションの儀礼度で重視される要素のひとつとして、基本的儀礼発話機能に注目する。本節では、より詳細に基本的儀礼発話とはどのようなものか、儀礼的場面でどのような特徴を見せるのかを見ていく。

その前に、本論における儀礼的場面とはどのようなものかを定義すると以下のようになる。儀礼的場面は目で見て確認できないことが最大の課題となるが、いくつかの条件がインターアクションや場面で把握された場合に、そこでは儀礼的な言語行動が成り立っているとみなせる。具体的には、①形式にそったインターアクションが多く見られる場面、あるいは、②インターアクションにおいて、相手への気遣いや配慮、謙遜が強調されて発話されている場面を主とする。

4.2.1 基本的儀礼発話機能の特徴

基本的儀礼発話機能は、以下の二つの特徴を基本的に持っている。

(1) ひとつの機能がいくつかの役割を同時に果たすことができる

ある発話には表面的にもつ役割と、言外に持つ役割がある。この場合発話機能は、談話内での円滑なコミュニケーションを成り立たせているということが重要である。例えば、「誘う」という行為は、文字通りには相手をある所へ招待することを表す。しかし、ペルシア語話者の儀礼的(ターロフ)フレームでの「誘い」とは、相手を自分の家などに実際に誘っているのではなく、儀礼として「誘い」の言語行動を表示することが文化的に好ましいとされるために行われるものである。従って、このような儀礼的行動は、単純にその場の雰囲気の談話を維持するための、儀礼上の「誘い」である。

(2) 基本的儀礼発話機能には儀礼的な頻度の差が存在する

基本的儀礼発話機能には、9 つの機能(「挨拶-提供-申し出-褒め-誘い-感謝-依頼-願望」)が存在しているが、すべての発話機能の儀礼度合い(儀礼性)は同等でないことが指摘できる。主に儀礼性が高い発話機能は、場面を儀礼的なものに切り替える役割をもつ。一方で、儀礼性が弱い発話機能は、本来は儀礼的な要因はないものの、インターアクションでの状況やフ

レーム内で儀礼的な役割として表れるものである。特に儀礼性が弱い発話機能に関しては、追加的儀礼発話機能などがつくことでより儀礼度合いをあげるものも多い。

儀礼性が高い基本的儀礼発話として、特に挨拶や感謝などが挙げられる。また、儀礼性は文化や習慣により異なると考えられる。そのため、接触場面においては、各文化における基本的儀礼発話機能の頻度が異なることも、インターアクションにおいて問題を引き起こす可能性がある。

(3)　相手に対する儀礼的な思いやりを行動の中でより強調させる役割を持つ

儀礼的発話機能の種類によっては、その産出は相手に対しより儀礼を強調させる効果を持つ。この特徴は、社会的アイデンティティへの確認や仲間意識といった意志を示すものでもある。

4.2.2　各基本的儀礼発話の定義と分類

以下に、実際の自然場面で収集したデータ（ペルシア語・日本語両方から）を参考に、上記 9 つの発話機能の定義を述べる。これらの種類と定義、それぞれの分類に用いられる用例に関しては、分析者の判断の妥当性を補うために、高度な日本語能力を持つ 2 名のペルシア語母語話者にも第三者として会話のデータを聞いてもらい、各発話が儀礼的な役割を果たしているかどうかを判断してもらった。

各基本的儀礼発話機能の分類においては、大きく「A:表出される場所と時期」または「B:相手の発話者との関係」が重要となる。

〔Ｉ：　挨拶〕

挨拶は、インターアクションが開始する、あるいは終了する合図として判断できる。特に挨拶の大きな特徴は、場所や時間帯の状況に合わせて多くの形式化された表現を用いており、そこから場面を儀礼的にする役割である。

以下の【表 4－1】は挨拶に対する研究者の複数の視点から、いくつか代表的な挨拶の定義をまとめたものである。

挨拶機能の分類においては、先行研究において挨拶がどのように定義され観察されるのかも基準として分類した。また、機能の局面の項目では、インターアクションにおいて、その機能が状況で果たす役割や状態を示す。ラベル付けにおいては、定義や機能の詳細を略したものを使用している。

【表 4－1】先行研究から見る儀礼的な挨拶の定義・機能

機能	機能の局面	定義･機能の詳細	先行研究
①挨拶	A.絆の確立	人間関係の絆を確立する役割を果たし、社会的地位などの重要な社会的情報を付与するもの	Malinowski 1922
	B.社会役割の構築	あいさつを中心とする発話の交換は、互いの役割を定義し構築しようとする機能を持つ	Laver 1975
	C.非言語行動で見られる挨拶	あいさつとは、言葉以外のおじぎ、微笑み、態度といった行動様式とも密接に関連している	**鈴木** 1975
		出会いの時の非言語行動(シンボリック挨拶）で、親しさの指標である	**大坊** 1999
	D.社会関係の構築	人間が他人との間に親和的な社会関係を設定するために、または、設定されている親和的な社会関係にも基づいて、維持強化するための社交・儀礼的な行動様式の一つ	**渡辺** 1977
		あいさつは一種の恐怖への対応」であり、そのため未知の者同士の「出会い」では「互いに害するものでない害心をものでないことを示しあい、既知の物同士の「別れ」のあいさつは、「共にいた時の関係を再開のときも維持しようという意味	**比嘉** 1981
	E. 会話開始部・終了部言語・非言語行動で見られる挨拶	人と人が会ったときや別れるときに取り交わされる社交的あるいは儀礼的な言葉や動作	**野元** 1985
	F.待遇関係認識の表示	挨拶という会話の切り出しに見られる隣接対、あいさつ言葉の交換とは、話し手の聞き手との待遇関係認識の表示−承認である	**中西** 2008
		話し手と聞き手の待遇関係認識の表示	

	G. 日常場面	毎日、家族の者や知人と交わす『おはよう』『さようなら』のたぐい、初対面の人同士の自己紹介、公式の席における祝詞、答辞といったもの、さらに特殊な社会で用いられる任義までをいう	曲志強他 2010
		出会いと別れの一般的で日常的な挨拶と、冠婚葬祭などのより公的な場面における特別な挨拶の二種類である	

挨拶機能は、ペルシア語話者のインターアクションにとって重要な役割を持っている。

本調査で挨拶と見なす表現を「A:表出される場所と時期」を基準に以下のように大別した。その理由として、発話機能が儀礼的な役割として判断されるためには、機能が表出される会話での位置と会話が行われている時期や行事内容が何であるのかが重要となるからである。

【Ⅰ-1：会話開始部における儀礼的挨拶】

【Ⅰ-2：会話終了部における儀礼的挨拶】

【Ⅰ-3：会話開始/終了における非言語的な挨拶】

【Ⅰ-4：特定の行事や時期に依存する挨拶】

【Ⅰ-1：会話開始部における儀礼的挨拶】

日本語母語話者は、「昨日は」「先日は」「この間は」などの言葉で始まるお詫びの挨拶言葉が、主に談話を切り出す際に働いていると報告されている（住田 1992）。開始部に使用される挨拶には以下の 5 つの分類があり、これらを本調査で得られた会話例と共に示す。

(1)　再会時に交わす挨拶

インターアクションで話者が相手と会話を開始する際に、両者が互いを認識し会話の開始合図として挨拶が見られる。母語場面の開始部では、多様な種類の挨拶が見られる。

〔接触場面：会話 24 事例 36〕

1	PR(10)	あー来た来た。	
2	JP(10)	おーーー、ハロー。	挨拶
3	PR(10)	いらっしゃいませ～(笑い)Hhhh[↑]。	挨拶
4	JP(10)	久しぶり～。	挨拶

〔母語場面：会話 4 事例 147〕

1	IR(07)	Salam Aghaye「IR(81)」。 「IR(81)」さん、**こんにちは。**	**挨拶**
2	IR(81)	Sallam[↑]、Khub hastid[↑]？*residan<bekheir>{<},,* **こんにちは[↑]、お元気でしたか？*おひさし <ぶりです>{<},,**	**挨拶**

(2)　健康や近況を尋ねる挨拶

談話内で相手や相手の発話者の身内の近況や健康を尋ねる場合においても儀礼的挨拶が現れたとみなす。健康を尋ねることは、相手を気遣う表現として儀礼的であるためである。

〔接触場面：会話 2 事例 8〕

38	PR(04)	店長**どう、忙しい？。**	挨拶
39	JP(02)	忙しくないっすよ～。	応答

〔母語場面：会話 4 事例 147〕

3	IR(07)	Merci,Shoma Khubin[↑]＝。 ありがとうございます**,お元気ですか[↑]**＝。	**感謝＋挨拶**
4	IR(81)	＝Haletun khube, <Khubin enshallah？>{<},, ＝**健康ですか, <神のおかげでお元気にしてますか？**>{<},,	**挨拶**
5	IR(07)	<Merci,Kheili >{>}Mamnun。 <ありがとう,ありがとう >{>}ございます。	**感謝**

(3)　初対面者同士の会話開始部での儀礼的挨拶

初めて接触する二者の間では、通常の挨拶に加え自分と相手との関係を考慮した内容が発話が産出されるが、この発話を儀礼的挨拶とみなす。

〔接触場面：会話 9 事例 61〕

8	JP(27)	こんにちは。	挨拶
9	PR(13)	**はじめまして。**	挨拶

(4)　役割上の会話開始部での挨拶

役割上相手に示す儀礼的な歓迎の表現として解釈できるフレーズを、儀礼的挨拶とみなす。

〔接触場面：会話 3 事例 13〕

11	JP(03)	**毎度どうもいらっしゃいませー。**	**挨拶**
12	PR(04)	どう、元気？	**挨拶**
13	JP(03)	元気よう。	**挨拶**

(5)　会話開始部における歓迎的な挨拶

会話開始部に相手の発話者を歓迎する表現が見られた際にその表現を儀礼的な挨拶とする。

〔母語場面：会話 1 事例 144〕

4	IR(85)	***Kheili Khosh Umadin***、Khahesh Mikonam Befarmaid[手で座るように指示]=**【【**。 ***ようこそいらっしゃいました***、どうぞお座り下さい[手で座るように指示]=**【【**。	**挨拶+提供**
5	IR(13)	**】】**=Kheili mamnun、Shoma Khub Hastin?,, **】】**=ありがとうございます、お元気ですか?,,	**感謝＋挨拶**

【Ⅰ-2：会話終了部における儀礼的挨拶】

(1)　会話が終了したことへの合図

インターアクションが終了することを示すフレーズを会話終了の挨拶として定義する。会話終了の挨拶は今後の関係の構築を期待するものと、単に儀礼的フレームの終了として発話されるのみのものがある。

〔接触場面：会話 16 事例 75〕

231	JP(28)	じゃ、「PR(13)」ちゃん**またね。**	挨拶
232	PR(13)	ありがとう～［↑］、ごめんね。	感謝＋謝罪
233	JP(28)	ううん、じゃ〈**また、ゆっくり**〉｛〈｝。	挨拶

〔母語場面：会話 4 事例 149〕

30	IR(07)	Felan **Ba Ejazatun,Mamnun** Merci＝。 それじゃ、***失礼します,どうも***＝。	挨拶＋感謝
31	IR(82)	*Khahesh mikonam* ＝。 *どういたしまして*＝。	
32	IR(07)	**Khodahafez shoma。** さよなら。	挨拶
33	IR(82)	**Ghorbane shoma。** どうも。	挨拶

(2)　相手の領域に関わる者への儀礼的言付け

会話を終了する際、相手の発話者に関係ある者(その相手の家族や友人など）に「よろしく」などの儀礼的な挨拶を伝える。

〔接触場面：会話 16 事例 76〕

270	PR(01)	よとしく＜どうぞ＞｛＜｝,,	挨拶
271	JP(28)	〈じゃ、また〉｛〉｝。	挨拶
272	PR(13)	はーい、ありがとう～、**よろしく旦那さんにも**。	挨拶
273	JP(28)	うん。	

〔母語場面：会話 33 事例 110〕

17	IR(70)	Ali ro bebus,a dayana ro bebus。 私のほうから**アリをキスして、ダヤナにもキスを**。	挨拶
18	IR(72)	merci。 ありがとう。	挨拶

(3)　相手に対する勇気づけの表現

シンプルに会話を終了させるのではなく、相手を気遣うような表現も挨拶とする。これは、相手のこれまでの努力を讃える場合や会話の後で相手がまだ仕事を続けるような場合によく現れる。

〔接触場面：会話 17 事例 79〕

112	PR(01)	**頑張って仕事。**	挨拶
113	JP(29)	うん、またあとでね。	挨拶
114	PR(01)	ありがとうございます。	感謝

〔接触場面：会話 29 事例 84〕

93	PR(11)	**〈じゃ、仕事〉 {〉 } 頑張って下さい。**	**挨拶**
94	JP(33)	う～うん、どうも、頑張りたくないけど〈笑〉。	**感謝**
95		〈笑〉。	

【Ⅰ-3：会話開始/終了における非言語的な挨拶】

相手に会った際、あるいは会話を終了させる際に見られる、メタ言語的な行動(儀礼的行動としてのキスやハグ）も挨拶の一種とする。

〔母語場面：会話 13 事例 14〕

15	IR(02)	salamalekom, **[頬にキス]**khub hastid？。 こんにちは、**(頬にキス)**お元気ですか？。	**挨拶**
16	IR(13)	alhamdollelah, Shoma chetorin？。 *神のおかげで元気です、あなたはお元気ですか？。*	挨拶

【Ⅰ-4：特定の行事や時期に依存する挨拶】

冠婚葬祭のような特定の儀式において、あるいはある時期に交わされる挨拶も儀礼的挨拶のひとつであるとする。

〔接触場面：会話 5 事例 50〕

28	PR(06)	**来年もよろしくお願いします、今年本当に、お世話になりました。**	挨拶
29	JP(21)	なんでも、してませんけど〈私は〉 ｛〈｝,,	
30	PR(06)	**〈来年も〉 {〉 } 、よろしくお願いします。**	挨拶

〔母語場面：会話 35 事例 25〕

158	IR(22)	mochakeram,khub hastid?mobarak<bashe>{<}。 ありがとうございます,**お元気ですか?おめでとう<ございま>{<}。**	感謝＋挨拶
159	IR(74)	<,salamat>{>}bashid。 <ありがとう>{>}ございます。	感謝
160	IR(22)	be salamati enshallah khoshbakht beshan。 神の元でお幸せになりますように、あなたもいつまでも健康で。	願望

〔Ⅱ：提供〕

儀礼的な提供とは、相手の負担を軽減するために産出される要素である。本研究の分類の基準においては、「A.表出する場所」が重要となる。儀礼的提供もどの位置で表出されるかにより、その場面を儀礼的なものに切り替える役割を持っており、儀礼性が高い機能のひとつである。特に、相手が要求をしていないにも関わらず、自己領域に属するものを差し出す場合を示す。以下では、坂本(1997)の定義を【表 4－2】にまとめる。

【表 4－2】先行研究から見る儀礼的な提供の定義・機能

発話機能の種類	機能の局面	定義・機能の詳細	先行研究
②提供	A.相手に与える行動	「提供表現」は、「座席に座る権利」のように、私はあなたに与える、あなたはその権利を受け、行使する、という裏表をなす二つの行動である	坂本 1997
		「自分」も「相手」も行動するが、それぞれの行動は異なってはいるが裏表一体であり、一方のみでは成立しない行動である。	
	B.客に対する言語・非言語行動	客に対して「飲み物や食べ物」などを勧めるときの表現。「召し上がって下さい」「どうぞ。」「よろしかったら、どうぞ召し上がって下さい」など。	
		「よろしかったらどうぞ」「よろしかったらどうぞ、召し上がって下さい」などがある	

本研究において儀礼的な提供は以下のように分類する。

【Ⅱ-1：食べ物の提供】

【Ⅱ-2：私物の提供】

【Ⅱ-3：場所の提供】

【Ⅱ-4：取引上の商品の提供】

【Ⅱ−1：食べ物の提供】

相手の発話者からは何の要求がなかったにもかかわらず、食べ物を提供することが配慮として解釈される場合、その言語行動を儀礼的提供として定義する。さらにこの項目では、直接食べ物を提供するものと、間接的に提供の表現を使用するものに下位分類される。

(1)　直接提供表現を用いる

〔接触場面：会話 1 事例 1〕

50	PR(04)	美味しいよ、[少し間]、食べて始めてでしょう、こんな美味しいもの**食べてるの？。**	提供
51	JP(01)	えへっ、始めて[→]。	

〔母語場面：会話 24 事例 75〕

4	IR(01)	*Ghorbanet,***Bekhor dige**。 *ダーリン、***どうぞ食べて。**	**提供**
5	IR(02)	Berizam Barat？。 入れてあげようか？。	**申し出**
6	IR(44)	*Negarane Man Ken abash Dige*。 *私の心配はしないでいいわよ。*	

(2)　間接的に提供表現を用いる

〔母語場面：会話 32 事例 106〕

231	IR(01)	**「IR(02)」ina ham <u>khoshmazas</u>**,aghage doctor,in masto khiyararo bedam ba gerduye kheili **<u>khoshmazas</u>**。 **「IR(02)」これも<u>美味しいわよ</u>**,**ドクターさん**,**このヨーグルトきゅうり、くるみも入っていて<u>美味しいですよ</u>。**	提供
232	IR(73)	Bar midaram dastetun dard nakoneh。 **取りますよありがとう。**	

【Ⅱ-2：私物の提供】

一般に何か物を与えるのではなく、配慮的な提供表現を用い自分の物を謙遜して相手に与えることで、場面を改まったものにする効果が生まれる。

〔接触場面：会話 9 事例 64〕

84	PR(13)	これは、多いので。	
85	JP(27)	いいの、いいの、<u>どうぞどうぞ</u>。	提供

〔母語場面：会話 25 事例 160〕

12	IR(01)	「IR(53)」Khanum,<u>Dastetun dard nakone</u>,*kheili zahmat <Dadim, <u>Bebakhshid</u>*>{<},, 「IR(53)」さん,<u>ありがとうございます</u>、*とてもお手数 〈おかけしました*、<u>すみません</u>〉{〈},,	**感謝＋謝罪**
13	IR(53)	<Bashe,*<u>Ghabel nadare</u> bekhodaa*>{>}。 <**いいですよ**,***どうぞ神に誓って、<u>大したものじゃないですよ</u>***>{>}。	提供
14	IR(54)	*<u>Ghabel nadare</u>* amme。 **おばさん、*どうぞ<u>大した物じゃないです</u>***。	提供

【Ⅱ-3：場所の提供】

自分のいる場所、あるいはよい席やスペースを相手に与える際に発話される言語行動を示す。

〔接触場面：会話 16 事例 72〕

120	PR(13)	はい、うんじゃ、**どうぞどうぞ。**	提供
121	PR(01)	お邪魔します、はい。	

〔母語場面：会話 14 事例 21〕

24	IR(09)	**】Befarmaid,**,*「IR(13)_jan* maman。 **】**どうぞ, お母さん、*「IR(13)]さん*[↑]。	提供
25	IR(10)	**Befarmaid。** どうぞ。	提供
26	IR(09)	＃＃＃＃	
27	IR(10)	**Befarmaid**[↑]。 どうぞ[↑]。	提供

【Ⅱ-4：取引上の商品の提供】

店先での買い物において商品を店員から渡される際の表現も、儀礼的な提供表現に属する。店員がその品物を「大したものではない」と謙遜したり、時には「差し上げますよ」と無料で客に渡したりする様子が見られる。

〔接触場面：会話 4 事例 148〕

19	IR(07)	Chand mieshe？。 いくらですか？。	
20	IR(82)	***Gabel nadare*。** *大したものじゃないですよ、どうぞ。*	提供
21	IR(07)	mamnun。 ありがとう。	感謝

〔Ⅲ：褒め〕

インターアクションにおいて、相手の領域に属する者を讃え、尊重する言語行動を指す。ペルシア語では、相手や相手に関する物を褒めることは、それを肯定的に評価することになり、相手に対する儀礼的行動として好まれる。従って、褒めはそもそも儀礼の性質が高いも

のではないが、儀礼的フレーム内で発話される要素となる。以下の【表 4－3】は、代表的な先行研究での褒めの定義である。

【表 4－3】先行研究から見る儀礼的な褒めの定義・機能

発話機能の種類	機能の局面	定義・機能の詳細	先行研究
③褒め	A.讃える行為	「相手を讃える」行為であり、相手に敬意を払い、称賛を表す表現で誠意が込められていれば、最大の褒め言葉となり、「褒める」行為であるとしている。	田辺 1996
	B.聞き手を心地よくさせる	ほめるという言語行為は、話し手が聞き手あるいは聞き手の家族やそれに類する者に関して“良い”と認める様々なものに対して、聞き手を心地よくさせることを前提に、明示的あるいは暗示的に、肯定的な評価を与える行為。	小玉 1996
		「ほめ」は、話し手が聞き手を心地よくさせることを意図し、聞き手あるいは聞き手に関わりのある人、物、ことに関して「良い」と認める様々なものに対して、直接或は間接的に、肯定的な価値があると伝える言語行動である	金 2012
	C.ポジティブ・ポライトネスの行為	ほめは一般に、ほめられた人のポジティブ・フェイスが満たされるポジティブ・ポライトネスの行為である；ほめるということは、ほめの対象となった事柄について、ほめる人の水準や価値観とほめられた人の水準や価値観がつり合う（対等である）ことを認めることである	滝浦 2008
	D.好感情を表す言語行動	相手自身、あるいは相手に関連する「よい」と認めうるものごとについて、明示的あるいは暗示的に肯定評価を与えることによって、相手への好感情を表す言語行動	大野 2002;2003;2010
	E.よいことの評価を与える行為	話し手は他者、特に聞き手が持っている、両者に認められる外見、人柄や性格、所有物及び能力の達成などのよいことについて直接、あるいは間接評価を与える言語行為である	劉 2012
	F.お世辞言葉	客に対する挨拶や会話のつなぎとしてほめ言葉、お世辞を言う場面でみられるものである	ナジュージダ・ウェイン 2016

褒めが儀礼的な役割を持つかどうかは、実際に褒めが使用される該当の場面に大きく左右される。褒めがターロフ場面で多く見られる理由としては、【表 4－3】の B、C、D の説明が妥当であると考えられる。つまり褒めは、ターロフ場面で必要とされる、聞き手を心地よ

くさせるポジティブな言語行動として評価されるためである。また、褒めにはFにあるようにお世辞言葉としての側面もあるが、これも社交辞令を含むターロフ場面で最も儀礼的な褒めが使用される理由のひとつとなっている。

褒めは以下のように分類できる。

【Ⅲ-1：相手領域の褒め】

【Ⅲ-2：提供されたものの褒め】

【Ⅲ-3：相手の動作・考えの褒め】

【Ⅲ-4：相手を何かに例えての褒め】

【Ⅲ－1：相手領域の褒め】

ここで言う「領域」とは、相手の所有物と見なされる「外見（顔、服装など）、夫や子供、家族、私物」などを指す。特に必要とされてはいない場面で唐突に褒めが産出された場合において、その褒めは儀礼性が強いものとなる。この場合、褒めは儀礼的フレームを作るという役割をもっている。

〔接触場面：会話10事例57〕

13	PR(07)	Tsu,ビューティー。	褒め
14	PR(13)	うーん。	
15	PR(07)	すごい、ビューティー。	褒め
16	PR(13)	あっきれい（〈笑〉）。	褒め
17	PR(13)	うん（〈笑〉）。	

〔母語場面：会話1事例145〕

11	IR(13)	**】】**Taarife Shoma ro **Kheili az dustam Shenide Budamo.】】** あなた(先生)の、**良い評判は友人からよくお聞きしていました。**	**褒め**
12	IR(85)	*Khahesh Mikonam,<Kheili Lotf Darin>{<}[↑]【【。* *いいえ,<それは、あたなの優しさからよ>{<}[↑]【【。*	感謝

【Ⅲ-2：提供されたものの褒め】

提供された食べ物や物を褒め讃える表現を使用する。この褒めは相手に対する心遣いであるため、儀礼的行動の一つとなる。

〔接触場面：会話 1 事例 1〕

48	PR(04)	アーモンド。	
49	JP(01)	あ～～〈笑〉、**美味しい。**	褒め
50	PR(04)	美味しいよ、［少し間］、食べて初めてでしょう、こんな美味しいもの食べてるの？。	提供

〔母語場面：会話 18 事例 58〕

100	IR(32)	Bebakhshida,ma<**笑**>Pishdastiman injuriye。 すみません、私たちの‹笑›お皿こんな形で。	謝罪
101	IR(01)	Kheili **Aaliyee**。 **とても最高です。**	褒め

【Ⅲ-3：相手の動作・考えの褒め】

思い遣りや相手への配慮として儀礼的な褒めが見られる場合がある。

〔接触場面：会話 3 事例 13〕

14	PR(04)	**頑張ってるね**。	褒め
15	JP(03)	うふ、うん**頑張ってるよう**。	

〔母語場面：会話 18 事例 62〕

153	IR(02)	Daneshju shode？。 学生になったの？。	
154	IR(31)	Balee,salee avvale daneshgah。 はい、大学 1 年です。	
155	IR(05)	**Uuu,Mashallah mashallah, Barikallah。** **お～すごい、すごい、素晴らしい**。	褒め

【Ⅲ-4：相手を何かに例えての褒め】

相手を褒める際、相手を何か価値が高いとされるものに例えながら褒める場合がある。

〔母語場面：会話 18 事例 64〕

170	IR(02)	Akhe unjuri poshtam be shomas。 え～これじゃ、後ろが皆さんに向いちゃう。	
171	IR(13)	Eb nadare，Gol poshte ru nadare＝【。 問題ないですよ、お花は前後でも変わらないから＝【。	褒め
172	IR(02)	】＝Khash,Mikonam「IR（13）」jan。 】＝いやいや～「IR（13）」ちゃん。	
173	IR(13)	Gol poshte ru nadare。 お花は前後でも変わらないから。	褒め
174	IR(02)	Salamat Bashid[↓]。 ありがとうございます[↓]。	感謝

〔母語場面：会話 25 事例 164〕

76	IR(52)	<Chetori doctor>｛>｝Baba doctor,**To vujudet<Kimiyaas>**｛<｝。 <元気ですか、博士>｛>｝もう博士,**あなたの存在は<宝石です>** ｛<｝。	**挨拶＋褒め**
77	IR(56)	<Eradat darim>｛>｝(<笑>)。 <光栄です>｛>｝(<笑>)。	**挨拶**

〔Ⅳ:申し出〕

儀礼的場面での申し出は、まさに社会的つながりを重視しようとする気持ちの表れであると言える。申し出は提供と類似した要素であるが、提供はある物品を差し出す場合のみを示す。一方、申し出は、物を差し出すことより、相手を思い遣ることで何かを行動に移すことを前提としている。従って、申し出の機能は、提供と比較するとより広い範囲での言語行動を伴うことが考えられる。それは、例えば提案を含んだ形の発言が考えられる。先行研究における定義を、【表 4－4】にまとめる。

【表 4－4】先行研究から見る儀礼的な申し出の定義・機能

発話機能の種類	機能の局面	定義･機能の詳細	先行研究
④申し出	A.相手の利益のために言語･非言語行動をする	「相手」は「自分」の行動を必要としている。「相手」はそのことを「自分」で明言できないでいる。「申し出」の主体がこのように認識する根拠があるということが必要である。	坂本･蒲谷 1995
		「申し出」は「自分」が「相手」の「利益」のために「行動」しようという意図を示して「相手」にその「行動」を「決定」する意向があるかどうかを尋ねるものである	川口他 2002

相手の利益のために言語・非言語行動を行っても、必ずしも相手がその行動を必要としているかどうかは確実ではない。本研究で扱う申し出とは、以下の例のように相手に対する配慮から、その人のために何か行動をしたいという意思を示す発話行為を指す。

〔接触場面：会話 17 事例 77〕

21	PR(13)	お茶で、いいですか？。	申し出
22	JP(29)	あっ、僕大丈夫です、水でいいです。	
23	PR(13)	水？。	

〔母語場面：会話 20 事例 68〕

27	IR(13)	Khob,mikhain alan **baratun dam konam?**。 じゃ、**今ちょっと作りますよ?**。	申し出
28	IR（01）	*Na dige ma nahar ziyad khordim。* *いやいや、だって今は沢山もうお昼も食べてるし=【【。*	
29	IR(13)	**Nanana,alan ke vaghean ghaza kheili khordim=【【,,** **】】=じゃ、今は果物は食べないとか言わないですよね,,**	申し出

〔V：誘い〕

ターロフが現れるフレームでは、相手のことを気遣い、自己の領域（自宅など）に誘う言語行動が期待される。ペルシア語によるターロフ場面での誘いは、必ずしも相手に実際に自分のもとへ来てもらいたいということではなく、建前としての儀礼上なものであることが多

い。筒井(2002)は、勧誘を「一緒に行為をすることを求め、それに関する様々な決定を行うまでの一連の行為」としている。一部の先行研究では別の分析がなされており、川口他(2002)による定義を【表 4－5】にまとめた。

【表 4－5】先行研究から見る儀礼的な申し出の定義・機能

発話機能の種類	機能の局面	定義・機能の詳細	先行研究
⑤誘い	A.相手と自分の利益のために言語・非言語行動をする	「行動展開表現」であることから、「待遇表現」の性格をもつ。「自分」が「相手」の表現内容が「相手」に理解されたうえで、「相手」がその行動を起こすことで表現としての目的が達成される	川口他 2002
		「誘い」には、「行動」「決定権」「利益」の三つの要素がある。(1)「行動」は「相手」と「自分」と一緒に行う(2)行動の「決定権」は「相手」に所属する(3)「利益」は「相手」にも「自分」にもある	
	B.挨拶の代替	「誘い」は「人間関係を設定./維持/強化する」という「表現意図」を持つ表現である。その「表現意図」は「あいさつ」と類似するため、「形式誘い」というタイプの表現によって「あいさつ」と同様の表現が可能になる	

儀礼場面での誘いは挨拶を兼ねているため、性質としては、「形式誘い」に近い表現であると言える。このような誘いのタイプでは、産出される場所と時期が分類の基準となる。なぜならば、何時どこで、誘いが行われるかによって儀礼的になりがちな誘いであるかどうか判断できる。

儀礼的誘いは二種類に分類できる。

【V-1：会話終了部での誘い】

【V-2：建物の玄関先での誘い】

【V-1：会話終了部での誘い】

会話の終了部で挨拶と同時に産出される誘いは、儀礼的な挨拶の一環として捉える。この種類の誘いには、直接的な誘いと間接的な誘いが存在している。

〔接触場面：会話 14 事例 29〕

21	PR(16)	あの、また、**是非いらっしゃって下さいって**、本当に。	**誘い**
22	JP(09)	ありがとうございます、今度あのイランに。	**感謝**

〔母語場面：会話 17 事例 49〕

98	IR(05)	Are,maham tehran,**dige mostagharim enshallah tashrif biyarid**. そう、私たちも、**テヘランにいらっしゃることを目を輝かせてお待ちしています**。	**誘い**
99	IR(29)	Enshallah,enshallah. 神のお許しのもとで、神のお許しのもとで。	

【V-2：建物の玄関先での誘い】

「客に家に上がるように誘う」、また「客が帰る際にまだ残るように誘う」という二つのパターンは儀礼的誘いとして解釈する。

〔母語場面：会話 25 事例 162〕

28	IR(57)	**Befarmaid,bala。** **お家にどうぞ上がって下さい。**	**誘い**
29	IR(57)	B**efarmaid ,Balaa[↑]。** **どうぞ，上がって下さい[↑]。**	**誘い**

〔母語場面：会話 28 事例 167〕

3	IR(62)	*<Khahesh mikonam> {>}。* *<いいえ、どういたしまして>{>}。*	
4	IR(63)	**Bashid hala＝【。** **まだ、いらっしゃっててください＝【。**	誘い
5	IR(21)	**】＝***Na na、Ta yek goftin ghatar Hastesh？。* **】＝***いやいや、1 時まで電車があるんだっけ？。*	

〔VI：感謝〕

「感謝」とは、参加者が謙遜する態度を示すことで、肯定的、積極的なニュアンスを言語行動の中で持つものであると考えられる(西原 1994)。ペルシア語話者は相手に対して、自

己に対する好意や親切さのありがたさを様々な形で表現する。本分析では、どの状況下においても感謝が見られた箇所は儀礼的行動として見なす。「感謝」については以下の【表 4－6】に先行研究の定義をまとめた。

【表 4－6】先行研究から見る儀礼的な感謝の定義・機能

発話機能の種類	機能の局面	定義･機能の詳細	先行研究
⑥感謝	A.社会関係への構築	感謝をするということは、人間関係の維持や構築に直接的に関わっている	Austin 1962
	B.過去の行為に基づく利益	話し手にとって聞き手によってなされた過去の行為に利益があったことに基づいて為される発話内行為	Searle 1975
	C.社交的な機能	感謝を「社交的な機能」すなわち助力に感謝し、礼儀正しさと社会的雰囲気を維持することを目的とする	Leech 1983

本研究で扱う儀礼的な感謝は、産出される場所が重要な分類基準となる。時期や行事の影響より会話内でどの位置に感謝が表出されるかのほうが儀礼への度合いに影響を及ぼすと考える。

【VI-1：会話終了の合図としての感謝】

【VI-1：相手の発話者の行動に対する感謝】

【VI-1：会話終了の合図としての感謝】

会話が終了する段階にといて、儀礼的な挨拶フレームの内で会話を心地よく終了させるために感謝の言葉が産出される場合がある。

〔接触場面：会話 4 事例 49〕

18	JP(19)	以上でよろしいですか、＜少し間＞はい、ありがとうございます。	確認＋感謝
19	PR(05)	ありがとうございます。	感謝
20	PR(05)	ありがとうございます。	感謝

〔母語場面：会話 34 事例 114〕

60	IR(38)	Moraghebe khodet bash azize delam。 気をつけていってらっしゃいねダーリン。	
61	IR(02)	<Kheili lotf kardi,**daste shoma dard nakone**>{<}。 <すごくお手数お掛けしました、**どうもありがとう>{<}**。	感謝

【VI-2：相手の発話者の行動に対する感謝】

この種類の感謝は、更に三つの下位区分が可能である。

(1) 自分の領域を相手から褒め讃えられたことに対する感謝

〔接触場面：会話 7 事例 54〕

23	JP(23)	イスラム教じゃないんだけど、**すごい素敵なんだもん、おねいちゃんのそれ。**	褒め
24	PR(07)	うｈｈ、**ありがとうございます。**	感謝
25	JP(23)	うん、どうなってるんですか？。	

〔母語場面：会話 13 事例 14〕

11	IR(13)	{>}<Salaam, *aziz jaan*>。 {>}<こんにちは, *私のかわいい子ちゃん*>。	**挨拶**
12	IR(02)	**Kheili mamnun**, *Kheili zahmat keshidin*。 **ありがとうございます**, *ご迷惑をお掛けしました。*	感謝

(2) 相手の行動によって自分が利益を得たことに対する感謝

〔接触場面：会話 3 事例 18〕

121	PR(04)	そうだよう。	
122	JP(03)	あっ、**ありがとうございます**。	感謝
123	JP(03)	えっと、これとこれね、全部で 3777 円でーす。	

〔母語場面：会話 36 事例 132〕

41	IR(04)	biyain az unvar。 こっちから来てくれます。	
42	IR(11)	mive bekhorin。 果物食べて下さい。	提供
43	IR(79)	merci sarf shod。 ありがとうございます、頂きました。	感謝

(3) 歓迎の挨拶を述べられたことに対する感謝

これは、儀礼的挨拶のフレーム内で見られる感謝である場合が多い。

〔母語場面：会話 12 事例 9〕

12	IR(13)	*<bah bah >{>}khosh amadin*。 *<あらあら >{>}ようこそいらっしゃいました*。	**挨拶**
13	IR(09)	**kheili mamnunn**。 ありがとうございます。	**感謝**

〔Ⅶ:依頼〕

依頼という行為は、相手のフェイスを侵害する恐れがある。依頼をする側は、相手への負担にならないよう、相手が断りやすいような言語行動を試みる。従って依頼表現では、儀礼的な調整がなされる傾向にある。【表 4－7】において、いくつかの先行研究の依頼の定義を要約する。

【表 4－7】先行研究から見る儀礼的な依頼の定義・機能

発話機能の種類	機能の局面	定義・機能の詳細	先行研究
⑦依頼	A.ネガティブ・ポライトネスの行為	依頼する話し手は、特定の行為を要求することによって、聞き手に時間や労力などの多少の負担をかけたり、聞き手に何かを押しつけたり、聞き手の行動の自由を妨げることにより、聞き手のネガティブ・フェイスを脅かしていることになる。依頼はフェイス侵害行為(FTA＝Face Threatening Act)の一種である	Brown＆Levinson 1987

	B.自分の利益となる行為	発話者が自覚的な「行動展開」の意図をもち、その意図を実現するために他者に対して「行動展開」を促す行為である。「丁寧さ」の原理としては、「相手」が「行動」し、「決定権」を持ち、「自分」が「利益」を受ける。	蒲谷他 1998
	C.他者の行動によって叶えられる表現	「依頼表現」は、「自己の実現したい事柄を他者の好意による行動によって叶えられるよう働きかける表現行為」である	蒲谷他 1993

相手のフェイスを侵害しないように依頼をする際、様々な儀礼的な発話行為の産出が期待される(A.の場合)。しかし B.の「自分の利益となる行為」（蒲谷他 1998）に関しては必ずしもそうでない。特にターロフでの依頼の多くは、相手に対する配慮が見られることから、自分に対する利益がそれほど強調されない。

本研究で分析対象とする依頼は、「A:相手との関係」が基準になっているものと、「B:産出の場所」が基準になっているものの二つがある。ここでの関係とは、相手との上下関係や親密さを示し、儀礼的な依頼が使用されるか不かがそれによって決まる。また、会話の狩猟部での依頼は儀礼的な可能性が高くなる。

【Ⅶ-1：自分の欲求が相手への負担につながる依頼】

【Ⅶ-2：会話終了部で表出される依頼】

【Ⅶ-1：自分の欲求が相手への負担につながる依頼】

相手に自分の欲求を示し、結果的に相手に多かれ少なかれ負担をかけることになる依頼は儀礼的依頼と考える。

〔接触場面：会話 28 事例 25〕

1	PR(14)	あっ、**お願いします**、あっ今日雨なんですけれども。	依頼
2	JP(07)	ビニール袋？。	
3	PR(14)	ビニール袋で**お願いしまーす**。	依頼

【Ⅶ-2：会話終了部で表出される依頼】

今後の関係維持への期待を示すための依頼も儀礼的な依頼となる。業務上の場面で使用されることが多い。

〔接触場面：会話 7 事例 55〕

33	JP(23)	イランの国の言葉を覚えてからまた、こちらに来たいと思います。	
34	PR(07)	あっはあはは、<u>**またお願いしま～す**</u>。	**挨拶**

〔Ⅷ:謝罪〕

儀礼的な謝罪とは、発話者に過失がなくとも、自分の行為が相手の負担になったことを想定し、謝ることをいう。儀礼的な謝罪をしながら、非言語的な行動のひとつであるお辞儀が行われることもある。謝罪についても、先行研究による様々な定義がある。【表 4－8】に挙げているのは、その中の一部の研究による定義である。

【表 4－8】先行研究から見る儀礼的な謝罪の定義・機能

発話機能の種類	機能の局面	定義･機能の詳細	先行研究
⑧謝罪	A.関係修復のための言語行動	話し手が起こした言動により聞き手に不利益や不快感が生じる」、「話し手と聞き手との人間関係に不均衡が生じる」、「元の快適な状況に修復するために話し手が謝罪をする	熊取台 1991
	B.迷惑を詫びる行為	自分のあやまちや人にかけた迷惑などについて詫びる行為	熊谷 1993
	C.関係修復言語行動	謝罪とは、謝罪する側と受ける側とが相互に交渉しつつ共同で作り上げていく行為である	宇佐美他 2005
		相手との間で問題や摩擦を解決し、人間関係を修復するという目的を達成するための行為	鄭 2011

この表にあるように、多くの研究者が「謝罪」を「関係修復のための言語行動」として定義している。しかし儀礼的場面において注目すべき謝罪はこのようなものに限らず、相手に対する配慮的表現としての性質を持つものである。その場合には、「関係修復」よりもむしろ「関係維持」の言語行動が強調されている。あるいは、「すみません」のような言語表現では、「関係が侵害されない」ことを事前に調整しているとも考えられる。本研究では、儀

礼的謝罪を、発話者が自らの行いにより相手に負担がかかると考えてし産出し、相手への負担を軽減しようとする働きを持つ謝罪と定義する。従って、相手との関係が分類の基準となる。

〔接触場面：会話 9 事例 67〕

110	PR(13)	すみません、これいただいて。	謝罪
111	JP(27)	はい、どうぞ。	提供

〔母語場面：会話 15 事例 28〕

3	IR(01)	*Sharmandamun Kardin,**Bebakhshid***。 *お恥ずかしいです、**すみませんわざわざ***。	**謝罪**
4	IR(01)	Salamalekom Hajagha,Bebakhshid###. こんにちは、『 Hajagha』、*すみません###*。	**挨拶＋謝罪**

〔Ⅸ：願望〕

儀礼的な願望とは、相手の発話者のために何かを祈ることである。ここでの祈りは、口に出して「相手のために何かを願う」ということを示す儀礼的なマーカーであると考えられる。「願望」は「～したい」、「心の底から、自分の望みを叶えて欲しいと強く思う」というように定義が多様である。相手に対する配慮の表現として願望を口に出すことが儀礼的行動として期待される。

いくつかの先行研究では、願望を以下の【表 4-9】のように定義している。

【表 4－9】先行研究から見る儀礼的な願望の定義・機能

発話機能の種類	機能の局面	定義･機能の詳細	先行研究
⑨願望	先行研究	願い望むこと（自分に対して強く望む）	明鏡国語辞典
		その目的を達成する手段がないのに熱望することをいう	ネット参考[23]
		具体的な強い思い･願い	ネット参考[24]

[23] https://kotobank.jp/word/%E9%A1%98%E6%9C%9B-471456
[24] https://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q1254573347

儀礼的な願望は、以下のように分類する。

【Ⅸ-1：挨拶の最中での願望】

【Ⅸ-2：情報提供に対する願望】

【Ⅸ-1：挨拶の最中での願望】

儀礼的な願望のひとつに、儀礼的フレームでの挨拶の一環として相手のために産出される願いの発話がある。

〔母語場面：会話 4 事例 147〕

10	IR(82)	Residan Bekheir。 お久しぶりです。	**挨拶**
11	IR(07)	**<Salamat bashid ghorbane shom>**{<}、merci。 **<健康でいて下さい>**{<}、ありがとう。	**挨拶+願望＋感謝**
12	IR(82)	**<Salamat bashid ghorbane shom>**{<}。 **<健康でいて下さい>{<}。**	**挨拶＋願望**

〔母語場面：会話 33 事例 109〕

5	IR(70)	**khoda negahdaretun**,khoda<behamrahetun>{<}。 **神のお守りの下で**, さよ‹うなら›{‹}。	願望＋ 挨拶
6	IR(72)	<khoda>{>}hafez shoma。 ‹さよ›{›}うなら。	挨拶

〔母語場面：会話 17 事例 46〕

49	IR(29)	Bilite be chin dasht,emshab saate 9 parvaz dare. 中国行きのチケットがあって、今夜 9 時に出発するみたい。	
50	IR(05)	Enshallah **be salamati**. 神様の元で、**健康でありますように**。	願望
51	IR(29)	1haftei mire chin,guruhi ham daran miran,bara karaye kharido, 1 週間中国に行って、仕事仲間で行くみたいで、仕事関係の。	
52	IR(05)	Enshallah **be salamati**. 神様の元で、**健康でありますように**。	願望

【Ⅸ-2：情報提供に対する願望】

(1)　相手がある動作を行う

相手が自身あるいは自身の領域に対する情報を発した際に、儀礼的な言語行動として相手に対する願望が見られる。多くの場合には相手の健康を祈る発話が多い。

(2)　料理を食べる

食事場面で相手が料理に対して好ましい評価をした場合に、相手のことを思いやって発話される願望も儀礼的な行為として見なすことができる。

〔母語場面：会話 32 事例 99〕

90	IR(02)	kheili aali shode ,kheili khoshmazas。 見事です、とても美味しいです。	褒め
91	IR(05)	kheili aaliye。 最高です。	褒め
92	IR(70)	**nushe junet。** **美味しく召し上がれ。**	願望

4.3　追加的儀礼発話機能

基本的儀礼発話機能に対し、追加的儀礼発話機能が存在する。追加的儀礼発話機能は、「感情提示 - 配慮 - 謙遜 - 応答」に分類する。本節では、追加的儀礼発話機能の特徴を見ると同時に、各発話機能がどのように場面の儀礼性に影響するのかを考察する。

4.3.1　追加的儀礼発話機能の特徴

会話を儀礼的なフレームにするため、その補助的な役目を果たすのが、追加的儀礼発話機能である。基本的儀礼発話機能に加えて追加的儀礼発話機能が現れることで、その会話の儀礼度が上がることが指摘できる。

ここで、発話をより儀礼的にする追加的儀礼発話機能の特徴を以下に示す。

・追加的儀礼発話機能は有標である。

・発話によっては、必ずしも言語形式による追加的儀礼発話機能が見られるとは限らない。その場合は、相手に対する儀礼を通常とは異なる声のトーン、非言語的行動によって追加的儀礼発話機能を示すこともある。

・いくつかの行為がひとつつの談話に同時に現れる

・発話においては、発話機能が複合的に使用されることもある。

以上のことから、儀礼場面におけるペルシア語話者の行為タイプは『1．単一追加発話行為タイプ』と『2．複合追加発話行為タイプ』に分類できる。

4.3.2　各追加的儀礼発話の定義と分類

以下では、追加的儀礼発話機能の 4 つの下位分類を母語場面の事例を参考に詳述する。

〔1．感情提示〕：

これは、「感情の直接表出」とも言える要素である。相手の発話者に肯定的な感情を表出することで、儀礼を強調している。ターロフでは、場面によりいかに相手への感情や思いを大げさに示すかが重要となる。本研究では感情提示の方法として以下の九つの要素を挙げる。発話においてこれらの要素がひとつでも確認された場合、その発話では感情提示が儀礼の役割を果たしていると解釈する。なおひとつの発話内で複数の感情提示要素が見られるケースもある。

①　共感を極端に提示する

相手の思想や行動に対して自分も共感していることを誇張し、儀礼意識を明示する。

〔母語場面：会話 30 事例 86〕

32	IR(01)	Bache ha be labase 「IR(69)」 negah <konid>{<}。 みんな、「IR(69)」の服を <見て>{<}。	褒め	
33	IR(68)	{<}<che lebase >shikii。 {<}<なんて素敵な >服。	褒め	
34	IR(69)	**Rast migiii［↑］。** **本当に［↑］。**		感情提示①② ＋応答
35	IR(02)	Areeee。 うんんん。		
36	IR(68)	**Uf oh are kheiliii oo mano alan bargashtaam(<笑い>）。** **おーうんすごい、私今気づいて振り向いた(<笑い>）。**		感情提示①④

② 声のトーンを上げる

声を高く発声することで相手に対して好印象を与えることが儀礼の一環として重視される場合を指す。

③ 単語の語尾を伸ばす

感情を示す語彙の語尾を伸ばし、相手への想いを強調する。これは特に女性に多く見られる感情提示のストラテジーである。

②と③は同時に発話されることが多いため、母語場面からの会話例をひとつ紹介する。

〔母語場面：会話 29 事例 178〕

1	IR(02)	**Salaa＜ am［↑］＞｛＜｝。** **こんに＜ちは［↑］＞｛＜｝。**	挨拶	感情提示②
2	IR(66)	＜Salaaam＞｛＞｝。 ＜こんにちは＞｛＞｝。	挨拶	
3	IR(02)	**Chetoriiii?。** **元気（語尾伸ばす）?。**	挨拶	感情提示③
4	IR(66)	**Khubaam,merciiii［↑］。** **元気よ,ありがとううう［↑］（語尾伸ばし）。**	感謝	感情提示②③
5	IR(02)	mercii。 ありがとう。	感謝	
6	IR(66)	Akheeee。 あら～～～。		
7	IR(02)	**Khubi** 「IR(66)」junam［↑］。 私の「IR(66)」ちゃん、**元気［↑］**。	挨拶	感情提示②⑦
8	IR(01)	ハグとキス。		感情提示⑨
9	IR(02)	Ye buse dige bede[キスする]。 もうひとつキスちょうだい[キスする]。		感情提示⑨
10	IR(02)	＜Khubii＞｛＜｝＜少し笑いながら＞。 ＜元気＞｛＜｝＜少し笑いながら＞。	挨拶	感情提示⑨
11	IR(66)	＜Maman＞｛＞｝「IR(02)」umad＜少し笑いながら＞。 ＜お母さん＞｛＞｝「IR(02)」が来てくれた＜少し笑いながら＞。		

④　相手の領域に属する者への興味や関心を認識させる

相手自身に限らず、相手の領域に関わる者に対して興味を示す発話を述べる。

〔母語場面：会話 17 事例 49〕

96	IR(29)	**<bishtar>{>}bebinimetun.** **<もっと>{>}お会いしましょう。**		感情提示④
97	IR(01)	**bishtar bebinimetun dige.** **もっと、お会いしましょう。**		感情提示④⑧
98	IR(05)	**are,maham tehran,dige mostagharim enshallah tashrif biyarid.** **そう、私たちも、テヘランいらっしゃることを目を輝かせてお待ちしています。**	誘い	感情提示④
99	IR(29)	enshallah,enshallah. 神のお許しのもとで、神のお許しのもとで。		応答

⑤　他者フェイスの保持調整を行う

相手のフェイスを侵害しないことが儀礼行為の一つの目的であり、それを発話の中で明示する場合を指す。

〔母語場面：会話 1 事例 146〕

15	IR(85)	「IR(13)」Jan Bebakhshid Babate In Chandeighe Takhir. . [話題展開]。 【何秒の間】「IR(13)」ちゃん、何分も遅れてしまって申し訳ないわ. . [話題展開]。	**謝罪**	
16	IR(13)	*AAA . . Na Khahesh Mikonam*。 *あー. . いいえ、とんでもないです。*		応答
17	IR(85)	Ab Meil Darid Shoma?。 お水でも飲む?。	提供	
18	IR(13)	*EEE . . Na Merci*。 *えー. . いいえ、どうも。*	**感謝**	応答
19	IR(85)	Meil Nadarid Na??[↓]。 お飲みにならないですか??[↓]。	**提供**	
20	IR(13)	*Na Na Merci《少し間》*。 *いいえ、どうも《少し間》*。	**感謝**	応答
21	IR(85)	Arzamn Be huzure Shoma Ke. . [話題展開]##Ozr<Khahi Mikonam>{<}„さて、まずあなたにおしゃっるとしたら. . [話題展開]##すみ<ません>{<}„	**謝罪**	
22	IR(13)	*<Khahesh Mikonam>{>}*。 *<いいえ、大丈夫です>{>}*。		応答
23	IR(85)	Porpje Ghabli Man Tul Keshid、EE=【【。 前の患者がちょっと長引いちゃって、え〜=【【。		
24	IR(13)	】】=Ettefaghan *Manam Yekami Gashtam*。 】】=実は、*私も少し(見つけるのに)迷ってて*。		感情提示

⑥　何らかの呼称表現を使用する

相手に普通に呼びかけるのではなく、多様な呼称を使用し相手への敬意をより明確に示す。

〔母語場面：会話 22 事例 152〕

5	IR(45)	Chi meil kardin？。 何を召し上がりましたか？。		
6	IR(05)	Ye abhavij dashtim,ye coffe,ye ab,ye salad。 にんじんジュース　コーヒーがひとつ，水，シーザーサラダがひとつ。		
7	IR(44)	***Doctor*** *bezarid man* ＝。 ***博士***、*私が支払ます・・＝。*		感情提示⑥+配慮⑤
8	IR(05)	＝*Nananana…* *＝ぜんぜん（ダメですと言う意味）・・。*		応答
9	IR(44)	Akhe。 でも。		

⑦　場面の緊張を緩和する

相手に気を遣う発話をすることで場面の緊張を緩和し、相手の発話者に好印象を与える場合を指す。

〔母語場面：会話 17 事例 48〕

67	IR(01)	chan vaght mashhad bud 「IR(30)の娘」 jan?。 「IR(30)の娘」ちゃんは、どれくらいマシュハッドに滞在してたの?。		
68	IR(30)	ye 20 ruzi bud,shod,ye 20,25 ruzi bud。 20日くらい、かな、20、25日間いました。		
69	IR(01)	**ee khoda ro shokr。** **あら～神様に感謝ですね。**		感情提示⑦
70	IR(30)	dige。 そうですね。		

⑧　心理的な距離を縮める

相手を敬う発話を行い、自分と相手の関係が親しいことを発話中で示すことは儀礼的な行為とされる。

〔母語場面：会話 16 事例 41〕

100	IR(05)	**na ma tofigh nadashitim,ma zekro kheiresho shenide<budim>{<}。** **そう、私たちは目にかかるチャンスがなかったです、よいお話しは<聞いていました>{<}。**	褒め	感情提示⑤⑧
101	IR(16)	<salamat>{>}bashid。 <ありがとう>{>}ございます。	感謝	
102	IR(05)	***kheili tabrik migim ,enshallah ke,be khoshi salamati,hamintori naslandal nasl hame darsh,,*** ***本当におめでとうございます、神様のもとでいつも楽しいこと、健康でい続ける家でありますように、そして孫から孫へと使える家になりますように,,***	願望	感情提示⑧＋配慮②
103	IR(16)	salamat bashid。 ありがとうございます。	感謝	

⑨　非言語行動で感情を表す

挨拶の際にハグやキスなどの言葉を用いない行動により、相手に対する想いを示す。これも儀礼の一環である。

〔2.配慮〕：

一般的に、相手に気を遣うことを指す。本論においても、相手を思い遣って心遣いを言語行動で示すことを基準として考える。また、待遇的な役割をもつターロフ表現も配慮の枠組みから考察できる。ペルシア語話者にとって、特に他の発話タイプの中でも儀礼の象徴として期待されるのが「配慮」であると調査結果から考えられる。また「配慮」には非言語行動も含まれる。「配慮」にはいくつかの下位分類が認められる。

①　相手を心地よく感じさせるために気を配る

相手のいる状況を心地よくする際に発話される儀礼的表現を指す。席を譲るなどの非言語行動も含まれる。

〔母語場面：会話 2 事例 4〕

40	IR(04)	ye zare heif shod。 ちょっと残念。		
41	IR(02)	ee merci ***shoma chera*?。** あ～ありがとう、***なんであなたが[お茶を運んできたの]?***。	感謝	配慮①
42	IR(01)	na *khahesh mikonam*。 いいえ、どういたしまして。		応答
43	IR(04)	**badan bara shoma *bara shoma ham bezaram* khale?。** ***あとで、おばさんのためにも置かしてください*？。**	申し出	配慮①
44	IR(01)	merci。 ありがとう。	感謝	
45	IR(02)	mamnun pas hala ke。 ありがとう、じゃ今は。	感謝	
46	IR(04)	ke intour。 そういうことか。		
47	IR(01)	hala dige doros mishe。 でもよくなるよ。		

② 相手からの誘いや待遇に気を遣う

相手に誘われた際、あるいは誘われて行った場所でもてなしをしてくれた相手に対し、相手への気遣いを表現する。

〔母語場面：会話 13 事例 14〕

11	IR(13)	｛＞｝＜Salaam, *aziz jaan*＞。 ｛＞｝＜こんにちは，*私のかわいい子ちゃん*＞。	挨拶	感情提示⑦
12	IR(02)	Kheili mamnun, ***Kheili zahmat keshidin*。** ありがとうございます，***ご迷惑をお掛けしました。***	感謝	配慮②
13	IR(01)	***Baaese zahmat ＜ Shodim＞***｛＜｝„ ***迷惑に＜なっちゃいました＞***｛＜｝„		配慮②
14	IR(13)	｛＞｝＜*Ekhtiyardarin*＞。 ｛＞｝＜*そんなこと言わないでください*＞。		応答

③ あいづちを打つ

あいづちを打つことは、相手の話を聞いているということを示す重要な儀礼的行動であるため、これも相手に対する配慮のひとつであると言える。

〔母語場面：会話 28 事例 171〕

107	IR(21)	】＝**Bale Bale**, Salamat Bashid,**enshallah ba doa haye shoma**。 **】＝はいはい**,ありがとうございます,きっと、**あなた達が祈ってくれればなります。**	感謝	配慮③
108	IR(21)	Daste shoma dard nakone,Kheili zahmat keshidin［↑］。 ありがとうございます,とてもお手数をお掛けしました［↑］。	感謝	謙遜②
109	IR(63)	Sare Shoma Dard Nakone，Ekhtiyar darin＝【。 どういたしまして，そんなことないですよ＝【。		応答
110	IR(21)	【＝Zahmat dadim。 【＝ご迷惑おかけしました。	感謝	配慮①+ 謙遜①

④　相手の状況を改善するための許可を求める

相手が現在置かれている状況を改善しようと行動を起こす前に、相手に許可を求めてからその動作を行う場合を指す。

〔母語場面：会話 20 事例 70〕

84	IR(12)	**dar baze,「IR(02)」 khanum *aziyat ke nemishan?*。** **ドア開いてるけど,「IR(02)」さん、*邪魔じゃないかな?*。**		配慮④
85	IR(12)	「IR(13)」jan,inam ghaza,*daghe shoma ro nabinam*。 「IR(13)」さん,これも料理、*貴方の悲しさを一生見ませんように。*	願望	応答

⑤　相手の負担を軽減する

相手に物を提供する際や、相手のために何かをする際に、相手に負担をかけないような言葉を述べることを指す。

〔母語場面：会話 14 事例 21〕

35	IR(05)	Agha「IR(16)」*aziz*。 *愛しい*「IR(16)」さん。		感情提示⑥
36	IR(12)	*「IR(16)」amad*？。 *「IR(16)」さん、来た*？。		
37	IR(23)	***Agha 「IR(16)」 aziz befarmaid*。** ***愛しい「IR(16)」さん、どうぞ。***	提供	配慮⑤＋感情提示⑥
38	IR(12)	Agha「IR(16)」biya。 「IR(16)」さん、来てくだい。	提供	

⑥　場面を緩和する

場面の雰囲気に合わせて相手に何らかの発言をすることを指す。特に会話中で沈黙ができた際や話題が見つからずに当事者同士が気まずい思いをしている時きに、その場の雰囲気を緩和するため発話されるものである。

〔母語場面：会話 35 事例 121〕

95	IR(05)	yaallah。 入りますよ。		配慮①⑥
96	IR(74)	befar<maid>{<}。 どう<ぞ>{<}。	提供	応答
97	IR(05)	<salamalekom>{>}hale shoma。 <こんにちは>{>}お元気ですか。	挨拶	

〔3.謙遜〕：

一般的に、へりくだることや控え目な態度をとることとされており、本研究においても同様の意味として捉える。待遇表現の枠組みから検討すると、「謙譲語」がこの枠に属する。しかし、ペルシア語の謙譲語では、話し手である自分を卑下すると同時に、直接的に相手の発話者を尊重することとなる。本研究で扱う「謙遜」は、以下のものを指す。

①　恐縮の念を表す

相手が自分のために何かをしてくれた場合、相手の負担に感謝して自分が恥じ入っているという気持ちを言語行動で表す場合を指す。

〔母語場面：会話 34 事例 112〕

29	IR(01)	**kheili zahmat behet<dadim khale>{<}„** **　とてもご迷惑をお掛けしたわ<おばさん>{<}„**		配慮① 謙遜①
30	IR(38)	<ghorbune>{>}shoma beram khale junam。 <いいえ～>{>}おばちゃんの可愛い子。		感情提示⑥＋応答
31	IR(01)	enshallah ke hamishe sofratun <bargharar bashe>{<}。 神の元でいつまでも、たくさんの食事を提供できる環境<を持ちますように>{<}。	願望	

②　定型表現（「謙譲語」）を用いる

自分の行いを価値のないことであると表現し、相手の行動を尊重することを指す。

〔母語場面：会話 9 事例 187〕

21	IR(20)	***Naa[高い声で][↑]Na， Ma Ham Ba Kamtar Emkanat Bargozar Mikonm Enshallah Ke doreham Bashim(Are)。'*** ***いやー[高い声で][↑]違います，私たちもあまりご馳走を準備する予定はありませんから、目的は皆が集まることです(はい)。***		感情提示②+謙遜②
22	IR(21)	*Bale Hatman Hatman'*。 *'うん、もちろん*		応答
23	IR(20)	Khob Chon Ja yekami Kuchike ,Hala Shayad Birun Rahattar Bashe＝。' うん、ただ家は少し狭いので外食するかもしれませんが＝。		

〔4.相手の発話者に対する儀礼的応答〕：

ターロフと見なされる発話は儀礼的発話ペアの成立が期待される。儀礼的な応答は、インターアクションにおいて重要な要素である。そのため、儀礼的発話が見られた場合には、相手の発話者の適切な応答が期待される。ここでの応答とは、発話された「基本的儀礼発話機能」または「追加的儀礼発話機能」に対しての優先的応答のことである。一方、儀式的な応答は他の追加的儀礼発話機能とは異なる性質を持つ。なぜなら、儀式的応答は場面を儀礼的フレームにする力は持たないためである。しかし、儀礼的フレーム内で儀礼的な発話連鎖が継続して進むことには影響する。つまり、儀礼的応答が追加されることで、場面の儀礼なインターアクションが順調に続くという効果が期待される。

以下の事例は応答の産出が確認されたものである。

〔母語場面：会話 36 事例 134〕

71	IR(79)	moshtaghe didaaaar［↑］。 お会いしたかったわ～［↑］。		感情提示②
72	IR(04)	be hamchenin。 私もよ。		感情提示①+応答
73	IR(22)	shoma khubin?khosh umadin。 お元気ですか?ようこそいらっしゃいました。	挨拶	感情提示④+配慮
74	IR(79)	salamat bashid。 ありがとうございます。	感謝	応答

次章からの分析で追加的発話機能に言及する際は、各機能の下位分類への言及は省略する。例えば取り上げる事例中に「感情提示」の機能をもつ発話が含まれている場合、その機

能が 9 つの下位分類のうちのどれに該当するかには触れず、単に「感情提示」というラベルを付すに留める。

次章からは、第 3 章と第 4 章で見てきた分析の枠組みを適用し、母語場面、そして接触場面の分析を試みる。

第 5 章

第 5 章　儀礼的発話機能の分析

本章では、会話内で儀礼的なフレームが確認された母語場面と接触場面において、ペルシア語母語話者の儀礼的な言語行動を把握する。特に本章は、量的分析を中心にしており、そこから明らかになったことを分析の対象とする。5.1 節では、主に母語場面でのペルシア語母語話者の儀礼的行動を考察し、5.2 節で同じアプローチを用いて接触場面内での儀礼的行動を観察する。各節の最後には、自然会話で最も多く見られた儀礼的行動の傾向からそれぞれいくつかの典型的な事例を出し、質的にも説明を追加する。

5.1　母語場面における儀礼的発話機能の分析

本節では、儀礼的な発話が現れるターン数を目安に、ペルシア語母語話者同士(母語場面)がどのような儀礼的な発話機能をどれほどの頻度で使用しているのかを測った。また、発話状況のどのような属性が彼らの言語使用を左右しているのかという問いに答えるべく、ペルシア語母語話者の「基本的儀礼発話機能」と「追加的儀礼発話機能」の会話内における使用頻度と使用位置を見る。これによって、ペルシア語母語話者の儀礼的(ターロフも含む）フレームにおける言語選択の量的な外面を明らかにすることができる。

分析では、データ内の儀礼的な発話機能のターンを数え、第 3 章の分析の枠組みを参考に、「基本的発話機能」と「追加的発話機能」それぞれの使用頻度を、全場面で個別に比較する。

5.1.1　母語場面における基本的儀礼発話機能表出頻度

分析の結果、それぞれの場面において儀礼的発話の表出頻度に差が見られた。また、儀礼的発話機能の種類やその頻度にも差が表れている。分析の結果を以下の【表 5－1】に示す。大きな分類としては、会話が行われた場面をまず私的な場面と公的なそれとに分類した。

【表 5－1】全 37 場面における基本的儀礼発話機能の表出頻度

分類	場面種類	会話番号	参加者数	参加者関係	挨拶	感謝	提供	謝罪	申し出	願望	褒め	誘い	依頼	会話全体比率	儀礼の頻度
私的	パーティー場面	【会話2】	8	親戚同士	6.1%	2.6%	0.0%	0.0%	1.8%	2.6%	5.3%	0.9%	0.0%	*19.3%*	○
		【会話12】	9	親戚同士	5.3%	9.6%	3.3%	0.0%	5.3%	0.0%	2.4%	0.0%	0.0%	*25.8%*	○
		【会話13】	6	親戚同士	11.8%	3.6%	0.5%	0.0%	3.2%	2.3%	2.7%	0.0%	0.0%	*24.0%*	○
		【会話14】	21	親戚同士	0.0%	6.7%	8.4%	0.0%	3.0%	2.4%	3.4%	0.0%	0.0%	*23.9%*	○
		【会話15】	10	親戚同士	18.2%	12.3%	5.2%	2.6%	0.0%	0.6%	1.9%	2.6%	0.0%	*43.5%*	☆
		【会話16】	21	親戚同士	23.2%	12.4%	5.6%	2.3%	0.0%	1.7%	4.0%	0.0%	0.0%	*49.2%*	☆
		【会話17】	6	親戚同士	4.9%	5.7%	0.0%	2.5%	0.0%	1.6%	4.1%	2.5%	0.0%	*21.3%*	○
		【会話18】	13	親戚同士	12.7%	7.8%	5.2%	2.6%	2.6%	0.6%	2.9%	0.0%	0.0%	*34.4%*	○
		【会話20】	5	親戚同士	0.0%	4.3%	3.3%	0.0%	7.6%	1.1%	2.2%	0.0%	0.0%	*18.5%*	△
		【会話23】	6	友人同士	2.1%	19.6%	0.0%	2.1%	0.0%	0.0%	7.2%	4.1%	0.0%	*35.1%*	○
		【会話24】	10	友人同士	0.0%	7.9%	18.8%	0.5%	4.0%	0.5%	0.0%	0.0%	0.0%	*31.7%*	○
		【会話30】	4	親戚同士	8.5%	4.3%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	9.6%	0.0%	0.0%	*22.3%*	○
		【会話31】	7	友人同士	27.2%	3.7%	2.5%	1.2%	1.2%	1.2%	4.9%	0.0%	0.0%	*42.0%*	☆
		【会話32】	9	友人同士	0.0%	5.7%	6.1%	0.0%	1.9%	1.1%	6.1%	0.0%	0.0%	*21.1%*	○
		【会話33】	5	友人同士	37.5%	8.3%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	*45.8%*	☆
		【会話34】	5	親戚同士	5.1%	7.7%	5.1%	0.9%	1.7%	4.3%	0.9%	5.1%	1.7%	*32.5%*	○
		【会話35】	8	親戚同士	26.5%	8.8%	3.3%	0.0%	0.0%	1.4%	0.9%	0.0%	0.0%	*40.9%*	☆
		【会話36】	15	親戚同士	17.8%	16.9%	3.4%	0.0%	0.0%	0.8%	0.8%	0.0%	0.0%	*39.8%*	○
		【会話37】	3	友人同士	29.4%	13.7%	0.0%	0.0%	0.0%	3.9%	3.9%	0.0%	0.0%	*51.0%*	☆
	車での場面	【会話5】	4	友人同士	9.2%	5.3%	3.9%	3.9%	0.0%	2.6%	0.0%	0.0%	0.0%	*25.0%*	○
		【会話26】	9	親戚同士	71.1%	4.4%	0.0%	0.0%	0.0%	2.2%	0.0%	0.0%	0.0%	*77.8%*	☆☆
		【会話27】	7	友人同士	0.0%	2.8%	22.2%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	*25.0%*	○
	玄関先	【会話19】	6	親戚と友人	47.2%	13.9%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	8.3%	0.0%	0.0%	*69.4%*	☆
		【会話25】	6	親戚同士	16.3%	5.9%	1.3%	1.3%	0.0%	0.7%	0.7%	6.5%	0.0%	*32.7%*	○
		【会話28】	7	友人同士	2.8%	13.7%	0.0%	0.9%	0.0%	3.3%	0.0%	1.9%	0.0%	*22.6%*	○
		【会話29】	4	友人同士	19.7%	7.6%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	*27.3%*	○
	電話	【会話7】	2	友人	57.9%	15.8%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	*73.7%*	☆☆
		【会話8】	2	友人	26.7%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	*26.7%*	○
		【会話9】	2	親戚	30.0%	36.7%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	3.3%	0.0%	*70.0%*	☆☆
		【会話10】	2	親戚	14.3%	7.1%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	10.7%	0.0%	*32.1%*	○
		【会話11】	2	親戚	23.8%	23.8%	0.0%	0.0%	0.0%	4.8%	0.0%	0.0%	0.0%	*52.4%*	☆
公的	クリニック	【会話1】	2	医者-患者	8.3%	20.8%	12.5%	12.5%	0.0%	0.0%	8.3%	0.0%	0.0%	*62.5%*	☆
	美容室	【会話3】	3	美容師と客	20.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	*20.0%*	○
	スーパー	【会話4】	3	客と店員	47.1%	26.5%	5.9%	2.9%	0.0%	11.8%	0.0%	0.0%	0.0%	*94.1%*	☆☆
	お店	【会話6】	3	客と店員	6.5%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	*6.5%*	△
	会議	【会話21】	3	社長と社員	0.0%	6.6%	3.9%	1.3%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	*11.8%*	△
	レストラン	【会話22】	3	ウェートレス-客	0.0%	16.7%	25.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	*41.7%*	☆
基本的儀礼発話機能のパーセンテージポイント					*17.2%*	*10.0%*	*3.9%*	*1.0%*	*0.9%*	*1.4%*	*2.2%*	*1.0%*	*0.0%*	***37.7%***	

ここでの私的な場面は、場面がパブリックではなくプライベートなところで会話が行われるという性質の場面を指す。また、こうした場面における参加者の関係は、上司や部下といった社会的な役割のつながりではなく、家族や親戚そして友人同士の関係などがメインとなっている。これに対して公的な場面では、家以外において、なおかつ社会的な役割が存在するパブリックな環境で会話が行われている。

以上の分析結果から、ペルシア語母語話者の儀礼的行動では挨拶が多くの割合を占めていることが明らかとなった。挨拶の使用頻度の平均的な割合は会話全体の 17.2%であり、この数字は少ないものであるとは言い難く、かなりの頻度で儀礼的な挨拶が会話全体で連続して見られる。次に、感謝が会話中の 10%ほどで見られた。場面によって感謝の表出頻度には差が見られるものの、相互行為において、37 場面中 35 の場面(95%)において何かしらの形

で感謝が使用されている。感謝が高頻度で見られる理由は、会話中で必ず一度は発話されるほど重要な儀礼的役割を果たす機能であるためと考えられる。次に感謝と比べて 6%ほどの割合の差で産出されたのが、提供（3.9%）である。提供も全場面で見られるものではないものの、54%の場面で（ほぼ二つにひとつの場面では）何かしらの提供が行われていると言える。儀礼的な提供は、相手の発話者がその物を要求していないにも関わらず差し出すと定義されることから、ペルシア語母語話者の提供はかなり積極的な儀礼的行動であると考えられる。他の基本的儀礼発話機能に関しては、総合的な割合がかなり落ちるものの、会話全体の 1%～2%ほどで表れている。また、本研究の扱う自然場面に関しては、儀礼的な依頼は一例の産出が観察できたが、パーセンテージポイントとしては 0%という結果になった。その理由として、確実に儀礼的な依頼として述べられている発話が見られなかったことが指摘できる。また、ひとつの場面に関してすべての基本的儀礼発話機能が産出されるとは限らず、場面における状況や発話の話題、そして参加者の関係性がその差に大きく関わっているのではないかと予測される。

量的分析の結果から、ペルシア語母語話者は平均的に会話の 4 割近く（37.7%）において、高い頻度で儀礼的行動を行っている[25]。儀礼的行動が 20%以下であった場面は 4 つであり、そのうちパーティー場面からは 2 つ(会話 2, 会話 20）が見られたものの、その他は公的な場面での会話(会話 6, 会話 21）であった。特に、会話 21 に関しては、会話の開始部に挨拶が見られるものの、その他の儀礼的な相互行為は見られなかった。また、会話の 70%以上が儀礼的なインターアクションで占められている場面も 4 つあるが、車中で交わされた会話一つ(会話 26）を除く他の三つでは、1 対 1 の会話が交わされていることが特徴的である。

[25]【表 5-1】の最右列にある△○☆というマークは、儀礼的な言語行動が場面別の会話全体の中で占める割合を示す。各割合はそれぞれ次の場面数で見られる。
△：20%以下:4 場面　－　　○：20%～40%:18 場面
☆：40%～70%:10 場面　－　☆☆：70%以上:4 場面

ここで、各基本的儀礼発話機能のパーセンテージ同士を比較するため、次のように各機能を数値化する。まず、各機能の標準誤差 SE(Standard error）を求めるため、次のような数式を用いる。

SE=SD/√N

ここで SE となっている値は、標準誤差を√Nで割ったものである。また SD(Standard deviation）とは、得られたデータのばらつきの度合を表す標準偏差を示し、データの分散の平方根をとったものとなる。以下の式では、N はデータの総数、X_iは数値、Xは平均値を表す。

分散：$V=\frac{\sum(X_i-X)}{(N-1)}$

$SD=\sqrt{V}$

SE の式からわかるように、標準誤差は標準偏差よりも必ず小さい数字となる。

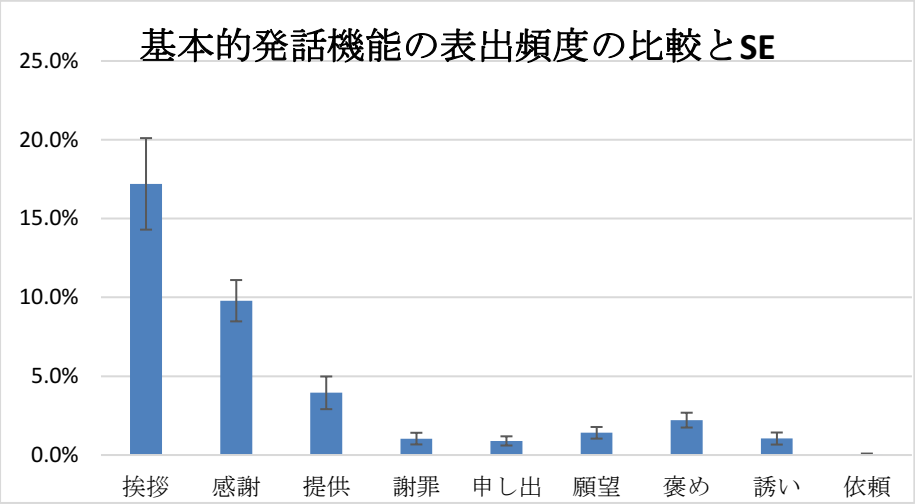
このような計算から、各基本的儀礼発話機能の全体における割合とそれらの標準誤差（SE）は【表 5-6】のようになる。標準誤差を出すことで、各発話機能の統計に見られるばらつきの度合いが大きくないことが確認され、データの信頼性を強めることができる。

【表 5-2】ペルシア語母語場面における基本的儀礼発話機能の表出頻度の標準誤差（SE）

基本機能種類	挨拶	感謝	提供	謝罪	申し出	願望	褒め	誘い	依頼
全体での割合	17.2%	9.8%	3.9%	1.0%	0.9%	1.4%	2.2%	1.0%	0.0%
SE	2.9%	1.3%	1.0%	0.4%	0.3%	0.4%	0.5%	0.4%	0.0%

またこれらの値は【グラフ 5-1】のように可視化される。

【グラフ 5-1】基本的発話機能の表出頻度の比較と SE の割合



先述の通り、挨拶と感謝はほぼすべての事例で見られる。これに対し、【グラフ 5-1】が示すように、他の基本的儀礼発話機能の表出頻度はかなり低くなり、すべての会話において必ず現れるとは限らない。次に多く見られた儀礼的提供は、食事場面（会話 24, 会話 32 など）や開始部の挨拶場面以外においては、さほど多く見られず、特に面と向かって会話が行われていない電話場面(会話 7～11）では、発話された例がない。次に多かった儀礼的な褒めについても、電話場面では発話された例がないのに対し、相手と対面して話をするパーティー場面ではほぼ一度は見られる。そして公的な場面については、ほとんど褒めが表出されていなかった。願望が最も多く見られたのが、会話 4 のスーパー場面である。会話 4 の特徴は、知り合いの店で買い物をしている客と店員の間で多くの儀礼的挨拶が交わされていることである。また、会話 11 の電話場面でも 4.8%もの儀礼的願望が見られている。表出頻度が等しい謝罪と誘い(1%）では、大きな相違として、公的な場面でも見られる謝罪に対して、誘いは私的な場面で知り合い同士でのみ交わされていた。最も謝罪が産出されたのは、公的場面であるクリニックでの医者と患者の間のスピーチ・イベントであった。そして、誘いが最も多かった場面である会話 11 では、会話の 10.7%で誘いが表れていた。最後に最も表出頻度数が少なかった申し出に関しては、パーティー場面のみで、37 場面中の 10 場面でのみ（全会話の 27%）儀礼として表れている。

各場面において、基本的儀礼発話機能の出現率には、話題や参加者の関係といった要因が影響を及ぼすと考えられるものの、場面を考察すると似たようなパターンが各機能において見られているということが明らかとなった。5.1.3 節において、各基本的発話機能がどの場面でどのような特徴をもって会話の中で見られるのか、事例を通して質的に考察していく。

5.1.2　母語場面における追加的儀礼発話機能表出頻度

次に、ペルシア語母語話者の儀礼的言語行動の独特な特徴としても指摘できる「追加的儀礼発話機能」の各場面における表出頻度を考察する(それぞれの行為の定義に関しては第 4 章を参照)。37 の場面におけるそれぞれの行為の表出頻度は、以下の【表 5－3】のようにまとめられる[26]。

[26] 表の右側のマーク（△○☆）は会話全体の中での頻度の度合を示したもので、内訳は次のようなものとなる。
△：20%以下・・・・10 場面　－　　○：20%～40%・・・・12 場面
☆：40%～70%・・・・11 場面　－　☆☆：70%以上・・・・4 場面

【表 5−3】全 37 場面における追加的儀礼発話機能の表出頻度

会話場面					追加的発話機能				会話全体比率	儀礼の頻度
分類	場面種類	会話番号	参加者数	参加者関係	感情提示	配慮	謙遜	応答		
私的	パーティー場面	【会話2】	8	親戚同士	16.67%	6.14%	0.00%	5.26%	28.07%	○
		【会話12】	9	親戚同士	10.05%	4.78%	1.44%	5.26%	21.53%	○
		【会話13】	6	親戚同士	7.24%	12.67%	0.00%	8.60%	28.51%	○
		【会話14】	21	親戚同士	6.06%	1.01%	1.01%	6.06%	14.14%	△
		【会話15】	10	親戚同士	19.48%	9.74%	10.39%	7.79%	47.40%	☆
		【会話16】	21	親戚同士	19.21%	6.21%	7.34%	6.78%	39.55%	○
		【会話17】	6	親戚同士	21.31%	5.74%	4.92%	7.38%	39.34%	○
		【会話18】	13	親戚同士	10.06%	13.31%	7.47%	7.47%	38.31%	○
		【会話20】	5	親戚同士	1.09%	4.35%	2.17%	11.96%	19.57%	△
		【会話23】	6	友人同士	13.40%	0.00%	2.06%	12.37%	27.84%	○
		【会話24】	10	友人同士	1.49%	4.95%	0.00%	7.92%	14.36%	△
		【会話30】	4	親戚同士	9.57%	0.00%	1.06%	8.51%	19.15%	△
		【会話31】	7	友人同士	27.16%	3.70%	7.41%	4.94%	43.21%	☆
		【会話32】	9	友人同士	3.45%	1.53%	0.38%	7.28%	12.64%	△
		【会話33】	5	友人同士	25.00%	0.00%	0.00%	0.00%	25.00%	○
		【会話34】	5	親戚同士	35.04%	3.42%	5.98%	13.68%	58.12%	☆
		【会話35】	8	親戚同士	27.44%	6.51%	1.86%	5.12%	40.93%	☆
		【会話36】	15	親戚同士	28.81%	4.24%	4.24%	5.93%	43.22%	☆
		【会話37】	3	友人同士	29.41%	1.96%	3.92%	13.73%	49.02%	☆
	車での場面	【会話5】	4	友人同士	25.00%	11.84%	0.00%	7.89%	44.74%	☆
		【会話26】	9	親戚同士	60.00%	11.11%	0.00%	0.00%	71.11%	☆☆
		【会話27】	7	友人同士	0.00%	5.56%	0.00%	0.00%	5.56%	△
	玄関先	【会話19】	6	親戚と友人	38.89%	8.33%	0.00%	2.78%	50.00%	☆
		【会話25】	6	親戚同士	9.15%	6.54%	3.92%	5.23%	24.84%	○
		【会話28】	7	友人同士	7.08%	10.38%	2.83%	8.49%	28.77%	○
		【会話29】	4	友人同士	21.21%	0.00%	0.00%	6.06%	27.27%	○
	電話	【会話7】	2	友人	68.42%	0.00%	0.00%	10.53%	78.95%	☆☆
		【会話8】	2	友人	13.33%	0.00%	0.00%	0.00%	13.33%	△
		【会話9】	2	親戚	43.33%	16.67%	10.00%	13.33%	83.33%	☆☆
		【会話10】	2	親戚	42.86%	3.57%	17.86%	25.00%	89.29%	☆☆
		【会話11】	2	親戚	42.86%	2.38%	2.38%	14.29%	61.90%	☆
公的	クリニック	【会話1】	2	医者-患者	16.67%	4.17%	4.17%	33.33%	58.33%	☆
	美容室	【会話3】	3	美容師と客	20.00%	0.00%	0.00%	0.00%	20.00%	△
	スーパー	【会話4】	3	客と店員	5.88%	8.82%	2.94%	5.88%	23.53%	○
	お店	【会話6】	3	客と店員	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	△
	会議	【会話21】	3	社長と社員	5.26%	2.63%	0.00%	0.00%	7.89%	△
	レストラン	【会話22】	3	ウェートレス-客	8.33%	8.33%	8.33%	8.33%	33.33%	☆
追加的儀礼発話機能のパーセンテージポイント					20.01%	5.15%	3.08%	7.76%	36.00%	

それぞれの追加的発話機能を比較すると、感情提示の使用頻度数が圧倒的に多く、他の配慮・謙遜・応答と比較しても、4 倍以上も高いことが分かる。他の追加的発話機能は、ほとんど同じ度合で見られる。また感情提示は、およそ 9 割の会話場面で見られているが、他の発話機能は全場面で必ず出現するとは限らないことが分析の結果から明らかとなった。平均的なパーセンテージを見ると、会話の 20%で儀礼的な感情提示が見られるのに対し、それに 13%ほどの差をつけて次に応答が 7.76%と追加的儀礼として多く見られている。それに引き続き、会話の 5.15%で配慮が、そして 3.08%で謙遜が見られる。

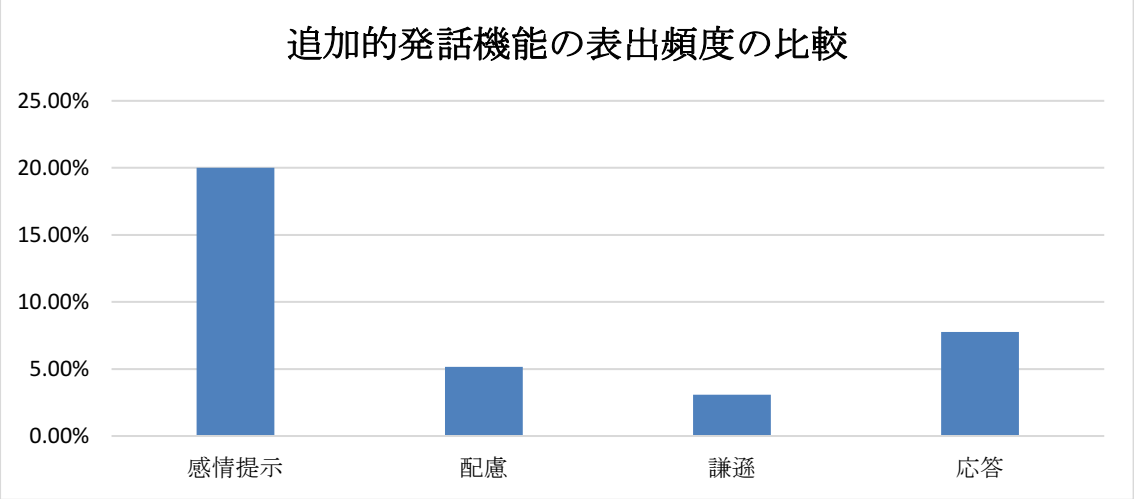
以上の結果を基本的発話機能の出現頻度と比較すると、追加的発話機能の出現頻度が20%以下である場面が同じ割合の基本的発話機能の場面よりも多いことが分かる。公的場面のおよそ半数の場面では、追加的発話機能の出現が20%以下であったことから、公的な場面においては追加的発話機能の頻度が下がる傾向があるようである。使用頻度が70%以上であった四つの場面中、三つが友人同士あるいは親戚同士の電話での談話であることが分かる。電話場面では、基本的発話機能が多く出現するだけではなく、追加的とされる儀礼も数多く見られることが分析から読み取れる。

以下に、上記表出頻度の平均数を示し、これを【グラフ5-2】にて示す。

【表5－4】全37場面における追加的儀礼発話機能の表出頻度

追加的発話機能	感情提示	配慮	謙遜	応答
全体での割合	20.01%	5.15%	3.08%	7.76%

【グラフ5-2】追加的発話機能の表出頻度の比較



会話内において、追加的儀礼発話機能の産出は、場面の儀礼度を向上させる効果を持っていることから、追加的機能の出現頻度が高い場面ほど、相手あるいは場面に対する儀礼度が高いことが予測できる。あるいは、感情提示が他の配慮や謙遜と比較し、ペルシア語母語話者にとって、場面の儀礼性をより相手に認識させる力をもつことも考えられる。つまり、場面を儀礼的フレームに切り替えようとする場合、感情提示が他の行為よりも使用性が高いことが考えられる。

また、感情提示が他の四つの機能より出現頻度が高いということは、ペルシア語母語話者は相手に対して興味や関心(インタレスト）を示すことで、儀礼を提示する傾向があると考えられる。感情提示が最も多く見られた場面は、友人同士の電話での談話(会話 7）であった。こうした場面では談話の長さに比較して、互いに感情を儀礼として提示する機能が多かったことが指摘できる。感情提示の頻度が 10%以下と低い場面(会話 13, 会話 14, 会話 20, 会話 24, 会話 30, 会話 32, 会話 27, 会話 25, 会話 28, 会話 4, 会話 6, 会話 21, 会話 22）では、他の基本的発話機能の頻度も比較的低い。本研究の分析場面において、感情提示が見られない場面は 2 つの事例(会話 27,会話 6）のみである。会話 27 では、友人同士が車に座る場面であり、誰が前に座るかについて儀礼的行動を行っている。もう一方の店での会話 6 の場面では、そもそも追加的な発話機能が全く出現していないことから、参加者同士の間には儀礼的表出の必要性が窺えないことが考えられる。

配慮が出現する会話を検討すると、友人同士の会話(会話 23, 会話 24, 会話 31, 会話 32, 会話 33, 会話 37, 会話 27, 会話 29, 会話 7, 会話 8）では、相手に配慮をする行動の談話中頻度が比較的低くなる傾向がある。それに対し、ホストとゲストの関係がある会話では、配慮的表現の頻度が高くなっていた。

次に他の追加的機能より出現頻度が低かった、謙遜の機能を見ていきたい。まず謙遜が多かった場面を順に見ると、親戚同士の会話 15 でのパーティー場面(10.39%）と会話 10 での電話場面(17.86%）が最も高い数を示していた。基本的機能の感謝あるいは提供と共に、追加的機能として用いられる傾向があるようだ。また、謙遜の表出頻度が 0%であった場面(会話 2, 会話 13, 会話 24, 会話 33, 会話 5, 会話 26, 会話 27, 会話 19, 会話 29, 会話 7, 会話 8, 会話 3 会話 6, 会話 21）では、追加的儀礼での感情提示の産出数が高い。

最後に応答に関しては、基本的あるいは追加的発話機能が会話の第一成分で見られた場合に、会話の連鎖を完成させるべき隣接ペアの第二成分として応答が現れることが明らかになった。特に応答が多く見られる場面に関しては、会話参加者の一方から儀礼的な発話が多く

開始され、それに対し応答するというケースが大半を占めている。応答があまり見られない場面では、儀礼的な発話連鎖があまり長く継続しない傾向が見られた。

5.1.3　会話構造における母語場面での儀礼的な発話機能の表出の位置と会話事例

5.1.1 節と 5.1.2 節では、マクロな視点と量的な分析を通して、ペルシア語母語話者の儀礼的行動の全体構造を把握することができた。しかし実際の場面では、それぞれの基本的儀礼発話機能や追加的儀礼発話機能がどういった状況で多く出現するのか、そこにはどのような特徴があるのか、量的分析からのみでは把握が難しい。本節では、具体的に儀礼が産出されると期待される場面で、実際にどのような発話機能がどういった関係において見られるのかを量的に分析すると同時に、数多く存在する実例の中から、特に特徴的であったものを検討する。

5.1.3.1　母語場面における社会文化行動の前後に見られる儀礼的行動

主に、相互行為においてある社会文化行動であると留意された活動が開始する、または終了するといった活動の変化が見られる際に起きる儀礼的行動のタイプである。

5.1.3.1 節では、社会文化行動が起こる直前または直後に、その行動をする発話者から儀礼的行動が見られたときのタイプと実例を紹介する。各発話機能は、どのような文化行動の前後で多く現れるのか、どのような現れ方によって場面を儀礼的にしているのかを見る。

【Ｉ「社会文化行動」の直前の儀礼的行動】

ペルシア語母語話者にとっては「食事を始める」、「自己領域に関する物を提供する」、「話を展開する」といったことが「社会文化行動」として認識されている。なぜな

ら、これらの社会文化行動の前には、何らかの儀礼的な行動が観察されるためである。これらの場面では、大きく提供、謝罪、申し出、願望が多く出現していることが分析から明らかとなった。以下の【表 5-5】では、文化行動直前の儀礼的発話機能のバリエーションを見る。これらの基本的儀礼発話機能には、追加的儀礼発話機能または発話連鎖の有無が確認され、この二つの出現が場面に儀礼的なニュアンスを添える効果をもつ。従って、以下の表にて追加的儀礼発話機能があるとされる社会文化行動は、場面の儀礼性が弱く、基本的儀礼発話機能のみでは儀礼が認識されにくく、儀礼的フレームに入りにくいことが予想される。

【表 5-5】「社会文化行動」直前の儀礼的発話機能のタイプ

発話機能	文化行動直前の儀礼的行動	追加的機能の有無	発話連鎖の有無	事例数	会話番号
提供	(1)店員が客に対して商品を謙遜的に提供する	あり	あり/なし	2	(4)(22)
	(2)相手に何か戻し返す際の提供する	あり/なし	なし	2	(22)(25)
	(3)個人の食べ物を相手に提供する	あり	あり	4	(5)(25)
	(4)食事や物を相手に提供する	なし	あり	25	(12)(14)(16)(18)(24)(32)(35)(36)(21)
謝罪	(5)話を展開する前に表出される謝罪	なし	なし	1	(21)
申し出	(6)提供する前段階の申し出	あり	あり	12	(13)(14)(18)(20)(32)
願望	(7)相手が食事をする前に表出される願望	あり	なし	3	(5)(24)(32)

以下では上掲の表にある、ペルシア語母語話者が活動を行う前にとる儀礼的な行動の特徴を示す。

【A-1】儀礼的提供

いくつかの行動の前には、主に四つの提供のバリエーションが見られた。

(1) 店員が客に対して謙遜する態度をとり商品を提供する

商品を渡すという行動の直前に発生した儀礼的行動である。店員によって商品が手渡される行動は、儀礼的行動が期待される文化行動であり、この行動の後は儀礼的フレームが作られる傾向がある。従って、そこからのインターアクションで表出される発話機能は儀礼的な役割をもつ。ここでは、店員が自分の店の商品をへりくだり、価値はないとすることが社会文化的な行動となる。

(2) 相手に物を返却する際に見られる提供

この社会文化行動は､借りていた物を持ち主に返す行動である｡このような活動に対して、持ち主は自分の所有物を相手から受け取る前に儀礼的な言語行動を行う。そこでは、持ち主が自分の貸していた物に対し「大したものではないです、どうぞ」と謙遜を使用することで儀礼的フレームに入り、その後受け取るのを拒否することで、儀礼的な提供が見られる。

(3)　個人の食べ物を相手に提供する

食べ物を食べるという行動の中で､「自分が一人で食べる」という活動に対して、同じ場面にいる他の参加者に自分の食事を儀礼的に提供するという発話が見られる。このような状況でポイントとなるのは､周囲の人が何も食べ物を食べていない中で自分一人が食事をする(食べる）という行動が、社会文化的な規範から逸脱として判断されるということである。従って、自分の食事を食べる直前に儀礼的フレームに入ることで逸脱を回避しようとする。その中で相手へ儀礼的に提供することが肯定的に評価される。

（4）食事や物を相手に提供する

このような提供は、社会文化行動直前の儀礼的行動として最もよく見られたストラテジーである(25 例)。この種の儀礼的行動は、多くの場合ホストがゲストに対して料理を提供しもてなすという行動が見られた際に表出されている。ホスト側が自分より年上である場合には、ゲストの側がホストに対して料理の提供をする儀礼的行動も見られる。ここでは、料理を食べる直前に儀礼的フレームが作られやすく、その中でホストとゲストの間での儀礼的なインターアクションが見られる。

【A-2】儀礼的謝罪

このタイプの謝罪は、一例の会話のみで見られた。ここでは改まった会議場面において、一人の発話者が話題を展開するという行動の前に儀礼的行動として謝罪が行われている。

【A-3】儀礼的申し出

社会文化行動直前での申し出は、5 つの会話場面(12 例）で見られた。特徴としては、相手に食事や物を提供する機能に近く、相手のために何かの提供を申し出るといったパターンが多い。従って、申し出が確認される場面は、儀礼的フレーム内で儀礼的な提供が見られる前に表れることが多い。特に儀礼的な申し出に関しては、スピーチ・イベントの参加者の一人から申し出が産出された場合、他の参加者からも申し出の発話が開始される傾向がある。つまり、儀礼的発話ペアの第一成分で申し出がなされた場合、第二成分でも同じく申し出が表れるパターンが多い。

【A-4】儀礼的願望

三つの会話場面において、社会文化行動の直前に儀礼的な願望が見られた。
このタイプの願望は､相手の発話者が食事をするという行動の合図を見せる場面で見られる。つまり、儀礼的な願望は食事をする直前に表れる。

【Ⅱ「社会文化行動」の直後の儀礼的行動】

ペルシア語母語話者にとって「プレゼントを贈る」、「情報を提供する」、「食事をする」、「帰宅の合図」がインターアクションで見られた場合、これらの行動は社会文化的な行動として留意されることが多く、ペルシア語母語話者は何らかの儀礼的なストラテジー行動をとり、儀礼的フレームを作る。本研究の調査結果では、以上のような社会文化行動の後に作られる儀礼的フレーム内では、謝罪、願望、褒め、誘いといった発話機能が儀礼的な役割を持ち、観察される。以下の【表 5-6】に、社会文化行動直後の儀礼的発話機能の種類を列挙する。

【表 5-6】社会文化行動直後の儀礼的発話タイプ

機能	文化行動直後の儀礼的行動	追加的機能の有無	発話連鎖の有無	事例数	会話番号
謝罪	(1)贈り物(プレゼント)提出の際に表出される謝罪	あり	あり	1	(16)
願望	(2)情報提供後に表出される願望	あり	なし	7	(9)(2)(13)(16)(36)(9)
	(3)食事後に表出される願望	なし	あり	2	(14)
褒め	(4)相手の情報提供後に表出される褒め	なし	あり	13	(2)(13)(14)(16)(17)(18)(30)(31)(34)
誘い	(5)相手の状況変化で見られる誘いの表出	なし	あり	2	(28)(17)

【B-1】儀礼謝罪

このタイプの謝罪は、相手の発話者に「プレゼントや手土産を渡す」ことが社会文化行動として認識されることによって産出される。ここでは、何かを手渡す際に発話者は自ら相手のために持ってきたものに対し「すみません、大したものではありません」と謝り、謙遜を示すことで儀礼を提示している。つまり、プレゼントを相手に渡す直後に、基本的儀礼発話機能の謝罪と追加的儀礼発話機能の謙遜が同時に表れることで、儀礼的フレームが作られる。このタイプでは、儀礼的連鎖も確認されている。

【B-2】儀礼的願望と儀礼的褒め

(1)　情報提供後に表出される願望と褒め

儀礼的願望と褒めは多くの場面で同時に産出されていたことから、同じ儀礼的役割を果たしていると考えられる。この二つの発話機能が同時に出現する理由は、同一の社会文化行動の後に作られた儀礼的フレームの中で産出されるためである。つまり、このタイプの儀礼的な願望と褒めは、相手の発話者から発せられる自己領域に関する情報提供に対して産出されるものである。ここでの情報提供とは、相手の発話者(あるいは領域範囲の人)の近況の報告、または実際に相手に会った際視覚的に得られた情報から産出される可能性がある。

(2)　食事後に表出される祈願

ここでもうひとつのバリエーションとなる、社会文化行動直後の願望は存在するが、この

タイプでは褒めは産出されない。

食事行動の後に見られた祈願(願望）の事例は一例のみ観察された。このタイプでは、参加者全員の食事が終了したことが確認された後に、場面の参加者の中で最も年配者が、他の全員の参加者のために祈りの言葉を口にする。こうした場面は最も儀礼的なものであり、一人がその場にいる全員に祈願となる言葉を発すると同時に、他の参加者は「アーメン」と発話する。こうした儀礼は、宗教的な儀式の終了部でもよく見られる。

【B-3】儀礼的誘い

このタイプの誘いは、相手の発話者の状況変化によって見られるタイプの儀礼的誘いである。つまりここで述べる「状況の変化」は、何らかの社会文化行動として判断される。特に多く見られた傾向としては、ゲスト側から帰宅するという合図が確認された際に、ホスト側がもう少し家にいるようにと言うことで、誘いの連鎖が開始するタイプである。誘いが儀礼的であると判断する基準としては、会話内で誘いが産出された位置とその後連鎖が続くことが指摘できる。一方で、この場合、追加的儀礼発話機能が見られていないことから、このタイプの誘いは儀礼性が高いことが指摘できる。儀礼性が高いほど、このようなパターンの儀礼的行動は社会的に一般化されており、儀礼的な認識性が高いことも理解できる。

以下に、社会文化行動の前後で最も多く見られた事例のパターンを三つ見る。

最初の事例は、社会文化行動の直前において最も多く産出された儀礼的な役割を持つ提供である。

会話 24 の事例 75 では、ホストである IR(01)、IR(02)と IR(05)の 3 名が、友人である他の発話者をレストランに招待した場面になる。

【会話 24-事例 75】友人同士の食事場面

事例	ライン番号	話者	発　話　内　容(日)	基本的発話機能	**追加的発話機能**
75	1	IR(01)	BeFarmaid,<Kahesh Mikonam>{<},, どうぞ,<お願いします>{<},,	**提供**	
	2	IR(02)	<Livan>{>}。 <コップ>{>}。		
	3	IR(01)	「IR(44)」Jan, *Unvar Pazirai Kon Lotfan*。 「IR(44)」ちゃん, *そっちちゃんとおもてなしてあげて*。		配慮
	4	IR(01)	*Ghorbunet* Bekhor dige。 *ダーリン*、どうぞ食べて。	**提供**	感情提示
	5	IR(02)	Berizam Barat？。 入れてあげようか？。	**申し出**	
	6	IR(44)	*Negarane Man Ke nabash Dige*。 *私の心配はしないでいいわよ*。		応答
	7	IR(01)	「IR(47)」Khanum[↑], Lotfan。 「IR(47)」さん[↑], どうぞ。	**提供**	
	8	IR(51)	*Maman Jun* Az In Berizam？。 *お母さん*、これ入れてあげようか？。	申し出	感情提示
	9	IR(47)	Na, Ziyad Nemikhore。 ううん, あまり食べないわ(アメリカ人)。		応答
	10	IR(44)	<Bezar Az In GoJe Ha 10 Ta Bezar>{<}。 <この、トマト10個入れてあげて>{<}。	提供	
	11	IR(05)	<Az Hame Model Ha Hast Bar Darin>{>}。 <いろいろあるから、全部食べて>{>}。	**提供**	
	12	IR(05)	Alan Bagheli Polo,Chiz Miyaran Hame chi[→]。 今ライスもってくるって,あ～なんでもくるよ[→]。	**提供**	
	13	IR(44)	Dastetun Dard<Nakone>{<},, ありがとう<ございます>{<},,	**感謝**	
	14	IR(49)	<Dastetun Dard Nakone>{>}。 <ありがとうございます>{>}。	感謝	
	15	IR(44)	Bara Madar Bozorgam Are【【。 おばあちゃんのははい【【。		
	16	IR(01)	】】Pas Harchi Mikhan Barashun Berizi。 】】何でも、必要なものおいてあげて。	**提供**	
	17	IR(44)	Are Hatman。 はい、必ず。		応答

事例 75 のインターアクションの特徴としては、料理を食べるという活動の前にホスト側からその料理を様々な儀礼的な形で提供する発話(発話 1、発話 4、発話 5、発話 7、発話 11、発話 12）が見られる。しかしそれだけではなく、ホスト側がゲストの中でも最も親しい IR(44)に対して、他のゲストをもてなすように頼む発話も見られた。発話 5 では IR(02)が IR(44)に対して、「入れてあげようか(Berizam barat）」と申し出をするが、IR(44)が「私の心配はしなくていいわよ(Negarane man ken abash dige）」(発話 6）と応答することで、自身をゲストという立場から外してもよいというシグナルを出している。友人同士としてかなり

親しい間柄ではあったようだが、IR(02)がホスト側として儀礼的な言語行動をゲストに対して取るというペルシア語母語話者の規範を適応しようとしたようである。しかし、IR(44)が自分をゲスト扱いしなくてもよいということを告げてから、IR(44)もホスト側の役割意識に入り、他のゲスト(特に年上である者）に儀礼的な提供を開始する。このスピーチ・イベントの追加的儀礼としては、発話 4 の相手を呼ぶ際の「ダーリン」や、発話 8 で IR(51)が自分の母に対する「Maman jun」という呼びかけが見られる。これは「お母さん(Maman）」に「ちゃん(Jun)」を追加して、母を呼ぶ際の儀礼的な感情を示している。

次は、社会文化行動の後の儀礼的フレーム内で多く使用されていた、儀礼的な褒めと願望の「(1)情報提供後に表出される願望と褒め」から、儀礼的なインターアクションを考察する。

以下の会話 16 は、IR(05)が妹である IR(16)の家に訪問した際の場面である。

【会話 16-事例 41】新築の妹の家を訪ねた際のスピーチ・イベント

事例	ライン番号	話者	発　話　内　容（日）	基本的発話機能	追加的発話機能
41	96	IR(16)	*kheili khosh amadin*。 *ようこそいらっしゃいました。*		感情提示
	97	IR(05)	*salamat bashid mobarak bashe bah bah bah bah enshallah <be salamati>{<}。ありがとうございます、おめでとうございます、あらあらあらあら＜健康のもとで>{<}。*		感情提示＋応答
	98	IR(15)	<salamat bashid>{>}。 *<健康でいらっしゃってください*（ありがとうございます）>{>}。	願望	応答
	99	IR(16)	<salamat bashid>{>}。 今夜のほうが寒いですね。		
	100	IR(05)	na ma tofigh nadashitim,ma zekro kheiresho shenide<budim>{<}。 そう、私たちは目にかかるチャンスがなかったです、よいお話しは<聞いていました>{<}。	褒め	感情提示
	101	IR(16)	<salamat>{>}bashid。 <ありがとう>{>}ございます。	感謝	
	102	IR(05)	*kheili tabrik migim ,enshallah ke,be khoshi salamati,hamintori naslandal nasl hame darsh,,* *本当におめでとうございます、神様のもとでいつも楽しいこと、健康でい続ける家でありますように、そして孫から孫へと使える家になりますように。*	願望	感情提示＋配慮
	103	IR(16)	salamat bashid。 ありがとうございます。	感謝	
	104	IR(05)	shad bashando salamat bashando salem bashan。 楽しいことに、嬉しいことに、健康な身体のもとで。	願望	

事例 41 では、ゲストである IR(05)が IR(15)と IR(16)の家を初めて訪れていることから、妹の家の事に関わる情報は彼女の領域に関する情報提供として判断され、社会的な文化行動としては、情報提供の後にゲストが家の持ち主に対し何かの儀礼的言語行動をすることが期待される。ここでは、IR(05)からは「新築の家への訪問」という情報提供に対して、「願

望」(発話 102、発話 104）が IR(16)に向けて産出されている。そこには、「神様のもとでいつも楽しいこと、健康でい続ける家でありますように、孫から孫へと使えますように」と相手に対する願望が連鎖的に続く。また、この願望と同時に見られたのが、IR(16)の領域(家）に対する儀礼的な褒め(発話 100）である。この発話では、「よいお話しは聞いていました(zekrokheiresho shenide budim）」と相手領域への興味や関心を強調する儀礼的な感情提示が褒めと同時に見られる。そして、場面を儀礼的フレームに切り替える発話は、IR(16)の「ようこそいらっしゃいました(Kheili khosh amadin)。」であり、フレームの開始の合図として解釈できる。儀礼的な発話連鎖は発話 104 以降らも長々と続く。

最後に、儀礼的な誘いが文化行動の後にどのようなフレーム内で現れるのか、事例の中から見る。

事例 167 は、パーティー場面でのスピーチ・イベントである。

【会話 28-事例 167】友人訪問時にゲストから帰宅の合図が表出された

事例	ライン番号	話者	発　話　内　容	基本的発話機能	追加的発話機能
167	1	IR(21)	Khob,daste shoma dard nakone＝【。 じゃ,ありがとうございました＝【。	感謝	
	2	IR(63)	】＝*<Sare Shoma Dard Nakone>｛<｝,,* 】＝*〈どういたしまして〉{〈},,*		応答
	3	IR(62)	*<Khahesh mikonam>｛>｝。* *＜いいえ、どういたしまして〉{〉}。*		応答
	4	IR(63)	Bashid hala＝【。 まだ、いらっしゃってください＝【。	誘い	
	5	IR(21)	】＝*Na na 、Ta yek goftin ghatar Hastesh ？。* 】＝*いやいや、1時まで電車があるんだっけ？。*		応答
	6	IR(65)	Fek Konam[↓]、Ba<Le>{<}, ,たぶん[↓]、は<あい>{<}。		
	7	IR(21)	<Bashe,Kheili khob>{>} Berim ta unja baz, Azmayesh bekonim,Try Bekonim Enshallah（<少し笑>）。 うん,いいね、じゃそこまで行こう、ためそう、トライしてみよう神のお許しのもとに（<少し笑>）。		
	8	IR(60)	Daste shoma dard nakone＝【。 ありがとうございました＝【。	感謝	
	9	IR(63)	】＝*Sare Shoma< Dard Nakone>｛<｝,,* 】＝*どういた しまして。*		応答
	10	IR(60)	<Motchakker>{>}。 ありがとう。	感謝	

IR(21)が発話 1 で「じゃ、ありがとうございました(khob ,dashte shoma dard nakone）」と帰宅意思の合図を示し、パーティーという活動の終了の報告を示している。この合図に対

し、ゲストである IR(63）と IR(62）の発話には儀礼的な応答が見られる(発話 2、発話 3）。この感謝は場面を儀礼的フレームに入らせる、スイッチのような役割を持つ。ここで期待される社会文化行動とは、ゲストに対するもてなしの表明である。続いて発話 4 では、IR(63）が「まだ、いらっしゃってください(Bashid hala）」と儀礼的であると推測される誘いが見られた。しかし、これが儀礼的な誘いであると留意したと考えられる IR(21) は、軽く「いやいや(Na na）・・」と誘いに対して儀礼的に否定する応答を示す。以上の事例タイプから、ペルシア語母語話者は、ゲスト側から帰宅する合図が見られた場合、儀礼としてホスト側が誘いをするという儀礼的な規範があると考えられる。

5.1.3.2　母語場面におけるスピーチ・イベント内の連鎖から見られる儀礼的行動

まとまったひとつの会話(スピーチ・イベント）の構造を検討すると、「会話の開始部連鎖」、そして「会話の終了部連鎖」が存在することが分かる。この節では、ペルシア語母語話者にはスピーチ・イベント内の個所によって様々な基本的儀礼発話機能を使い分ける傾向があることを示す。とりわけペルシア語母語話者の儀礼的な行動は、スピーチ・イベントの開始連鎖と終了連鎖の両部分に集中して見られる。スピーチ・イベントの主要部においては、会話の中においてある合図が確認されたときに儀礼的フレームが作られ、そこで儀礼的行動が見られる。以下にペルシア語母語話者のスピーチ・イベントに見られる儀礼的インターアクションの事例を示す。

【Ｉ　スピーチ・イベント内の開始連鎖で見られる儀礼的行動】

「こんにちは」、「はじめまして」「よろしく」など私たちが日頃あまり深く考えずに使っている挨拶の表現は、出会いの段階のコミュニケーションで重要な役割を果たしている。相手に対する第一印象は最初の数分で決まり、その後もなかなか変わらないということになると、挨拶の言葉、その時の声、顔の表情、視線、姿勢、服装などがその後の人間関係に深い影響を与えるのではないかと宮原(2006)は述べている。

以上の挨拶のやりとりを出会いの段階と考えると、その後にスモール・トークを通して相手のことを知り、関係性を作り上げることになる。このスモール・トークは、ペルシア語母語話者にとって挨拶に続いて重要な儀礼的行動であると考えられる。この節では、以上のような互いに会話を開始する発話、そしてそれに続くスモール・トークを「スピーチ・イベントの開始連鎖」の枠組みであると見なす。以下の【表 5-7】に、ペルシア語母語話者のイベント開始部に見られる様々な発話機能のタイプを挙げる。イベント開始部には(1)–(3)の三つの挨拶のバリエーションが見られ、これに謝罪、あるいは提供が伴う((4)(5)参照）タイプも存在する。次に褒め、誘い、そして感謝といった基本的発話機能が見られる。

【表 5−7】スピーチ・イベント開始連鎖の儀礼的行動

機能	スピーチイベント開始連鎖での儀礼的行動	追加的機能の有無	発話連鎖の有無	事例数	会話番号
挨拶	(1)連鎖と追加的儀礼が表出される開始部挨拶	あり	あり	19	(11)(7)(9)(5)(26)(19)(25)(29)(2)(12)(13)(15)(16)(18)(30)(31)(35)(36)(37)
	(2)連鎖が表出されない挨拶	あり/なし	なし	7	(6)(3)(19)(15)(17)(23)(33)
	(3)連鎖はあるが追加的儀礼が見られない	なし	あり	1	(8)
謝罪	(4)**開始部挨拶での謝罪**	あり	あり	6	(1)(5)(25)(15)(31)
提供	(5)開始部挨拶での提供	あり	あり	5	(1)(15)(18)(31)(36)
褒め	(6)**開始部スモールトークでの褒め**	あり	あり	2	(1)(37)
	(7)開始部挨拶での褒め	あり	あり/なし	7	(19)(25)(2)(30)(31)(34)(37)
誘い	(8)開始部挨拶での誘い	あり	あり	2	(9)(10)
	(9)開始部スモールトークでの誘い	あり/なし	あり	1	(25)
感謝	(10)**開始部挨拶での感謝**	なし	あり	13	(1)(4)(7)(11)(5)(25)(29)(12)(15)(9)(18)(35)(36)

【C-1】イベント開始連鎖における挨拶と感謝

ここでは、3 つの挨拶のタイプを比較する。

（1）イベント開始部挨拶に連鎖と追加的儀礼が表出されると同時に感謝も見られる

イベント開始部挨拶において拡張連鎖が検討された場合、そこには多くの追加的儀礼も同時に産出されていることが明らかとなった。儀礼的連鎖が長々と続く開始部挨拶においては、インターアクションをする発話者同士の関係が長期的な付き合いを持っている傾向が高い。または、発話者の今後の関係の構築が期待されるようなものが多く見られた。

一方､挨拶において連鎖が見られるひとつの要因として､相手の健康を尋ねる発話があり、

その応答には「感謝」の基本的儀礼発話機能が期待される。

（2）連鎖が表出されない挨拶

基本的に、相手に対してたとえ簡略なものであっても儀礼的な挨拶が期待されるペルシア語母語話者の社会文化規範においても、挨拶の発話連鎖が観察されない場合がある。特に当事者同士が初対面であり、なおかつ今後の関係性の構築が期待されない関係性である場面(会話 3・会話 6）でよく見られる。他にも会話 19 の事例 158 のように、当事者同士の付き合いが長いものであっても社会的階級が大きく異なる場合、一方が挨拶に対する連鎖を進行させない傾向が見られた。また、社会的階級などには関係なく、会話参加者同士の年齢差が大きい場合にもこうした連鎖の断絶が見られた。このような状況においては、年上の発話者から健康や近況を尋ねる発話が行われてももう片方は応答するのみであり、儀礼的連鎖の構築は見られない(会話 15 事例 30 など）。

（3）連鎖はあるが追加的儀礼が見られない

この種の挨拶において、発話の連鎖が産出されるものの追加的儀礼発話機能は全く観察されなかった。この事例は、電話場面における親しい友人同士のイベント開始部の挨拶などが当てはまる。

【C-2】イベント開始連鎖における謝罪と提供

イベント開始部挨拶と同時に見られる謝罪や提供は、大きなカテゴリーとして開始部挨拶とともに述べられるが、ここでは、「こんにちは」や「元気ですか」とはまた異なった性質を持つと判断したことためあえて独立のタイプに分類している。六つのスピーチ・イベントにおいて、開始部挨拶に謝罪が見られた。このようなタイプの謝罪では、玄関先において、ゲストである発話者が遅れてしまったことに対して謝る(会話 1、会話 25、会話 31）か、あ

るいはホスト側がゲストに対してわざわざ訪れてくれたことに、「面倒になりましたね、すみません」と儀礼的な謝罪を開始する(会話 15）ものがある。このタイプの謝罪は、上下関係を持つ、または多少の年齢差がある会話参加者同士の間で観察されている。

挨拶と同時に見られる提供は、物を渡すものではなく、ゲストあるいは患者である人間を部屋の奥へと案内し、「席にどうぞお座りください」などと場所を提供する際に発話される。

【C-3】イベント開始連鎖における褒め

開始部挨拶の褒めに関しても、二つのパターンがあると考えられる。ひとつ目は、開始部挨拶において第一部の挨拶が終了した後にスモール・トークに入った際に見られる褒めである。二つ目は「こんにちは」などの挨拶と同時に発せられる褒めとなる。

（1）開始部スモール・トークでの褒め

このタイプの褒めは二つの事例のみ(会話 1 事例 145 と会話 37 事例 142）で見られた。両者に共通する特徴は、当事者同士が初対面であったことと、社会的立場から見た際に目下から目上の発話者に対して、「他人からあなたについての良いお話しはたくさん聞いてました」といった形で目上の発話者に褒めを開始することである。「自分はこれまでお会いしていないが、あなたのよい評判は広がっていますよ」と、相手を立てるということがストラテジーの前提となる。

（2）開始部挨拶連鎖での褒め

この褒めはスモール・トークで見られる褒めとは異なり、逆に目上(年配者）から目下(若者）に対して褒めが見られる傾向がある。年配者から若者や子供に対して多く見られるこのタイプの褒めは、特に子供に対して向けられる場合に、褒められた者から必ずしも(儀礼

的）応答があるとは限らない(会話 2,会話 30,会話 31）。従って、スモール・トークで見られる褒めに比べ、会話参加者の一方が儀礼的な褒めの連鎖をしている傾向が高い。

【C-4】イベント開始連鎖における誘い

開始連鎖においては、二つのバリエーションの誘いが見られる。まずひとつ目の誘いは電話場面においてよく見られた。次の誘いのバリエーションは、玄関先で開始連鎖の挨拶をしている際に相手を家に上がるように誘うものである。開始連鎖における誘いでは、比較的長い連鎖が相互行為で起きていることが明らかとなった。

（1）スピーチ・イベント開始連鎖で見られる誘い

開始連鎖で見られる誘いは、電話場面の挨拶で表れている。誘いは挨拶の一環として、相手を自分の領域に誘う儀礼的行動である。先行研究[27]やインタビュー調査からも、ペルシア語母語話者は儀礼的行動として相手を家に誘うという文化的習慣があることがわかった。

（2）玄関先においての誘いの連鎖

本研究において開始連鎖で誘いが表出されたもうひとつのタイプは、玄関先における短い挨拶の後に見られた誘いである。このタイプでは、家を持つホスト側から相手 (ゲスト）に対して家に上がるようにしきりに誘う連鎖が長々と見られる。この例は会話 25 の事例 162 でのみ見られた。

【Ⅱ　スピーチ・イベントの主要連鎖で見られる儀礼的行動】

ペルシア語母語話者は、スピーチ・イベントの開始と終了部のみで儀礼的行動をするだけではなく、場合によってはスピーチ・イベントの主要部でも儀礼的行動をしていることが明らかとなった。主にペルシア語母語話者が主要部で儀礼を開始する箇所(主要部で儀礼的フ

[27] 第 2 章を参照。

レームが作られる箇所)は、会話の中において間が見られる部分、会話の話題が展開する部分に集中している。本論では、挨拶、褒め、誘い、謝罪の基本的儀礼発話機能がイベント内の主要連鎖で観察された。以下【表 5－8】はその一覧である。

【表 5－8】イベント中間部での話題展開時での儀礼的発話機能のタイプ

機能	スピーチイベント主要連鎖での儀礼的行動	追加的機能の有無	発話連鎖の有無	事例数	会話番号
挨拶	(1)会話中間部での挨拶	あり	なし	17	(4)(10)(5)(29)(13)(15)(17)(18)(35)(36)
褒め	(2)会話の途中で間の後に表出される褒め	あり	あり/なし	4	(2)(15)(18)
誘い	(3)会話中間部での誘い(誘いの再確認)	あり/なし	あり	4	(10)(2)(15)
謝罪	(4)謙遜的な謝罪	あり	なし	5	(25)(18)(32)

このグループで最も多く見られたのが、会話中間部での挨拶(17 事例）である。連鎖は見られないものの追加的儀礼発話機能が多く産出されていた。その理由として、会話の主要部で儀礼的フレームに一時的にスイッチするためには、基本的儀礼発話機能のみでは相手に儀礼として認識されにくいことが考えられ、追加的儀礼発話機能の存在が重要となることが挙げられる。主要部でよく見られる儀礼的行動は、場の雰囲気を穏やかにする機能があると考えられる。

【D-1】イベント主要連鎖における挨拶と褒め

最初に、主要連鎖における挨拶と褒めを挙げる。この二つの発話機能が表出されるタイミングは同様であり、ある話題の終了後、次の話題を開始する前(話題展開部）となる。ここでの挨拶とは、相手の発話者に対して近況を尋ねることである。一方で話題展開の際は、スピーチ内において、ある「間」が見られた時点において儀礼的行動が現れる。主要連鎖で見られる褒めは、開始連鎖の褒めに近いものがあり、目上あるいは年上の者から年下の者に対して唐突に開始される。しかしこのパターンの褒めにおいても、必ずしも応答が見られるとは限らないようである。従って、主要部で産出される褒めは必ずしも儀礼発話ペアを求めるとは限らない。

【D-2】イベント主要連鎖における誘い

主要連鎖で見られる儀礼的誘いは四つの事例において見られた。ペルシア語母語話者は相手から誘いを受ける際、その誘いが儀礼的でない場合であっても、相手が儀礼的な誘いを行っていると考えてその誘いを拒否する規範を作っていると考えられる。つまり、相手を自分の領域に誘うことが場面を儀礼的フレームに切り替えるスイッチとなる。その後、誘われた側はそれに対し儀礼的に拒否(遠慮)することが期待される。

【D-3】イベント主要連鎖における謝罪

主要連鎖に謝罪が見られた五つの事例では、いずれも相手に対して負担をかけていることを強調し儀礼的な謝罪をしている。例えば、家に来てくれたゲストに対して、食べ物を会話の途中で提供するという儀礼的フレームの中で、儀礼的な謝罪の言葉を発話するものなどである。

【Ⅲ　スピーチ・イベント内の終了連鎖で見られる儀礼的行動】

「別れ」の挨拶で使用されている「挨拶言葉」は、大きく「ありがとうございました」のように感謝を表す系列と、「さようなら」のように別れを告げる系列の 2 種類が見られると岡部（2001）は述べている。ペルシア語母語話者はこの二つの種類以外にも、スピーチ・イベント内の終了連鎖(会話終了時での儀礼的フレーム内)で、「謝罪」、「願望」、「誘い」を産出することが明らかとなった。参加者の関係や場面により三つのバリエーションがあることが観察された。以下の【表 5－9】は、本研究におけるスピーチ・イベント内の終了連鎖での儀礼的発話機能のバリエーションを事例数と共に表したものである。

【表 5−9】イベント終了連鎖での儀礼的発話機能のタイプ

機能	スピーチイベント終了連鎖での儀礼的行動	追加的機能の有無	発話連鎖の有無	事例数	会話番号
挨拶	(1)配慮的な終了部挨拶	あり/なし	なし	6	(4)(9)(11)(28)(17)(37)
	(2)連鎖が表出されない終了部挨拶	あり/なし	なし	7	(3)(10)(19)(15)(17)(23)(33)
	(3)連鎖と追加的儀礼が表出される終了部挨拶	あり	あり	8	(28)(23)(33)(34)(35)(37)
感謝	(4)終了部挨拶での感謝	あり	あり	14	(28)(14)(15)(20)(23)(33)(34)(37)
謝罪	(5)会話終了部での謝罪	あり	あり	4	(15)(17)(23)
願望	(6)会話終了部での願望	あり	あり	5	(28)(34)(36)(37)(4)(9)(34)(36)(37)
誘い	(7)会話終了部での誘い	なし	あり	8	(28)(17)(23)(34)

上の表で最も多くのバリエーションを持つものが挨拶である。終了連鎖の挨拶と感謝の言葉は同時に発せられるケースが多く、本調査では 14 例が見られる。他にも終了連鎖において同時に発せられる機能では順に、誘い、願望、謝罪が多く見られた。

【E-1】イベント終了連鎖における挨拶バリエーションと感謝と願望

イベント終了連鎖の挨拶には、三つのバリエーションが見られた。また、終了連鎖挨拶と同時に多くの場面において、感謝と願望も同時に見られる。

（1）配慮的な終了挨拶

配慮的な終了連鎖とは、終了部の挨拶をする際に自分の終了挨拶が相手に負担をかけてしまっていることを述べるものである。そこで、このような終了連鎖の挨拶は相手に対する配慮と読み取れることから、本稿ではこれを「配慮的な終了部挨拶」と呼ぶ。あるいは、相手に配慮することを目的として相手から許可を得て場面の会話を終了させるといった行動が挙げられる。このタイプの挨拶は、儀礼的フレームを作る役割が大きく、儀礼的な終了連鎖の開始合図であるとも認識可能である。

（2）連鎖が表出されない終了連鎖挨拶

このタイプの挨拶は、挨拶の終了連鎖が一通り終わってから次の最終挨拶に入るものを示す。これは特に初対面の者同士で見られる傾向があり、最終連鎖挨拶は長くなく、二つ、あるいは三つの発話(ターン)で終了する。こうしたやりとりは長い付き合いのある発話者同士

の会話に見られるが、発話者の一方から応答がないことで完全に会話が終了する時にも現れる。

（3）連鎖と追加的儀礼が表出される終了挨拶に伴う感謝と願望

このタイプの終了連鎖挨拶は最も多く見られたタイプである。終了連鎖挨拶のフレームでは、感謝や相手に対する願望を発話することで、儀礼的な終了部挨拶が拡張される。連鎖が見られる終了挨拶の特徴としては、追加的儀礼発話機能が多く見られる。特にこれまで親しい関係でいたか、今後もその関係が続くことを期待している人々の会話(会話 37 など）でより多く見られた。また、終了連鎖で産出される願望は、ほとんどの場合相手の健康を祈る、あるいは相手への思い遣りを強調する発話として見られることから、特に応答は期待されない。

【E-2】イベント終了連鎖における謝罪と誘い

スピーチ・イベントの終了連鎖のフレーム内を考察すると、ホスト側がゲスト側より儀礼的行動をする傾向が見られた。このタイプの謝罪は、ホスト側からゲストに「わざわざ足を運んでくれてすみません」と謝罪をするものである。また、終了連鎖における儀礼的誘いも、ホスト側から「またいらっしゃって下さい」など追加的な儀礼を付け加えた誘いを述べる(こうした事例は 8 件見られた）ものである。

以下では、本研究の対象の中で最も場面を儀礼的フレームにする役割を持ち、儀礼性が高い開始部・主要部・終了部の挨拶から、それぞれ一例ずつ見る。

まず開始部の挨拶については「①連鎖と追加的儀礼が表出される同時に感謝も見られる挨拶」例である会話 29 の事例 180 を検討する。

【会話 29-事例 180】初対面者同士と長期的関係をもつ者同士の連鎖中の挨拶と感謝

事例	ライン番号	話者	発　話　内　容	基本的発話機能	追加的発話機能
180	50	IR(01)	Salaam hale shoma chetore。 こんにちは、お元気ですか。	挨拶	
	51	IR(67)	salam,ghorbane shomah。 こんにちは、ありがとうございます。	挨拶＋感謝	
	52	IR(01)	≤Salam,shoma khubin?>{<}。 〈こんにちは、あなたは元気?〉{〈}。	挨拶	
	53	IR(67)	<Salamalekom>{>}[**キスとハグ**]。 〈こんにちは〉{〉}[キスとハグ]。	挨拶	感情提示
	54	IR(01)	*Moshtaghe didaar* 。 *お会いしたかった～*。		感情提示
	55	IR(67)	*Be hamchenin* 。 *私もです*。		応答
	56	IR(02)	≤Salaam>{<}。 〈こんにちは〉{〈}。	挨拶	
	57	IR(67)	≤Salaam>{>}。 〈こんにちは〉{〉}。	挨拶	
	58	IR(67)	Hale shoma khub hastid?。 おからだのほうはお元気ですか。	挨拶	
	59	IR(01)	<「IR(02)」dokhtaram hastesh>{<}。 〈「IR(02)」私の娘です〉{〈}。		
	60	IR(02)	<「IR(02)」hastam>{>}。 〈「IR(02)」です〉{〉}。		
	61	IR(67)	*Salam,kheili khoshbakhtam* 。 *こんにちは、お会いできて幸せです。*	挨拶	感情提示
	62	IR(02)	*Be hamchenin mercii* 。 *私もです、ありがとう。*	感謝	応答

この事例は、開始部挨拶の儀礼的フレームが作られてからのインターアクションである。以前から知り合いであった IR(01)と IR(67)と、初対面者同士である IR(02)と IR(67)の二通りの関係を含む挨拶連鎖が見られる。

事例の発話数から考慮できるように、以前に一度会ったことのある IR(01) と IR(67)の挨拶連鎖の長さと健康を尋ねる発話、そして IR(01)の娘である IR(02)と IR(67)の挨拶の連鎖の長さから、二つのグループにおいての関係性の相異が確認できる。発話番号 53 では、IR(01)と IR(67)の間に儀礼的な非言語[28]行動のハグと頬へのキスが観察されたものの、IR(02)と IR(67)の間では非言語的な儀礼的行動は見られない。ここでは、追加的な儀礼行為として感情提示がいくつかの発話で観察された(発話 53, 発話 54,発話 67)。IR(01)が発話 IR(67)に「お会いしたかった～(Moshtaghe didar)」と挨拶で感情を提示するのに対し、IR(67)は「私もです（Be hamchenin）」(発話 55）と儀礼的に応答をしている。しかしここでは、初対面者同士の間でも「お会いできて幸せです(Kheili

[28] 5 章の表 5－15 に挙げた非言語的な儀礼的行動の挨拶タイプを参照。

khoshbakhtam)」という儀礼的な感情提示が見られた。

次に主要連鎖部での挨拶においては、会話 18 の事例 55 を紹介する。

以下の事例 55 では、スピーチ・イベント内の主要連鎖において、ホストで年上である IR(31) からゲストの IR(07)に対する、健康具合についての儀礼的な問いと褒めが観察できる。この挨拶と褒めが終了した後に本題が展開している。他にも 16 件のスピーチ・イベントにおいて、こうした事例に類似した挨拶が確認された。

【会話 18-事例 55】スピーチ・イベント内の主要連鎖で表出される挨拶と褒め

事例	ライン番号	話者	発　話　内　容	基本的発話機能	追加的発話機能
55	62	IR(31)	***【間】Khob chetor <hastin>{<}。*** ***【間】さ～お元気〈ですか〉{〈}。***	挨拶	配慮＋感情提示
	63	IR(07)	***<Mamnuun>{>}, Shoma khubin, Enshallah ?。*** ***〈ありがとうございます〉{〉}, あなたはお元気ですか ?。***	感謝＋挨拶	配慮＋感情提示＋応答
	64	IR(31)	***〈Rangorutan ke hezar 〉{〉} Mashallah。*** ***〈顔色はとてもよく〉{〉}素晴らしく見えますけど。***	褒め	配慮
	65	IR(02)	Eha**〈少し笑〉**。 えへは〈少し笑〉。		
	66	IR(31)	***Bezanidm be takhte〈笑〉。*** ***悪い目にかからないようにしないとね〈笑〉。***		配慮
	67	IR(31)	***Alhamdolleh,za<heran ke bad nis> {〈}„*** ***神に感謝ですね、〈お元気なように見えます〉{〈}„***		配慮
	68	IR(02)	***〈Khoda ro shokr〉{〉}。*** ***〈神に感謝です〉{〉}。***		応答

会話の中で間が確認された後に、IR(31) が唐突に「さ～お元気ですか（Khob chetor hatsin?）」と健康について尋ねることで、儀礼的なフレームを開始する(ターロフのインターアクションの開始である)。それに対し IR(07)は応答し、相手に配慮するかのように、同じく健康について尋ねる。そこで IR(31)は、自分が元気であるかについては何も述べないがその代りに、年下でゲストである IR(07)に配慮するかのように、「顔色はとてもよく素晴らしく見える」と褒めを開始している。IR(02)は褒めに対して何も儀礼的な応答は返さず、引き続き IR(31) からの配慮を含む発話を受ける(発話 67 と発話 68）。

最後に、イベント終了連鎖における挨拶を見る。その中から「(3)連鎖と追加儀礼が表出される終了挨拶に伴う感謝と願望」の事例を検討する。事例 143 は、終了部挨拶に感謝と願望が同時に現れた事例となる。このスピーチ・イベントでは、ある企画を主催した IR(89)が、そのフェスティバルに参加した知り合いの IR(02)と初対面であった IR(88)に終了連鎖にあたる挨拶をして

いる。

【会話 37-事例 143】友人同士があるフェスティバルに参加し主催者に終了部挨拶をする場面

事例	ライン番号	話者	発　話　内　容(日)	基本的発話機能	追加的発話機能
143	42	IR(89)	*Khoshhal Shodaam,Movazebe khodet bash［↑］。* *嬉しかったです,お気を付けて下さい［↑］。*		感情提示
	43	IR(88)	Kheili Mohabatt Kardin。 とてもご親切にありがとうございました。	**感謝**	
	44	IR(89)	Arzi Nist？, *Hatman Movazebe Khodetun Bashid,Kheili Khoshhal Shodam Didametun* 。 他に何かないでしょうか？, *どうぞお気を付けて下さい、お会いできてとても嬉しかったです。*	**挨拶**	感情提示
	45	IR(02)	*Behamchenin* 。 *同じく[嬉しかったです]。*		応答
	46	IR(88)	*Shoma Ham Hamintor Azizam*。 *ダーリンあなたもです「気を付けて]。*	挨拶	感情提示+応答
	47	IR(89)	Enshallah,Lezzat bebarid az in bazar,Hava ham kheili Khube。 このフェスティバルで楽しめますように、お天気もとても良いし。	**願望**	
	48	IR(02)	Merci。 ありがとうございます。	**感謝**	
	49	IR(89)	*Khahesh mikonam*。 *どういたしまして。*		応答
	50	IR(88)	Ghorbane Shoma。 ありがとうございます。	**感謝**	
	51	IR(89)	Khoda Negahdar。 さようなら。	**挨拶**	

終了連鎖のフレームに入ったのは、IR(89)が発話 42 で「嬉しかったです、お気を付けて下さい［↑］(Khoshhal shodam,mavazebe khodetun bashi［↑］)」と発言してからであると考えられる。この発話では、感情提示として非言語行動である高いピッチが見られた。その発話に対し IR(88)から「とてもご親切にありがとうございました(Kheili mohabbat karidn)」と感謝機能が産出された。発話 44 においては、IR(89)が配慮的な挨拶であるとも考えられる「他に何かないでしょうか・・(Arzinist?)」という発話が相手に別れを告げる合図を示していることが観察できる。ここでは、すぐに「さようなら」とは述べずに、まずは配慮してから次の段階に入ることを試みている。続いて、同じ発話 44 の中でで「どうぞお気を付けて下さい、お会いできとても嬉しかった」などと相手への儀礼的な感情提示も追加している。IR(02)は短く「同じく(Behamchenin)」と応答を返す。また、IR(88) も IR(89)を「ダーリン」と呼んで追加的儀礼の感情提示を行い、「あなたもです(Shoma ham hamintor)」と挨拶をす

る。最後に IR(89)からは「フェスティバルで楽しめますように(Enshallah lezat bebarid az in bazar)・・」と相手を思い遣る願望を述べてから、終了連鎖は挨拶と感謝で終わる。

5.1.3.3　母語場面における儀礼的発話ペアによる儀礼的行動とその他

儀礼的発話ペアによる儀礼的行動とは、スピーチ・イベント内の連鎖の箇所に関係なく発話ペアの第一発話が確認された場合に、相手の発話者が儀礼的なペアを完成させるためにその第二発話を述べるものである。儀礼的発話ペアが完成することで、相互行為において儀礼的行動が順調に進んでいると見なすことができる。ここに言う発話ペアは必ずしも隣接ペアの特徴を持つとは限らない。儀礼的発話ペアの産出される儀礼的なフレームは短いが、いくつかの発話連鎖中において作られる。

【表 5－10】儀礼的発話ペアの第二成分として表出される儀礼的発話機能のタイプ

機能	隣接ペアの第二成分としての儀礼的行動	追加的機能の有無	発話連鎖の有無	事例数	会話番号
感謝	(1)褒めに対する感謝	あり	あり	5	(1)(16)(23)(37)
	(2)提供に対する感謝	なし/あり	あり	24	(1)(4)(22)(25)(21)(2)(12)(14)(15)(16)(18)(20)(24)(31)(32)(36)
	(3)願望に対する感謝	なし	なし	3	(9)(28)
	(4)「感情提示」に対する感謝	なし	あり	7	(11)(16)(17)(35)
	(5)誘いに対する感謝	あり	あり	2	(15)
提供	(7)褒めに対する提供	なし	あり	2	(20)
	(6)提供に対する提供	あり	なし	4	(27)(18)(32)
申し出	(8)提供した側に対する申し出	あり	あり	5	(2)(12)(18)(20)(24)
願望	(9)相手からの親切さや配慮に対する願望	なし	なし	3	(28)(20)(37)
	(10)健康を尋ねる言葉に対する挨拶と同時に願望が表出	なし	なし	9	(1)(4)(25)(15)(18)(35)(36)(2)
褒め	(11)相手領域から提供されたものに対する褒め	あり	あり	19	(12)(14)(20)(23)(24)(31)(32)
	(12)相手の配慮に対する褒め	あり	あり	1	(18)

【表 5－10】では、ペルシア語母語話者が儀礼的発話ペアの第二発話として使用していた基本的儀礼発話機能が明らかになっている。

第二発話として最もよく現れているものが、感謝(42 事例)である。感謝に対する第一発話では、褒め、提供、願望、感情提示、誘いが発話されている。それに続いて多く見られる提供が第二成分である発話には、第一成分に褒め、そして提供が現れている。また提供が第一成分に見られた場合、儀礼的行動として第二成分に申し出が産出されたものもある(5 事

例）。願望が第二成分になるタイプには二つある。ひとつは、第一成分で配慮的な行動を示す発話が現れており、健康を尋ねる挨拶言葉に対して願望を述べるという儀礼的ストラテジー行動である。もうひとつは、健康を尋ねる挨拶言葉に対する願望である。最後に、褒めは二通りの状況で出現することが明らかとなった(20 事例）。

【F-1】儀礼的発話ペアの第二発話における感謝

(1)　褒めに対する感謝

相手を直接褒めるだけではなく、相手を花や太陽など何か事物にたとえて褒める。それに対して、相手が感謝をする事例がいくつか観察された。このタイプの隣接ペアは、年上から年下に対して発話される場合が多い。

(2)　提供と申し出に対する感謝と褒め

ここでは、提供が第一発話として見られた場合に感謝と褒めが第二発話として現れるパターンがある。まず、提供に対する感謝では、提供されたものをすぐに受け取って感謝をする場合と、すぐには受け取らずに遠慮する場合の 2 タイプがある。感謝しつつも遠慮する場合においては、儀礼的な発話連鎖が見られる。提供に対する感謝のタイプでは、場面参加者が複数いる場合、一人の発話者が感謝を述べた後で他の発話者からも感謝の連鎖が開始される。また提供に対する褒めでは、提供した相手のフェイスを保つため提供されたものに対して大げさなリアクションを見せる。

(3)　願望に対する感謝

儀礼的な願望においては必ずしも感謝が見られるわけではないが、願望の主体が年上であり、特に願望についての発話が強調された場合に、願望に対して感謝が見られた。

(4)　感情提示に対する感謝

ある基本的儀礼発話機能と同時に感情提示が発話された場合において感謝はあまり見られないものの、感情提示がひとつの発話で追加的に産出されなかった場合には相手からの感謝が観察される。

(5)　誘いに対する感謝

2 つの事例において、儀礼的フレーム内の誘いの連鎖の中で感謝が第二発話として産出された。儀礼的なやり取りとしては、誘われた側は一度拒否をする行動が見られる。もし誘いが儀礼的なものではなく実質的なものであれば、日程を指定することによって、会話が儀礼的なフレームから実質的な誘いのフレームに変更される。

【F-2】儀礼的発話ペアの第二発話における提供

(1)　褒めに対する提供

ペルシア語母語話者には、相手領域に関わるもの(食べ物や品物）を褒めた場合、褒められた側が自分の物を提供するという儀礼的な行動が見られる。

(2)　提供に対する提供

このタイプの第二発話は、提供した側に同等の物を提供する儀礼的行動である。例えば、インターアクションにおいて年上の者が食べ物を提供した際に、提供された年下の者が相手に同じく食べ物を提供する行為を指す。

日本語母語話者の儀礼的な社会規範にも同様の儀礼的発話ペアがある。例えば、宴会の席である人がビールなど飲み物を注いだ際に、それを受けた側も相手に同じく飲み物を注ぐといったやりとりに近いと考えられる。

【F-3】儀礼的発話ペアの第二発話における申し出

(1)　提供に対する申し出

申し出が第二発話として産出した事例は、第一発話が提供である場合のみであった。提供に対する提供と同じくこのタイプにおいても、提供する側が年上や年配である場合、第二発話では提供された側が返礼として申し出をする。

【F-4】儀礼的発話ペアの第二発話における願望

願望が儀礼的発話ペアの第二発話として産出される時、そこには大きく 2 つのパターンが見られた。

(1)　相手からの親切さや配慮に対する願望

相手から自分のために何か配慮的な行動や発話が表れた際、ある種の願望が第二発話において見られた。例えば、第一発話で相手の座っている場所が心地悪いことに配慮する(会話 20）または、相手に対して何か配慮する言葉を述べる(会話 37）といった内容が見られる場合を指す。このような言語行動に対して受け手は、相手あるいは相手領域のために何かを願う発話を産出する。

(2)　健康を尋ねる言葉に対する挨拶と同時に出現する願望

この種類の願望はこれまでも多くの事例で観察されている。特に、開始連鎖でよく現れ、「元気か？」などの健康を尋ねる問いに対しその応答として「健康でいて下さい」や「はい、健康でいらっしゃって下さい」と相手の配慮に儀礼的に応答するやりとりが多い。

【F-5】儀礼的発話ペアの第二発話における褒め

第二発話として産出される褒めは、大きく次の二つのタイプが存在することが見て取れる。

(1)　相手領域から提供されたものに対する褒め

産出された事例から判断すると、私的な場面において幅広く使われる傾向があり、比較的多く使われる儀礼的ストラテジー(19 事例)であると言える。

(2)　相手の配慮に対する褒め

このタイプの褒めは、本研究では一例のみ見られた。場面の参加者が配慮的な行動をした際に見られる。

以下では、儀礼的発話ペアが確認された多くの事例から最も出現する傾向が高かった三つのタイプの事例を紹介する。最初の事例では、「**【F-1】(1)　褒めに対する感謝**」から会話 37 の事例 140 を紹介する。

以下の事例は、相手の発話者を直接褒めるのみではなく、相手の発話者を花や太陽など何か事物にたとえて褒めるものである。それに対して、相手が感謝をする事例がいくつか観察された。このタイプの儀礼的発話は、年上から年下に対して産出される場合が多い。以下の事例は、年上である IR(89)から IR(02)に対して褒めが表出された事例である。

【会話 37-事例 140】相手の発話者を太陽にたとえる

事例	ライン番号	話者	発　話　内　容	基本的発話機能	追加的発話機能
140	13	IR(02)	〈Hatman〉{〉}Merci。' 〈もちろん〉{〉}ありがとうございます。	感謝	
	14	IR(89)	Bezar,Aftab dar biyaad。 '太陽のような顔を見せてちょうだい。	褒め	感情提示
	15	IR(02)	Baale，Kheili mamanun〈笑〉，*Khaste nabashid Ba barnamehatun*。 'はいい、ありがとうございます〈笑〉，*プログラムお疲れ様です*。	**感謝**	配慮
	16	IR(89)	Merci,Mamnunam([↑]，*Inghadr Ghza dashtim inja*。 'どうも、ありがとう[↑]，*ここ全部料理だったのよ*。	**感謝**	感情提示

IR(89)は発話 14 で「太陽のような顔を見せてちょうだい」と IR(02)を太陽にたとえ、最近あまり見かけないから、太陽のようなあなたをもう少し見たい(出させてちょうだい）と述べている。その儀礼的な褒めに対して IR(02)は、第二発話で「はいい、ありがとうございます・・」と自分が太陽にたとえられたのが面白かったためか、微笑みながら感謝をする。

次は、第二発話に見られる提供の事例から、「**【F-2】(1)　褒めに対する提供**」を検討する。

事例 67 では、提供された茶を褒めるが、褒められた側がまた褒められた対象物を提供するといった発話連鎖が見られた。

【会話 20－事例 67】親戚から提供された茶が褒められ、また提供が行われる連鎖

事例	ライン番号	話者	発　話　内　容	基本的発話機能	追加的発話機能
67	1	IR（01）	chon chaish chai haye khubiye。 すごくお茶が良い質だったから…。	褒め	
	2	IR(05)	Kheili atre <khubi dare>｛<｝„ すごく良い<香りがありますね>｛<｝„	褒め	
	3	IR(13)	<Pas hamin bara〉｛>}Shoma。 <じゃ、これどうぞ〉｛>}あなたたちのために。	提供	
	4	IR（01）	*「IR(13)」，Man＜Daram＞｛<｝［↑］„* *「IR(13)」，私＜あります＞｛<｝［↑］„*		応答
	5	IR(05)	*〈Na baba〉｛〉｝。* *〈いやいや！〉｛〉｝。*		応答
	6	IR（01）	*Akhe un dare miyad hey godfte <chi mikhai>{<},,* *だって、彼女来るから＜何が欲しいかって>{<},,*		応答
	7	IR(05)	<「IR(13)」>{>}。		
	8	IR(13)	Ha?。 うん?。		
	9	IR（01）	*Un gofte chi biyaram,man goftam chai* *何が欲しいか聞かれたから,お茶が良いって言ったんですよ。*		応答
	10	IR(05)	*Gofte biyaram,goftim are biya<Ha>*。 *持ってこようかって,うん、持ってきて<てだから>r*。		応答
	11	IR（01）	Chon goftim in chai haye khubiye。 だって、いいお茶だからそっちのは。		
	12	IR(13)	Daste shoma dard nakone,akhe ina kheili ziyadiye=【【。 ありがとうございます,でも、これは多いですよ=【【。	感謝	感情提示
	13	IR(02)	*】】=Naa,baba ghabele shoma ro nadare<Na>,<Na>[皆同時で]　。* *】】=ぜんぜん、そんな貴方の価値に比べれば<いいえ>,<いいえ>[皆同時で]　。*		謙遜＋応答

会話 20 の事例 67 のスピーチ・イベントは、ゲストである IR(01)、IR(02)と IR(05)に提供されたお茶を IR(13)が褒めるところから儀礼的フレームが開始する。「すごくお茶がいい品質だから」（発話 1)、「すごくいい香りがしますね」(発話 2)と美味しいという内容の発言をするのに重ねて、次の発話 3 では、IR(13)が「じゃ、これどうぞあなたたちのために」と茶のパックをすべて渡そうとする。それに対し、発話 4 から発話 11 まで IR(01)と IR(05)は受け取れない理由を必死に説明する(遠慮する)。この説明をあまり聞いていないかのように、発話 12 から IR(13)はゲストの IR(01)と IR(05)と IR(02) から頂いた手土産が多いと新たな儀礼的フレームを開始する。その新しい儀礼的フレームにも IR(02)が発話 13 で謙遜する内容の応答をする。ペルシア語母語話者は、ひとつの儀礼的フレームが終了していなくても、新たな儀礼的フレームを開始する傾向があると考察できる。

母語場面からの最後の事例として検討するのは、ターロフの典型的な事例である。それは、第二発話で「【F-5】(2)　相手の配慮に対する褒め」が見られるパターンである。

このタイプの褒めは、場面の参加者が配慮的な行動をした際に見られる。このような行動が見られる事例として、会話 18 のパーティー場面での儀礼的な相互行為が挙げられる(事例 64)。

【会話 18-事例 64】IR(02)から年配である IR(13)に対する配慮

事例	ライン番号	話者	発　話　内　容	基本的発話機能	追加的発話機能
64	170	IR(02)	*Akhe unjuri poshtam be shomas 。* *え～これじゃ、背中が皆さんに向いちゃう。*		配慮
	171	IR(13)	*Eb nadare , Gol poshte ru nadare =【。* *問題ないですよ、お花は前後でも変わらないから=【。*	褒め	感情提示＋配慮
	172	IR(02)	*】=Khash,Mikonam「IR（13）」jan 。* *】=いやいや～「IR（13）」ちゃん。*		応答
	173	IR(13)	*Gol poshte ru nadare 。* *お花は前後でも変わらないから。*	褒め	感情提示＋配慮
	174	IR(02)	*Salamat Bashid[↓]。* *ありがとうございます[↓]。*	感謝	応答
	175	IR(13)	Hamino yekam bekeshid,Aaa。 これだけほんの少しすみません,あああ。		

IR(02)の座る場所が他の参加者に対して背を向ける位置になるため、発話 170 で IR(02)が「背中が皆さんに向いちゃう（poshtam be shoma mishe）」と気を遣う儀礼的な発話を産出している。ペルシア語母語話者の社会文化規範では、誰かに背を向けて座ることは本来失礼にあたる。しかしこのパーティーの会場では、座席配置の都合でやむを得ず他人に対して背を向けなければならないため、IR(02)はこうした配慮的な表現を用いている。この配慮に対して、IR(13)は発話 171 にて、「お花は前後でも変わらないから」と、お世辞と捉えられようとも IR(02)を花に例え、彼女が背中を向けて座っても全く構わないことを告げている。

【その他】

この項では、上記で扱わなかった基本的儀礼発話機能以外の追加的発話機能に焦点をあてている。中でも最も多く見られた儀礼的な追加的儀礼の発話パターンを【表 5－11】に列挙する。

【表 5－11】追加的発話行為のみ表出される儀礼タイプ

機能	基本的発話機能のみ	発話連鎖の有無	事例数	会話番号
感情提示	(1)**相手への呼称の強調で儀礼を強調**	なし	9	(22)(3)(28)(21)(12)(14)(20)
	(2)**相手領域への興味や関心により儀礼を強調**	あり/なし	28	(7)(8)(9)(11)(5)(28)(2)(5)(12)(15)(18)(23)(32)(33)(34)(35)(36)(36)
配慮＋謙遜	(3)「謙遜」と「配慮」の同時表出で儀礼を提示	あり	5	(22)(9)(28)(2)
配慮	(4)相手の状況を心地よくする心遣いで表出される儀	あり	4	(9)(10)(16)(32)
	(5)「配慮」の表出で相手への負担を減少させる儀礼	あり	7	(25)(13)(16)(18)(36)(28)

儀礼的な感情提示の定義にはいくつかの感情提示方法があった。感情提示の中から特にペルシア語母語話者が儀礼的なインターアクションを起こすために使用するものとして、二つのパターンが見られた。また、観察された五つの事例に関しては、発話者が配慮と謙遜を同時にひとつの発話で産出していた。また、配慮的な追加的儀礼もペルシア語母語話者が多く使用する儀礼的ストラテジー行動のひとつのパターンであった。

【G-1】感情提示のみ表出

(1)　相手への呼称の使用により儀礼を強調

儀礼的なフレームとして定義づけられるスピーチ・イベント内においては、必ずしも基本的儀礼発話機能が全ての発話中で見られるとは限らない。特に、公的な場面や初対面者同士の場面においては、相手を呼ぶ際に儀礼的な行動として、「ドクター」、「ダーリン」、「愛しい人」、「ミス」、「ミスター」、「可愛い妹」、「可愛い子ちゃん」、「博士」などと多くの呼称表現を使っていることが分かった。儀礼的な呼称表現を使用する利点としては、長々と儀礼的な連鎖を続ける必要もなく、儀礼的呼称表現を使用すること自体が相手に対する感情提示であり、場面の儀礼度を向上させられることが挙げられる。

(2)　相手領域への興味や関心により儀礼を強調

ペルシア語母語話者の儀礼的な発話を見ると、相手、あるいは相手領域に対して興味を示すことがひとつの儀礼的行動の重要なストラテジーになっていると考えられる。このパターンの発話は、関係が親しく親密な人との会話ほど多く産出される。親しい間柄であるからこ

そ、儀礼的連鎖の中で堅苦しい内容の発話ではなく、相手に対する思いを「会いたい」、「光栄です」あるいは「お会いできてうれしい」、「ようこそ来てくれました」、「召し上がれ」などと相手への思い遣りを示す発話を産出し、なおかつこれらの内容を連鎖的に述べるという特徴がある。

【G-2】配慮と謙遜のみが同時に表出

配慮と謙遜が同時に同じ発話内で見られた場合、その発話は二つの役割を同時に果たしているということになる。このような発話は、友人同士の食事中におけるスピーチ・イベントでよく見られた。

【G-3】配慮のみ表出

配慮は、対人コミュニケーションにおいて相手との人間関係をなるべく良好に保つことに配慮して用いられる言語表現であることから、様々な定型的表現が存在する。これらの配慮的発話を産出することは、相手との関係の構築を目的としたものである。

【G-4】周辺言語および非言語行動の表出

挨拶連鎖において多く見られた周辺言語と非言語的な儀礼行動については、下記の【表 5－13】のようにまとめられる。この両方における儀礼的行動は、相手に対する儀礼を強調する機能を持つと推測できる。例えば、何の特徴も持たせず「お元気ですか？」と挨拶するのではなく、「お元気ですか［↑］」と語尾のイントネーションを上げることで、相手に対する興味、そして儀礼を強調することができる。または、語尾の最後を伸ばすという調整もありうる。本研究は本来音声のみのデータを資料としているためデータには記録されていないが、発話の内容からスピーチ・イベントの開始連鎖あるいは終了連鎖で儀礼的行動として、

キスあるいはハグが行われたと推測できる事例がいくつか見られる。これに関する事例の紹介は省略する。以下の【表 5－12】は、非言語行動が見られた会話番号と事例の数を示す。

【表 5－12】非言語行動で儀礼を産出するタイプ

機能	非言語的行動	追加的機能の有無	発話連鎖の有無	事例数	会話番号
挨拶	(1)周辺言語が表れる挨拶	あり	なし	12	(4)(7)(9)(10)(11)(26)(25)(28)(16)
	(2)非言語的な儀礼的行動が表出される挨拶	なし	なし	2	(29)(13)

5.1.4　母語場面における考察

5.1 節では、ペルシア語母語話者の自然会話における儀礼の産出の実態を考察した。従来の研究は、ターロフがどのような場面で最も使用されるかを観察し、またその定義を論じるものであった。しかし、それらの場面でどのような機能がどれほど見られるのかは明らかにされてこなかった。また、フィールド調査で儀礼が実際に起きている場面を扱った研究は存在しない。今回の母語場面における研究の分析結果からは従来の研究結果には見られない、新たな視点が明確となった。つまり、Beeman(1986）が述べた、ペルシア語母語話者の儀礼を示す根本的な思想である Self-Lowering と Other-Raising が実際にスピーチ・イベントの中で多く見られることが明らかとなった。更に本研究の結果は、儀礼的行動が発話連鎖において、どこで、誰に対してどういった状況下で見られるのかも明らかにした。量的分析そして質的分析を通して、基本的、そして追加的儀礼発話機能を大きく三つの視点から考察した。主にこの三つの視点に注目することで、ペルシア語母語話者の儀礼的言語行動のタイプを分析することができるためである。会話の中において発話連鎖の長さは、会話参加者同士の関係とペルシア語母語話者同士でターロフが順調に進行しているかどうかに影響を受けていることが明らかとなった。

【A】 【量的分析からのまとめ】

量的分析の結果から、本論はマクロな視点からペルシア語母語話者の儀礼的な発話機能の使用実態を明らかにした。5.1 節の考察結果から、ペルシア語母語話者が日本語母語話者と

の接触場面においても同様の場面、あるいは人間関係において儀礼を何らかの形で表示する傾向があることが推測できる。5.1.1 節と 5.1.2 節をまとめると、以下のことが考察できる。

（1）基本的儀礼発話機能の表出頻度から

会話の開始、あるいは終了部で必ず現れる挨拶の使用頻度が最も高かったことが明らかとなった。挨拶は、渡辺(1977）の定義でも述べられているように、人間が他人との間に親和的な社会関係を設定する、あるいは維持強化するための社交・儀礼的な行動であることから、儀礼形式の第一歩、そして相手への第一印象として重要な役割を果たしていることが予想される。そのため、挨拶はほぼ全ての場面で何らかの形で表示されている。挨拶の頻度が下がる、あるいは見られなかった場面は、当事者の関係性が初対面である場合が多い。次に使用頻度が高かった感謝では、その定義からも読み取れるように、「人間関係の維持や構築に直接的にかかわる」(Austin 1962）言語行動が見られた。礼儀正しさと社会的雰囲気を維持する目的を持つ感謝(Leech 1983）は、95%以上の場面で産出されていたことから、接触場面においても多く見られる傾向が期待される。

次に使用頻度が高かった提供、願望、褒め、誘いについては、ペルシア語母語話者は儀礼的場面において相手に何かの権利を与える、相手を讃える傾向が強いことが明らかとなった。しかしこれらの基本的発話機能に関しては、場面による出現のばらつきが見られた。特に公的な場面に関しては、誘いや申し出は一度も産出されていない。以上を踏まえ、ペルシア語母語話者は、親戚あるいは友人といった長期的な付き合いを持っている、なおかつ私的な場面での方がより儀礼を産出する傾向があることが明らかとなった。あるいは、相手の発話者との今後の関係性が期待される場面(会話 1）でも儀礼がより見られる傾向がある。

（2）追加的儀礼発話機能の表出頻度から

追加的儀礼発話機能では、感情提示、応答、配慮、謙遜の順で表出頻度が高い。特に、相手に対して、感情を示すことで儀礼を提示する、感情提示の出現率は他の三つの追加的機能より大幅に多く、一般的に、私的な場面でも公的な場面でも見られる傾向がある。しかし、

どのような場面で感情提示が儀礼として産出されるのかにより、その種類には相違がある。特に公的な場での感情提示は、周辺言語のような「高調子」や「相手への呼称の使用」といったものが多く見られ、一方、ハグやキスのような非言語的な儀礼的行動は一切見られなかった。また、公的な場面では、相手を呼ぶ際に、儀礼的な呼称(「ドクター」、「ミスター」、「ミス」、「博士」、「先生」、「親愛な人」、「ダーリン」など）を使用する傾向がある。それに対し、私的な場面(親戚や友人関係）での感情提示では、相手に対するポジティブな儀礼(相手や相手領域に対する関心の強調）などが多く見られた。次に表出頻度が高かった応答に関しては、儀礼的言語行動が比較的少なかった公的な場面ではそもそもあまり見られないものの、全場面に対して表出頻度に大きなばらつきは見られなかった。最後に、配慮と謙遜に関しては、会話場面によりその表出頻度に多少のばらつきが見られた。

追加的発話機能に関しては、参加者の関係より場面性が追加発話のタイプや表出頻度に影響していると推測される。場面の改まり度が高くなるにつれ、儀礼的な感情提示から応答、あるいは配慮へといった追加的儀礼の傾向が変化している。このような結果から、ひとつの追加的発話機能の産出が他の追加的機能の表出頻度に影響を与える傾向があると言える。

(3) 基本的儀礼と追加的儀礼発話機能の比較

ひとつの会話場面において、基本的儀礼発話機能と追加的儀礼発話機能が互いに影響を及ぼすのか、あるいはどちらの機能がより多く見られるのかについてはある傾向が見られた。儀礼の表出頻度を範囲のマーク（△〇☆）で表した際、同じ頻度で基本的儀礼発話機能と追加的儀礼発話機能を表出していた場面は、全場面の 59%と、およそ 6 割を占めていた。それ以外の 41%の場面では、基本的儀礼発話機能と追加的儀礼発話機能の表出頻度には相違が見られる。追加儀礼とはその名前にもあるように、場面を儀礼的フレームにするため、基本的儀礼に追加として表れるものである。従って、儀礼を強調する役割を持つことから、相違が見られた場面では追加的儀礼の表出頻度は一般的に基本的儀礼より低かった。そのような場面では、基本的儀礼発話機能の儀礼度が高いと考えられる。公的な場面のように、そもそも追加的発話機能があまり現れないような場面ではそのような差が多く見られる。

【B】【儀礼的発話機能の表出箇所からのまとめ】

（1）場面性と発話機能タイプの関わり

ここで言う場面性とは、インターアクションが起きている場面が私的あるいは公的であるかによって区別されている。研究の概要(3.4 節）でそれぞれの場面においての詳細を記述した。以上の質的分析の結果から、スピーチ・イベントが行われている場面に応じて、儀礼的発話機能が産出されるタイプに以下のような差が見られた。

（1－1）公的場面で表出された儀礼的行動タイプ

A「社会文化行動の前後に見られる儀礼的行動」

社会文化行動の前には、儀礼的発話機能の提供の四つの全バリエーションと謝罪が公的な場面において産出されていた。「客に対して商品を謙遜しながら提供する」タイプの提供と「話題展開の前に表出する謝罪」は公的な場面でのみ見られる。文化行動直後の儀礼的行動は、公的な場面において全く産出されていない。その理由として、文化行動直後のインターアクションは、「食べ物の提供」、「プレゼント提供」、「情報提供」に現れる儀礼的発話機能であるため、そもそもこういった行動が公的な場ではあまり見られないことが原因であると考えられる。

B「イベント内の連鎖から見られる儀礼的行動」

スピーチ・イベント内の発話開始連鎖においては、挨拶のバリエーションでは「連鎖が表出されない挨拶」や、相手の発話者を儀礼的に席に案内するタイプの提供が見られた。これら以外にも、スモール・トークにおける褒めと開始部挨拶での感謝が見られることが分かる。主要連鎖に関しては、会話中間部での挨拶のみが現れた。最後に終了連鎖については、「配慮的な終了挨拶」、「連鎖が表出されないシンプルな終了挨拶」、そして終了部での「願望」が見られた。

C「儀礼的発話ペアによる儀礼的行動」

公的な場面において第二発話に産出されたのは、「儀礼的な褒め(開始連鎖内の褒め）に対する感謝」、「提供(開始連鎖内の提供）に対する感謝」、そして「健康を尋ねる言葉に対する挨拶と同時の願望」である。最後に追加的儀礼発話機能に関しては、相手の発話者の呼称を儀礼的に呼ぶストラテジーのみが見られた。

（1－2）私的場面で表出された儀礼的行動タイプ

私的場面に関しては、二つのタイプを除く全てのタイプが見られた。その二つのタイプとは、店内で店員が客に対し品物を提出する際に見られる儀礼的な提供と、会社の会議内で見られる謝罪のタイプである(いずれも社会文化行動直前の儀礼的フレーム内で現れていた）。以上の結果から、私的場面においては多様な儀礼的発話のタイプが存在することが明らかとなった。また、私的な場面においては、儀礼のバリエーションの多様性が考えられる。特に追加的発話機能に関しては、ほぼ私的な場面のみで見られた。この結果から、ペルシア語母語話者は、身内が多い私的場面ほど儀礼を示す重要性を感じ取っていると言うことができる。

（2）関係と発話機能タイプの関わり

ここで言う関係とは、インターアクションをする状況におかれた二者が初対面同士であるのか、あるいは長期的な付き合いを持っている者同士であるのかといった枠付けである。また、彼らの間の上下関係やいわゆる地位差のみではなく、年上・年下(目立つ年の差）といった年齢差も儀礼的発話機能のタイプに影響を及ぼしていることが、分析の結果から明らかとなった。まず、関係の時間的長さの影響について考察すると、先ほど述べた公的な場面で見られた基本的儀礼発話機能のタイプの使用に関しては、会話参加者同士が初対面同士である可能性が十分高い。しかしその中でもひとつ、儀礼的発話ペアの第二発話として公的な場面で見られた願望」関しては、公的な場面でも長期的な付き合いをもつ者同士のみで見られた。また初対面の者同士でも、医者と患者、パーティー場面において自己紹介された人々など今後の関係の構築が期待される者同士では、褒めや感謝などの発話連鎖が見られている。

また上下関係の影響については、社会文化行動直後に表れる「食事後の願望」はスピーチ・イベント参加者の中でも最も年配の人によって発話されることが明らかになった。開始部連鎖については、褒めが年上の者から年下の者に対して表れた一方で、玄関先にいる相手を家に誘う連鎖は年下の者から年上の者に対して述べられていた。主要連鎖では、褒めは年上の者から年下の者に向けて産出され、それ以外にも「会話中間部の挨拶」も年上の者から年下の者に対して開始されることが多い。その一方で、ホストがゲストに対して述べる謙遜的な謝罪は、年下の者から年上の者に述べられる傾向がある。同じく終了連鎖の「謝罪」も、年下の者から年上の者(ホストからゲスト）に配慮的に述べられる。儀礼的発話ペアのパターンでは、提供に対する申し出や提供は年下の者が提供してくれた年上の者に向けて行われる。最後に年下の者から産出される配慮に関しては、年上の者から褒めが産出されることが分かった。特に多く見られた追加的儀礼のタイプからも、配慮や謙遜的行動は特に年齢や地位が低い者から高い者に対して産出されることが多いことが明らかとなった。

(3) スピーチ・イベントにおける参加者影響

もうひとつ質的分析を通して明らかとなったものは、スピーチ・イベントに参加する者同士の儀礼的な影響である。参加者の数が 2 人以上である場合、ある参加者が儀礼的な行動を開始すると、その場面にいる他の参加者からも同様の儀礼的な発話機能が産出される傾向がある。この傾向はどの儀礼的な発話機能にもあるわけではなく、基本的儀礼発話機能での「提供に対する提供」、「提供に対する褒め」、「提供に対する感謝」そして「提供に対する申し出」に限られたものである。

(4) 儀礼から実質的発話に転移するためのシフター

ペルシア語母語話者の儀礼的場面を困難にするものは、相手が述べている発話が儀礼からのものであるのか、あるいは実質的なものであるのかという疑問である。第 3 章で述べたように、儀礼的発話は儀礼的フレーム内で起こる傾向が高い。一方で、儀礼的フレームがどこで終了するのかも問題である。分析の結果、ひとつの談話マーカーとして「儀礼的シフタ

ー」という、儀礼的な発話から実質的発話に転移するために発せられる語句があることが分かった。儀礼的シフターの事例としては、「Bekhoda ghasam(神に誓った）」、「Ghasam mikhoram(神に誓う）」などが挙げられる。

次節では、複雑な儀礼的行動ストラテジーを持つペルシア語母語話者が、実際に他文化(日本社会)においてどのように儀礼的行動を調整しているのかを明らかにする。

5.2　接触場面における儀礼的発話機能の分析

5.1 節に引き続き、5.2 節においてもペルシア語母語話者の儀礼的行動を「基本的儀礼発話機能」と「追加的儀礼発話機能」の使用頻度と使用位置から、量的、そして事例を通し質的に分析する。本節では、各場面での会話全体において発話機能別に儀礼的な発話文の使用率を集計した。ここでは、一発話を一単位としてカウントしている。

量的分析の利点としては、それぞれの儀礼的発話機能が会話全体においてどれほど使用されているのか､またどのような自然会話の位置において儀礼頻度がより高まるのかといった、二つの視点から考察できることである。

量的分析においては、ペルシア語母語話者のみではなく日本語母語話者の儀礼的行動にも注目する。インターアクションにおいて、両発話者の儀礼的行動の傾向の実態を明らかにする必要性が考えられるためである。それぞれの儀礼的行動が互いにどのように影響しているのか、あるいはどのような特徴があるのかを検討することが重要となる。

5.2.1　接触場面における基本的儀礼発話機能表出頻度

ここでも場面性を大きく「公的な場面」と「私的な場面」に区別した。各場面における会話全体での基本的儀礼発話機能の割合を【表 5－13】に示す。全体の儀礼的発話機能使用のうち、どれほどの割合でペルシア語母語話者、そして日本語母語話者が発話していたのかを明らかにしたものである。

【表 5－13】接触場面において会話全体に見られる基本的儀礼発話機能の表出の割合

分類	調査場面	会話番号	挨拶		感謝		褒め		誘い		提供		依頼		謝罪		願望		申し出		確認		警告		会話全体比率		Total	比較
			PR	JP	PR	JP	PR	JP	PR	JP	PR	JP	PR	JP	PR	JP	PR	JP	PR	JP	PR	JP	PR	JP	PR	JP		
公的場面	スーパー	【会話1】	0%	0%	0%	1%	1%	1%	0%	0%	4%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	1%	0%	0%	0%	0%	0%	6%	3%	9%	PR
		【会話2】	8%	3%	0%	1%	0%	2%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	1%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	8%	7%	16%	PR
		【会話3】	4%	2%	2%	1%	4%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	10%	4%	13%	PR
		【会話27】	2%	0%	10%	4%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	6%	6%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	2%	0%	0%	18%	12%	30%	PR
		【会話28】	0%	0%	19%	6%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	25%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	6%	0%	0%	44%	13%	56%	PR
	レストラン	【会話4】	0%	0%	11%	5%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	16%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	5%	0%	0%	26%	11%	37%	PR
		【会話19】	0%	0%	0%	2%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	6%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	2%	0%	0%	6%	4%	10%	PR
		【会話10】	0%	0%	0%	10%	24%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	24%	10%	33%	PR
		【会話8】	2%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	2%	0%	2%	PR
		【会話5】	11%	2%	2%	0%	0%	0%	2%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	14%	2%	16%	PR
		【会話18】	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%
		【会話6】	5%	3%	1%	0%	1%	0%	0%	0%	0%	0%	4%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	11%	3%	14%	PR
		【会話7】	3%	0%	3%	3%	0%	9%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	6%	12%	18%	JP
	展示会	【会話11】	1%	1%	1%	0%	0%	1%	0%	0%	0%	0%	9%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	12%	3%	14%	PR
	フリーマーケット	【会話21】	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%
		【会話22】	6%	0%	0%	6%	0%	6%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	6%	13%	19%	JP
		【会話23】	0%	0%	3%	3%	3%	8%	3%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	8%	11%	19%	JP
		【会話24】	1%	2%	1%	0%	0%	1%	1%	1%	1%	0%	0%	1%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	5%	5%	10%	Same
		【会話25】	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	3%	3%	0%	10%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	3%	14%	17%	JP
	クリニック	【会話32】	1%	1%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	1%	1%	3%	0%	4%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	3%	10%	13%	JP
		【会話33】	1%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	1%	0%	1%	PR
	チャリティーバザー	【会話14】	10%	0%	3%	2%	2%	2%	7%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	22%	3%	25%	PR
		【会話12】	0%	0%	0%	9%	0%	0%	0%	0%	9%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	9%	9%	18%	Same
		【会話13】	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%
		【会話15】	0%	4%	19%	8%	0%	0%	12%	0%	0%	0%	0%	0%	4%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	35%	12%	46%	PR
	大学内	【会話34】	25%	13%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	13%	0%	38%	13%	50%	PR
		【会話36】	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%
		【会話31】	0%	0%	0%	0%	1%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	1%	0%	3%	0%	3%	PR
		【会話35】	6%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	11%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	17%	0%	17%	PR
		【会話29】	4%	0%	0%	1%	0%	0%	2%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	6%	1%	7%	PR
		【会話30】	3%	2%	4%	1%	0%	2%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	1%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	6%	5%	11%	PR
		【会話26】	1%	1%	1%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	3%	1%	4%	PR
私的場面	近所同士	【会話9】	8%	2%	7%	1%	3%	4%	1%	1%	0%	4%	1%	0%	1%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	21%	12%	33%	PR
	自宅	【会話16】	7%	4%	3%	1%	0%	0%	0%	0%	3%	0%	0%	0%	3%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	15%	5%	20%	PR
		【会話17】	3%	2%	1%	0%	0%	0%	0%	0%	10%	0%	0%	0%	3%	0%	0%	0%	7%	0%	0%	0%	0%	0%	25%	2%	28%	PR
		【会話20】	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	1%	0%	0%	0%	0%	0%	1%	0%	1%	PR
基本的儀礼発話機能のパ			3%	1%	3%	2%	1%	1%	1%	0%	1%	0%	2%	0%	1%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	12%	5%	17%	

はじめに、公的場面と私的場面における基本的儀礼発話機能の全体の割合を考える。まず公的場面では、「スーパー」、「チャリティーバザー」、「展示会」、「レストラン」の順で、ペルシア語母語話者の儀礼的発話の使用頻度が高い傾向にある。いずれも、挨拶や誘いなどの儀礼的発話機能よりも、感謝、依頼、または褒めが儀礼の頻度を上げた理由となっている。一方で、公的場面の内でも「大学内」における儀礼的な言語行動が他の公的場面とは違った傾向を見せていることが分かる。大学内では、長期的な付き合いがある者同士での会話が主となっている。そのため、スーパーやクリニックなどでの会話より、挨拶や誘いといった相手との距離を接近させるような儀礼的発話がより使用されている。それでも大学内の儀礼的発話機能の平均使用は 10.4%ほどであり、会話によっては、儀礼的行動が表出されなかった事例(会話(36)) も見られた。

次に私的場面に注目する。私的場面では、いずれもペルシア語母語話者は日本語母語話者より儀礼的行動を多く取っていた。私的場面では、挨拶、感謝、褒めの順に多く見られる。それに加え、公的場面ではほとんど表出されなかった申し出が、私的場面においては二つの会話(会話(17)、会話(20)) で表れている。私的場面において儀礼的発話機能の使用頻度が上がるのは、ペルシア語母語話者の母語場面に近い傾向があると考えられる。母語場面におけるペルシア語母語話者は、長期的な付き合いであればあるほど儀礼の発話の頻度が高まり、

そのバリエーションも豊富になる。これは、公的な場面でのインターアクションでも見られ、関係が長期的であれば(会話(2)、会話(5)、会話(9)、会話(34))、ペルシア語母語話者の儀礼的な挨拶頻度が高くなっている。

以下において、発話機能ごとの傾向を述べる。

(1) 以上の表を各基本的儀礼発話機能の使用頻度の平均的な割合から考察すると(一番下のパーセンテージポイント)、両発話者によって最も多く使用されている基本的儀礼発話機能が感謝(PR:3%, JP:2%)であることが分かる。それに続き、挨拶(PR:3%, JP:1%)と褒め(PR:1%, JP:1%)の順に多く使用されていた。

(2) 全ての発話機能に関して、確認以外は、ペルシア語母語話者の儀礼的発話機能の使用頻度が日本語母語話者より高い傾向がある。なお、確認と警告は儀礼的な役割を持った機能として、新接触場面での儀礼的フレーム内で新たに見られた。それぞれの産出数を見ると、確認は四つの場面(会話(4)、会話(19)、会話(27)、会話(28))において日本語母語話者のみ、そして警告は二つの場面(会話(31)、会話(34))においてペルシア語母語話者のみが産出している。確認は、日本語母語話者がスーパーやレストランなどで業務を行う場面で、相手に対するインターアクションとして発話する傾向がある。一方、警告に関しては、ペルシア語母語話者が知り合いに対して大学内で使用していることが分かった。

(3) ペルシア語母語話の母語場面では全会話の 54%の場面において産出されていた願望が、接触場面においてはひとつも見られなかった。

(4) ペルシア語母語話者が 58%の場面(21 会話)において儀礼的な挨拶をしているのに対して、日本語母語話者は 38%の場面 14 会話)でのみ儀礼的な挨拶をしている。

(5) 日本語母語話者の感謝や褒めの使用頻度数のいずれもペルシア語母語話者より少ないが、全場面におけるばらつきを考慮に入れると、両発話機能ともペルシア語母語話者より大きい数字が出ている(感謝が見られる会話; PR:47%, JP:50%－褒めが見られる会話; PR:22%, JP:27%)。ここから、感謝と褒めを使用する場面は日本語母語話者の方がわずかに多いことが分かる。

(6) 誘いに関しては、ペルシア語母語話者の場合 19%(7 つ会話)の場面で見られるのに対して、日本語母語話者は 5%2 つの会話)の場面でのみ見られる。

(7) また提供と謝罪の両方に関しては、ペルシア語母語話者が 14%(5 つ会話)の場面で使用しているが、日本語母語話者は提供を 5.5%の場面、そして謝罪を 11%の場面で使用している。

次の節では、ペルシア語母語場面では多く使用されていた追加的儀礼発話機能の割合の比較を行う。

5.2.2　接触場面における追加的儀礼発話機能表出頻度

接触場面においては、追加的儀礼発話機能の表出頻度はそれほど高くないものの会話の1%～2%の割合で使用されている。ここでは、決められた定型表現の使用のみではなく、発話したターンの役割が会話の中で、感情提示、配慮、謙遜そして儀礼的表現に対する応答のいずれかを示すものであれば、追加的儀礼としてカウントする。以下の【表 5－14】では、接触場面において会話全体で見られた産出の割合を示す。そこから、各会話の儀礼的頻度を会話全体の発話における比率を算出した。

【表 5－14】接触場面において会話全体に見られる追加的儀礼発話機能の表出の割合

分類	調査場面	会話番号	関係性と役割	感情提示		配慮		謙遜		応答		会話全体比率		Total	比較 (多いほう)
				PR	JP	PR	JP	PR	JP	PR	JP	PR	JP		
公的場面	スーパー	【会話1】	知り合い:JP↔PR	2.5%	1.3%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	3.8%	2.5%	5.0%	7.5%	JP
		【会話2】	店員:JP,客:PR	1.1%	1.1%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	2.1%	2.1%	3.2%	3.2%	6.3%	Same
		【会話3】	店員:JP,客:PR	0.7%	0.0%	0.0%	0.7%	0.0%	1.5%	0.0%	1.5%	0.7%	3.7%	4.4%	JP
		【会話27】	店員:JP,客:PR	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0
		【会話28】	店員:JP,客:PR	0.0%	0.0%	0.0%	12.5%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	12.5%	12.5%	JP
	レストラン	【会話4】	ウェトレス:JP,客:PR	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0
		【会話19】	ウェトレス:JP,客:PR	0.0%	0.0%	4.1%	2.0%	0.0%	0.0%	0.0%	2.0%	4.1%	4.1%	8.2%	Same
		【会話10】	客:JP,PR,ウェトレス:PR	14.3%	0.0%	4.8%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	19.0%	0.0%	19.0%	PR
		【会話8】	友人:JP↔PR	0.0%	1.9%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	1.9%	0.0%	3.8%	3.8%	JP
		【会話5】	客:JP,オーナー:PR	1.6%	0.0%	1.6%	0.0%	1.6%	1.6%	0.0%	1.6%	4.8%	3.2%	7.9%	PR
		【会話18】	客:JP,PR,オーナー:PR	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0
		【会話6】	客:JP,PRオーナー:PR	1.3%	0.0%	0.0%	1.3%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	1.3%	1.3%	2.5%	Same
		【会話7】	客:JP,ウェートレス:PR	0.0%	5.9%	0.0%	0.0%	2.9%	0.0%	5.9%	0.0%	8.8%	5.9%	14.7%	PR
	展示会	【会話11】	店員:JP,客:PR	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	2.6%	0.0%	0.0%	0.0%	2.6%	0.0%	2.6%	PR
	フリーマーケット	【会話21】	客:JP,店員:PR	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0
		【会話22】	客:JP,店員:PR	0.0%	6.3%	6.3%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	6.3%	6.3%	12.5%	Same
		【会話23】	出店者:JP↔PR	2.8%	5.6%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	5.6%	2.8%	8.3%	8.3%	16.7%	Same
		【会話24】	友人:JP↔PR	2.4%	1.0%	1.0%	0.7%	0.0%	0.0%	0.7%	0.0%	4.1%	1.7%	5.7%	PR
		【会話25】	責任者:JP,出店者:JP,PR	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0
	クリニック	【会話32】	医者:JP,患者:PR	0.0%	0.0%	0.0%	4.2%	0.0%	0.0%	2.8%	0.0%	2.8%	4.2%	7.0%	JP
		【会話33】	医者:JP,患者:PR	0.0%	0.9%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.9%	0.9%	JP
	チャリティーバザー	【会話14】	ゲスト:JP,ホスト:PR	18.6%	6.8%	0.0%	0.0%	1.7%	0.0%	1.7%	3.4%	22.0%	10.2%	32.2%	PR
		【会話12】	参加者:JP↔PR	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	18.2%	0.0%	18.2%	0.0%	18.2%	PR
		【会話13】	参加者:JP↔PR	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0
		【会話15】	参加者:JP↔PR	7.7%	0.0%	3.8%	3.8%	7.7%	11.5%	0.0%	7.7%	19.2%	23.1%	42.3%	JP
	大学内	【会話34】	学友:JP↔PR	0.0%	12.5%	12.5%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	12.5%	12.5%	25.0%	Same
		【会話36】	学友:JP↔PR	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0
		【会話31】	先輩:JP,後輩:PR	1.4%	1.4%	1.4%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	1.4%	2.7%	2.7%	5.5%	Same
		【会話35】	学生:JP, 先生:PR	5.6%	0.0%	0.0%	11.1%	0.0%	0.0%	0.0%	11.1%	5.6%	22.2%	27.8%	JP
		【会話29】	事務職員:JP,学生:PR	1.0%	1.0%	2.0%	0.0%	1.0%	0.0%	0.0%	5.1%	4.1%	6.1%	10.2%	JP
		【会話30】	事務職員:JP,学生:PR	0.0%	0.0%	0.9%	3.5%	0.0%	0.0%	0.0%	1.8%	0.9%	5.3%	6.1%	JP
		【会話26】	学友:JP↔PR	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	1.5%	0.0%	1.5%	0.0%	3.0%	3.0%	JP
私的場面	近所同士	【会話9】	友人:JP↔PR	4.9%	2.1%	7.0%	4.2%	1.4%	1.4%	2.8%	4.2%	16.2%	12.0%	28.2%	PR
	自宅	【会話16】	初対面者同士:JP↔PR	0.0%	1.1%	2.3%	3.4%	1.5%	0.8%	2.3%	2.7%	6.1%	8.0%	14.1%	JP
		【会話17】	初対面者同士:JP↔PR	1.1%	0.0%	11.5%	0.0%	0.0%	1.1%	2.3%	9.2%	14.9%	10.3%	25.3%	PR
		【会話20】	夫:JP,妻:PR	0.0%	0.0%	1.1%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	1.1%	0.0%	1.1%	PR
基本的儀礼発話機能のパーセンテージポイント				1.9%	1.4%	1.7%	1.3%	0.6%	0.5%	1.2%	1.8%	5.3%	5.0%	10.0%	

まず公的場面と私的場面の追加的儀礼発話機能の表出頻度を比較すると、一般的に公的な場面では配慮的発話機能が多く見られる。公的場面では追加的発話機能のタイプに偏りが表れているものの、一方私的場面に関しては多様なタイプが見られる。また、公的場面でも

っとも追加的儀礼が少なかった事例として、展示会での会話が挙げられる。

以下では、追加的儀礼発話の機能ごとに傾向を見る。

(1) 母語場面とは異なり、接触場面では四つの発話機能の表出頻度にそれほどの差が表れていない。ペルシア語母語話者は、母語場面内では会話全体の 20%において儀礼的な感情提示をしていたのに対し、接触場面においてはおよそ 2%と 10 分の 1 になっている。

(2) 接触場面において、圧倒的にペルシア語母語話者の感情提示の表出頻度が下がっていることが指摘できる。そのひとつの理由としては、ペルシア語に存在する豊かな儀礼的表現を日本語で発話できないことが挙げられる。またそれに加え、感情提示は私的で長期的な付き合い場面で多く使用される傾向があることから、公的場面での会話が多い接触場面では、自然にその使用率が下がると考えられる。儀礼的感情提示が見られる 2%の会話(会話(10)、会話(5)、会話(6)、会話(15)、会話(35)、会話(17)）では、ペルシア語母語話者のみが儀礼的な感情提示を行っていた。一方、日本語母語話者のみが感情提示を行っていた場面(会話(8)、会話(7)、会話(22)、会話(33)、会話(34)）もあった。総合的に母語場面と比較した場合、接触場面においても感情提示は私的な場面での方が産出さやすいことが指摘できる(四つの場面中三つ）。

(3) 感情提示とほぼ同じ頻度で見られるのが、配慮的表現である。ペルシア語母語話者はおよそ 4 割の場面、そして日本語母語話者は 3 割の場面で儀礼的な配慮を使用する。場面別に見てみると、例えばスーパーとクリニックの会話では、日本語母語話者のみ(会話(3)、会話(28)、会話(32)、会話(33)）が儀礼的な配慮表現を発話していた。また大学内の会話でも、教員(日本語母語話者）と学生(ペルシア語母語話者）または事務職員(日本語母語話者）と学生(ペルシア語母語話者）の会話では、教員や事務職員側からのみ儀礼的な配慮表現が産出されていた。ペルシア語母語話者側だけが儀礼的な配慮を産出していた場面には、ペルシア語母語話者が店員やウェトレス(会話(5)、会話(10)）、あるいは友人(会話(34)）や妻（会話(20)）であるタイプの事例が多く見られた。

(4) 両発話者の使用頻度が最も少なかった謙遜は、36 場面中 11 の場面(30%）のみしか確認されていない。ペルシア語母語話者のみが謙遜をしていた場面は、彼らがウェトレスまたは客(会話(7)、会話(11)）あるいはホスト(会話(14))という役割が明確であった事例である。近隣住民同士(会話(9)）やレストランのオーナーと客という顔見知り同士（会話(5)）という長期的な付き合いのある関係においては、儀礼的な謙遜が両発話者によって同じ程度の割合で発話されていた。ここから、長期的な付き合いがあればあるほど日本語母語話者からの儀礼度も上がることが分かる。

(5) この項目では、日本語母語話者がペルシア語母語話者より活用していた追加的儀礼発話機能の応答(PR:1.2%, JP:1.8%）について考察する。日本語母語話者の応答の使用頻度が高い理由として、前節で見たような様々基本的儀礼発話機能がペルシア語母語話者によって数多く産出されるため、それに対して儀礼的な応答を日本語母語話者がしているためであると考えられる。それに加え、ペルシア語母語話者が儀礼を示すのに対し、日本語母語話者は儀礼の受け手側の立場である場合が多いことも理由に挙げられる。

(6) 日本語母語話者がペルシア語母語話者より儀礼的な追加的発話機能を使用する場面数の方が、その逆より多いことが分析の結果確認できた。以上の結果から、ペルシア語母語話者の母語場面において儀礼がコミュニケーション規範の重要な鍵を握っているものの、第二言語で発話を行う際その調整(コントロール)が難しいことが推測される。

5.2.3　会話構造における接触場面での儀礼的な発話機能の位置と会話事例

本節では、母語場面において実施した質的分析からペルシア語母語話者の儀礼的行動が多く産出されていることが明らかになった三つの箇所に注目する。「社会文化行動の前後に見られる儀礼的行動」、「スピーチ・イベント内の連鎖から見られる儀礼的行動」、そして「儀礼的発話ペアによる儀礼的行動」は、それぞれ母語場面では重要な儀礼的ポイントであった。接触場面のインターアクションにおいてもこれらの箇所に注目することで、ペルシア語母語話者の母語の転移が表出されやすい場所での儀礼の調整を見ることができる。以下で見ていくのは、ペルシア語母語話者が接触場面内において発話している儀礼的行動である。

5.2.3.1　接触場面における社会文化行動の前後にみられる儀礼的行動

インターアクションにおいて、ある社会文化的な行動が起こる前後には儀礼的行動の調整の可能性が高まる。なぜなら、そこではある行動が産出されようとしているために、互いのフェイスが脅かされる危機に陥ることがあり得るからである。その接触によって起こり得る摩擦を和らげるストラテジーのひとつとして、儀礼的な社会文化行動が考えられる。特に母語場面の考察から、ペルシア語母語話者は多様なストラテジーで社会文化的背景を持つ行動

の前後で儀礼的な行動を取っていることが明らかとなった。以下では、接触場面において、社会文化行動を起こす発話者がその直前と直後にどのような儀礼的行動を起こすのかを考察する。

【Ⅰ「社会文化行動」の直前の儀礼的行動】

ペルシア語母語話者は接触場面において、「飲食する」、「物を提供する」、「料金を支払う・受け取る」、「家に上がる」、「相手に何かを要求する」行動の前に四つの儀礼的発話機能を使用している[29]。以上の五つの行動は、ペルシア語母語話者にとって母語の社会文化的な規範から儀礼的フレームに入りやすい要素である。

以下の【表 5－15】は、各儀礼的発話機能がどの行動の前に産出されたのかを示すものである。

【表 5－15】ペルシア語母語話者の文化行動直前の儀礼的行動

発話機能	儀礼的行動	事例数	会話番号
提供	(1)食べ物や物を相手に提供する	3	(1)(17)
申し出	(2)提供する前段階の申し出	5	(1)(20) (17)(16)
依頼*	(3)料金を支払う・商品を受け取るための依頼	5	(27)(28)
配慮*	(4)家に入る前段階の配慮的挨拶	1	(16)
	(5)相手に何かを要求する	1	(11)

以下では【表 5－15】に挙げられた項目について、ペルシア語母語話者の接触場面での儀礼的な行動を見る。

【A-1】儀礼的提供

社会文化行動直前の儀礼的提供は、ひとつのパターン(会話(1)、会話(17))でのみ見られた。ここでは、ペルシア語母語話者が自ら持っている「食べ物を相手に提供する」という形で現れている。このタイプの提供は、母語場面の食事場面でもよく見られる儀礼的パターンであった。その背景には、自分一人で食べ物を食べる行いは好まれず、その場にいる者にも儀礼的に食べ物を提供するという考えがある。

29 【表 5－16】において(*)で示している儀礼的発話機能に関しては、母語場面では見られなかった新たな儀礼的行動ストラテジーであると判断されたものである。

【A-2】儀礼的申し出

社会文化行動直前に表れる申し出は、儀礼的な提供にとても近い形を取る。この儀礼的な申し出は、相手に何かを提供する前に一度申し出をし、次にその物を提供するというパターン(会話(1)、会話(16)、会話(17)、会話(20)）で見られる。会話(1)、会話(16)、会話(17)に関しては、儀礼的な申し出をする側は、ホストである、あるいは年齢的に年上であることが分かった。一方会話(20)に関しては、ペルシア語母語話者である妻が日本語母語話者の夫に、何か行動を起こす前に儀礼的申し出をする形で見られた。

【A-3】儀礼的依頼

このパターンの儀礼的依頼は、母語場面の会話では産出されなかった。しかし接触場面においては、ペルシア語母語話者が「料金を支払う際」、あるいは「店員から商品を受け取る際」に儀礼的な依頼表現を繰り返し用いている。金銭のやり取りは繊細なインターアクションであるため、文化的に儀礼的な言語行動が期待されるためであると考えられる。一方で、母語場面で使用されていた定型表現が日本語では使えないことから、料金の支払い場面における儀礼的フレーム内で「お願いします」と丁寧に店員に依頼している。

【A-4】儀礼的配慮

ここでは本研究の枠組みから、配慮を追加的儀礼であると判断している。接触場面において、二つのパターンで儀礼的配慮が見られた。

(1)「家に入る前の配慮的挨拶」

会話(16)では、ペルシア語母語話者のゲストがホストの家に上がる際、「お邪魔します」という表現で儀礼的な行動を取っている。この種の定型表現は、まさに日本語的な開始部の挨拶であると考えられる。

(2)「相手の発話者に何かを要求する前」

二つ目のパターンでは、客であるペルシア語母語話者が店員の日本語母語話者に対して、商品の値段を値下げしてくれるように依頼(「お願いします」)している。客と店員の会話はペルシア語母語話者にとって儀礼的フレームに入る重要な箇所であるため、儀礼的な発話機能を使用する傾向がある。

【Ⅱ「社会文化行動」の直後の儀礼的行動】

一方で、場面によってはある行動が終了した後に儀礼が見られた。最も多く見られたパターンは、日本語母語話者から自己領域に関する情報提供が発話された後に、ペルシア語母語話者により何かの儀礼的行動が産出されるものである。以下の【表 5－16】は、どのような儀礼的発話機能がどういった社会文化行動の後に現れるのかを示したものである。

【表 5－16】接触場面で見られるペルシア語母語話者のインターアクション直後の儀礼行動

発話機能	儀礼的行動	事例数	会話番号
褒め	(1) 相手の情報提供後に産出される褒め	7	(3)(31)(6)(24)
依頼*	(2) 注文した後の依頼	2	(4)(19)
	(3) 協力を得る際の依頼	4	(6)(9)(32)
	(4) クレームが終了した後の依頼	1	(25)
警告*	(5) 情報提供後に表出される警告	2	(31)(34)

大きく三つの儀礼的発話機能(褒め、依頼、警告）が、文化行動と判断された行動の直後に儀礼的調整として現れる。具体的な行動としては、「相手の発話者の情報提供後」、「何かを注文した後」、「誰かの協力が得られる際」、「クレームが終了した後」に儀礼的フレームが作られ、儀礼的なインターアクションがペルシア語母語話者から開始されている事例が見られた。

【B-1】儀礼的褒め

このタイプの褒めは、「相手の発話者が自分の領域について情報を提供した後」に表れる。ペルシア語母語話者の儀礼的なフレームを考察した際にも、基本的発話機能の褒めは多く産出されており、接触場面においても三つの会話場面の六つの事例で同じパターンの褒めが表れた。特にペルシア語母語話者の接触場面における儀礼的な褒めでは、相手の話に対する「すごい～」と言うような場合が多く見られる。この褒めが表れることで、儀礼的フレームが作られる。

【B-2】儀礼的依頼

このタイプの儀礼的依頼は、三つの行動が現れた後に産出される。また、依頼も母語場面では見られなかった儀礼的調整となる。

(1)　注文後の儀礼的依頼

注文をするという社会文化行動は相手に負担を与えているという考えから、注文の後に儀礼的依頼が表れる。儀礼的依頼はポジティブ・フェイスの調整である考えられ、本研究では二つの会話(会話(4)と会話(19))においてこのような傾向が見られた。

(2)　協力が得られる際の依頼

四つの事例において、相手(日本語母語話者)から協力が得られると留意した際に産出される儀礼的依頼が見られた。接触場面で最も多く見られる、ペルシア語母語話者の儀礼的依頼の発話は「お願いします」であり、ひとつのスピーチ・イベントで何度も連鎖的に産出されるパターンも少なくない。

(3)　クレームが終了した後の依頼

このパターンでは、「クレームを言う」という行動の後に儀礼的な発話の必要性が見られた。このパターンはひとつの事例でのみしか観察されなかったものの、日本語母語話者である相手にクレームを述べた後に、ペルシア語母語話者から「お願いします」と儀礼的依頼の発話機能が表れた(会話(25))。

【B-3】儀礼的警告

このパターンの儀礼的行動は接触場面でのみ表出された。二つの会話(会話(31)、会話(34))で、日本語母語話者が何か情報提供をした際にペルシア語母語話者から配慮と判断される儀礼的な警告が産出された。このような警告を儀礼的発話機能として判断した理由には、ペルシア語母語話者の警告が場に対する意識と相手に対する配慮であるという経緯がある。また、開始の挨拶という儀礼的フレームが現れやすい場面で産出されていたことも理由として挙げられる。

以下においては、社会文化行動の前後で現れた儀礼的行動の事例を二つ検討する。まず、儀礼的な依頼が見られた会話(27)の事例 23 を見る。この事例は、客である PR(14)が店員である JP(05) に料金を支払う際の談話となる。

【会話 27－事例 23】スーパーのレジでの店と客の談話(1)

事例	ライン番号	話者	発　話　内　容	基本的発話機能	追加的発話機能
23	25	JP(05)	こちら4点で、2160円でございます。		
	26	PR(14)	えー、60円、5200円でお願いしまーす。	依頼	
	27	JP(05)	はい、ありがとうございます、5200円お預かり致します。	感謝	
	28	PR(14)	あと、これも入れてくださーい。		
	29	JP(05)	ここに、入れるっ？。		
	30	PR(14)	はーい。		
	31	JP(05)	*かしこまりました。*		謙遜
	32	PR(14)	こちら、1000、2000、3000円と。		
	33	JP(05)	はい。		
	34	JP(05)	40円のお返しになります。		
	35	PR(14)	はーい、ありがとうございます。	感謝	
	36	JP(05)	中に袋2枚入れておきますね。		
	37	PR(14)	はーい、お願いしまーす、あっここも商品入れてください。	依頼	
	38	JP(05)	あっ、ここも商品。		
	39	PR(14)	はーい。		
	40	JP(05)	*かしこまりました。*		謙遜
	41	JP(05)	*この、サイズでもよろしいですか**//**。*		配慮
	42	PR(14)	***//**はーい[↑]、ありがとうございます、大丈夫でーす。*	感謝	応答

社会文化的な規範から、ペルシア語母語話者にとっては、料金の交渉場面は儀礼的フレームに入る場所であり、高い儀礼意識が働く。事例 23 のスピーチ・イベントでまず儀礼的な依頼が見られたのは、PR(14) による発話 26 で、料金を店員に手渡す直前の「えー、60 円、5200 円でお願いしまーす。」である。料金を渡す行動が相手への負担になると解釈したのか、儀礼的な依頼が表れた。それに対し、発話 27 で店員の JP(05)は感謝し、料金を預かる。それに続く儀礼的な依頼は、発話 37 で産出されている。ここでは、発話 36 における「中に袋 2 枚入れておきますね。」という JP(05)の気遣いに対し、PR(14)が再び儀礼的な役割を持った依頼(「はーい、お願いしまーす、あっここも商品入れてください。」）を産出している。

次は会話 6 から事例 52 を見る。この事例は、開始部の挨拶の儀礼的フレームにおいて、ペルシア語母語話者が情報提供に対して「すごい～」と発話する場面である。相手からの情報提供後は儀礼を行う傾向が強い社会文化的な規範を持つペルシア語母語話者は、接触場面においても褒め的な表現を多く使おうとする傾向がある。

【会話 6－事例 52】レストラン内で初めて知り合った者同士の談話

事例	ライン番号	話者	発　話　内　容	基本的発話機能	追加的発話機能
52	1	JP(22)	〈じゃ、日本語〉しゃべれる？。		
	2	PR(07)	はい。		
	3	PR(06)	たのみ〈ます〉｛〈｝。	依頼	
	4	PR(07)	〈はい、よろ〉｛〉｝しくお願いします。	挨拶	
	5	PR(06)	あの、先生、あの、学校の先生で。		
	6	PR(07)	あ～すごい～。	褒め	感情提示
	7	PR(06)	やってますから。		
	8	PR(07)	〈よろしくお願いします〉｛〈｝。	挨拶	
	9	PR(06)	〈僕のむか～しの〉｛〉｝友人です。		
	10	PR(07)	あっそうなんっですか、へえええええ。		
	11	PR(06)	もう、20年くらいになりますね。		
	12	PR(07)	あ～～。		
	13	JP(22)	あれ？		
	14	PR(06)	20年目だよね(〈あ～〉)。		
	15	JP(22)	あっ、20年。		

事例 52 では、昔から JP(22)と知り合いであるレストランのオーナーの PR(06)が、PR(07)と JP(22) を互いに紹介させ合う場面である。PR(07) は PR(06)のレストランで新人として仕事を始めることになり、そこで PR(06)が昔からの常連客である JP(22) に二人を引き合わせたという経緯である。発話 5 で PR(06) が JP(22)について「あの、先生、あの、学校の先生で。」と、PR(07)に PR(06)の持っている情報を共有するというアクションを起こす。JP(22)に関する情報提供に留意した PR(07)は、発話 6 で「あ～すごい～。」と JP(22)に対する褒めを発話する。このやりとりにおける褒めが儀礼的であるのは、表出した箇所が儀礼的フレーム内であると解釈できるためである。その後、発話 6 に対して JP(22)からは特に応答は見られず、その後も自己紹介の談話が続く。

5.2.3.2　接触場面におけるスピーチ・イベント内の連鎖に見られる儀礼的行動

5.2.3.2 節では彼らの接触場面におけるスピーチ・イベント内の儀礼的連鎖に注目する。そこで、実際にペルシア語母語話者が日本語母語話者との会話の開始部、主要部、そして終了部においてどのような儀礼的行動を取っているのかを考察する。

【Ⅰ　スピーチ・イベント内の開始連鎖で見られる儀礼的行動】

主に接触場面の開始連鎖で発話された基本的儀礼発話機能は挨拶、感謝、提供、そして謝罪である。特に会話の開始部は相手に対し自己のイメージを定着させるための重要な箇所であることから、インターアクションにおける調整は重視される。以下の【表 5－17】では、開始連鎖で産出された基本的儀礼発話機能を示すと同時に、各特徴と事例数を見る。産出された機能の中でも儀礼的な挨拶が多くの事例で表れていた。

【表 5－17】接触場面で見られるペルシア語母語話者の開始連鎖での儀礼的行動

	発話機能	スピーチ・イベントと儀礼的行動	事例数	会話番号
開始連鎖	挨拶	(1)連鎖が産出されない挨拶	12	(2)(9)(16)(33)(30) (34)(35)(24)(32)(29)
		(2)連鎖と追加的儀礼が見られる挨拶	2	(24)
		(3)連鎖はあるが追加的儀礼が見られない*	2	(16)
		(4)客が来た際の儀礼的挨拶*	2	(22)(24)
		(5)「お疲れ様」タイプの挨拶*	1	(26)
	感謝	(6)開始部挨拶での感謝	1	(16)
	提供	(7)開始部挨拶での提供	2	(16)(17)
	謝罪	(8)開始部挨拶での謝罪	1	(35)

以下において、開始部連鎖の各タイプの儀礼的行動を考察する。

【C-1】スピーチ・イベント開始連鎖における挨拶

開始連鎖における挨拶は、五つのタイプに分類できる。分類の形式としては、開始のスピーチ・イベントで挨拶の連鎖があるか、あるいは挨拶と同時に儀礼性を強調するための追加的儀礼発話機能も見られるかというポイントを見るものである。また、客に対して見られる挨拶形式と目標言語規範に近い挨拶行動もこのタイプに分類することができる。

(1)　連鎖が産出されない挨拶

このタイプの儀礼的挨拶は他の挨拶タイプより多い事例で見られた(12 事例)。つまり、接触場面では最もシンプルなパターンの挨拶連鎖を続ける傾向が高いと言える。このパターンでは、ペルシア語母語話者と日本語母語話者の間で一度挨拶が交わされてから、会話の本題に入る。このタイプの挨拶は母語場面では最も出現頻度が低く、会話参加者が初対面者同士であり今後の関係の構築可能性が低い者同士で発話される傾向が高かった。このようなパターンは、儀礼的フレームが最も短い形で現れている。

(2)　連鎖と追加的儀礼が見られる挨拶

このパターンの開始連鎖の挨拶は、母語場面では最も多く見られたタイプであった。このパターンの特徴として、儀礼的フレームの中で多様な定型的な儀礼的挨拶の産出が起こることが指摘できる。一方で接触場面においては、このパターンの挨拶はひとつの会話場面でしか見られなかった。会話(24)の長期的な付き合いのあった参加者の開始部挨拶では、インターアクションにおいて挨拶の連鎖が見られた。

(3)　連鎖はあるが追加的儀礼が見られない

スピーチ・イベント開始部に挨拶の連鎖はあるものの、追加的儀礼が見られないタイプの挨拶は、会話(16)でのみ見られた。会話(16)は私的な場面で、家の中で友人同士の間で行われた会話である。このタイプは挨拶のタイプ(2)と比較すると、ペルシア語母語話者の場面に対する儀礼的意識が比較的低くなっていると考えられる。もうひとつ指摘できることは、このタイプの挨拶は初対面者同士の間で見られたことである。従って、ペルシア語母語話者は相手の日本語母語話者が初対面者である場合儀礼の強調がやや弱まると考えられる。この傾向は、母語場面と同様である。

(4)　客が来た際の儀礼的挨拶

このパターンの開始連鎖の挨拶は、ペルシア語母語話者が店員であり、日本語母語話者が客であるというパターンで見られた。本研究ではフリーマーケットの会話場面(会話(22)と会話(24)) においてこの種の挨拶が観察された。このパターンは母語場面では現れておらず、ペルシア語母語話者が目標言語(日本語) の規範に沿い客に対して儀礼的調整したものだと考えられる。客に対する開始挨拶として、「いらっしゃいませ。」が見られる。

(5)　「お疲れ様」タイプの挨拶

このタイプの開始部挨拶の連鎖は、儀礼挨拶タイプ(4)に近いパターンである。つまり、ペルシア語母語話者が目標言語規範に近い儀礼的行動を取っている場合を指す。事例では、研究仲間に対しペルシア語母語話者が、「お疲れ様です～。」と相手に対して儀礼的フレーズを発話している。このフレーズをペルシア語母語話者が発話することで、儀礼的フレームが開始する合図であると認識可能になる。しかし、相手が儀礼的な行動の連鎖を続けるかどうかは場面や関係によって異なる。

【C-2】スピーチ・イベント開始連鎖における感謝と提供

イベント開始部の儀礼的感謝と提供とは、開始部の挨拶と同時に産出される場合が多い。特にこのパターンは、会話参加者のどちらかがホスト(主催者）でありもう一方がゲスト(訪問者）であるという関係においてより多く見られる。本研究の事例においても、ペルシア語母語話者がホストであった場合日本語母語話者に対し、開始連鎖において感謝と提供を産出している(会話(16)と会話(17))。このパターンの開始連鎖は母語場面では多く見られた。ゲストがわざわざ来てくれたことに感謝したり、開始部の儀礼的提供として、「どうぞ。」と相手を家の中に招き入れたりする発話などが連鎖的に見られる。

【C-3】スピーチ・イベント開始連鎖における謝罪

接触場面で見られた儀礼的謝罪は、母語場面との謝罪とは異なることが分かった。母語場面での謝罪はゲストが家に訪れる際に見られたものであり、相手に対する謙遜の気持ちが儀礼として見られている。それに対し、接触場面での謝罪は実際に自分が犯した失敗に対するものである。本研究の事例では、ひとつの会話のみにおいて開始連鎖の謝罪が観察された。

【Ⅱ　スピーチ・イベント内の主要連鎖で見られる儀礼的行動】

母語場面と同様に、接触場面においてもペルシア語母語話者は会話の主要部で儀礼的行動を開始していることが明らかとなった。母語場面の談話の中間部で儀礼的行動が産出されるのは、通常何かの合図が見られる場合が多かった。同様に接触場面においてもそのような合図が留意された際にも、ペルシア語母語話者の儀礼的な行動が確認された。

以下の【表 5－18】は、接触場面で産出された主要連鎖での儀礼的発話機能の種類を示す。会話の主要部では、挨拶、誘い、褒めがペルシア語母語話者によって発話されている。

【表 5－18】接触場面で見られるペルシア語母語話者の主要連鎖での儀礼的行動

	発話機能	スピーチ・イベントと儀礼的行動	事例数	会話番号
主要連鎖	挨拶	(1)会話主要部で間の後に見られる挨拶	7	(2)(8)(16)(9)
	誘い	(2)会話主要部での誘い	3	(14)(24)
	褒め	(3)会話主要部での褒め	3	(10)

以下では、事例を通して主要部連鎖における儀礼的行動を見る。

【D-1】スピーチ・イベント主要連鎖における挨拶

インターアクションの際に、話題の変更、発話の間が留意された場合、ペルシア語母語話者は場面の雰囲気を調整するために儀礼的な挨拶を開始することが多い。この儀礼的な挨拶は形式的なものであるため、通常その挨拶(「相手の健康を尋ねる」）に対して応答はそれほど期待されないものの、相手に対する礼儀として発話されることが多い。接触場面においても、七つの事例で以上のような儀礼的な挨拶が確認された。母語場面では、このような儀礼的フレームが発話者の間ではっきりと認識されることが多い。

【D-2】スピーチ・イベント主要連鎖における誘い

主要部での儀礼的誘いは、会話の本題につなげて、ペルシア語母語話者であるホスト側が日本語母語話者のゲストを招待するパターンで見られた。主要連鎖での儀礼的誘いから儀礼的フレームに入りやすく、会話参加者同士の間で儀礼の開始が認識され、相手の日本語母語話者が応答する形態が多く、比較的ペルシア語母語話者の期待に沿った応答が産出されていると考えられる。そのやりとりの結果から、会話の流れが順調に進行していると読み取れる。

【D-3】スピーチ・イベント主要連鎖における褒め

このタイプの儀礼的な褒めは会話(10)でのみ見られた。

スピーチ・イベントの主要連鎖での褒めは、ペルシア語母語話者が、相手が自己領域について何か情報を提供した際に、その物に対し褒めを開始するというパターンである。

【Ⅲ　スピーチ・イベント内の終了連鎖で見られる儀礼的行動】

接触場面のデータから、ペルシア語母語話者はスピーチ・イベント内の終了連鎖において最も多くの儀礼的発話機能を産出していることが明らかとなった。発話連鎖数が多く見られる理由のひとつに、日本語母語話者からの期待の応答が現れていることが指摘できる。終了連鎖では感謝、挨拶、誘い、謝罪、依頼の順で発話機能が儀礼的な役割を持って儀礼的フレーム内で現れる。以下の【表 5－19】は各基本的儀礼的発話機能の事例数と会話番号を示している。

【表 5－19】接触場面で見られるペルシア語母語話者の終了連鎖での儀礼的行動

	発話機能	スピーチ・イベントと儀礼的行動	事例数	会話番号
終了連鎖	感謝	(1)会話終了部での感謝	14	(28)(14)(15)(4)(5)(9)(16)(30)(11)(17)(26)(24)
	挨拶	(2)**会話**終了部挨拶- 配慮的な終了挨拶	11	(14)(9)(16)(29)(30) (17)(5)(24)
	誘い	(3)会話終了連鎖での誘い	5	(15)(5)(14)(24)
	謝罪	(4)**会話**終了連鎖での謝罪	2	(16)(17)
	依頼*	(5)店員に対する依頼	1	(11)
		(6)客に対する依頼	1	(7)

【E-1】スピーチ・イベント終了連鎖における感謝

終了部において、儀礼的フレームが現れる場面でペルシア語母語話者が全ての基本的儀礼的発話の中で最も使用していたのが、感謝であった(14 事例)。感謝は様々な場面で表れ、連鎖が多少長く継続していたものと、一方的にペルシア語母語話者が感謝し場面の儀礼的フレームが終了したものがある。

【E-2】スピーチ・イベント終了連鎖における挨拶

母語場面とは異なり、接触場面での終了部の挨拶は明確に「さようなら」という定型表現は発話されないものの、その代わりとなる儀礼的な終了部挨拶が産出される。

【E-3】スピーチ・イベント終了連鎖における誘いと謝罪

会話を終了するにあたり、相手に対し儀礼的な誘いを行うパターンはしばしば見られる。このパターンの会話の終了は母語場面でも多く見られ、相手との今後の関係の維持を期待することがその前提として考えられている。また、終了連鎖での謝罪に関しては、会話(16)(17)で産出され、いずれも「わざわざ家に来てくれてすみません」と相手に配慮し、ゲストとして来てくれたことで迷惑をかけてしまったと謝罪をするものである。いずれも儀礼として認識されやすく、儀礼的フレームに入りやすい。

【E-4】スピーチ・イベント終了連鎖における依頼

儀礼的フレームの会話が依頼で終了するパターンは二つの事例でしか現れなかった。依頼における終了連鎖は母語場面では見られず、ペルシア語母語話者が接触場面でのみ使用する儀礼的ストラテジー行動であると判断できる。ここで見られたいずれのパターンも、公的な場面でペルシア語母語話者が店員または客という立場において産出された。儀礼的な依頼とは、「お願いします」という発話を示す。

スピーチ・イベント内の連鎖では、多くの儀礼的なインターアクションが確認された。その中から、代表的な三つの事例を以下で検討する。

まず、接触場面における開始部の挨拶の事例を見る。以下の会話(9)の事例 61 は、以前から知り合いである近所に住む二人(PR(07)と JP(27)）のスピーチ・イベント開始部において、儀礼的フレームが確認された中での挨拶である。

【会話 9－事例 61】近隣住民同士の開始部挨拶

事例	ライン番号	話者	発　話　内　容	基本的発話機能	追加的発話機能
61	1	PR(07)	ごめんくださーい、「JP(27)」ジャン。	挨拶	配慮＋感情提示
	2	PR(07)	あ～こんにちは～、おはようございます、私《笑》。	挨拶	
	3	JP(27)	こんにちは。	挨拶	
	4	PR(01)	おはようございます、どうも。	挨拶	
	5	PR(07)	友達。		
	6	JP(27)	あ～＝【。		
	7	PR(13)	】＝こんにちは～。	挨拶	
	8	JP(27)	こんにちは。	挨拶	
	9	PR(13)	はじめまして。	挨拶	
	10	PR(07)	前、こな。		
	11	JP(27)	うん？。		
	12	PR(07)	前、山。		
	13	JP(27)	山？うん。		
	14	PR(07)	こな、買えました。		
	15	PR(13)	〈米〉｛〈｝。		
	16	PR(01)	〈米〉｛〉｝。		
	17	PR(07)	米！〈笑〉。		
	18	PR(07)	こめ、こめ。		
	19	JP(27)	うんうんうん。		
	20	PR(07)	今、「JP(27)」ジャン、このこなのこまのエスキーちっと欲しい、売ると思う?。		
	21	JP(27)	米?。		
	22	PR(07)	うん。		

ここでは、PR(07) が JP(27) の家を訪ね、JP(27)を玄関先から呼ぶ発話(「ごめんくださーい、「JP(27)」ジャン。」）から始まる。最初の挨拶に続き JP(27)が玄関先に来たのか、発話 2 で PR(07)が挨拶に対する挨拶(「あ～こんにちは～、おはようございます、私《笑》。」）をする。そこでやっと JP(27)が「こんにちは。」と挨拶に対して応答をする。また、PR(07)と一緒

にいた PR(01)と PR(13)も続いて JP(27) に挨拶をする。ここで見られる挨拶の連鎖は、二人の間でのインターアクションではなく、場面に参加している参加者が複数(4 名)であるため、各自が続けて挨拶をしているために起こっている。発話 7 で PR(13) が「】＝こんにちは～。」と挨拶をすると続いて JP(27)は「こんにちは。」と応答するが、PR(13) の「はじめまして。」という挨拶に対しては応答がない。発話 10 からは何の前置きもなく PR(07) が本題に入る。ここでは、発話者同士の間の儀礼的フレームに対する認識の異なりが確認できる。

次に、スピーチ・イベントの主要連鎖で見られた儀礼的な誘いの事例をみる。

以下の会話(14)の事例 29 は、本研究の接触場面会話で唯一通訳者(PR(16))が間に入り会話が行われたものになる。

【会話 14－事例 29】通訳を通しての日本語母語話者との儀礼的挨拶

事例	ライン番号	話者	発　話　内　容	基本的発話機能	追加的発話機能
29	13	PR(16)	Avalin bar bud miyam ye hamchin,Jai ro az nazdik mibinam ye hamchin jai ro az <nazdik mibinam>{<|。 こんなところに来るのが初めてで、近くから見るのも初めて、初めて近くらか<見るのが>{<|。		
	14	PR(09)	<Okey>{>}。		
	15	PR(09)	Ghablanam umade budan,begid。 前来たことあったか、聞いて下さい。		
	16	PR(08)	始めて?。		
	17	JP(09)	始めて～。		
	18	PR(08)	Na avvalin bare【。 いいぇ、初めてです【。		
	19	PR(09)	】Avvalin bare。 '】初めて。		
	20	PR(09)	*Kheili khosh amadin ,khoshhalemun kardin,begid,Bazam biyaid inja , Aha 。'* *ようこそいらっしゃいました、嬉しくなりました、言ってください、またいらっしゃるように、うん。*	**誘い**	**感情提示**
	21	PR(16)	あの、また、是非いらっしゃって下さいって、本当に。	**誘い**	
	22	JP(09)	ありがとうございます、今度あのイランに。	**感謝**	
	23	PR(16)	Mige dust daram biyam iran hatman。 イランに必ず行きたいと言っています。		
	24	PR(09)	*Enshallah 、Enshallah,Tashrif biyarid khoshhal mishim*。 *きっと、きっと、いらっしゃってください、喜びます。*	**誘い**	**応答＋感情提示**
	25	PR(16)	あの、いらっしゃって下さい、是非。	**誘い（訳）**	
	26	JP(09)	ね～本当連れてって～。		
	27	PR(08)	嫌だよ～、一人で行けよ〈笑〉。		
	28	JP(09)	ひどいね～〈笑〉。		
	29	PR(09)	Khob。 さて。		
	30	PR(08)	彼はね、すごい素晴らしい方でね。	**褒め**	
	31	JP(09)	ううんん。		
	32	PR(08)	先ほど、感動した写真のことを〈うん〉説明したら、とてももう我慢できないがら、挨拶しながらちょっと、あの、＃＃＃の＜うん＞何というの話しようかなと思ってきたの。		
	33	PR(09)	Chi mige。 何を言ってるの。		

チャリティーバザーの主催者である PR(09)は、短期滞在で来日しており日本語会話レベルは初級の段階である。そのため 9 年日本に滞在している PR(16)が JP(09)との間に入り、通訳をしている。発話 13 で、PR(16)は JP(09)の日本語をペルシア語に訳し PR(09)に伝え

ている。発話 15 から発話 18 までは、PR(09)は JP(09)に対しチャリティーバザーが開催されている会場に今まで来たことがあるのかを尋ねている。発話 19 で、PR(09)は JP(09)がこれまでこのバザーに参加したことがなかったことに気付くと、ターロフが必要な場面であると言わんばかりに、次々に儀礼的な発話を会話の主要部で開始する。ここから儀礼的なフレームが開始したと考えられる。その中で、発話 20 において儀礼的な誘いが“Kheili khosh amadin ,khoshhalemun kardin,begid,Bazam biyaid inja，Aha。(和訳：ようこそいらっしゃいました、嬉しいです、言ってください、またいらっしゃるように、うん。)”という形で表れる。「ようこそいらっしゃいました」は歓迎の言葉として追加的儀礼であると判断する。そして「またいらっしゃるように」の箇所は JP(09)を再び招待していると考えられる。その誘いに対し JP(09)は、「ありがとうございます、今度あのイランに。」と感謝の気持ちを表すと同時に、次はイランに行きたいという意思を表明している。儀礼的なフレームは、発話 25 まで続いている。

最後に以下の会話(30)の事例 86 は、公的な場面での儀礼的な終了部挨拶でなる。

【会話 30－事例 86】学生と事務員スタッフの終了部挨拶

事例	ライン番号	話者	発　話　内　容	基本的発話機能	追加的発話機能
86	99	PR(12)	はい、分かりました。		
	100	JP(34)	はい。		
	101	PR(12)	ありがとう、じゃ、一応聞いて、質問あったらまたメールで【【。	感謝	
	102	JP(34)	ノノ あっ、言って下さい。		応答
	103	JP(35)	はいはい。		
	104	PR(11)	ありがとうございますー。	感謝	
	105	JP(35)	すみません、ちょっといろいろ細かいんですけど。	謝罪	配慮
	106	JP(34)	そうですねー。		配慮
	107	PR(11)	ありがとうございました。	感謝	
	108	JP(35)	外国だからねーEhhh。		
	109	PR(12)	ありがとうございました、どうも。	感謝	
	110	JP(34)	はい、はい。		
	111	PR(12)	失礼しまーす。	挨拶	
	112	JP(35)	はーい。		応答
	113	JP(34)	＜ありがとうございます＞｛＜｝。	感謝	
	114	PR(11)	＜失礼しまーす＞｛＞｝。	挨拶	

学生である PR(11)と PR(12)が、事務員スタッフの JP(34)と JP(35)に対し会話の終了部の合図を示した部分から儀礼的フレームが開始されている。発話 99 では、PR(12)が「はい、分かりました。」と終了挨拶の合図を示す。またそれに続き、発話 101 でも PR(12)から「ありがとう、じゃ、一応聞いて、質問あったらまたメールで【【。」と、会話の続きは質問がある場合にメールで伝えると述べる。発話 101 においても、基本的儀礼の感謝の表出箇所に逸脱は見られないものの、事務員スタッフに対して「ありがとう」と文末の「ます」を省略している

ことには違和感がある。その後、PR(11)も続いて感謝し(発話 104)、それに対して JP(35)も配慮するかのように「すみません、ちょっといろいろ細かいんですけど[30]。」と儀礼的な謝罪が見られる。最後に終了挨拶の決め手となったのが、発話 111 と発話 114 で産出された「失礼しまーす」である。これらの儀礼的表現はペルシア語でも同じニュアンスがあり、比較的ペルシア語母語話者が逸脱なく上手く表現を使用できた終了部挨拶であると考えられる。

5.2.3.3　接触場面における儀礼的発話ペアによる儀礼的行動とその他

最後に儀礼的発話ペアに関しては、儀礼的発話の第一発話を日本語母語話者、そして第二発話をペルシア語母語話者が共同産出する形となる。日本語母語話者の方から情報提供、提供、配慮的行動、確認と褒めが見られた場合に、ペルシア語母語話者は第二発話で儀礼的な行動を提示する。第二発話で産出される儀礼的な行動としては感謝、誘い、そして提供がある。以下の【表 5－20】では接触場面での儀礼的発話ペアが作られやすい機能の種類と事例数を示す。

【表 5－20】接触場面における儀礼的発話ペア

	発話機能	儀礼的行動に対する第一成分	事例数	会話番号
発話ペアによる儀礼的行動	**感謝**	(1)情報提供に対する感謝	2	(27)
		(2)提供に対する感謝	4	(27)(9)
		(3)配慮に対する感謝	1	(6)
		(4)確認に対する感謝	1	(32)
		(5)褒めに対する感謝	1	(23)
	誘い	(6)褒めに対する誘い	2	(29)(9)
	提供	(7)褒めに対する提供	1	(23)

多くの発話ペアの第二発話に現れたのが感謝であることが分かる(9 事例）。続いて、誘いと提供が順に続く。以下では儀礼的な発話ペアがどのように産出されるのかを考える。

【F-1】儀礼的発話ペアにおける感謝

30 日本語の配布資料が細かいことを指している。

本研究の考察の結果、感謝が儀礼的発話ペアの第二発話として産出されるのは、五つのパターンがあることが明らかになった。

(1) 情報提供に対する感謝

この種類の感謝は、日本語母語話者がペルシア語母語話者の役に立つ情報を提供したことに対し、儀礼的に感謝を示すパターンである。情報提供に関しては、必ずしも儀礼的な要素を含む訳ではないが、ペルシア語母語話者が感謝をすることで場面が儀礼的フレームに切り替わることが可能となる。

(2) 提供に対する感謝

このパターンの感謝は、日本語母語話者から何か物が提供された際に見られた。事例は二つの会話(会話(27)、会話(9))において観察された。接触場面では、レストランやスーパーで店員から料理を受け取る、あるいは釣銭を受け取る際にペルシア語母語話者から発話された事例が見られた。

(3) 配慮に対する感謝

ひとつのスピーチ・イベント(会話(6))でしか観察されなかったが、日本語母語話者が何か相手のことを思い配慮的な表現を産出する際に儀礼的な感謝が見られた。

(4) 確認に対する感謝

接触場面のひとつの事例のみにおいて、日本語母語話者がある事項を確認した際、その確認に対しペルシア語母語話者から儀礼的な感謝が産出された。この事例が見られた会話(32)では、クリニックで日本語母語話者の看護師がペルシア語母語話者である患者に対しいくつか確認事項をしている。その際、看護師の確認に対しペルシア語母語話者から感謝の発話が見られた。

(5) 褒めに対する感謝

日本語母語話者がペルシア語母語話者の自己領域を褒めると、それに対して儀礼的な感謝が表出されるというパターンを指す。このタイプの第二発話はひとつの会話(会話(23))でのみ見られた。それは、客が展示されていた商品を褒め、それに対し店員であるペルシア語母語話者が感謝をするという形である。連鎖は確認されていない。

【F-2】儀礼的発話ペアにおける誘い

儀礼的発話ペアの第二発話において儀礼的な誘いがペルシア語母語話者から発話されたのは、第一発話で日本語母語話者から褒めが見られた場合である。このパターンの儀礼的なインターアクションは母語場面でのターロフでよく見られる。

【F-3】儀礼的発話ペアにおける提供

このパターンの儀礼的行動は母語場面では多く観察されていたものの、接触場面ではひとつの発話でしか見られなかった。ペルシア語母語話者は日本語母語話者から何か褒めの儀礼的発話を述べられると、それに対し儀礼的な行動を起こす傾向が強い。会話(23)で褒めの後に提供が表れている。

【その他】

最後に、接触場面でペルシア語母語話者が追加的儀礼発話機能を産出したパターンを見る。量的分析の結果からも確認できるように、ペルシア語母語話者の接触場面における追加的儀礼の表出頻度は大幅に下がる傾向がある。従って、質的分析の結果で追加的儀礼発話機能のみが産出される発話はそれほど見られない。しかし、ひとつの事例のみにおいて、ペルシア語母語話者から非言語的な儀礼的行動が見られた。それは、母語場面では一般的に使用される、開始部や終了部挨拶の儀礼的フレーム内でのハグや握手、キスなどである。このタイプの儀礼は感情提示に分類される。

【表 5－21】接触場面における追加的儀礼発話機能の表出

追加的発話機能	発話機能	儀礼的行動	事例数	会話番号
	感情提示	(1)**非言語的行動で儀礼を示す**	1	(24)

【表 5－21】にある通り、追加的儀礼の中で感情提示のみが表れている。

以下では、儀礼的発話ペアのパターンから二つの事例を検討する。

会話(9)の事例 65 は、長期的な付き合いを持つ近隣住民同士である JP(27)と PR(07)の間で見られた。

【会話 9－事例 65】近所同士の玄関先での雑談

事例	ライン番号	話者	発　話　内　容	基本的発話機能	追加的発話機能
65	97	PR(07)	今も、『Akabab』をイランのレストラン、アルバイト。		
	98	JP(27)	アルバイト？。		
	99	PR(07)	は＾。		
	100	PR(07)	週、よんにち。		
	101	JP(27)	あら、いいこと。	褒め	
	102	PR(07)	一週間、よんにち。		
	103	JP(27)	あら、そう、良かったね。	褒め	
	104	JP(27)	いいとこ、見つかってね。	褒め	
	105	PR(07)	*はい、本当に。*		応答
	106	PR(07)	*遊びに来て下さい。*	誘い	感情提示＋配慮
	107	JP(27)	〈笑〉。		
	108	PR(13)	はーい、ありがとうございます。	感謝	
	109	PR(07)	いつも、ありがとうございます。	感謝	

PR(07)は JP(27)に対して、新しいアルバイト先を見つけたと発話 97 で述べる(「今も、『Akabab』をイランのレストラン、アルバイト。」）。発話 97 に対し、発話 103 と 104 で JP(27)は、「あら、そう、良かったね。」、「いいとこ、見つかってね。」と PR(07)がアルバイトを見つけられたことを褒めている。職を見つけたということを褒められていることに留意した PR(07)は、儀礼的フレーム内に入り、アルバイト先を自己領域である前提に立ち発話 106 で JP(27)をバイト先に誘う(「遊びに来て下さい。」）。その誘いに対して、JP(27)からの応答は見られない。

最後に、以下の会話(24)の事例 36 は開始部挨拶で追加的儀礼(非言語行動)の感情提示が産出されたものである。

事例 36 のスピーチ・イベントには 4 名の発話者が参加している。PR(10) と JP(15)は昔からの知り合いであり、この場面において久々に再開している。また、PR(10)の夫である日本語母語話者の JP(10)と、JP(15)の夫の JP(16)も会話に参加している。この会話は、開始部挨拶のタイプの中でも、連鎖と追加的儀礼が同時に見られたスピーチ･イベントのひとつである。会話が比較的にスムーズに行われた理由として、参加者が長期的に付き合いを持っていたことが考えられる。

【会話 24－事例 36】友人同士の開始部挨拶での感情提示表出

事例	ライン番号	話者	発　話　内　容	基本的発話機能	追加的発話機能
36	1	PR(10)	あー来た来た。		
	2	JP(10)	おーーー、ハロー。	挨拶	感情提示
	3	PR(10)	いらっしゃいませ～（笑い）Hhhh「↑」。	挨拶	
	4	JP(10)	久しぶり～。	挨拶	
	5	PR(10)	元気～「↑」。	挨拶	感情提示
	6	JP(15)	あれ、初めましてじゃない？。		
	7	PR(10)	あっ、［U］：：さんに初めてだねー。		
	8	JP(15)	でしょう？。		
	9	JP(16)	えっ、会ってないの、本当？		
	10	JP(16)	もう、1歳だっけ？。		
	11	PR(10)	1歳2ヶ月。		
	12	JP(10)	1歳だね。		
	13	PR(10)	まぁ～あと１週間で、いっいっさい2ヶ月になる。		
	14	PR(10)	あっ、*「JP(16)」さんを抱きしめたい～*：（笑い）。		感情提示
	15	JP(16)	Ehhha（笑い）。		
	16	PR(10)	*もう、会って＜ないからね＞｛＜｝*。		感情提示
	17	JP(16)	*＜ひさしぶり＞｛＞｝だね～*。	挨拶	感情提示
	18	JP(16)	うんうんうん、久しぶりだね～Uuuu＜ハグしながらキスする＞＜笑＞。	挨拶	感情提示
	19	PR(10)	友人だよ。		
	20	RE(01)	あーーー＜笑＞。		
	21	PR(10)	うーーん。		
	22	JP(16)	久しぶりだねー。	挨拶	
	23	JP(10)	お久しぶり。	挨拶	
	24	JP(16)	ユウちゃんだよ、ユウちゃん。		
	25	PR(10)	小学校行ってる↑？。		
	26	PR(10)	ユウちゃん、これくらいだったよ。		
	27	JP(16)	ねーー。		

ここで注目したいのは、開始挨拶の儀礼的フレームが終了した後にもう一度儀式的フレームを開始し、発話 14 から PR(10)が「あっ、「JP(16)」さんを抱きしめたい～：(笑い)。」と発話する箇所である。ここで抱きしめたいと述べているのは、ペルシア語の母語規範の影響が考えられる。発話 14 の前のインターアクションでは、開始部の挨拶の儀礼的フレームが終了しているかのように思われたが、しかし発話 14 からもう一度異なる形で開始部の挨拶が見られる(儀礼的フレームを再び開始している)。「抱きしめたい」という発話に対して、JP(16)は発話 15 で笑い、そこには多少の戸惑いが見られたものの、最終的には、発話 18 で PR(10)に合わせるかのように互いハグしながら「うんうんうん、久しぶりだね～Uuuu＜ハグしながらキスする＞＜笑＞。」と応答する。このパターンの挨拶はペルシア語母語話者同士では一般的であるが、日本語母語話者同士の母語場面では違和感があるものである。以上のようなインターアクションが見られたのは、PR(10)の最初の挨拶に何か儀礼的な行動としての物足りなさを留意して、再び「抱きしめたい」という儀礼的挨拶を継続していると解釈できる。

以上で、接触場面の自然会話の分析の結果を七つの事例を通して示した。次の 5.2.4 節において、接触場面における考察を見る。

5.2.4　接触場面における考察

本節では、第 5 章における接触場面での量的分析と儀礼的発話機能が現れた箇所を考察した質的分析の結果をまとめたものとなる。

【A】 量的分析からの考察

本量的分析の結果、以下の示唆と課題を得ることができた。

(1) 基本的儀礼発話機能の表出頻度から

基本的儀礼発話機能の量的な分析から、多様なバリエーションの発話機能が接触場面内で出現していることが指摘できる。しかし、必ずしも全ての場面において儀礼的な発話機能が見られるとは限らない。本調査の結果から、36 場面中、72 %の場面ではペルシア語母語話者の方が日本語母語話者より多く儀礼的な発話機能を使用していた。一方で、14%の場面においては、日本語母語話者による儀礼的な言語調整が見られた。それに続き、3%の場面では両母語話者が同じ頻度で儀礼的な発話機能を使用している。それに対して 11%の場面では、儀礼的な発話機能がひとつも見られなかった。以上の結果から、インターアクションにおいて、ペルシア語母語話者の方が儀礼的な発話機能を多く産出する傾向があると言える。また、母語場面の会話では見られなかった警告のような新たな儀礼的発話機能が、ペルシア語母語話者の接触場面で出現した。それに対し、儀礼的な母語場面では広く使われていた願望の発話機能が、日本語母語話者との会話では全く見られなかった。

(2) 追加的儀礼発話機能の表出頻度から

追加的儀礼発話機能は、接触場面においてその表出頻度が大幅に下がっている。最も多く見られた感情提示では、相手に興味を示す儀礼的発話「今日は来てよかったです」、相手の所要物に対して述べる「かわいい」や「すごい」などが日本語母語話者によって発話された。これらの発話は相手に対する気遣いなどから儀礼的場面のファクターとして現れる。一方ペルシア語母語話者は、相手を誘う際に「来て来て」などと相手への興味を示す儀礼的な感情提示を述べている。配慮的な発話機能は、特にペルシア語母語話者によって会話の終了部で「すみません、お時間を頂いて」などというとこで見られる。これは、母語場面からの

影響が読み取れる箇所である。また、母語場面では発話されなかった、「割引をあげるよ」や「よろしくお願いします」などが配慮的表現であると言える。

母語場面からの影響が見られる傾向がある基本的儀礼発話機能に対して、追加的儀礼発話機能では、母語場面と異なる形式が表れた。この現象には、ペルシア語母語話者が追加的儀礼発話機能に関しては、日本語規範に近い調整を行うことができていると考えられる。

【B】 質的分析からの考察

5.2 節の前半においては、接触場面参加者の儀礼的発話数の量的比較から彼らがどのような儀礼的発話機能をインターアクションにおいてより活用しているのかを考察した。後半においては、それぞれの儀礼的発話機能が会話の中のどの箇所で産出されるのかを考察する。

(1) ペルシア語母語話者の儀礼的言語行動の表出箇所

以下では、本節で明らかになった接触場面における儀礼的発話機能の表出の特徴をまとめる。【表 5－22】は、分析の対象として全 36 場面におけるペルシア語母語話者の儀礼的パターンを簡単にまとめたものになる。この儀礼的パターンの枠組みは、母語場面での使用から明らかになったペルシア語母語話者の儀礼産出の形式によるものである。

【表 5－22】ペルシア語母語話者の接触場面における母語規範の枠組みからの儀礼の考察

儀礼的パターン		行動	発話機能	事例数
文化行動の前後	直前	料金を支払う前	「依頼*、提供、申し出、配慮」	25
		行為や事物を要求する前		
		家に上がる前		
		商品を販売する前		
	直後	情報を提供する後	「褒め、依頼*、警告*」	12
		料理を注文した後		
		行為や事物を要求した後		
スピーチイベント内の連鎖	開始連鎖	「挨拶、感謝、提供、謝罪」		31
	主要連鎖	「挨拶、誘い、褒め」		13
	終了連鎖	「依頼*、感謝、挨拶、誘い、謝罪」		34
発話ペアの完成	第一成分：「提供、配慮、情報提供、褒め、確認*、依頼*」（日本語母語話者）			13
	第二成分：「感謝、誘い、提供」（ペルシア語母語話者）			

社会文化行動の前後に産出された儀礼的行動を見ると、ペルシア語母語話者は、接触場面において行動を起こす前に儀礼的調整をする傾向が最も強い。自然会話であるということもあり、母語場面と全く同じ条件の場面の会話を採取することが困難であったが、母語場面であまり儀礼が強調されていなかった箇所でも、接触場面にいては儀礼的行動が見られるなど、多様性のある会話を観察することができた。ペルシア語母語規範からの社会文化行動であるとして観察された行為は、「料金の支払い」や「何らかの要求前」など、相手に負担が

かかると考えられる行動の前に儀礼的発話が多く見られる。これは、ペルシア語母語話者同士の母語場面より接触場面において、ペルシア語母語話者は自分のフェイスの調整により気を遣っているようにも捉えられる。儀礼的行動を試みようとする一方で、日本語の儀礼的な定型表現が少ない、あるいは儀礼を示すツールをあまり使いこなすことができないこともということも考えられる。そのため、例えば依頼のようなペルシア語母語場面ではあまり儀礼的行動として見られなかった発話が、日本語においては理解しやすい(習得しやすい）ひとつの儀礼的表現として多くの会話で発話されている。社会文化行動の後に関しても、同じ傾向が見られる。具体的には、相手に負担をかけた後に再び依頼などが見られる事例がある。ここでも母語場面では見られなかった基本的儀礼発話機能が新たに見られた。同様な母語場面では様々な儀礼的な定型表現を使用することができるのだが、日本語の儀礼的な定型表現をあまり知らない、あるいは日本語には儀礼的な定型表現が存在しないと考えられる。そのため、「お願いします。」や「よろしくお願いします。」など最も汎用的に使用できると判断した儀礼的表現を、多様な場面で過剰に繰り返す傾向があるのではないかと考えられる。

次に、スピーチ・イベント内の発話連鎖や儀礼的発話ペアにおける儀礼的種類が見られる。儀礼的発話ペアでは、日本語母語話者が第一成分で様々な儀礼的発話機能を使用するのに対し、ペルシア語母語話者は決まった発話機能を繰り返し使用している。ここでも何らかの言語習得に関わる要因が関わっていると考えられる。

以下では、質的分析の考察の総括を行う。

(2)　接触場面内の対人関係による儀礼的発話機能のタイプと使用頻度

接触場面内の対人関係は二つの側面から考えられる。それは「関係の長さ」と「上下関係」である。

1.　関係の長さ（初対面-長期的付き合い）

(1-1)　初対面同士

初対面場面において、日本語母語話者に対してペルシア語話者が最も使用する儀礼的行動として、依頼の定型表現が挙げられる(18 の初対面場面中 7 場面において使用）。特に、ペルシア語話者の過剰な依頼表現の使用は初対面の相手に対して多く使用されることが指摘できる。次に、挨拶、感謝や誘いが多く見られた。初めて会話を交わす相手に対して誘いが表出される儀礼的行動は、私的な場面(家の中）、あるいは公的な場面(イベント会場など）のどちらにおいても、相手と今後の関係の構築を期待する場合にのみ行われる。あるいは、儀礼的な発話連鎖がある程度うまく進行している会話において、母語規範の転移として現れて

いる。また、初対面同士でも、公的な場面より私的な場面で相互行為が行われている場合に儀礼の頻度が向上していた。

(1-2)　長期的付き合い

相手との関係が長期的である場合、ペルシア語母語話者の儀礼的頻度が上昇する。また、初対面同士の場面において追加的儀礼発話機能は配慮のみが見られたのに対し、付き合いが長期的であると感情提示や謙遜、また非言語行動での儀礼(キスやハグ）など追加儀礼が多く見られた。また、主要連鎖で見られる儀礼的調整(挨拶、誘い）は長期的な付き合いがある者のみに対して使用されている。従って、接触場面の儀礼の増加には、相手との関係性に対する兼ねてからの意識調整が必要である。

2.　上下関係（年齢差による上下、社会的役割(教師・生徒、先輩・後輩など））

まず年齢差に対する意識は、年長者に対し敬語表現を意識する、言葉を丁寧体にするなど、場面の改まり度を上昇させる調整行動を取る発話者と、相手が教師や年長者であっても友達口調で会話をするなど、敬語を上手く使用できない発話者の二通りのタイプに分かれていた。ペルシア語母語話者が先輩、あるいは年齢差がない場合では、友達口調になっているものの、警告などといった相手を配慮するような表現を発話連鎖の中で使用している。

これらを母語場面から考察すると、相手に対する思い遣りから表れる儀礼的発話の願望に近いものだと考えられる。しかし、ペルシア語表現の願望を接触場面で使用することは簡単でないことから、それが警告などに変化していると考えられる。ここでは、儀礼的発話機能の役割が近い行為同士で基本的儀礼の発話機能のタイプの変化が見られる。これらを、「役割同等の儀礼的発話機能」と呼ぶ。つまり、儀礼的発話機能の警告の現れは、母語場面における願望の「役割同等の儀礼的発話機能」であると言える。

(3) 接触場面における儀礼的発話機能の使用パターン

接触場面において、どちらかの発話者の儀礼的発話機能使用が多くなる傾向があることが明らかとなった。ペルシア語母語話者が儀礼的発話機能を多く使用するパターンと、日本語母語話者の儀礼的発話機能の使用数が多いパターンである。

まず、ペルシア語母語話者の儀礼的な発話機能の頻度が高い場面は以下のように特徴づけられる。ペルシア語母語話者は、 教師や事務員スタッフ、医師や先輩など、自分より社会的立場が上の相手に対し儀礼的な謝罪を多く用いている。次に、相手に何かを要求する場面では、特に店員に対して感謝や依頼の儀礼的な発話機能が多く見られた。また、初対面同士がパーティーにいるような場面においても、ペルシア語母語話者から感謝が多く提示されて

おり、そこでは相手が初対面であるにも関わらず、会話の終了部では自宅に相手を誘うという儀礼的な調整としての誘う行動が見られた。このような談話の流れからは、母語場面での儀礼的規範からの転移が考えられる。それに加え、学校の知り合いのような親しい間柄である相手に対しても、ペルシア語母語話者は誘いや褒めのような儀礼的な発話機能を産出していた。

また、日本語母語話者の儀礼が多い場面においては、大きく二つの特徴を挙げることができる。ひとつは、社会的役割の中での日本語母語話者のマニュアル的な儀礼の表示である。そこでは、社会的義務として、感謝や確認のような儀礼的な発話機能が見られた。次に、ペルシア語母語話者のフェイスを侵害しないための儀礼的な調整である。特に、褒めのストラテジーが多くの発話機能で提示された。そして、全く儀礼的な言語行動が見られなかった場面においては、会話開始部の段階に挨拶が省略されていることが分かった。挨拶が省略されることで、それ以後の言語行動においても、儀礼的な調整は見られない。

第 5 章においては、母語場面と接触場面において、ペルシア語母語話者が儀礼的フレーム内でどのような発話機能や発話行為を用いて相手と儀礼的なインターアクションをするのかを考察した。その結果、以上のような分析結果からペルシア語母語話者の儀礼的インターアクションのストラテジーが明らかとなった。しかし、本論の目標においても特に注目すべきポイントであった、ペルシア語母語話者の接触場面での逸脱を取り扱うことができなかった。そのため次章の第 6 章では、ペルシア語母語話者の接触場面における言語問題の分析を考察する。第 5 章で考察したペルシア語母語話者の母語場面での儀礼的行動の特徴から、接触場面において母語場面の儀礼的規範がどのように影響しているのかを捉える。

その判断には、母語場面の分析以外にも、第三者からの評価も取り入れ、分析を行う。

第 6 章

第 6 章　接触場面における儀礼的な逸脱の分析

前章では、ペルシア語母語話者の儀礼的な言語行動が出現しやすい母語場面と接触場面の箇所に焦点を当て、彼らの言語行動の儀礼的な調整を考察した。

第 6 章においては以上の考察結果を踏まえ、接触場面においても母語規範の影響が発話内で表れやすい儀礼的発話機能は何か、そしてそこにはどのような逸脱が現れるのかを見る。逸脱の認定においては、録音会話で儀礼的発話が行われた前後のディスコースから相手側の「笑い」、「沈黙」、「曖昧な返事」などで逸脱を留意している。また逸脱が留意された箇所を似たような相互行為が見られた母語場面の会話と照らし合わせ、母語規範の影響がペルシア語母語話者の会話に反映しているかどうかも試みる。6.1 と 6.2 においては、このような視点から儀礼的な逸脱を考察する。

また 6.3 では、アキバリ(2016b)の接触場面における第三者の評価についての研究結果を参考に、言語管理の視点を取り入れ、儀礼的な自然会話においてどのような逸脱が報告され、現れやすいのかを把握する。

6.1　母語場面の分析から見られる接触場面での儀礼的な逸脱

6.1.1　スピーチ・イベントにおける逸脱

場面における儀礼に対する高い意識から、ペルシア語母語話者は無意識に儀礼的母語規範が前提となるインターアクションをする傾向が高いと考えられる。6.1.1 節では、「(1)スピーチ・イベントの発話連鎖で見られる逸脱」、「(2)接触場面内の社会文化行動前後の儀礼的行動で見られる逸脱」の発生が母語規範からの転移であるという分析を行う。ここでは、自然会話からの事例を通して、母語規範の転移が接触場面で逸脱を起こす原因であると考えられる個所に注目する。

(1)　スピーチ・イベントの発話連鎖で見られる逸脱

第 5 章では、母語場面・接触場面のいずれにおいても、ペルシア語母語話者が開始連鎖、主要連鎖、そして終了連鎖において儀礼的発話機能を集中的に発話していることが明らかとなった。

(1－1)　開始連鎖と主要連鎖で多く表出される挨拶形式

まず下に挙げる会話(2)の PR(04)(男性）の儀礼的行動に注目し、事例 5 と事例 7 を分析する。

まず、調査者が行ったフォローアップ・インタビューから、PR(04)は、日本語母語話者との会話において親しさを追求するため敬語表現を避けていると報告している。「日本語の敬語表現は堅苦しく相手に対する感情を上手く伝えられない』ことが理由であると言う。従って、敬語の使用はペルシア語母語話者の求めているポジティブ・ポライトネスからかけ離れていると考えられるということになる。一方で PR(04)は、日本語母語話者に対してペルシア語の規範となる儀礼的行動(ターロフ)はしていないと述べていたが、スピーチ・イベントを考察する限り、ペルシア語母語規範からの転移と考えられる行動を取っている。会話(2)では、会話の間[31]や話題の変更が見られる個所で PR(04)の儀礼的挨拶が見られる。事例 5 は、あるコンビニエンスストアの常連客である PR(04)と店長の JP(02)の開始部の挨拶である。

【会話 2-事例 5】コンビニエンスストアの店長と常連客によるスピーチ・イベントでの開始連鎖

事例	ライン番号	話者	発　話　内　容	基本的発話機能	追加的発話機能
5	23	JP(02)	まいど。	**挨拶**	
	24	PR(04)	元気？。	**挨拶**	
	25	JP(02)	はーい。		**応答**
	26		＃＃＃		

JP(02) は「まいど」と客に対する定型的な儀礼的挨拶を発話する。この発話により、儀礼的フレームが作られる可能性が高いと考えられる。一方、本来 PR(04)にはこの挨拶に対して「こんにちは」や「どうも」などといった開始部挨拶を発話することが期待されるが、PR(04)は「元気？」と応答している。母語場面の開始連鎖では「こんにちは」を意味する言葉と「元気ですか？」を意味する言葉がセットで発話されるため、日本語での会話場面でも「元気？」という発話が「こんにちは」や「どうも」に優先して発話されたものと考えられる。また PR(04)の意識調査からも伺えたように、彼は「元気？」と述べ、「です・ます」を省略していることが分かる。事例 5 においては、PR(04)が無意識に母語場面での挨拶の開始部における儀礼的フレーム内でのインターアクションの流れを用いていることが分かる。以上のようなギャップがインターアクション上で逸脱になる原因につながると考えられる。

次の事例 7 では、PR(04)が JP(02) と雑談をしている主要連鎖での儀礼的行動である。

[31] ここでの「間（ま)」とは、会話の中で沈黙ができるその瞬間を示す。誰も話さない一瞬の時間を指している。

【会話 2-事例 7】コンビニエンスストアの店長と常連客によるスピーチ・イベントでの主要連鎖

事例	ライン番号	話者	発　話　内　容	基本的発話機能	追加的発話機能
7	31	PR(04)	店長、あの、元気？、妹だよ。	**挨拶**	
	32	JP(02)	綺麗ですね。	**褒め**	**感情提示**
	33	PR(04)	綺麗だよ～あの、人の者だよ～あの、あまり触るといけないよ（<笑>）。		

インターアクションにおいて会話内の間が確認された後、「相手の健康を尋ねる」発話が産出された。PR(04)は度々店長に「元気？」(発話 31)と尋ねている。会話(2)の他の事例でも、相手の具合を気遣うかのように儀礼的な挨拶を何度も繰り返しているのが観察できる[32]。その挨拶に対して JP(02)からは、特に応答は見られない。また、母語場面でよく見られた挨拶に対する挨拶の儀礼的発話ペアなども見られず、このような言語行動がペルシア語母語話者の母語規範からの転移であると考えられる。つまり、ペルシア語母語話者は儀礼的フレームを作ろうとしているが、日本語母語話者の儀礼への認識が異なるためか儀礼的なフレームが連鎖として作られない。従って、接触場面における健康に関する問いかけは儀礼的な効果を持つのではなく、会話に度々表れるためにインターアクション上の逸脱につながると考えられる。

最後に挙げるのは、フリーマーケットにおける会話(24)の事例 36 である。事例 36 は、イランのハンドメイドの品をフリーマーケットで販売している PR(10)(女性）と、彼女の夫 JP(10)の会話である。PR(10)の友人 JP(16)と JP(15)がブースに訪れた際の開始部の挨拶となる。この事例において母語規範からの転移による問題であると考えられるのは、追加的儀礼発話機能の感情提示の部分である[33]。

[32] 「お母さん元気？」、「ベイビー元気？」などである。
[33] この事例は第 6 章にも挙げてある。

【会話 24-事例 36】友人との久々の再会での開始部挨拶

事例	ライン番号	話者	発話内容	基本的発話機能	追加的発話機能
36	1	PR(10)	あー来た来た。		
	2	JP(10)	*おーーー、ハロー。*	挨拶	感情提示
	3	PR(10)	いらっしゃいませ～（笑い）Hhhh［↑］。	挨拶	
	4	JP(10)	久しぶり～。	挨拶	
	5	PR(10)	*元気～［↑］。*	挨拶	感情提示
	6	JP(15)	あれ、初めましてじゃない？。		
	7	PR(10)	あっ、［U］: :さんに初めてだねー。		
	8	JP(15)	でしょう？。		
	9	JP(16)	えっ、会ってないの、本当？		
	10	JP(16)	もう、1歳だっけ？。		
	11	PR(10)	1歳2ヶ月。		
	12	JP(10)	1歳だね。		
	13	PR(10)	まぁ～あと1週間で、いっいっさい2ヶ月になる。		
	14	PR(10)	*あっ、「JP(16) 」さんを抱きしめたい～:（笑い）。*		感情提示
	15	JP(16)	Ehhha（笑い）。		
	16	PR(10)	*もう、会って＜ないからね＞［＜］。*		感情提示
	17	JP(16)	*＜ひさしぶり＞［＞］だね～。*	挨拶	感情提示
	18	JP(16)	*うんうんうん、久しぶりだね～Uuuu ＜ハグしながらキスする＞＜笑＞。*	挨拶	感情提示
	19	PR(10)	友人だよ。		
	20	RE(01)	あーーー＜笑＞。		
	21	PR(10)	うーーん。		
	22	JP(16)	久しぶりだねー。	挨拶	
	23	JP(10)	お久しぶり。	挨拶	
	24	JP(16)	ユウちゃんだよ、ユウちゃん。		
	25	PR(10)	小学校行ってる↑？。		
	26	PR(10)	ユウちゃん、これくらいだったよ。		
	27	JP(16)	ねーー。		

まず、儀礼的発話として確認できるのは、発話 3 の「いらっしゃいませ～（笑）Hhh［↑］」である。発話 3 では、母語場面でよく見られた感情提示による高い調子での発声が語尾において確認された。この傾向の儀礼は母語場面でも、長期的な付き合いで親しい間柄で多く見られたものである。次に発話 5 で PR(10)は「元気？」と健康について尋ねる挨拶をしている。それに対して PR(16)からは何の応答もなく、発話 6 から発話 13 では別の話題が挨拶として導入されている(PR(10)の子供の年齢を確認する）。次に母語規範の転移が大きく影響していると考えられる発話 14 では、「あっ、「JP（16）」さんを抱きしめたい～（笑）」という、ペルシア語母語話者同士でよく見られるメタ言語的な挨拶のハグやキスを要求している。PR(10)は JP(16)に対する感情を十分に提示していないと判断しており、儀礼的相互行為において何か不足を感じているように読み取れる。あるいは、挨拶を行うにあたって何かが足りないと判断したと考えられる。キスやハグをするという行為は日本の儀礼的規範にはないことを留意したのか、こうした行動に対して両者から笑いが見られる。このやり取りが、母語規範の転移が逸脱を作る可能性が高い箇所となる。PR(10) の感情提示に対して、JP(16)も「久しぶりだね～」と相手の要求に応えている。

(1－2)　主要連鎖部での褒めの表出

次の会話(10)の事例 57 は、母語場面で多く使用された主要連鎖部での褒めの表出個所である。これはあるレストランで、アルバイト店員の PR(07)と PR(13)が、店を訪れた JP(25)(女性）とそのパートナーの PR(15)(男性）と会話をしている場面である。PR(07)と PR(13)のやり取りの流れに注目すると、ペルシア語母語話者が一方的に褒めを開始していることが分かる。

【会話 10-事例 57】レストランにおけるウェトレスの主要連鎖での褒め

事例	ライン番号	話者	発　話　内　容	基本的発話機能	追加的発話機能
57	13	PR(07)	Tsu,ビューティー。	**褒め**	
	14	PR(13)	うーん。		
	15	PR(07)	すごい、ビューティー。	**褒め**	**感情提示**
	16	PR(13)	あっきれい（〈笑〉）。	**褒め**	**感情提示＋配慮**
	17	PR(13)	うん（〈笑〉）。		
	18	PR(07)	すごい、綺麗。	**褒め**	**感情提示**
	19	JP(25)	ありがとうう〈笑いながら〉。	**感謝**	
	20	PR(15)	なんかね～〈笑〉。		
	21	JP(25)	メグシー。	**感謝**	
	22	PR(13)	すごい、本当、イランは、まだ行ってない?。	**褒め**	
	23	PR(15)	イランは、行ってないですね、でも。		
	24	PR(13)	あ～。		
	25	PR(15)	言葉ちょっとしゃべれるでしょう?。		

彼ら 4 人が普通に雑談をしている途中(スピーチ・イベントの主要部）で、少しの間が見られた後に PR(07)が突然 JP(25)に対して「Tsu,ビューティー」(発話 13)と褒めを開始する。この発話 13 以降にペルシア語母語話者による儀礼が増加した理由として、 PR(13)からも褒めが発話 16 で産出されたことが挙げられる(つまり、参加者同士の影響が見られる）。調査者のインタビューに対して、PR(13)は「PR(07) が綺麗と JP(25)に発話していたので、自分もそのように言わないと失礼であると思った。』、「褒めることが相手に対する敬意であるから』と述べており、場面の儀礼増加は参加者の相互的な影響が関係していることが分かった。褒めに対し JP(25)は、「ありがとうう。」(発話 19)、「メグシー」(発話 21）などと感謝をしている。発話 21 の「メグシー」は、ペルシア語の「Merci」を発話したものと考えられ、それに対して PR(13)からはペルシア語が話せるのかと、「すごい」(発話 22）とまた褒めの発話が見られる。この事例においても、JP(25)が綺麗であるという情報提供に対して、年上の者から年下の者に対し儀礼的な褒めが開始している。以上の褒めが儀礼であるという根拠として、間の後に表れたこと、また参加者影響(フォローアップ)で次々に褒めを発話し

ていることが挙げられる。このような初対面の相手に対する一方的な褒めは、儀礼的な要因として表れているが、目標言語の規範からの逸脱になりかねない。

(1－3)　終了連鎖で表出される感謝と誘い

最後に検討する会話(15)の事例 31 は、母語規範に近い儀礼的行動として、終了連鎖で表れる感謝と誘いが見られる。この例は、PR(16)と PR(07)が初対面の JP(09)と一定の時間を過ごした後に別れようとする場面である。

PR(16)と PR(07)は今後も JP(09)との関係の継続を望んでいると考えられ、終了連鎖の儀礼的行動を取っている。

【会話 15-事例 31】初対面の者同士のスピーチ・イベント終了連鎖での挨拶と誘い

事例	ライン番号	話者	発　話　内　容	基本的発話機能	追加的発話機能
31	1	PR(16)	本当にあいりがとうございました。	感謝	
	2	JP(09)	えーこちらこそ。		謙遜＋応答
	3	PR(16)	時間いただいて。		謙遜
	4	JP(09)	いいえー、またいつか、ねー、本当に。		謙遜＋応答
	5	PR(16)	ありがとうございます、あのう、茨城の方にも。	感謝＋誘い	
	6	JP(09)	ねー、家にまで。		
	7	PR(16)	あのう、「PR(07)」さんも茨城にいるので。		
	8	JP(09)	あーすごい。		
	9	PR(16)	はい、また是非。	誘い	
	10	PR(07)	茨城に住んでます、ぜひ来てください。	誘い	感情提示
	11	JP(09)	あー茨城に住んでらっしゃるんですね。		
	12	PR(07)	はい。		
	13	JP(09)	駅のほうですか。		
	14	PR(07)	あー、うん、＃川の近く。		
	15	JP(09)	えっ？		
	16	PR(07)	＃川の。		
	17	JP(09)	あー、＃川の。		
	18	PR(07)	後で、茨城、歴史長い。		
	19	PR(07)	どうぞ、遊びに。	誘い	感情提示
	20	JP(09)	はい、ありがとうございます、ぜひ行かせて頂きます。	感謝	
	21	PR(16)	本当に、すみませんお時間も。	感謝＋謝罪	謙遜＋配慮
	22	JP(09)	いえいえ。		謙遜＋応答
	23	PR(16)	はーい。		
	24	JP(09)	Khaste nabashi。	挨拶	
	25	PR(16)	Merci,Ghorbane shoma。	感謝	
	26	JP(09)	Merci。	感謝	

事例 31 でのインターアクションは一見、日本語の規範に近い儀礼的終了連鎖に見えるが、いくつかの箇所において、ペルシア語の儀礼的規範の転移として考えられる発話機能が産出されている。それらの箇所において、目標規範から逸脱が見られる。まず PR(16)が発話 1 で「本当にあいりがとうございました。」と感謝をするところから、終了連鎖の儀礼的フレームに入っている。次に、発話 4 で JP(09)が「いいえー、またいつか、ねー、本当に。」と応答する。今後また再会しようという意思を見せていると判断したのか、発話 5 から友人である PR(16) と PR(07)が、JP(09)に対して儀礼的な誘いの連鎖を開始する(発話 9、発話 10、発話 19）。最後に JP(09) が、発話 20 で「はい、ありがとうございます、ぜひ行かせて頂きます。」と述べて誘いの連鎖が終了する。このスピーチ・イベントにおいてペルシア語母語話者の儀礼が多くなる理由として、ペルシア語母語話者の参加者同士の影響と、日本語母語話者に対するポジティブ・ポライトネスへの調整の影響が考えられる。実際にフォローアップ・インタビューでは、JP(09)は「初対面なのにここまで誘うのは違和感を感じました」と誘いの連鎖に対し逸脱を留意していた。従って、ペルシア語の母語規範からの誘いの連鎖が接触場面において儀礼的な逸脱を起していることが指摘できる。

(2) 接触場面内の社会文化行動前後の儀礼的行動で見られる逸脱

(2－1)　褒め発話機能の後に表出された誘い

このパターンの誘いは、母語場面の儀礼的フレーム内ではよく見られるパターンであった。

以下の会話(29)の事例 84 でも同じような現象が見られた。この事例では、PR(11)と PR(12)が大学の事務員スタッフの JP(33)と会話をしている儀礼的フレームが確認された、終了連鎖でのインターアクションである。

【会話 29-事例 84】学生と事務員スタッフの終了部挨拶

事例	ライン番号	話者	発　話　内　容	基本的発話機能	追加的発話機能
84	80	PR(11)	はい。		
	81	JP(33)	へー。		
	82	PR(11)	今やっぱ、スタンフォードとかバーキングとか大学の＜こと＞{＜}, ,		
	83	JP(33)	＜いいな～＞{＞}。		感情提示
	84	PR(12)	あ、会いに来てください。	誘い	配慮
	85	JP(33)	〈笑〉。		
	86	JP(33)	あ～うん、できたら、行きます〈笑〉、行きます行きます。	応答	
	87	PR(12)	出張とかで〈笑〉。	誘い	
	88	JP(33)	え～あのあ、あそびに行きます〈笑〉。	応答	
	89	PR(12)	あ～はい＜笑＞。		
	90	PR(11)	〈オッケー〉{〈}。		
	91	PR(12)	〈決まったらね〉{〉}。	応答	
	92	JP(33)	うん〈はい〉{＜}, ,		
	93	PR(11)	〈じゃ、仕事〉{〉}頑張って下さい。	挨拶	感情提示
	94	JP(33)	う～うん、どうも、頑張りたくないけど〈笑〉。	感謝	応答
	95		〈笑〉。		
	96	JP(33)	はいはいはい。		
	97	PR(11)	じゃ、失礼します。	挨拶	
	98	JP(33)	はい。		応答

アメリカにインターシップに行く予定がある PR(11)と PR(12)が、発話 82 において「今やっぱ、スタンフォードとかバーキングとか大学の＜こと＞｛＜｝」とインターシップ先の大学の名前を述べると、JP(33)から「＜いいな～＞｛＞｝」とほぼ同時に褒めと解釈できる発話がなされる。それに留意した PR(12)が、情報提供という行動の直後に褒めの発話機能が見られたことで、儀礼的なインターアクションとして、ペルシア語母語規範の儀礼的行動の調整から誘いを発話する。しかし、「あ、会いに来てください」(発話 84）(つまり「アメリカへ来てください」という意味）と PR (12)に誘われた JP(33)は、戸惑いを感じているのを示すように笑いで応答している。その後も、誘いの発話に対して両者はお互いの発話に対する意思を確認するかのように、再度確認や修正をしている。ここでは、ペルシア語母語話者は相手による褒めの後に、儀礼的フレームを作る傾向に入ることが分かる。この儀礼的行動に対する意識の相異が、インターアクションにおいて逸脱を起こしている可能性が高い。

6.1.2　対人関係における接触場面での逸脱

6.1.2.1　初対面場面における逸脱

一般的に母語場面においては、初対面場面において儀礼的言語行動の発話数が減少することが明らかとなった。唐(2014:113)は、初対面での会話は人間関係形成の出発点であり、コミュニケーション活動において重要な役割を持つと述べている。さらに、日本語母語話者が

初対面の相手やあまり知らない人に対して、より定型的な表現を使用し儀礼的に接する傾向があると述べている。

下の事例は、初対面者同士の医者 JP(30)と患者 PR(14)の開始部挨拶となる。ここでは、ペルシア語母語話者の儀礼的発話数が少ない。

【会話 32-事例 77】医者と患者の開始部挨拶

事例	ライン番号	話者	発　話　内　容	基本的発話機能	追加的発話機能
77	1	JP(30)	はい、〈こんにちはー〉{〈}【【。	挨拶	
	2	PR(14)	】】〈こんにちは～〉{〉}。	挨拶	
	3	JP(30)	こちらどうぞう。	提供	
	4	PR(14)	はーい。		応答
	5	JP(30)	転んじゃったの？。		
	6	PR(14)	はい。		
	7	JP(30)	うん、どこ、ちょっと〈痛いとこ見せて〉{〈}【【。		
	8	PR(14)	】】〈えっと〉{〉}ちょっと待ってて下さいね。		

この事例における医者と患者の開始部挨拶は非常に短い。足を骨折した PR(14)に対して医者の JP(30)は短い挨拶をすませてから、すぐ「転んじゃったの?」(発話 5）と質問を投げかけて本題に入る。儀礼的行為として判断できる挨拶以外に、JP(30)は患者に席を提供する発話として「こちらどうぞう。」と述べるが、それに対する PR(14)の応答は「はーい。」のみであり、儀礼的行動としての感謝などは見られない。事例 77 におけるインターアクションは、ペルシア語母語話者同士の母語規範におけるスーパーマーケットでのやり取りや美容室でのやり取りに見られるインターアクションに近いものがある。母語場面では、感情提示や配慮といった追加的儀礼発話機能の使用によって場面に対する儀礼度が調整されるが、接触場面においてはそのような定型表現がないことから、基本的儀礼発話機能のみでは上手く場面を儀礼的に調整できないことも観察できる。従って、初対面者との接触場面において、ペルシア語母語話者の儀礼的な逸脱が起こる可能性が考えられる。

6.1.2.2　社会的役割関係の理解認識から表れる逸脱

最後に母語規範の影響で逸脱が予想されるのは、ペルシア語母語話者が社会的な役割として(販売者としての責任上）儀礼的な行動を取ることが期待される場面である。

ここでは、以下会話(22)の事例 33 を参照する。この事例では、ペルシア語母語話者が、目標言語規範(日本語規範）の通りに客(社会的役割)に対する儀礼的調整ができていないことが観察される。どちらかと言えば母語規範の影響が接客態度に出てきてしまう傾向があり、そこで逸脱が発生すると考えられる。

【会話 22-事例 33】店員として客に対する役割行動

事例	ライン番号	話者	発　話　内　容	基本的発話機能	追加的発話機能
33	1	PR(10)	いらっしゃいませー。	挨拶	配慮
	2	JP(12)	これは？。		
	3	PR(10)	イランの手作りです。		
	4	JP(12)	うーーん。		
	5	PR(10)	全部ハンドメードで。		
	6	JP(12)	うーーん。		
	7	PR(10)	これ、コーヒーのマッグでー。		
	8	JP(12)	ねーかわいい。	褒め	感情提示
	9	PR(10)	レンジでも大丈夫です。		
	10	JP(12)	うーーん。		
	11	PR(10)	ペインティングは手でやってたんでー。		
	12	JP(12)	へーー。		
	13	PR(10)	でも、水飲んだほうが、いいかもね、青だから夏でー。		
	14	JP(12)	うんうんん。		
	15	PR(10)	気分ね（笑）。		
	16	JP(12)	: :ありがとうございます。	感謝	

まず PR(10)は、接客で必要とされる儀礼的挨拶の「いらっしゃいませー」を発話 1 で産出している。JP(12)が発話 2 において、「これは?」と商品を指しながら一度質問をする。そこから PR(10) は販売している商品について長々と説明を開始する(発話 3、発話 5、発話 7、発話 9、発話 11、発話 13、発話 15）。この商品説明に対して、客である JP（12）は常にあいづちを打っているが、発話 8 でのみ、「ねーかわいい。」と PR(10) を気遣うかのように褒めと判断できる応答をする。あるいはこの褒めが、商品に対する説明を終わらせてほしいという合図である可能性も高い。しかし、この褒めに対して PR(10)からは何の応答も見られない。また、最後に発話 16 で JP(12)が場面を去る際にも PR(10)は「ありがとうございます。」と儀礼的に感謝をしているが、この感謝に対しても応答が見られなかった。終了連鎖の感謝の応答に関しては、母語規範の転移ではなく、母語規範、そして目標言語規範からも逸脱が生じているように思われる。ここでは、中間言語的な規範に近いものが起きていると考えられる。従って、ペルシア語母語話者は、自己が置かれる社会的役割を認識しているものの、どのように自身の責任において相手の発話者との距離を調整し、そこから儀礼につながる態度をとるべきか、判断するのが難しいように読み取れる。従って、接触場面においてペルシア語話者がこのような状況に置かれたときに問題が予測される。

6.2　接触場面で独自に表れたストラテジーから見られる逸脱

6.2.1 日本語母語話者の儀礼的な応答達成の期待から表れる逸脱

このタイプの調整は、ペルシア語母語話者と日本語母語話者の儀礼的フレームへの理解にずれが生じているために起きているものであると考えられる。このパターンでは、インターアクションにおいて儀礼を開始する役割をペルシア語母語話者が持つ。母語場面においては、儀礼の開始合図を一人が発話するともう一方が応答し、発話連鎖が継続していた。しかしターロフのない接触場面においては、日本語母語話者から期待する応答が得られず、次第にペルシア語母語話者の儀礼的発話が拡張し、最終的にペルシア語母語話者がより多くの敬意的表現を含んだ発話をすることになってしまう。この一方的な儀礼的行動が、日本語母語話者に重く捉えられ逆に非儀礼的なものとなる。

(1)　終了連鎖の挨拶における応答達成の調整からの逸脱

以下の会話(5)の事例 50 は、レストランの店長である PR(06)が常連客の JP(20)と JP(21)に対して終了の挨拶をする会話である。

【会話 5-事例 50】レストランにおける店長と常連客との終了部挨拶(1)

事例	ライン番号	話者	発　話　内　容	基本的発話機能	追加的発話機能
50	23	JP(21)	じゃ、もう「PR(06)」さんの分〈笑〉。		
	24	PR(06)	そうそう、それで《笑》私自慢して、こういうのね、作ったからどうですか、ね。		
	25	JP(20)	じゃ、ちょっと、模様の勉強します。		
	26	PR(06)	オッケーです、はい、じゃまた。	挨拶	
	27	RE(01)	はーい。		
	28	PR(06)	来年もよろしくお願いします、*今年本当に、お世話になりました。*	挨拶	謙遜
	29	JP(21)	*なんでも、してませんけど〈私は〉{〈}, ,*		応答＋謙遜
	30	PR(06)	〈来年も〉{〉}、よろしくお願いします。	挨拶	
	31	JP(21)	うん、お願いします。	挨拶	
	32	PR(06)	来ていただけるだけで、*とても嬉しいです。*	感謝	感情提示
	33	JP(21)	〈笑〉。		
	34	PR(06)	すみません、いつもナンパして、ごめんなさい。		
	35		《笑》。		
	36	PR(06)	なんか、ひっかからないけど、来年も〈また、頑張ります～〉{〈}, ,		
	37	JP(21)	〈大丈夫〉{〉}、挨拶がわりだと思って。		
	38	RE(01)	ははは。		

事例 50 の挨拶の終了連鎖の儀礼的フレームが開始したのは、PR(06) の「オッケーです、はい、じゃまた。」(発話 26）という比較的気楽な会話終了合図を述べてからである。

これに続いて、この会話に参加していた調査者 RE(01)も「はーい。」と会話終了の合図を示す。発話 28 でも PR(06)は、「来年もよろしくお願いします、」と引き続き日本語規範に沿った年末の儀礼的挨拶をする。それに加えて、追加的儀礼であるとして考えることのできる発話がが「今年本当に、お世話になりました」の「本当に」である。これらを追加することで儀礼の内容を強調する。次に、JP(21)が PR(06)の発話に対し、自分は何もしていないと述べる(発話 29)。この応答が PR(06)にとっては期待していなかった応答であったためか、発話 30 で続けて「〈来年も〉 {〉 } 、よろしくお願いします。」と述べる。そしてようやく発話 31 で、PR(21)から「うん、お願いします。」と形式化された挨拶が見られる。ここで追加的儀礼として、発話 32 で「来ていただけるだけで、とても嬉しいです。」と相手が店に来てくれることだけでも嬉しいと JP(21)への興味を表示する発話が見られる。それに対し、JP(21)からは笑いが産出される。また JP(21) が、発話 37 での PR(06) の「ナンパ」を挨拶代わりだと思っていることが発言から分かる。このようなやり取りから、これまで、店長である PR(06)が JP(21) に対する儀礼的挨拶を上手く調整できていなかったと考えられる。相手の日本語母語話者から、母語規範に沿った儀礼的な応答を期待するために、連鎖的に相手に感謝し発話している事例である。

(2)　儀礼的フレーム内でのペルシア語へのコードスイッチングから表れる逸脱

次の会話(12)の事例 26 では、儀礼的フレームに入った途端に、日本語からペルシア語へのコードスイッチングが見られる。このようなパターンは他にも見られた。ペルシア語へのコードスイッチングは儀礼に入る合図である。

【会話 12-事例 26】店員が客へプレゼントを贈る場面

事例	ライン番号	話者	発　話　内　容	基本的発話機能	追加的発話機能
26	1	PR(16)	あ～知り合いなんですよ～。		
	2	JP(08)	あ～知り合い、あ～そうなん＜はい＞だ。		
	3	PR(16)	はい、だから、いま、さっきなんか、話をしてて。		
	4	JP(08)	あっ、そうなんだ。		
	5	PR(07)	本欲しい、何の本ほしい？。		
	6	JP(08)	あっ、今、いまちょっと聞いてて。		
	7	PR(07)	Inam aghaye「BRP(01)」Dadan migan Peresente bara Shoma。 これも「BRP(01)」さんがあなたにプレゼントとしてくれました。	**提供**	
	8	JP(08)	Eee, えええ,		
	9	BPR(01)	Khahesh mikonam。 どういたしまして。		**応答**
	10	JP(08)	Sepasgozaram。 ありがとうございます。	**感謝**	
	11	BPR(01)	Khahesh mikonam。 どういたしまして。		**応答**

PR(16)は JP(08)と PR(07)と以前から知り合いであり、JP(08)と PR(07)は初対面である。BPR[34](01)はバザーで店舗を持つペルシア語母語話者であり、日本語ができないようである。しかし、チャリティーバザーに訪れた JP(08) に対するもてなしとして、展示していた子供向けの本を突然無料で提供する。母語場面から考えると、何か物を相手に提供する(プレゼントする）行為は、儀礼的なフレームに入ろうとする箇所であり、儀礼的連鎖が期待される。一方で、JP(08) に対して儀礼をペルシア語で発話した理由は、JP(08)がペルシア語をある程度話せるためである。PR(07)が何の前置きもなく、発話 7 で“Inam aghaye「BPR(01)」Dadan migan Present bara Shoma（和訳：本を BPR(01)があなたにプレゼントしました）”とペルシア語で述べると、JP(08)はびっくりしたように、「えええ」と応答する。この驚きの発話に対し、BPR(01)は「Khahesh mikonam（どういたしまして）」と儀礼的な応答を開始し、その後 JP(08)がかなりかたいペルシア語で“Sepasgozaram（ありがとうございます）”と感謝をする。ここでも再度、BPR(01) からは、“Khahesh mikonam（どういたしまして）”と応答が見られた。この発話の後、JP(08)からの応答は見られず、儀礼的な会話は終了する。

日本語母語話者のこうした短い儀礼的発話が、日本語母語話者の態度が冷たいとペルシア語母語話者が評価してしまう理由のひとつであると考察できる。一方で、何の前置きもなく何かを日本語母語話者に提供するというペルシア語母語話者の行為は、アキバリ(2016b)の研究結果から、日本語母語話者に否定的に評価される理由のひとつであるということが分かっている。ペルシア語母語話者は、自分から何かを提供をしたのにもかかわらず相手から儀礼的な応答が十分に見られないと、その相手に対して否定的な印象を抱く。一方、日本語母語話者は、ペルシア語母語話者からどのような理由で何の前置きもなく物を提供された(プレゼントされた)のかと、呆然としてしまう。この例からは、ペルシア語にコードスイッチングすることによって場面を日本語の規範から母語規範に切り替える傾向が高く、日本語母語話者との儀礼的な問題が現れやすくなることが分かる。また、母語場面では何かの前置きがあるのに対し、接触場面ではそのような調整を上手く行うことができていないことから、接触場面独自のストラテジーが表れる。

6.2.2 依頼場面に現れる儀礼的な逸脱

本調査において、日本語母語話者同士、そしてペルシア語母語話者同士の儀礼場面のいずれにおいても産出されない行動が見られ、接触場面であるからこそ両文化の社会言語規範か

[34] BRP の B は Bazar の略である。

ら離れた儀礼的行動がなされていると判断できる場合がある。このような行動は、言語管理の視点から見ると中間言語に近い現象であると推測できる。

この節では、ペルシア語母語話者が相手に何かを要求する際に、儀礼的な依頼(「お願いします」）を過剰に使用する場面の検討を行う。彼らが過剰に依頼行動を取ることが、接触場面におけるペルシア語母語話者の儀礼的逸脱につながる理由となる。

以下では三つの事例を通して、ペルシア語母語話者がなぜ依頼[35]行動を過剰に取るのかを検討する。これらの場面には、ペルシア語母語話者が客であり、日本語母語話者がレストランのオーナーや店員であるという共通点がある。ペルシア語母語話者が日本語母語話者に何か「要求事項を伝える際」や、「願望を明らかにしようとする時」にこうした儀礼的行動が見られる。

(1)　支払い場面における客としての依頼

会話(28)は、客である PR(13)がレジで会計をしており、外で雨が降っていることからビニール袋を店員の JP(07)に要求している。以下の事例を儀礼的フレームにおけるやり取りと判断した理由として、客と店員という関係は母語場面において儀礼的フレームとして認識されることが多く、ペルシア語母語話者がより改まった言語行動を試みる可能性が高いと考えられるためである。

【会話 28-事例 25】店舗での会計場面

事例	ライン番号	話者	発　話　内　容	基本的発話機能	追加的発話機能
25	1	PR(13)	あっ、お願いします、あっ今日雨なんですけれども。	依頼	
	2	JP(07)	ビニール袋？。		
	3	PR(13)	ビニール袋でお願いしまーす。	依頼	
	4	JP(07)	240円になります。		
	5	PR(13)	はーい、えっと、40あるかもしれなーい。		
	6	PR(13)	はい、お願いしまーす。	依頼	
	7	JP(07)	1000と40円お預かり致します。	確認	配慮
	8	PR(13)	はーい、お願いしまーす。	依頼	
	9	JP(07)	＜YYY＞のカードはよろしいですか。		配慮
	10	PR(13)	えっと、持ってないです、大丈夫でーす。		
	11	JP(07)	500円のお返しですねー。		
	12	PR(13)	はーい。		
	13	PR(13)	ありがとうございます。	感謝	
	14	PR(13)	はい、ありがとうございまーす。	感謝	
	15	JP(07)	###ございましたー。	感謝	
	16	PR(13)	ありがとう、ThankYou、はーい。	感謝	

35 場面によっては感謝の過剰使用も見られる。

早速発話 1 から PR(13)は、依頼を行う。その前に「お願いします」と丁寧な依頼表現を発話する。「あっ、今日雨なんですけれども」と発話した PR(13)の要求をレジにいる JP(07)が留意したためか、発話 2 で「ビニール袋?」と質問をする。その質問に対し、発話 3 で PR(13)は自分の要求を明確に発話し「ビニール袋でお願いしまーす。」と文末の語尾を伸ばしながら、比較的敬意のレベルが弱い依頼を行う。それ以降にも、代金を店員に渡す際や、店員が「1000 と 40 円お預かりいたします。」(発話 7）と儀礼的に金額の確認をした際に、再度「お願いします」(発話 8）と依頼を行う。後半の発話 11 からは、過剰に感謝表現(発話 13、発話 14、発話 16）を発話している。スピーチ・イベントの終了連鎖で、相手(店員）に対してどのように会話を儀礼的に終了すべきかが判断できず、一人で儀礼的な連鎖を形成していると考えられる。また、日本語の儀礼的表現がペルシア語の定型表現と比較して少ないことから、常に同じ表現(ありがとう）を何度も繰り返す結果に至っていると考えられる。

(2)　レストランの客としての注文時における依頼

会話(19)の事例 60 では、レストランの客 PR(02)と PR(03) が店員の JP(24)に料理の注文をしている。

【会話 19-事例 60】レストランで料理を注文する

事例	ライン番号	話者	発　話　内　容	基本的発話機能	追加的発話機能
60	34	PR(02)	あと、Kubideを単品、いっこだけ。		
	35	JP(24)	Kubideの単品。		
	36	PR(02)	はい。		
	37	PR(02)	あとは、ピクロスを3つ下さい。		
	38	JP(24)	＃＃＃だな。		
	39	PR(02)	あと、Dughとコカ・コーラを一個ずつ。		
	40	JP(24)	はい、分かりました。		
	41	PR(02)	Shoma koka budin dige？。 あなたは、コーラでしたよね?。		
	42	JP(24)	Dug,コカ・コーラ？。		
	43	PR(02)	はい、両方ともひとつ。		
	44	JP(24)	はい、分かりました。		
	45	JP(24)	*以上で、よろしいですか？。*	**確認**	**配慮**
	46	PR(02)	*よろしくお願いします。*	**依頼**	**配慮**
	47	PR(03)	*よろしくお願いします。*	**依頼**	**配慮**
	49	JP(24)	ありがとうございます、ありがとうございます＜笑＞。	**感謝**	

PR(02)と PR(03)による儀礼的フレームの開始の合図が見られたのは、料理を JP(24)に注文した後の終了部の箇所である。ここでは、JP(24)が発話 45 において、「以上でよろしいでしょうか?」と儀礼的に確認した後、「よろしくお願いします。」(発話 46、発話 47）という応答が見られた。この応答に対して、発話 49 で JP(24)からは、「ありがとうございます」という感謝の発話が見られるが、発話と同時に多少の笑いも見られる。JP(24) もこの

過剰に改まった注文に逸脱を感じていると考えられる。しかし、調査者が行ったインタビューから PR(02)と PR(03)は、日本で自分たちは日本語の規範に沿って儀礼を調整していると述べており、日本社会ではペルシア語のようなターロフがないことで会話が楽になっているとも述べていた。

この会話においても、スピーチ・イベントが終了する箇所で儀礼的な逸脱が起きていると考えられる。客という立場から、何度も繰り返して「よろしくお願いします」と発話する必要性はなく、依頼の連鎖の繰り返しが接触場面における逸脱を引き起こしていると考えられる。

(3) 商品の値下げに対する依頼

最後の事例は、以上の二つの事例とは多少異なる。ここでの依頼は相手に対する願望が強く感じ取られる発話である。この例は客である PR(01) がある商品の展示会にて、ブース担当者の JP(41)に真珠のネックレスの値下げを依頼している。こちらにおいても、儀礼的フレームに対する認識の異なりから、接触場面において逸脱が現れる。

【会話 11-事例 93】展示会におけるペルシア語母語話者による値下げの依頼

事例	ライン番号	話者	発話内容	基本的発話機能	追加的発話機能
93	52	PR(01)	あのう、申し訳ないけど、わざわざ海外から、来てるんだって。	依頼	謙遜
	53	JP(41)	うーーん。		
	54	PR(01)	あのう今、本当に決めたいんだって。		
	55	JP(41)	はい。		
	56	PR(01)	お願いしたいんですよ。	依頼	謙遜
	57	JP(41)	はい、はい。		
	58	PR(01)	で、もし＃＃＃ですって。		
	59	JP(41)	はい。		
	60	PR(01)	あのう、いろんな買い物して。		
	61	JP(41)	はい。		
	62	PR(01)	で、経済も少し悪いんで。		
	63	JP(41)	えっ〈笑〉		
	64	PR(01)	お願いします。	依頼	
	65	JP(41)	どっち、こっち、どっちがいいの？・		
	66	PR(01)	こっち。		
	67	JP(41)	これ？。		
	68	PR(01)	こっち。		
	69	PR(01)	私から借りてるんだって。		
	70	JP(41)	ちょっと待って、ちょっと待って。		
	71	PR(01)	うんうんん。		
	72	PR(01)	お願いします。	依頼	
	73	JP(41)	ちょっと待って〈笑〉。		
	74	PR(01)	精一杯で頑張って下さい、お願いします。	依頼	
	75	PR(01)	いじめる、つもりの話じゃないから、本当に買うつもりなんですよ。	依頼	
	76	PR(01)	頼みますよこれ、11万6千円だよ、これ！。	依頼	

このスピーチ・イベントにおいて、PR(01)の儀礼的な依頼は発話 52 から開始する。「申し訳ないけど、わざわざ海外から、来てるんだって」と真珠を購入するためにイランから友人が来ており、そのために値下げを依頼している(間接的依頼）。そこから連鎖的に依頼を続ける(発話 56、64、72、74、76)。PR(01)の連鎖的な依頼に対して、JP(41)の戸惑いが発話 63 や発話 73 から読み取れる。このように、PR(01)は儀礼的な形式で依頼を行っているものの、依頼の過剰使用がかえって非儀礼的になっている。また、社会文化行動の観点からは、母語場面の規範では物を相手に売る際に店員から謙遜的な発話が見られるやり取りである(第 5 章参照）。しかし、接触場面では店員の謙遜的な発話がないことも、このような儀礼的依頼の発話の過剰な使用につながっているのではないかと考えられる。

次節からは、母語場面のディスコースにおける分析のみではなく第三者からの評価の視点を取り入れて、ペルシア語母語話者の逸脱が留意された箇所とタイプを検討する。

6.3　第三者評価からみた接触場面での儀礼的な逸脱

本節では、会話当事者(ペルシア語母語話者）の言語管理に注目し、ペルシア語母語話者の社会言語規範からの逸脱を取り上げる。まず、同じ会話を第三者に聞いてもらい、会話内で逸脱であると留意した箇所を指摘してもらった。それらの箇所で留意された逸脱は、ペルシア語母語話者の問題が現れやすい箇所として注目すべき部分となる。

6.3.1　第三者評価者のデータの概要

第三者評価の分析では、会話場面(9)、(11)、(23)、(29)、 (31)の五つの発話を聞いてもらい、そこから儀礼的な逸脱を指摘してもらった。

第三者による逸脱の留意の分析では、4 名の日本語母語話者と 2 名のペルシア語母語話者、合計 6 名の協力を得た。協力を依頼したペルシア語話者は、日本語を十分理解し、相互行為での会話の流れや、目標言語からの逸脱を評価できる者を対象とした。

【表 6－1】　第三者日本語母語話者

日本語母語話者			
第3者評価協力者	性別	年齢	身分
JPE1	男	30代	社会人
JPE2	女	20代	学生
JPE3	男	20代	学生
JPE4	女	20代	学生

【表 6－2】　第三者ペルシア語母語話者

ペルシア語母語話者			
第三者評価協力者	性別	年齢	身分
PRE1	男	20代	社会人
PRE2	男	50代	社会人

6.3.2　第三者評価の分析結果

ここでは、第三者による逸脱への気づきの箇所を検討する。まず、第三者に談話内において「気になった箇所」、「分かりづらい、理解しにくいと留意した箇所」を指摘してもらった。

それぞれの箇所とその数を以下の【表 6－3】に示す。

以下の表は第三者によって留意された逸脱と、それを逸脱判定基準によって分類した結果を示したものである。

【表 6－3】第三者による逸脱の詳細の箇所と数

逸脱種類	逸脱の詳細（コメントを参考に）	逸脱への留意数	総計
話題関係	①話題の前置きがなく本題に入る	7	18
	②会話の終了部での挨拶	5	
	③「誘い」が軽く、本気でない、冗談に聞こえる	4	
	④ペルシア語話者からの話題展開が多い	2	
隣接ペア連鎖	①日本人の情報提供に関しての不適切な応答（『あ～』や『すごい』）	3	11
	②笑いが多く、不自然に捉えられる	3	
	③第1成分と第2成分のあいだに間が見られる	2	
	④日本人の応答がややに冷たい	2	
	⑤第2成分で期待の応答が見られない	1	
対人関係	①日本語規範の上下関係が留意されていない（不適切な表現の使用）	9	17
	②文末の丁寧体の語尾表現の省略	5	
	③年上である日本人の名前にペルシア語の接尾辞を使用	2	
	④談話内でスピーチレベルシフトが多く見られた	1	
話順交換への留意	①ペルシア語発話者が一方的に会話を進める⇒ターン交換ない	4	7
	②日本人が聞き手になり、ペルシア語話者が話し続ける	3	
その他	①談話の流れをペルシア語規範で進行している	3	10
	②ペルシア語話者の感情提示が談話で留意され、聞いていて気持ちがいい	2	
	③ペルシア語話者がなれなれしく会話する	2	
	④ペルシア語話者が日本人の会話のテンポに合わせてとてもいい	1	
	⑤声を張りすぎている	2	

【表 6－3】から、ペルシア語母語話者の逸脱の種類を第三者評価の視点から、大きく五つに分類することができた。以下の点において、ペルシア語母語話者が場面を非儀礼的にする可能性が高くなる。

(1) 話題関係での逸脱：発話者同士の談話内での話題の内容が逸脱として注目される。

(2) 隣接ペア・発話の連鎖からの逸脱：未完成な儀礼的発話ペアや非優先的な応答による逸脱が見られる。

(3) 対人関係での逸脱：インターアクションにおいて、相手との関係と関連する言語行動、社会的立場・社会的関係の認識に関わる逸脱により、言語調整に変化が表れる。

(4) 話順交替の逸脱の留意：ターンを長く持ち続けることで、非儀礼的になる、または話題開始に見られる逸脱が見られる。

(5) その他：談話内のミクロな視点からのみではなく、マクロな視点からの逸脱が留意される場

合がある。

多い順に、話題関係、対人関係からの逸脱が留意されていることが分かる。その中でも最も多く報告されたのは、対人関係の「日本語規範の上下関係からの逸脱」で、次に「話題の前置きがなく突然本題に入る(前置きがなく話題を変える)」であった。また、「文末の丁寧体の語尾表現の省略」や「会話の終了部での挨拶」なども多く逸脱としての指摘が見られる。注意点として、第三者にはどこにどのように注目するのかを説明せず、儀礼的発話機能のみではなく、全体的に場面を非儀礼的にするペルシア語母語話者の逸脱の箇所を示してもらっている。従って、留意点の箇所は分析の枠組みの儀礼的発話機能の枠を超えて、会話全体を対象にしている。

6.3.3　第三者による逸脱の評価と規範

これまでは、分析を通して逸脱がどの箇所で留意されたのかを検討した。この項では、日本語母語話者とペルシア語母語話者がそれぞれの逸脱をどのように評価したのか、またそれぞれが逸脱として判断した規範が何であったのかを検討する。【表 6−4】は、指摘されたそれぞれの逸脱の箇所と逸脱の評価基準として用いた規範を示したものである。日本語の規範のみを知っている日本語母語話者は、日本語の規範からの逸脱を留意し、評価している。そして、両規範を知っているペルシア語話者は、日本語とペルシア語両方の規範から逸脱の留意、また評価をしている。つまり、収集されたスピーチ・イベントに対して第三者の日本語母語話者、ペルシア語母語話者は、一方では共通の規範から逸脱を留意し、他方ではそれぞれ別の規範をもとに逸脱を留意していたと考えることができる。

【表 6−4】　第三者による逸脱への評価と適用された規範

逸脱種類	逸脱の詳細	日本語母語話者			ペルシア語母語話者		
		留意	規範	評価	留意	規範	評価
話題関係	①話題の前置きがなく本題に入る	○	日本語規範	否定的	○	日本語/ ペルシア語規範	否定的
	②会話の終了部での挨拶	○	日本語規範	否定的	○	日本語/ ペルシア語規範	否定的
	③「誘い」が軽く、本気でない、冗談に聞こえる	○	日本語規範	否定的	×	—	—
発話ペア連鎖	①日本人の情報提供に関しての不適切な応答(『あ～』や『すごい』)	○	日本語規範	否定的	×	—	—
	②笑いが多く、不自然に捉えられる	○	日本語規範	否定的	×	—	—
	③日本人の応答がややに冷たい	×	—	—	○	ペルシア語規範	否定的
対人関係	①日本語規範の上下関係が留意されていない(不適切な表現の使用)	○	日本語規範	否定的	○	日本語 規範	否定的
	②文末の丁寧体の語尾表現の省略	○	日本語規範	否定的	○	日本語/ ペルシア語規範	否定的—肯定的
	③年上である日本人の名前にペルシア語の接尾辞を使用	×	—	—	○	ペルシア語規範	否定的—肯定的
話順交換への留意	①イラン人発話者が一方的に会話を進める⇒ターン交換ない	○	日本語規範	否定的	×	—	—
	②日本人が聞き手になり、ペルシア語話者が話し続ける	○	日本語規範	否定的	×	—	—
その他	①談話の流れをペルシア語規範で進行している	×	—	—	○	ペルシア語規範	否定的—肯定的
	②ペルシア語話者の感情提示が談話で留意され、聞いていて気持ちがいい	×	—	—	○	ペルシア語規範	否定的—肯定的
	③ペルシア語話者の会話が馴れ馴れしい	○	日本語規範	否定的	×	—	—
	④ペルシア語話者が日本人の会話のテンポに合わせてとてもいい	×	—	—	○	ペルシア語規範	肯定的
	⑤声を張りすぎている	○	日本語規範	否定的	○	ペルシア語規範	肯定的

ここで、日本語母語話者のみが留意した箇所に関しては、ペルシア語母語話者が母語の影響を受けやすい、あるいは接触場面で逸脱をしがちであると考えられる箇所になる。なぜなら、インターアクションの会話参加者、第三者として会話を評価したペルシア語母語話者のどちらも、それらの箇所に対し儀礼的な逸脱として留意していなかったからである。

6.3.4　逸脱の分析

以下では、事例を通し第三者が逸脱を留意した(問題を指摘した)箇所を検討する。

(1)　日本語母語話者のみによって留意された逸脱

まず、最初の事例は会話(31)の事例 88 である。この事例は、日本語母語話者の第三者のみが逸

脱を留意し、それも否定的なコメントをしたものである。会話は研究室内で行われており、PR(14)が先輩の JP(36)と JP(37)とインターアクションをしている主要部である。

【逸脱の種類】: 日本語母語話者の情報提供に対する不適切な応答(儀礼的発話ペア)

【評価】: 否定的　　【判断規範】: 日本語規範

【会話 31-事例 88】研究室の仲間に対する警告の産出

事例	ライン番号	話者	発話内容	基本的発話機能	追加的発話機能
88	62	PR(14)	皆さん、どこか行かれるんですか？。		
	63	JP(36)	【少し間】私は、実家に帰って、家族と一緒にいます。		
	64	PR(14)	*おーーう、すごい、実家一番だよね＜笑＞。*	褒め	感情提示
	65	PR(14)	実家帰りたいね、本当。		
	66	JP(37)	帰らないの？。		
	67	PR(14)	本当、短いから、お正月の休みは、外国は行けないね。		
	68	JP(37)	二週間くらいにしちゃえばいいのに。		
	69	PR(14)	なんか、この時期高いんですよ、飛行機のチケットとかも。		
	70	JP(37)	あー。		
	71	PR(14)	だから、もう本当2倍くらいしますね。		

第三者評価者である日本語母語話者が最も否定的に評価していたのは、「①日本人の情報提供に対する不適切な応答」であった。事例 88 では、会話で少しの間が見られた時に、PR(14) が話題提供を開始している。質問に対して JP(36)が応答したものの、発話 64 でペルシア語話者が、「おーう、すごい、実家一番だよね＜笑＞。』と返答する。発話 64 は、話者である PR(14)が母語規範の影響から儀礼的発話ペアを成立させているつもりであるものの、日本語母語話者からは否定的に評価されている。「どうして、家族旅行が『すごい』と反応される対象になるのか」、「日本人は、『いいね』などと答える」、「大変なことをしているわけではない」というコメントが見られた。従って、PR(14)はペルシア語の儀礼的規範から「相手に興味を表示する」、または「感情を会話の中で示す」ための発話を応答として行っているが、このような応答は日本語母語話者には肯定的に評価されないようである。つまりこのようなやり取りは、母語の転移からの儀礼的な褒めの使用で逸脱が起きる可能性が高くなる。

(2)　ペルシア語母語話者のみによって留意された逸脱

ペルシア語母語話者のみによって逸脱が留意され、なおかつ肯定的に評価されたものは、対人関係の「③年上である日本人の名前にペルシア語の接尾辞を使用」、その他の「①談話の流れをペ

ルシア語規範で促進」、「②ペルシア語母語話者による感情提示が談話で留意され、聞いていて気持ちがいい」、「③ペルシア語話者が日本人の会話のテンポにあわせている」であった。コメントの内容から、肯定的に評価されたものはペルシア語の儀礼に関する規範が評価の基準となっており、インターアクションで母語規範が重視されていることが分かる。

次の会話(9)の事例 65 は、PR(07)が近所に住む友人である JP(27)の褒めを留意した後に自分の仕事場に誘う場面である(なお PR(13)は PR(07)の友人である）。

【逸脱の種類】: 談話の流れをペルシア語規範で促進している

【評価】: 肯定的　　【判断規範】: ペルシア語規範

【会話 9-事例 65】近所に住む者同士の会話における褒めと誘い[1]

事例	ライン番号	話者	発話内容	基本的発話機能	追加的発話機能
65	97	PR(07)	今も、「Akabab」をイランのレストラン、アルバイト。		
	98	JP(27)	アルバイト？。		
	99	PR(07)	は^。		
	100	PR(07)	週、よんにち。		
	101	JP(27)	あら、いいこと。	褒め	
	102	PR(07)	ー週間、よんにち。		
	103	JP(27)	あら、そう、良かったね。	褒め	
	104	JP(27)	いいとこ、見つかってね。	褒め	
	105	PR(07)	はい、本当に。	応答	
	106	PR(07)	遊びに来て下さい。	誘い	感情提示＋配慮
	107	JP(27)	〈笑〉。		
	108	PR(13)	はーい、ありがとうございます。	感謝	
	109	PR(07)	いつも、ありがとうございます。	感謝	

事例 65 では、PR(07)が「Akabab」というレストランでアルバイトを始めたことについて述べている。その情報提供に対して、発話 103 と 104 で、JP(27)から「あら、そう、良かったね。」、「いいとこ、見つかってね」と褒めが発話される。第三者のペルシア語母語話者が PR(07)の誘いや感謝の発話機能の表出が日本語規範に沿っていないことを留意したが、「これらが会話で見られることで、相手に対して感情を示している」、「会話の流れを聞いていて気持ちがいい」などの肯定的評価を行った。ペルシア語の儀礼的な社会言語規範(ターロフ）では、「相手の発話者を自分の領域に誘う」、または「自分の感情を示す発話連鎖」が礼儀として見なされていることが、上記の第三者のコメントと母語場面の分析から理解される。発話 106、107 では期待される儀

礼的発話ペアが未完成であり、また笑いや間が見られる。また応答がある場合、それは非優先的な応答と考えられ、相手の JP(27) によってなされている。しかし、PR(07)は感情提示や相手に興味を示すことで、会話内においてより親密な人間関係を作ることを重視していると考えられる。しかし、このような誘いや褒めの突然の表出は、会話で問題を起こすことにつながる。

次の会話(31)の事例 87 では、ペルシア語母語話者が突然日本語話者にアドバイス(警告）をしている場面である。警告を受けている相手の日本語話者は、PR(14)の先輩である。

【逸脱の種類】: 談話の流れをペルシア語規範で促進している

【評価】: 肯定的　　【判断規範】: ペルシア語規範

【会話 31-事例 87】日本語母語話者に対するアドバイス

事例	ライン番号	話者	発話内容	基本的発話機能	追加的発話機能
87	44	PR(14)	そうそうそうそう。		
	45	PR(14)	だから、金曜日も、昨日も、ー昨日も来てなくて、<うん>そう、休んだ。		
	46	PR(14)	でも、ちょっとやだ、なんかヤバイ、いろいろ研究のこととか残ってて。		
	47	PR(14)	すっごい、すっごいできなくて。		
	48	JP(36)	*ね、でも、出てこれて良かった。*		感情提示
	49	PR(14)	*うんなね、はい、皆ちゃんと気をつけて下さいね。*	警告	配慮
	50	JP(36)	【間】うん、はい。	応答	
	51	PR(14)	もう、正月も近いし、私スノーボードに行く予定だったんだけど。		
	52	JP(36)	えーー。		
	53	PR(14)	全部、キャンセルされて。		

ここでは、PR(14)による上下関係の意識に対する逸脱が見られる。研究室には助手や先輩がいたにも関わらず、「ちゃんと気をつけてくださいね」と相手に対してペルシア語母語話者から感情提示を行っていることが肯定的に評価された。ペルシア語規範に沿っている発話であるようだが、日本語規範からは逸脱していると考えられる。また発話 50 では、先輩である JP(36)の応答に間やうなずきが確認される。この間やうなずきは、ペルシア語母語話者からすると、期待していた応答とは異なることから、日本語母語話者に冷たく対応されたと認識されてしまうようである。従ってこのような反応は、ペルシア語母語話者によって非儀礼的な応答だと判断される。

ペルシア語母語話者のみに否定的に評価された逸脱には、ペルシア語母語話者が日本語規範を規定規範として考えた際に否定的に評価されたものである。

以下の事例 61 において、逸脱が確認された箇所を検討する。

【逸脱の種類】: 年上の日本人の名前にペルシア語尾の接尾辞を使用(対人関係から）

【評価】: 否定的　　【判断規範】: ペルシア語規範と日本語規範

【会話 9-事例 61】近所に住む者同士の会話における挨拶

事例	ライン番号	話者	発　話　内　容	基本的発話機能	追加的発話機能
61	1	PR(07)	ごめんくださーい、「JP(27)」ジャン。	挨拶	配慮＋感情提示
	2	PR(07)	あ～こんにちは～、おはようございます、私《笑》。	挨拶	
	3	JP(27)	こんにちは。	挨拶	
	4	PR(01)	おはようございます、どうも。	挨拶	
	5	PR(07)	友達。		
	6	JP(27)	あ～＝【。		
	7	PR(13)	】＝こんにちは～。	挨拶	
	8	JP(27)	こんにちは。	挨拶	
	9	PR(13)	はじめまして。	挨拶	
	10	PR(07)	前、こな。		
	11	JP(27)	うん？。		
	12	PR(07)	前、山。		
	13	JP(27)	山？うん。		
	14	PR(07)	こな、買えました。		
	15	PR(13)	〈米〉{〈}。		
	16	PR(01)	〈米〉{〉}。		
	17	PR(07)	米！〈笑〉。		
	18	PR(07)	こめ、こめ。		
	19	JP(27)	うんうんうん。		
	20	PR(07)	今、「JP(27)」ジャン、このこなのこまのエスキーちっと欲しい、売ると思う?。		
	21	JP(27)	米?。		
	22	PR(07)	うん。		

ここでは、会話開始部の挨拶で逸脱の留意が報告されている。相手の JP(27)が PR(07)より年上であるにも関わらず、親しみの感情提示の表れだと判断できるペルシア語の「ジャン」という呼称表現を JP(27)の名前の後に付けていることが分かる。まず、「ちゃん」の代わりに「ジャン」と誤ってペルシア語にコードスイッチングをしていることに加え、そもそも日本語の社会言語規範を基準とする場合には、自分より年上の相手に「ちゃん」という呼称で呼びかけないことが指摘される。しかし、母語場面分析の結果からも明らかになったように、会話開始部における儀礼的フレーム内では、場面をより儀礼的なものとして強調するために、様々な表現の追加的儀礼発話が提示される。しかし、接触場面においては、追加的儀礼発話の表出が逸脱(問題)につながる可能性も高いことがこの事例から分かる。

(3) 日本語母語話者とペルシア語母語話者の両者によって留意された逸脱

次は、逸脱に対する同様の評価(両者が否定的あるいは肯定的に判断している）の事例を検討する。いずれの評価も否定的なものであった。否定的に評価された理由としては、日本語の社会言語規範が評価の基準となっていたことが、評価者のコメントから明らかになっている。ここでは、

会話(29)の事例 84 を見る。

【逸脱の種類】: 会話の終了部での挨拶（話題関係から）

【評価】: 否定的　　【判断規範】: ペルシア語規範と日本語規範

【会話 29-事例 84】学生と大学スタッフの終了部の挨拶

事例	ライン番号	話者	発話内容	基本的発話機能	追加的発話機能
84	80	PR(11)	はい。		
	81	JP(33)	へー。		
	82	PR(11)	今やっぱ、スタンフォードとかバーキングとか大学の＜こと＞{＜}, ,		
	83	JP(33)	*＜いいな～＞{＞}*。		感情提示
	84	PR(12)	*あ、会いに来てください。*	誘い	配慮
	85	JP(33)	〈笑〉。		
	86	JP(33)	あ～うん、できたら、行きます〈笑〉、行きます行きます。		
	87	PR(12)	出張とかで〈笑〉。		
	88	JP(33)	え～あのあ、あそびに行きます〈笑〉。		
	89	PR(12)	あ～はい＜笑＞。		
	90	PR(11)	〈オッケー〉{〈}。		
	91	JP(33)	〈決まったらね〉{〉}。		
	92	JP(33)	うん〈はい〉{〈}, ,		
	93	PR(11)	*〈じゃ、仕事〉{〉}頑張って下さい。*	挨拶	感情提示
	94	JP(33)	*う～うん、どうも、頑張りたくないけど〈笑〉。*	感謝	応答
	95		〈笑〉。		
	96	JP(33)	はいはいはい。		
	97	PR(11)	じゃ、失礼します。	挨拶	
	98	JP(33)	*はい。*		応答

事例 84 では、学生である PR(11)が大学のスタッフの JP(33)に会話の終了部の挨拶をしている。この会話で全ての第三者に留意されたのは、発話 93 の「〈じゃ、仕事〉{} 頑張って下さい』という箇所である。「なぜこのタイミングでいきなりこの話題を導入しているのか」、「目下から目上の相手に労わる表現を用いてはいけない(ライン番号 93)」などのコメントが両者から述べられ、否定的に評価された。また、発話 94 の PR(11)の発話に対して JP(33)が、笑いながら応答していることに関しては、「最後はちょっと笑いがあり不自然に思えた」などの評価も述べられている。ここでの笑いも非優先的な応答であると判断できる。このような日本語母語話者の応答は、ペルシア語母語話者が儀礼的発話ペアから逸脱をしているためだと考えられる。ペルシア語母語規範における会話の終了連鎖では、目上の者に対してある程度の儀礼的発話連鎖をしない限り会話を終了させてはいけないと振る舞う傾向があるため、このような形で会話が終了したものと考えられる。このような理由によって、会話の終了部において問題が表れやすくなる。

次に、会話(9)での事例 63 も、主要連鎖で PR(07)が近所の知り合いである JP(27)に対し、挨拶をしている箇所になる。

【逸脱の種類】：会話の終了部での挨拶（話題関係から）

【評価】：否定的　　【判断規範】：ペルシア語規範と日本語規範

【会話 9-事例 63】主要連鎖で表れた近所同士の挨拶

事例	ライン番号	話者	発　話　内　容	基本的発話機能	追加的発話機能
63			雑談《ペルシア語》		
	71	PR(07)	「JP(27)の娘の名前」ジャン、元気ですか？。	挨拶	感情提示
	72	JP(27)	うん、元気だよ。		応答
	73	PR(07)	あ～、「JP(27)の娘の名前」ジャン？。	挨拶	感情提示
	74	PR(07)	「JP(27)の娘の名前」ジャン？。	挨拶	感情提示
	75	JP(27)	うん、大きくなってね、また重くなった。		応答
	76	PR(07)	あ～。		
	77	PR(07)	「JP(27)」ジャン、ちょっと大丈夫、ちょっと、ちょっと。		遠慮
	78	PR(07)	あ～、これ多い(笑)。		遠慮
	79	PR(13)	これ、多いです。		遠慮
	80	JP(27)	どこへ住んでる？。		
	81	PR(07)	「錦糸町」住んでる。		

事例 63 は、ペルシア語母語話者の応答が不適切であるとして留意され、それが非儀礼的な行動につながるようである。事例 63 の談話では、いくつもの逸脱が報告されているが、ここではペルシア語母語話者の「あ～」に注目する。発話 71 と発話 74 では、PR(07)が相手の娘の健康について尋ねている。この安否の挨拶の発話は、儀礼的な行動の開始として判断できるが、その後の「あ～」は儀礼行動として第三者どちらからも評価されず、最終的には総合的に非儀礼的応答であるとして否定的に判断されている。発話 76 でも同様のことが見られる。つまり、儀礼的な行動を開始するものの、日本語母語話者からの儀礼的な発話に対し、上手く応答ができないというやり取りである。このやり取りのように、ペルシア語母語話者の儀礼的な問題が見られると考えられる。

最後の第三者による接触場面の逸脱に対する異なる評価では、会話(23)から事例 35 を検討する。この事例では、話題関係の「①前置きがなく命題に入る」と「②会話終了部での挨拶」での逸脱が、両者によって否定的に評価されていた。しかし、対人関係の逸脱での「②文末の丁寧体の語尾表現の省略」では、日本語話者には否定的に評価されたが、一部ペルシア語話者には肯定的に評価されている。

【逸脱の種類】：文末の丁寧体の語尾表現の省略（対人関係から）

【評価】：日本語母語話者：否定的、ペルシア語母語話者：肯定的

【判断規範】：日本語母語話者：日本語規範、ペルシア語母語話者：ペルシア語規範

【会話 23-事例 35】初対面者同士でみられる褒めと応答

事例	ライン番号	話者	発　話　内　容	基本的発話機能	追加的発話機能
35	15	JP(13)	全部ハンドメードなんですか？。		
	16	PR(10)	全部、ハンドメードです。		
	17	JP(13)	えーー。		
	18	PR(10)	はい。		
	19	PR(10)	イランのほうで、頼んで。		
	20	JP(13)	頼んで、ええーー。		
	21	PR(10)	はい。		
	22	JP(13)	輸入してるんですね。		
	23	PR(10)	はい。		
	24	JP(13)	あああー。		
	25	JP(14)	*かわいいねー。*	褒め	感情提示
	26	JP(13)	うん。		
	27	PR(10)	ありがとうございます。	感謝	
	28	JP(13)	うん。		
	29	PR(10)	どうぞ見てください。	誘い	
	30	JP(14)	*はい。*		応答
	31	JP(13)	ありがとうございます（笑）。	感謝	
	32	JP(13)	結構日本長いんですか？。ぺらぺらですね。	褒め	
	33	PR(10)	*私、10 年。*		応答
	34	JP(13)	10年、えーーーはー。		
	35	JP(14)	*上手、上手。*	褒め	感情提示
	36	PR(10)	*いいえ。*		応答

＜日本語母語話者による評価＞

日本語話者はマクロな視点から PR(10)の会話の全体の流れを評価している。「ペルシア語話者は話を盛り上げない」、「初対面であるのに、会話がなれなれしく感じられる」、「会話に変な親しさ感がある」と総合的に評価を述べている。

一方、ミクロな視点からの留意では、会話のいくつかの箇所において、発話 33 のように文末に動詞が現れないことが挙げられた。初対面であるにもかかわらず、動詞の省略が関係を馴れ馴れしく見せていることが否定的な評価として報告されていた。

＜ペルシア語母語話者＞

一方ペルシア語話者は、この場面においては、発話者同士の間では上下関係もなく、「文末の動詞省略が関係をより親しくしている」と、その逸脱を肯定的に評価していた。同じく、「会話中に声を張る」も儀礼的なマーカーとして肯定的に評価されていた。これらの場合ではいずれも、ペルシア語の社会言語的規範を評価の基準としていると考えられる。

6.4 考察

以下において、本章の分析の結果をまとめる。

(1)　母語場面の分析から見られる儀礼的な逸脱

ペルシア語母語話者には、大きく二つの段階において、母語場面の影響から儀礼的な逸脱が予想される。

(1)　スピーチ・イベントの連鎖内における母語規範の逸脱

(2)　対人関係における接触場面での逸脱

スピーチの開始連鎖や終了連鎖において、ペルシア語母語話者の母語規範からの転移が多く現れている。特にスピーチ・イベントの終了連鎖では、日本語母語話者からの儀礼的な応答を要求する傾向が強い。ペルシア語母語場面では、会話の終了部において拡張連鎖が見られ、一度ではなく数回に渡り相手と終了の挨拶を繰り返す。ここから、挨拶の連鎖がなく簡単に会話を終了させる接触場面においては、どこで会話が終了したのか判断がつきづらく、終了の調整が困難となる。

社会文化行動では、何らかの情報提供後に儀礼的な褒めが観察された。この発話行動は、ペルシア語母語話者が母語場面で褒めを使用する傾向に近いと考える。これ以外にも、ペルシア語母語話者による褒めは主要連鎖でも観察された。また、主要連鎖や終了連鎖における儀礼的な要素が入る誘いも母語による影響が高い。会話内において相手の健康について繰り返し尋ねる行為も、日本語母語場面では見られない傾向であり、母語からの転移が影響を及ぼしていると考えられる。追加的儀礼発話機能については、非言語的なハグやキス、そして声の調子を高くする話し方も相手に対する儀礼的行動のひとつとして母語からの転移であると考えられる。

対人的関係においては、初対面の相手と会話をする場面では特にペルシア語母語話者の儀礼に対する意識が変化していた。母語場面においても、初対面同士の間では、儀礼の頻度数が減少していた。会話において二者の関係が今後継続する、あるいはそれを期待する場合であれば儀礼の頻度が上がる。しかし、本研究で見た初対面同士の接触場面では、儀礼の頻度が下がっていることが明らかになった。また、商品の販売者の儀礼的行動では、接客を行う者として日本社会で期待される決められた儀礼的行動が見られない。一方で、客が常連客ではなくその店を初めて訪れた者であれば、その頻度はさらに低かった。

このような結果から、今後のペルシア語母語話者への日本語教育では、接触場面において儀礼的機能を過剰に使用することは不適切であるという指導が必要とされると考えられる。

(2)　接触場面独自に作られる儀礼的ストラテジー

接触場面では、独自の儀礼的な言語行動が作られていることが明らかとなった。そこでは目標言語とも異なるストラテジーが見られ、逸脱の発生が考えられる。特に依頼について

は、上述した様に、ひとつの儀礼的発話のツールとして使用しやすい発話であることが明らかになった。そこで、他の儀礼的定型表現がない場合、あるいはペルシア語母語話者が期待する反応が相手の日本語母語話者から見られない場合、同じ発話の機能が過剰に繰り返し使用されている事例が観察された。

(3) 接触場面から見られたターロフがもつ「ディスコース・マーカー」としての役割

接触場面の考察から、ターロフが会話におけるディスコース・マーカーとしての役割を持っていることが明らかとなった。まず、4 章の考察では、母語場面では「話題の変更」、あるいは「新たな話題の導入時」において、そのインターアクションの前に儀礼的行動がなされる傾向があると結論付けられた。一方で接触場面においては、ペルシア語母語話者がうまく「話題の変更」や「話題の導入」をできていないことが第三者の評価により明らかになった(アキバリ 2016b)。そこで、今回収集した事例を検討してみると、話題の導入時において会話の乱れが多く見られる。ここから、ターロフ、いわゆるペルシア語の儀礼的行動は、会話の中においてある種の間が産出され、それによって話題が変更される際のマーカーとしての役割を持っていると考えられる。日本語母語規範では、「ところで」などの表現が話題を変更するマーカーとして用いられる。以上の結果から、母語では使用されていたディスコース・マーカーが接触場面においては使えなくなることから、その箇所において何らかの逸脱が生じるものと考えられる。このような逸脱が場面をより不自然にしてしまうことにつながる。

(4) 談話内における発話機能と第二言語話者による基底規範の重視

本章の分析の結果から、談話の進行状況を見ていくと会話の内容により多くの種類の発話機能[36]が産出されていることが分かった。ペルシア語母語話者の母語場面での会話では、どのような発話機能が産出されてもインターアクションを行う参加者同士の規範は一定である(固定している)。しかし彼らが日本語母語話者と会話をする接触場面では、ひとつの会話内でも発話機能によって使用する規範が異なることが考えられる。例えば接触場面の挨拶に関しては、目標言語規範に沿って儀礼的挨拶がなされるものの、同じ会話の中で感謝をするべき場面になると、母語規範が転移される傾向にある。本章では、挨拶は発話者によって規定規範の調整が異なることについて指摘した。目標言語規範に沿って挨拶をする場合と、ある主要連鎖においては母語規範に沿って挨拶をする場合がある。また同じ会話において、日本語母語話者が相手のペルシア語母語話者を褒める場合母語規範に沿った儀礼的行動をするが、

[36] 本章では、儀礼的な発話機能のみについて考察した。

褒められる側のペルシア語母語話者は儀礼的応答が上手くできず、中間言語的なストラテジーが規範になる傾向もある。感謝は、目標言語規範が基底規範になる傾向があるが、提供に関しては母語規範の影響が表れやすい。つまり、発話機能によって上手く日本語の規範に合わせられるものとそうでないものがあり、規範への対応(意識)は儀礼的機能によって変化すると考えられる。従って、発話機能により逸脱が現れやすいものと、儀礼的な調整がしやすいものに分かれる。

一方で、基底規範の状態について考察すると、同じ空間の同じ時間帯であるにも関わらず、会話をする相手により規範は一定でない可能性も考えられる。

結論としては、ひとつの会話において、儀礼的発話機能の基底規範は混在しており、規範によって接触性に影響されやすいものとあまり影響されないもの、または母語規範の影響が強いものに分類できる。

(5) 第三者の評価から表れた逸脱の留意

分析の結果、以下のことが明らかになった。

第三者からの儀礼的フレーム内の会話の評価を見ると、大きく五つのカテゴリーから特に逸脱が留意されている。

日本語母語話者の第三者によるペルシア語話者の逸脱の評価は、全て否定的であった。そうした逸脱が多く留意された場面の録音データでは、ペルシア語母語話者から誤った質問や応答が特に多く見られた。期待の応答でない発話が見られた箇所に関しては、笑いや間が多く現れ、そこからの 2〜3 ターンでは会話の乱れが見られる。

儀礼的な言語行動に見られた発話機能のうち、褒め、誘い、願望、警告ではターロフの影響が現れている一方で、挨拶や感謝では日本語の規範に近い行動が見られた。従って、母語規範の影響が強い儀礼的発話機能に関しては、日本語規範からの逸脱の可能性が高く、インターアクションにおいて課題が考えられる。

第 7 章

第 7 章　結論

本研究では、日本在住のペルシア語を母語とする上級日本語話者を対象に、これまで注目されてこなかった彼らの日本語母語話者との儀礼的言語行動に焦点を当て、考察を行った。中・長期滞在者である彼らは、日本語を用いた日常生活において豊富な経験を持ちながらも、日本語話者との儀礼的な接触場面では逸脱が留意された。本研究では特に 1. ペルシア語母語話者の儀礼的言語行動(ターロフ)の特徴、2. 母語場面においてのペルシア語母語話者の儀礼的表出箇所とその特徴、3. ペルシア語母語話者と日本語母語話者との接触場面における儀礼的行動の表出箇所と調整方法、4. 日本語における儀礼的接触場面での目標言語からの逸脱と問題を分析対象とした。本章では各章の内容を総括し、本研究の応用範囲と今後の課題について述べる。

7.1 各章の要約とテーマの相関

第 1 章では研究の背景、考えられる論点と課題、そして本研究の目的と意義を述べた。

第 2 章においては、大きくⅠ. 儀礼的コミュニケーションとフレーム、Ⅱ. ペルシア語母語話者の儀礼的コミュニケーション、最後にⅢ. 接触場面研究について先行研究の見解を参考にしつつ、考察を行った。

第 3 章では、母語場面と接触場面のそれぞれの調査期間とその手順(調査の概要)、そして協力者の概要を見た。まずペルシア語母語話者の儀礼的特徴を明らかにするため、母語場面のデータ収集から始めた。その次に分析の枠組みとして、儀礼的フレームとは何か、どのような構造から成り立っているのか、それぞれを概観した。そして、研究全体における儀礼的発話機能の分析方法と接触場面における言語問題の分析について言及した。

第 4 章では、本研究の重要な観点となる「ペルシア語母語話者の儀礼的発話機能の要素とその定義」を記述し、本研究の分析の重要なキーワードとしてこれ以降の章でこの概念を使用した。

第 5 章では、母語場面と接触場面におけるペルシア語母語話者の儀礼的調整を、量的分析と質的分析の両観点から考察した。そして、それぞれの儀礼的発話機能の表出箇所とそのパターン化を試みた。

最後に第 6 章では、接触場面における言語問題の分析を行った。まず、第 5 章で明らかになった母語規範の転移が接触場面において問題を起こしかねない箇所に注目した。次に、第三者評価から見た接触場面での儀礼的問題を考察した。以上の分析から、従来の研究ではほぼ顧みられていなかった点について本分析を通して明らかにすることができた。

7.2　考察の結果

本節では、本研究での主要な位置付けを占める儀礼的な母語場面での研究結果、そして儀礼的な接触場面での研究結果で明らかになったことを総括する。

7.2.1　儀礼的な母語場面における傾向

母語場面においては、自然会話収録の結果から大きく二つの点が明らかとなった。まず、ペルシア語母語話者の儀礼的発話での構造の仕組みである。ペルシア語母語話者の儀礼的な言語行動はどのような要素から成り立っているのか、またそれぞれの要素が互いにどのように関連しているのかを明らかにした。次に、多様な儀礼的母語場面の分析から、ペルシア語母語話者が儀礼を産出する際に、会話内で儀礼的要素をどのように調整して発話しているのかを明らかにした。

7.2.1.1 ペルシア語母語話者の儀礼的言語行動の機能の特徴

儀礼的言語行動調整に存在する多様な発話機能

社会言語規範、社会文化規範である儀礼的言語行動は、「場面性」と「対人関係」に大きく左右される。ペルシア語母語話者は、儀礼の活用が必要であると認識した「場面」(状

況)、そして相手との「関係」において儀礼的言語行動を用いる。彼らは、母語規範によって必要に応じて決められた儀礼的発話機能を使用している。つまり、ペルシア語母語話者の儀礼的言語行動は、多くの儀礼的役割を果たす発話機能の結合によって成り立っている。インターアクションの中で儀礼的言語行動を適切に活用するためには、高い社会言語能力が必要とされる。

本研究では、儀礼的発話機能が大きく二つのタイプに分類できることを明らかにした。

A：基本的儀礼発話機能

B：追加的儀礼発話機能

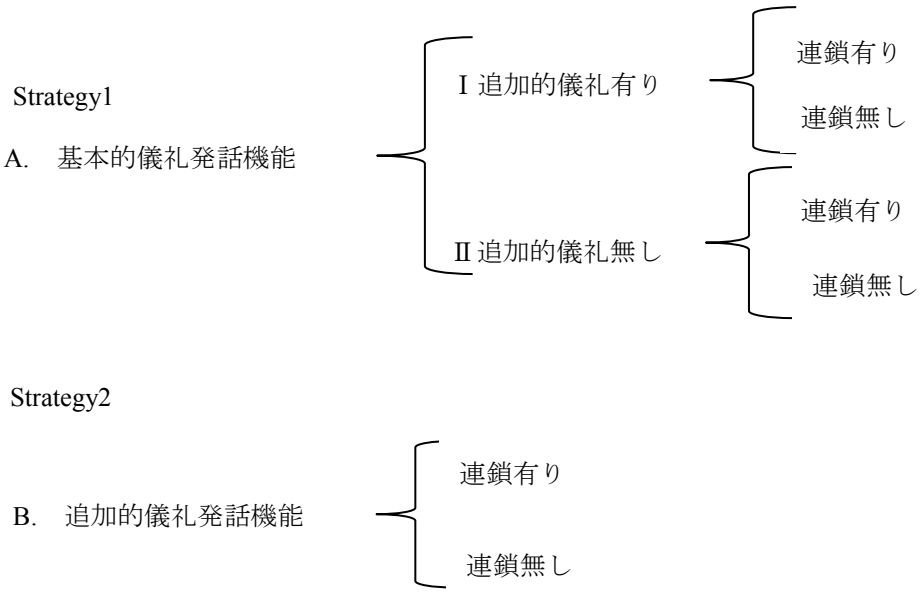
A の基本的儀礼発話機能は、「挨拶-提供-申し出-褒め-誘い-感謝-依頼-謝罪-願望」の九つの発話機能から成り立っている。各発話機能は通常の形式ではなく、儀礼的な役割を担う形式として会話の中で現れるという特徴がある。つまり、ペルシア語母語話者の基本的儀礼発話機能は拡張機能であり、その機能は通常の役割から儀礼的な役割へと変化することになる。また、基本的儀礼発話機能は、単に場におけるインターアクションの雰囲気を緩和する役割のみを担うこともある。

次に、B の追加的儀礼発話機能は、ペルシア語母語話者独特の儀礼的行動として存在している。従来の研究では、ターロフを単に儀礼の表れと画一的に見なす傾向があった。しかし本研究は、ターロフを詳細に分析し、これがいくつかの要素から成り立っていることを明らかにした。追加的儀礼発話機能は、「感情提示-配慮-謙遜-相手の発話者に対する儀礼的応答」の四つの要素から成り立っている。それぞれの機能が会話の中で見られた場合、場面の儀礼度が上がり、インターアクションにおける儀礼がより強調されることになる。追加的儀礼発話機能には定型表現のみならず、「声のトーンを高くする」、「相手へキスやハグをする」、「席から立ち上がる」などの非言語的行動(メタ言語）も含まれている。また、発話においては、いくつかの要素が同時に産出されることもある。

7.2.1.2　会話における儀礼的言語行動の調整ストラテジー

儀礼的発話の文脈構造

まず基本的儀礼発話機能と追加的儀礼発話機能がどのように結合し、ひとつの発話連鎖を作り上げるのについて考察した。その結果は、以下の【図 7-1】のように図示される。



【図 7-1】ペルシア語母語話者の儀礼的構造のストラテジー

ペルシア語母語話者が儀礼的発話機能を使用する際、二つのストラテジーが考えられる。まず、Strategy1 の基本的儀礼発話機能の使用である。次に、Strategy2 の追加的儀礼発話機能のみで儀礼を表現することもある。Strategy1 に関しては、追加的儀礼発話機能を発話に追加するかどうかを選択することが可能である。またもうひとつの追加的選択として、相互行為をする上で会話参加者は、インターアクションにおいて儀礼的発話ペアから成り立つ発話連鎖を継続するかどうかを決めることもできる。発話連鎖の有無の決め手のひとつとなるのが、次に述べる「相手との対人関係」と「儀礼的フレームが表れる場面(公的・私的)」の

要素である。インターアクションにおいて連鎖が機能すれば、順序としてのコンテクストが成立したと考えられる。

儀礼的発話機能の表出箇所

分析結果から、ペルシア語母語話者の儀礼的発話機能が主に産出される箇所(儀礼的行動）を大きく三つに分類した。それは、「1. 決められた社会文化行動の前後に見られる儀礼的行動」、「2. スピーチ・イベント内の連鎖から見られる儀礼的行動」、「3. 儀礼的発話ペアによる儀礼的行動」である。それぞれの箇所において必ずしも全ての儀礼的発話機能が産出されるわけではなく、ある一定の傾向に沿って各儀礼的発話機能が産出されていることが明らかとなった。下の【表 7-1】は、儀礼が産出される 3 パターンにおいて、どのような儀礼的発話機能がどの箇所で見られたのかを示したものである。

【表 7-1】ペルシア語母語話者の母語場面における儀礼的発話機能の表出箇所

<table>
<tr><th colspan="2">儀礼的パターン</th><th>行動</th><th>発話機能</th></tr>
<tr><td rowspan="10">社会文化行動の前後</td><td rowspan="5">直前</td><td>「商品の提供」</td><td rowspan="5">「提供、謝罪、申し出、願望」</td></tr>
<tr><td>「何かを戻す」</td></tr>
<tr><td>「食べ物を食べる」</td></tr>
<tr><td>「提供する前」</td></tr>
<tr><td>「話題展開前」</td></tr>
<tr><td rowspan="5">直後</td><td>「贈り物提供後」</td><td rowspan="5">「謝罪、願望、褒め、誘い」</td></tr>
<tr><td>「情報提供後」</td></tr>
<tr><td>「状況変化後」</td></tr>
<tr><td>「食事終了後」</td></tr>
<tr><td rowspan="3">スピーチイベント内の連鎖</td><td>開始連鎖</td><td colspan="2">「挨拶、感謝、提供、謝罪、褒め、誘い」</td></tr>
<tr><td>主要連鎖</td><td colspan="2">「挨拶、誘い、褒め、謝罪」</td></tr>
<tr><td>終了連鎖</td><td colspan="2">「挨拶、感謝、謝罪、願望、誘い」</td></tr>
<tr><td rowspan="2">儀礼的発話ペアの完成</td><td colspan="3">第一成分：「挨拶、褒め、提供、願望、誘い、感情提示、配慮」</td></tr>
<tr><td colspan="3">第二成分：「挨拶、感謝、提供、申し出、願望、褒め」</td></tr>
</table>

この表には、ペルシア語母語話者がターロフ場面において用いる全ての発話機能が含まれている。本研究において分析した 38 の自然会話と文献調査の結果、ペルシア語話者は上の表にあるような特徴を持った儀礼を産出していることが分かった。その中で最も多く見られた事例は、儀礼的発話ペアとして成り立つ儀礼的パターン(84 事例)である。また、社会文化行動の前後を考察した結果、彼らの行動前での儀礼的調整(49 事例)は、社会文化行動直後

(25 事例)の儀礼的調整よりも多いことが分かった。最後に、母語場面においてペルシア語母語話者は、終了連鎖や主要連鎖よりも開始連鎖において儀礼的調整を行う傾向がある。これは、開始連鎖で儀礼的調整をすることで、やり取りの最初の段階から相手に対するフェイスを調整することに力を入れているためであると考えられる。

対人関係と場面性によるペルシア語母語話者の儀礼的調整

本調査の結果、ペルシア語母語話者は相手に応じて儀礼的な行動を調整していることが明らかとなった。対人関係については、長期的付き合いを持つ相手に対して儀礼が表出される頻度が高い。

また追加的儀礼発話機能の使用も多くなっている。まさにこの追加的儀礼発話機能の存在こそが、儀礼度を向上させる理由につながると考えられる。追加的儀礼発話機能には、感情提示、配慮、謙遜といった、相手との関係に関わる重要な要素が含まれる。特に感情提示の表出に関しては、相手と長期的な付き合いがあり、なおかつ親密であるほど多様なバリエーションで相手への思いを儀礼的なフレーム中で示す傾向がある。Shayli(2003)は、特にターロフが社会におけるコミュニケーション上で果たす役割を分析し、身内に対するターロフは疎遠な相手に対するターロフより出現頻度が極めて低いと述べている。身内が家に訪れる際の接し方はより親しさにあふれており、ターロフ表現は堅苦しいため使われないとしている。しかし本研究結果からは、身近な相手に対しターロフの表出頻度が低くなるのではなく、表出するターロフのタイプが異なるだけであるということが分かる。また、上下関係がターロフの使用に与える影響はそれほど大きくなく、会話参加者同士の間での儀礼的調整はほぼ均一に観察される。儀礼の表出頻度に影響する要因は、発話者の社会的立場が相手より上であるか下であるかということよりも、むしろ会話中のどの箇所で儀礼的なインターアクションが行われるのかということである。上下関係のある者同士の発話でも、彼らの社会的立場よりはスピーチレベルや儀礼が表れた位置が、双方の儀礼的発話機能の産出に影響を及ぼしている。

新たに見出された儀礼的場面(ターロフ場面)の特徴

当初の本研究の目的としては注目していなかったものの、ペルシア語母語話者の儀礼的行動の結果からいくつか新たな事実が明らかとなった。

第一に、儀礼的場面における参加者同士の儀礼の波及である。ペルシア語母語話者の儀礼的場面の特徴として、一人の発話者が誰かに対し儀礼を開始した際、他の参加者からも連鎖的に儀礼が開始されることが挙げられる。

第二に、実質的シフターの存在である。儀礼的発話機能で見られる九つの機能が儀礼的な役割から実質的な役割へ転移する際に、実質的発話に転移するためのシフターが存在することが明らかとなった。実質的シフターとは、例えば「神に誓うから〇〇〇して」のように「神に誓う』、「お願いだから』、本当になどの発話を強調するニュアンスを含む言葉である。実質的シフターの存在を認めることにより、儀礼的発話と実質的発話とを区別するひとつの手掛かりが得られた。このような実質的シフターの習得は、ペルシア語の教育目標の中に今後含まれるべき要素であると考えられる。

7.2.2 儀礼的な接触場面における傾向

母語場面におけるペルシア語母語話者の儀礼的行動の特徴から、彼らの接触場面での儀礼的行動を明らかにした。母語場面に存在する多様な儀礼的発話機能が、日本語母語話者との接触場面ではどのように調整されているのかが重要となる。そこで本節では、「接触場面におけるペルシア語母語話者の儀礼的発話機能(7.2.2.1 節)」と「接触場面でのペルシア語母語話者の言語問題と管理(7.2.2.2 節)」に注目し、明らかになった点を総括する。

7.2.2.1 接触場面におけるペルシア語母語話者の儀礼的発話機能

基本的儀礼発話機能と追加的儀礼発話機能の表れ

接触場面では、母語場面に近い儀礼的発話機能が現れた。それに加え、母語場面では一度も観察されなかった儀礼的発話機能の産出も観察された。

接触場面で見られた基本的儀礼発話機能は、挨拶、感謝、依頼、褒め、誘い、謝罪、警告、提供の順に多い。その中で、依頼や警告における儀礼的発話機能は、母語場面では見られなかった儀礼的調整であることと考えられる。

追加的儀礼発話機能については、ペルシア語母語話者独特の儀礼的規範であると考えられる。しかし、どの言語においても場面をより儀礼的にする役割を持つ追加的儀礼発話機能は様々な形で存在していると考えられる。本研究においてペルシア語母語話者の接触場面での追加的儀礼発話機能は、感情提示、応答(相手の儀礼的発話に対するもの)、配慮、謙遜の順に多く見られた。感情提示に関しては、ペルシア語母語話者に独特の定型表現が多く目標言語(日本語）において対応する表現を見出すことが困難であるため、ペルシア語母語話者が適切に感情提示を行うことは容易ではない。一方で、配慮や謙遜は儀礼的行動として日本語にも存在することから、これらの表出頻度はそれほど下がっていない。

儀礼的基本発話機能の母語性と接触性の特徴

接触場面における儀礼的発話機能を分析した結果、もうひとつの特徴が明らかになった。それは、接触場面で使用される傾向が母語場面での傾向に近い機能と、接触場面で特に使用される傾向のある機能が認められることである。前者を「母語性が高い発話機能」、後者を「接触性が高い発話機能」と定義する。

「母語性が高い発話機能」では目標言語(ここでは日本語）の規範から逸脱した使用が見られやすく、その言語についての教育をどれほど受けていても、目標言語の規範に則った適切な発話機能の習得は容易ではない。挨拶、褒め、誘いの各儀礼的発話機能がこのグループに属する。これらの機能は、接触場面で発話されているにも関わらず、母語規範からの転移が観察された。

一方、「接触性が高い発話機能」には依頼、警告、感謝が属する。これらは、本来ペルシア語母語話者が母語場面で使用していた形式からは離れて目標言語規範に近い言語行動として使用されるもの(完全に母語規範から離れたもの)であり、目標言語での規範に則って適切

に習得される可能性がある。あるいは接触場面に影響され、中間言語的な新たなストラテジーとして表れるもの(多少母語の影響が残るもの)もある。

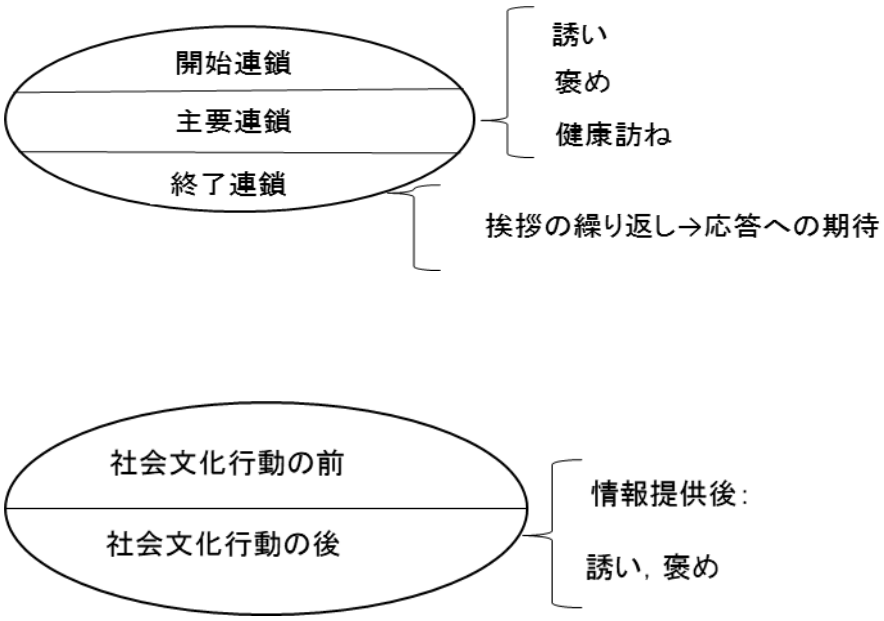
7.2.2.2　接触場面でのペルシア語母語話者の逸脱と管理

ペルシア語母語話者の接触場面における儀礼的発話機能の逸脱の表れ

ペルシア語母語話者は本来場面を儀礼的にすることに高い意識をもつが、日本語で儀礼的行動をする際に様々な逸脱が確認された。本項では、ペルシア語母語話者の儀礼的問題の現れを二つの面から明らかにした。以下、二つのアプローチにより明らかになったことを述べる。

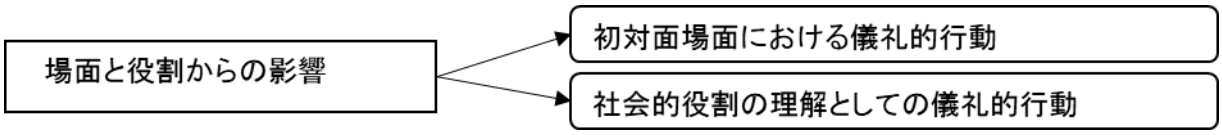
（A）　母語規範転移からの儀礼的な逸脱への留意

まず、儀礼的発話機能が多く確認される箇所に注目する。スピーチ・イベントの連鎖における問題と、社会文化行動の前後に考えられる問題が指摘できる。以下の【図 7-2】では、以上の二つの個所で多く見られた儀礼的発話機能を示したものである。それぞれの発話機能は、過剰に使用されている、または突然会話の中で唐突に使用されている。それぞれの箇所に注目すると、その儀礼的発話機能は母語場面でも同様な状況で現れていたことが分かる。



【図 7-2】ペルシア語母語話者の母語の転移が見られる個所

次に母語規範の影響が問題として見られたのが、対人関係による調整の問題である。特に儀礼的な調整が困難であるように読み取れたのは、初対面者に対する言語行動と、日本語母語話者に対して自分の社会的役割を上手く言語行動の中で表現できない箇所であり、そこでは逸脱が表れている。以下の【図 7-3】は考察内容を示したものである。



【図 7-3】ペルシア語母語話者の母語の転移が見られる個所

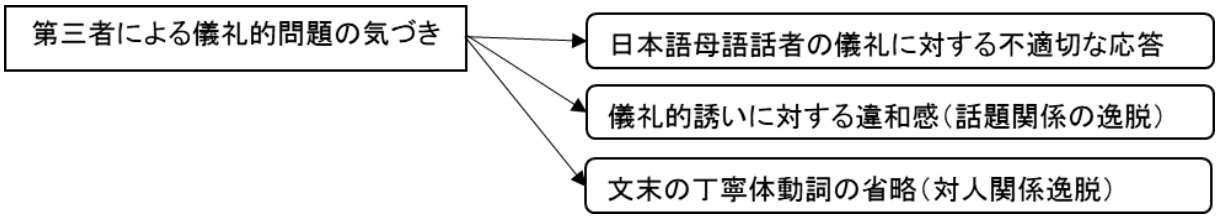
そして最後は、母語規範による影響の可能性も考えられるが接触場面において独自に現れた儀礼的行動である。彼らは儀礼的フレーム内で儀礼的発話機能を使用しているが、そこには目標言語からの逸脱が観察される。一方で母語場面においても、儀礼的フレーム内で発話機能はそこまで過剰に使用されることはない。以上の理由から、接触場面独特の調整であると考えられる。以下の【図 7-4】は、接触場面独特の儀礼的調整を示したものである。このような儀礼的発話機能の産出は接触場面におけるインターアクションの中で問題となる可能性が考えられる。

【図 7－4】接触場面独自にみられる儀礼的調整

（B） 第三者評価による儀礼的言語行動における逸脱への留意

第三者に儀礼的な行動が期待される接触場面の会話の評価を依頼し、該当会話におけるペルシア語母語話者の逸脱を指摘してもらう分析を行った。第三者による逸脱の評価は、儀礼的発話機能のみではなく、他の面にも注目する傾向が見られた。第三者の評価から、接触場面において調整管理の問題で逸脱が起こり得る箇所が新たに明らかとなった。

【図 7-5】では、最も多く指摘された逸脱を示した。



【図 7－5】第三者による主な儀礼的問題

基底規範は談話内で混在的である

儀礼的な母語場面での特徴とアキバリ(2016b)で得られた第三者の評価から、ペルシア語母語話者が儀礼的接触場面の談話においてどのような規範を会話の中で重視しているのかを考察した。その結果、発話者がある談話内において使用する基底規範は発話機能ごとに異なることが分かった。日本語母語話者が目標言語規範(日本語規範)からの逸脱を報告した箇所と同じ所で、ペルシア語話者は母語規範的な言語調整がなされていると見なしている。この場合、その発話機能の基底規範は母語規範であると考えられる。以上のような観点から、談話内において基底規範は発話機能ごとに混在していると考えられる。

新たに接触場面から構築されたターロフの特徴

5 章と 6 章の分析結果から、ターロフは場面を儀礼的にする役割に加え、「ディスコース・マーカー」としての役割も果たしていることが本分析から明らかになった。5 章では、ターロフが会話場面で話題導入や話題変更の前において産出される傾向があることが分かった。それに加え 6 章では、上記の二箇所でペルシア語母語話者による逸脱が留意されていることを述べた。さらに、それぞれの箇所で何の前置きもなく話題が変更され、不自然な会話の進行が見られることをその特徴として挙げた。以上の結果から、ターロフがインターアクションの主要部で産出される場合、それは話題変更のディスコース・マーカーとして機能するということが指摘できる。

7.3　本研究の応用

この項では、本研究の今後の発展の可能性について述べる。本調査の結果は、言語教育の研究分野と共に、ペルシア文学、待遇コミュニケーション研究、そしてマイノリティ・グループ発話者の接触場面研究に貢献することができると考えられるため、その関係について説明する。

言語・会話教育への提案

外国語教育において目標言語を教える際、常に教師が教科書に沿って文法の説明などを行うことが重視される。一方で、会話教育を中心としたインターアクション能力育成のための基本的な理論と具体的な実践例の導入も教育効果を高めることが可能である。このように、目標言語によるコミュニケーション能力をどのように非母語話者に提示するかということは常に課題となる。

その問題を解決するためには、「研究と実践の連帯」が重要となる(中井 2012a)。そのように言語教育課題につながる研究は、「会話分析」などの実際の接触場面での自然会話の分析を行うものである。教師と学習者を間接的に結び付ける役割を持つ要因は、会話分析によって明らかになる、学習者の自然場面での相互行為である。教師は絶えず、学習者のコミュニケーション能力の育成に結びつく教育方法を考えている。接触場面研究の成果が学習者の実際の自然会話での問題点を明らかにすることで、教師に日頃の授業で重視すべき項目を提供することができると考えられる。

会話の種類と機能には様々なタイプが存在する。本研究で注目したものは、講義やスピーチのような交渉会話ではなく、挨拶や謝辞などのような交流会話(Brown and Yule 1983)であった。接触場面における交流会話での問題が明らかにされることで、第二言語習得者の目標言語社会でのインターアクション能力[37](ネウストプニー 1995)の改善が期待できる。特に本研究が注目した儀礼的な行動が期待される場面では、社会言語行動が重要となり、ネウスト

[37] インターアクション能力は、社会文化行動、社会言語行動、言語行動から成り立っている。

プニー(1995)の点火のルール、セッティングのルール、参加者のルール、バラエティのルール、内容のルールが優先的に重視されていた。ターロフ言語行動が産出される場面の特徴を本研究が明らかにしたことにより、ペルシア語学習者やペルシア語の指導に携わっている教育者の儀礼的教育に貢献できると考えられる。それに加え、本研究はペルシア語母語話者と日本語母語話者の儀礼的場面での接触問題も明らかにした。そのため、母語規範の転移が表れやすい場面や発話機能、またはペルシア語母語話者が逸脱を起こす可能性が高い場面や発話機能についての教育指導を改善していくことにもつながる。

ペルシア語・ターロフ待遇コミュニケーションへの貢献

待遇コミュニケーションで重要となる「待遇表現」と「待遇理解」(蒲谷 2003)が、本分析の結果から明らかとなった。これまでペルシア語母語話者の待遇コミュニケーションにおいて必須要素とされる「ターロフ」については多くの研究者が論じていた。しかし、会話分析の手法から「ターロフ表現」(儀礼的発話機能)が実質的にどのようなものであるか、「ターロフに対する理解」がどのようなものであるかは明らかにされてこなかった。ターロフなしではペルシア語話者同士の会話は成り立たないが、その仕組みがどのようなものであるかは従来明らかにされてこなかった。「待遇場面」やそこで表れる「参加者関係」、そしてその「組織の仕組み」が本研究により明らかになった。

「マイノリティ・グループ」話者の日本社会での異文化接触場面での問題

グローバル化の進展と共に、多様な文化背景を持つ人々が日本社会に参入している。それに伴い、多様な言語を母語とする者はマイノリティとして自分たちのコミュニティーを作り、日本社会で生活を営み始める。少数であっても彼らは社会の一員であり、彼らの移住先での言語問題やそれに伴い生じる社会問題に焦点を当てることは重要である。なぜなら、彼らのコミュニケーション能力の改善は、よりよい社会につながる第一歩であるためである。本研究の結果は、イラン出身のペルシア語母語話者のみではなく、アフガニスタン出身者な

どのペルシア語を母語とする日本社会のマイノリティ・グループの持つ問題の改善につながると考えられる。

7.4 今後の課題

本研究では、場面を儀礼的なものにする重要な要素として、儀礼的な役割を持つ発話機能に焦点を当て分析を行った。以下では本研究の今後の課題として考察すべき点について述べる。

(1) 調査協力者のグループ対象

本調査は、中・長期滞在中の日本在住のペルシア語話者に焦点を当てた。彼らは長年の日本での生活経験と実際に学んだ日本語を生かし、相互行為において場面を儀礼的にするよう自分なりの調整をしている。彼らの長年の日本在住経験から、儀礼的行動を目標言語に近付けるように調整している者もいれば、会話の中で母語の転移が多く現れる者もいた。あるいは中間言語として解釈できる儀礼的行動を示す調査対象者もいた。今後は視点の幅を広げ、日本語能力が初級レベルであるペルシア語話者が儀礼場面でどのようなストラテジーを実行しているのかを分析することが今後の課題である。

(2) 儀礼的発話機能以外の儀礼的要素への注目

相互行為で場面が儀礼的になるもうひとつの要素として、文末の形態が指摘できる。本研究で、ペルシア語母語話者と日本語母語話者が儀礼場面で相互行為をしている際、日本語母語話者が儀礼的な発話機能を使用しなくても、発話における文末表現を敬体の形で終了させる傾向が見られた。文末表現を敬体にすることで、相手に対する敬意を表すことになる。それに対しペルシア語母語話者は、儀礼的場面において必ずしも文末表現を敬体にして儀礼を表しているとは限らない。その理由は、ペルシア語話者の母語場面にあるのではないかと考えられる。実際に、アキバリ(2016b)の調査において、ペルシア語母語話者の文末表現が第三者により逸脱として留意されていた。宇佐美(2003)によると、談話レベルからのポライト

ネスの調整では、文末が敬体か常体かにより相手に与える儀礼度が異なるとされている。従って、談話レベルも場面の儀礼度を決める重要な要素であると言える。スピーチレベルにおける文末の変換は、ペルシア語母語話者同士の母語場面でも存在する。しかし、日本語・ペルシア語両言語のスピーチレベルでの文末表現 (文末言語要素、あるいは文末詞)の変換には、異なったストラテジーが存在していると考えられる。

(3) ミクロ視点のみではないマクロな視点への関心

言語習得状況とライフストーリーは、コミュニケーションの調整行動に影響を与える。本研究では、接触場面機会が多いと考えられた日本在住のペルシア語母語話者の自然会話を対象に分析を行った。彼らと日本社会との関わりは個人によりばらつきがあるものの、各調査対象者は日本語を習得し、日本人社会とのコミュ二ティやネットワークを成立させることに成功している。しかし同じペルシア語母語話者でも、来日目的が就労であるか高度専門技術の習得を目指す留学であるかで異なる場合、接触する日本社会の場面や日本人との交際の範囲も異なってくる。接触場面でどのような社会言語規範を重視するのか、どのような言語管理を行うのかに依存する彼らのコミュニケーション能力は、移住先の社会的状況に直接的、あるいは間接的に影響される可能性がある。本研究はマクロな分析としてペルシア語母語話者の来日時期やその目的に触れ、来日時期が彼らの接触する状況を左右する重要な要因であることを示した。またミクロな視点からは、会話分析の手法を用いて、彼らの儀礼的発話の使用傾向に注目した。その傾向には特徴があり、母語の影響などの様々なファクターが彼らの言語選択に影響を及ぼしている。三宅(2010: 193)は、ミクロ社会言語学が、特に言語の使い方や言語変異に社会構造がどのように影響を与えるのかを研究する分野であると述べる一方で、マクロ社会言語学は、社会が言語に関して取る態度や評価、力、政策に関わる事柄に関心を抱く分野であると主張する。遠藤(2011: 39)も同様に、マクロの視点は、言語と国家、言語と民族というような大きなテーマを扱うと述べている。

今後は、日本でのペルシア語母語話者の日本語習得環境が目標言語である日本語での儀礼的な調整にどのように影響を及ぼしているのかという点を研究課題としたい。特に、マクロレベルでの言語習得環境(就労目的で来日する人々に対する言語政策)の影響が、ミクロレベルの彼らのインターアクションにどう反映されるのかを明らかにすることが目的である。

参考文献

《参考文献》

阿部圭子 (1999). 日米のあいさつことばの輪郭 國文學(44)6 學燈社

アキバリ・フーリエ (2014). ペルシア語母語話者と日本語母語話者の接触場面をみてー Taarof(タールフ)場面を中心にー 平成 25 年度千葉大学大学院研究生論文

アキバリ・フーリエ (2015). Taarof(タールフ)場面における談話管理 : ペルシア語母語話者と日本語母語話者の接触場面と内的場面の比較から 接触場面における相互行為の蓄積と評価ー接触場面の言語管理研究(12) 千葉大学人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書 292, pp.15-29.

アキバリ・フーリエ (2016a). ペルシア語母語話者同士の儀礼場面における談話管理 ～タールフ場面を中心に～ 千葉大学人文社会科学研究(32), pp.138-158.

アキバリ・フーリエ (2016b). 日本語母語話者との接触場面におけるペルシア語母語話者の儀礼的な言語行動の管理—第三者視点による評価を参考に— グローバル・コミュニケーション研究所(GCI)紀要(3) , pp.111-139.

アクドーアン・ナプル・大浜るい子(2008). 日本人学生とトルコ人学生の依頼行動の分析—相手配慮の視点から— 世界の日本語教育 18, pp.57-72.

Aliakbar, Dehkhoda علی‌اکبر دهخدا (1947). Loghat-name-ye Dehkhoda pp.41. Tehran:Entesharate daneshgahe

Alirezai,J.(2007).Bosehle Zuzuni Dar Tarikhe Beihaghi.*Yadname Abolfazle Beihaghi*.pp.220-232.

青木保他編 (1988). 儀礼文化と形式的行動 東京大学出版会

アーザルパランド・ソホラーブ (2010). ペルシャ語における敬語表現の研究 —— 日本語の敬語表現の特質を視野に入れて 一橋大学大学院博士学位論文

Asadi,R.(1980).Deference:Persian style. *Anthropological Linguistics*22. pp.221-224.

Austin,J.(1962).How to do things with words. In J.O.Urmston(Eds.),Cambrige:Harvard University Press.

葦原恭子・内海由美子(1987). 談話における文型の機能一一覧表作成の第一歩としてー国立国語研究所 日本語教育長期専門研修修了論文

Bakhshi,M.(1995).Ma Iranian:Zaminekavi Tarikhi va Ejtemai kholghiyate Irani(訳:私たちイラン人:社会と歴史背景から見たイラン人の性格). Tehran:Nashre Nei

Bateni,M. (1975). Masaele zabanshenasi novin,maghale zaban be onvane yek raftare ejtemai. Tehran:enteshare Agah.

Bateson,C.(1977). safa-yi Batin:A Study of the Interrelations of Iranian Ideal Character Types.In Phsycological Dimensions of Near Eastern Studies. Brown.L.C& Itzkowitz.J.K(eds.).Princeton.New Jersey:Drawin Press

Basiri,H.(2012).Chera aghab mande im?Jameshenasiye mardome Iran.(訳:なぜ遅れたか?イラン人の社会学).Tehran:Elm

Beeman,W.O. (1986) .Language,Status and Power in Iran. Bloomington: Indiyana University Press

———————— (1982).Culture,Performance and Communication in Iran.Tokyo:Institute for the Study

of Languages and Cultures of Asia and Africa(ILCAA)

Bloch, Maurice .(1974). Symbols, Song, Dance and Features of Articulation: Is Religion an Extreme Form of Traditional Authority? . *Archives Européennes de Sociologie.* 15 (1) ,pp. 55–84.

Brown,P.&Levinson,S.(1987). Politeness. Some Universals in Language usage: Cambridge University Press.

Brown,G&Yule,G.(1983). Discourse Analysis. Cambridge: Cambridge University Press.

ベイツ・ホッファ他(2012)　異文化理解とコミュニケーション　三修社

Campbell,A.(2006).Iran and deception modalities:The reach of Taqiyya,Kitman,Khodeh and Taarof. *National Observer*(70)

Canale,M.(1983).From cominicative compitance to communicative language pedagogy.In Richards,J.C.&R.Schmidt(Eds.),*Language a Communication*,pp.2-27.

Canale, M. &M. Swain (1980). Theoretical Bases of Communicative Approaches to Second Language Teaching and Testing. *Applied Linguistics,*1(1) ,pp.3-47.

Carmen,N.(2002). A conversation Analytical study of Telephone conversation openings between native and nonnative speaker. *Journal of Pragmatics*(34) ,pp. 1807-1832.

Deutschmann,M.(2003).Apolsogising in British English.doctoral dissertation,Umea University

デジタル大辞泉(2017)

大坊郁夫 (1999). あいさつ行動と非言語的コミュニケーション 學燈社

Ejlali,D.(2004).Zaban baz:Pajuheshi darbaraye Zaban va moderniyat.(訳:言葉使い:モダンと言葉の研究).Tehran:Nashre Markaz

袁帥 (2012).日中接触場面における「ほめ」―中国人日本語学習者の「ほめ」の言語行動と言語問題を中心に― 外来性に関わる通時性と共時性 接触場面の言語管理研究 vol.10　,pp. 107-122.

遠藤織枝(2011). 日本語教育を学ぶ―その歴史から現場まで―第二版 三修社

Fairbrother, L.C. (2000). Analysis of intercultural interaction management within a party situation. *The Japanese Journal of Language in Society.* 2(2), pp.33-42.

Fairbrother,L.C. (2009). Native speakers' application of contact norms in intercultural contact situations with English-speaking,Chinese-speaking and Portuguese-speaking non-native speakers of Japanese. In Nekvapil, J. & Sherman, T. (Eds.), *Language management in contact situations: Perspectives from three continents*. pp.123-150.

フェアブラザーリサ(2003). 接触場面と外来性―日本語母語話者のインターアクション管理の観点から― 千葉大学大学院博士学位論文

Faramarz,T.(2011).Taarof dar ziste ruzmareye Irani.(訳:日常でのイラン人のターロフ).*Barge Farhang*(22), pp.196-209.

Fan, S.K.C. (1994). Contact situations and language management. *Multilingua*(13)3, pp. 237-252.

――――(2003).日本語の外来性(foreigness)：第三者言語接触場面における参加者の日本語規範および規範の管理から 接触場面と日本語教育－ネウストプニーのインパクト　明治書院

ファン,S.K. (1999).非母語語者同士の日本語会話における言語問題 社会言語科学(2)1, pp.37-48.

――― (2000).オーストラリア香港人移民の言語接触と言語問題の一考察：日本人と英語による初対面会話における話者指示の管理から 東南アジアにおける人の移動と文化の創造(１) 宮崎恒二編東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所,pp. 121-147.

――― (2002).対象者の内相を調査する(1)フォローアップ・インタビュー 言語研究のための方法 共編著 J.V. ネウストプニー 宮崎恵司 くろしお出版

――― (2003). 接触場面のタイポロジーと会話参加者の言語管理 国立国語研究(編)日本語総合シラバスの構築と教材開発指針の作成論文集 国立国語研究所

――― (2006). 接触場面のタイポロジーと接触場面研究の課題 国立国語研究所(編) 日本語教育の新たな文脈: 学習環境,接触場面,コミュニケーションの多様性 アルク

Firth,R.(1967). 'Introduction' in Bronislaw Malinowski, A Dairy in the strict sence of the Term,New York, Harcourt,Brace& World,Inc.

フィオナ・ターバット.(2003).日本語学習者の中間言語に関する研究 日本語・日本文化研修プログラム研修レポート集 広島大学留学生センター17, pp.123-129.

Geoffrey N,Leech. (1983). *Principles of Pragmatics* .Longman.

Goffman,Erving .(1967). *Interaction Ritual, Doubleday & Company* (広瀬英彦・安江孝司訳ゴッフマン,E.1986 儀礼としての相互行為) 法政大学出版会

――― (1972). Relations in Public: Microstudies of the Public Order. London: Allen Lane

―――(1974). Frame Analysis: an essay on the organization of experience , Harvard University Press

Gharaimoghadam,A.(2009).*Ensan Shenasi Farhangi(Mardom Shenasiye Farhangi)*.(訳:文化人類学) Entesharate Abjad.

Ghazanfari,M.(2010).Manifestation of "self-lowering"and"other-raising"as politeness strategies in Persian political discourse and the implications for TEFL.presented in *the 5th TEFL conference*,Kuala Lumpur.

Gudykunst, W. B. (1993). Toward a theory of effective interpersonal and intergroup communication: An anxiety/uncertainty management perspective. In R. L. Wiseman & J. Koester (Eds.), *Intercultural communication competence*. Newbury Park, CA: Sage.

Gumperz,J. (1968). The Speechcommunity. *International Enyclopedia of Social Sciences*9.pp.381-386.

Hymes,D.(1967) .Models of the interaction of language and social setting. *Journal of Social Issues* (23) 2. pp. 8–28.

――― .(1972). Models of the interaction of language and social life. In J. Gumperz & D. Hymes (Eds.), *Directions in Sociolinguistics: The Ethnography of Communication.* New York: Holt, Rinehart, Winston.

―――. (1972). On Communicative Competence. In J. B. Pride and J. Holmes (Eds) ,*Sociolinguisitcs: Selected Readings*. Harmondsworth: Penguin Books.

————. (1974). An ethnographic perspective. *New Literary History*, 5, pp. 187-201

平井一弘(2012). コミュニケーションの仕組みとはたらき 本名信行他(編) *異文化理解とコミュニケーション1* 三修社

Hill,D.R.(1997).Setting up an ER programme:practical tips. *The language Teacher*(21) 5.pp.17-20.

井上史雄 (2007).その敬語では恥をかく PHP 研究所

今石幸子(1992). 電話の会話のストラテジー 日本語学(11) 9 明治書院

今村 仁司・今村 真介 (2007). 儀礼のオントロギー人間社会を再生産するもの 講談社

井出祥子 (1986). 日本人とアメリカ人の敬語行動－大学生の場合 南雲堂

石井敏・久米昭元・遠山淳・平井一弘・松本茂・御堂岡潔(2003). 異文化コミュニケーション・ハンドブック 株式会社有斐閣

生駒知・志村明(1993). 英語から日本語へのプラグマティック・トランスファ---「断り」という発話行為について 語用論<特集>日本(79) ,pp.41-52.

岩崎雅美(1999).アフガニスタン人の服飾と衣生活の変容－イラン・パキスタンにおける難民生活の状況からー *Research journal of living science*(55)2,pp. 75-85.

魏春娥(2014).日本人と外国人日本語学習者の敬語使用に関する考察:敬語表現調査の結果の分析を中心に 山口国文 (37) ,pp. 64-52.

جزایری م.الف Jazayeri,M.A.(1999).*Farhangestan*.(訳：イラン百科事典)

Johari,R.(2011).*Motalle Jame shenakhti ye Taarof dar zendegiye ruzmarreye shahre Tehran*(訳:テヘラン市民の日常生活におけるターロフの立ち位置).Shahed University Masters thesis.

徐孟鈴(2007). 依頼会話【先行部】の考察 - 日本語母語場面、台湾人母語場面、日台接触場面のロールプレイデータを比較して - 言葉と文化 8 名古屋大学大学院 国際言語文化研究科,pp. 219-238.

蒲谷 宏・川口義一・坂本 惠 (1996). 依頼表現方略の分析と記述―待遇表現教育への応用に向けて 早稲田大学日本語研究教育センター紀要(5) ,pp. 52-69.

————————— ———— (2002).『待遇表現研究』における『仮説』(1) 国語学研究と資料(25), pp.14-25.

蒲谷宏・待遇表現研究室 (2003).「待遇コミュニケーション」とは何か 早稲田大学日本語教育研究(2) 早稲田大学大学院日本語教育研究科,pp. 55-76.

Kamioka,K.(1998).Iranjinn Kishitsu Oboegaki 中東通信(7) 中東調査会,pp.35-35.

Kasper,G&Blum-Kalka,S.(Eds.)(1993).*Interlanguage Pragmatics*. New York: Oxford University Press.

川口義一・蒲谷宏・坂本惠 (1996). 待遇表現としてのほめ 日本語学(15)5 明治書院,pp. 13-21.

——————————— ———— (1998). 依頼表現方略の分析と記述－待遇表現教育への応用に向けて－ 早稲田大学日本語教育教育センター紀要(5) ,pp. 52-69.
——————————— ———— (1998). 待遇表現としての「ご挨拶」について 早稲田日本語研究(6) ,pp. 53-64.
——————————— ———— (2002). 敬語表現 大修館書店
——————————— ———— (2002).待遇表現としての『誘い』早稲田大学日本語教育教育センター紀要（1） ,pp. 21-30.
川口義一(2002).海外における待遇表現教育の問題点－台湾での研修会における『事前課題』分析(1) 早稲田大学日本語研究教育センター紀要,pp.15-28.
加藤好崇(2006). 接触場面における規範の考察 高見澤孟先生古希記念論文集,pp.48-58.
梶田孝道(1996).外国人労働者と日本 日本放送出版協会
熊取谷哲夫(1992).電話会話の開始と終結における「はい」と「もしもし」と「じゃ」の談話分析 日本語学(11) 9 明治書院
———— (1991).日本語における「感謝」の談話構造と表現配列『すみません』と『ありがとう』の場合－ 広島大学日本語教育学科紀要(1) , pp. 61-67.
熊谷智子 (1993). 研究対象としての謝罪―いくつかの切口について― 日本語学(12) 11, pp.4-12.
菊地康人(2010). 敬語再入門 講談社学術文庫
河路勝(2005). 美しい敬語を見つける本 中経出版
金庚芬(2012). 日本語と韓国語の「ほめ」に関する対照研究 ひつじ書房
金東奎(2004).「手紙文」と「スピーチ」から見た敬語接頭辞「お・ご」を用いた「敬語表現」の使用様相 早稲田大学日本語教育研究(4), pp. 83-102.
金東奎 (2005). 待遇コミュニケーション」における「敬語表現化」に関する考察――待遇表現教育のあり方への視座 早稲田大学日本語教育研究(7), pp.67-80.
金子泰子(1994). 若者と敬語表現 上田女子短期大学紀要(17), pp. 31-45.
金本伊津子(2009).多文化社会におけるエイジングとライフロング・ラーニング：日系の人々が伝えるもの 日本文化人類学会研究大会発表要旨集, pp.93-93.
川上郁雄 (2006).「移動する子供たち」と日本語教育―日本語を母語としない子どもへのことばの教育を考える 明石書店
———— (2009a).「移動する子供たち」との考える力とリテラシー―主体性の年少者日本語教育学 明石書店
木暮律子 (2002). 母語場面と接触場面の会話における話者交替－話者交替をめぐる概念の整理と発話権の取得－ 言葉と文化(3), pp.163-180.
倉持益子 (2008).「お疲れさま」系あいさつの意味の希薄化と拡大―職場での使い方を中心に― 明海日本語(13), pp.65-74.

――――― (2013). あいさつ言葉の変化 明海日本語(18),pp.259-284.

Koutlaki,S.A.(2002). Offers and expressions of thanks as face enhancing acts:taarof in Persian. *Journal of Pragmatics*(34) ,pp.1733-1756.

黒柳恒男 (1998). ペ日・日ペ 現代ペルシア語辞典　大学書林

倉真一 (1995). 景気後退下における在日イラン人:出身階級・生活機会およびその獲得戦略を中心に　年報社会学論集(8),pp.191-202.

北原保雄 (2004). 問題な日本語 大修館書店

小玉安恵 (1996). 対談インタビューにおけるほめの機能(1)－会話者の役割とほめの談話における－という観点から　日本語学(15)5,pp.59-67.

高民定 (2006).文法能力の規範についての一考察－接触場面の受身の生成を中心に－多文化共生社会における言語管理－接触場面の言語管理研究(4) 千葉大学大学院社会文化科学研究科研究プロジェクト報告書,pp.91-102.

曲志強 (2009). 日本語と中国語のあいさつ表現について－大人と子供の間の談話分析 山口国文(32),PP. 96-108.

曲志強・林伸一 (2010). 日本語と中国語のあいさつ表現について―外国人研究者の特別授業より―　山口国文 (33), pp.52－37.

喬曉筠 (2015). 台湾人日本語学習者のビジネス会話に見られる特徴:日本語母語話者の評価から 橋大学国際教育センター紀要(6),pp. 65-78.

北嘉正範 (1981). 挨拶の言語学 月刊言語(10) 大修館書店

笠井昇 (2013).日本語の表現：敬語の指導をめぐって　太成学院大学紀要(15),pp.37-41.

Laver,J. (1975).Communicativefunctionsofphaticcommunication In Kendon ,Adam ,Harris,RichardM &Key, Mary R(Eds.), *The organization　ofbehaviorinface・ to−faceinteraction*.pp.215−238. TheHague：Mouton

Levinson, C.(1983). *Pragmatics*. Cambrige University Press.(S.C.レヴィンソン/安井捻・奥田夏子(訳)1990『英語語用論』研究社出版)

Leech,G & Svartvik,J (1975), *A Communicative Grammar of English*. London: Longman. (現代英語文法 コミュニケーション編 (池上恵子訳、紀伊國屋書店、1998 年))

Leech,G. (1983).*Principals of pragmatics*. London:Longman.

Limbert,W(1987).*Iran at War with History*. Boalder:Westview Press.

Lipset,S.M.(Submitted).*American exceptionalism in Japanese perspective.*

Malinowski, B. (1922). *Argonauts of the western pacific*. New York: Dutton.

Matsumoto,Y.(1988).Re-examination of the universality of face:politeness phenomena in Japanese. *Journal of Pragmatics*(12),pp.403-426.

松木啓子(2003b).スピーチ・イベント　小池生夫他(編)　応用言語学辞典　研究社
丸山明代 (1996).男と女とほめ―大学キャンパスにおけるほめ行動の社会言語的分析―　日本語学(15)5,pp.68-80.
水野かほる(1996). 『依頼』の言語行動における中間言語語用論：中国人日本語学習者の場合　言語文化論集(17)2, pp.91-106.
南不二男 (1972). 日常会話の構造－とくにその単位について」 言語(1) 2　大修館書店
――― (1974). 現代日本語の構造　大修館書店
――― (1981). 日常会話の話題の推移－松江テクストを資料として 方言学叢Ⅰ　三省堂.
――― (1983). 談話の研究と教育の必要性 談話の研究と教育Ⅰ 国立国語研究所 1－5.
宮原哲(2006).入門コミュニケーション論　松柏社
宮崎里司,ヘレン・マリオット共編 (2003). 接触場面と日本語教育 ―ネウストプニーのインパクト― 明治書院
宮崎里司(1998). 第二言語習得理論における調整、意味交渉及びインプット 稲田大学日本語研究教育紀要(11) ,pp.177-190.
宮岡弥生・玉岡賀津雄 (2000). 中国人日本語学習者の敬語習得 平成 12 年度 日本語教育学会秋季大会予稿集 134･141 名古屋外国語大学,pp.111-124.
Miyakawa,K.(1996).*Taarofate Mardome Iran dar shahre Tehran*.(訳:テヘランに住むイラン人のターロフについて) テヘラン大学修士学位論文
三宅和子 (1993). 感謝の意味でつかわれる詫び表現の選択メカニズム 筑波大学留学生センター日本語教育論集(8) ,pp.19-38.
――― (1994). 感謝の対照研究：日英対照研究－文化社会を反映する言語行動－　日本語学　7 月号　明治書院
三宅正隆(2010). 言語変異をめぐる視点：Ⅰ－言語学からみた社会言語学 立命館国際研究(22)3,pp.193‒218.
森川知史 (1983). 敬語に関する私見－話し手の評価的判断の側面から－ 佐賀籠谷短期大学(29), pp.137-148.
Moshiri, M.(1996).*Iran dar Ahde Bastan*.(訳:古代イラン).Nashre Eshraghi
Morita,T.(2003).Iranian immigrant workers in Japan and their networks　in Goodman, Roger, *Global Japan: The Experience of Japan's New Immigrant and Overseas Communities*, Routledge,pp.159-164.
Moosavi,S.M.(1986).A Sociolinguistic Analysis of the Persian System of Taarof and its Implications for the Teaching of Farsi　University of Texsas,Ph.D Disseration
村岡英裕 (2006). 接触場面における社会文化管理プロセス―異文化の中で暮らすとはどのようなことか― 国立国語研究所(編) 日本語教育の新たな文脈―学習環境, 接触場面,コミュニケーションの多様性― アルク

――― (2009). 接触場面のコミュニケーション―日本に住む外国人の言語管理を通してみた言語問題の所在― 日本語学 29(14),pp.153-169

――― (2010). 接触場面における習慣化された言語管理はどのように記述されるべきか：類型論的アプローチについて 村岡英裕(編) 接触場面の変容と言語管理―接触場面の言語管理研究(8) 千葉大学大学院人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書 228 pp.47-59 千葉大学大学院人文社会科学研究科

――― (2016). 接触場面研究のパラダイム 村岡英裕他(編) 接触場面の言語学 母語話者・非母語話者から多言語話者へ ココ出版

南部みゆき (2010). ポライトネス研究における概念と理論的背景のまとめ 熊本大学社会文学研究(8) 熊本大学,pp.205−229.

Najafi,A.(2009).*Gunehaye Zabane Farsi*.(訳:ペルシア語の種類)Tehran:Nilufar .

Nemeth,A.(2008). Taarof as a Writers Tool in Twentieth Century Persian Literary Prose. *Iranian Studies*(41)2,pp.183-211.

Neustupný, J.V. (1985). Language norms in Australian-Japanese contact situations. In Clyne, M. (ed.) *meeting place of languages*, pp.161-170. Australia:Pacific Linguistics.

――― (1973) An outline of a theory of language problems (First draft, 1973. Paper prepared for the section Language Planning, VIIIth World Congress of Sociology, Toronto, August pp.16-24, 1974.)

――― (1994) Problems of English contact discourse and language planning. In Kandiah, T. and Kwan-Terry, J. (ed.), *English and language planning: A Southeast Asian contribution*. pp.50-69, Singapore: Academic Press.

――― (2005). Foreigners and the Japanese in contact situations: Evaluation of norm deviations. T*he International Journal of the Sociology of Language* 175/176, pp. 307-323.

ネウストプニー, J.V. (1983).日本語教育と二重文化教育 日本語教育(49),pp.13-24.

――― (1991). 新しい日本語教育のために 世界の日本語教育1 ,pp.1-14.

――― (1994). 日本研究の方法論―データ収集の段階― 得兼山論業(28)

――― (1995). 日本語教育と言語管理 阪大日本語研究(7), pp.67- 82.

――― (1995). 新しい日本語教育のために 大修館書店

―――(1997).日本語教育とネットワークの考え方―ネットワーク研究のためのガイド 日本語教育学会ネットワーク調査研究委員 (編) 国内の日本語教育ネットワーク作りに関する調査研究―最終報告書, pp.181-196. 平成 8 年文化庁日本語教育研究委嘱.

ネウストプニー, J.V.&宮崎里司編著 (2002). 言語研究の方法 : 言語学・日本語学・日本語教育学に携わる人のために くろしお出版刊

中西太郎(2007). あいさつ表現における待遇関係把握―社会的属性差の観点から―　言語科学論集(11),pp.23-34.
――― (2008).『あいさつ』における言語運用上の待遇関係把握　社会言語科学(11)1,ppP.76-90.
中村久美(2008). 地域コミュニティとしてのふれあい・いきいきサロンの評価とそのあり方（高齢者と地域まちづくり,都市計画）　学術講演梗概集(2008),pp.25-26.
Nafisi,S(2004).*Taghire Sabke Zandegi va Tahavolate Naslhaye Ejtemai dar Iran*(訳:イランの生活変化とジェネレーションギャップ).Mobin Project.
ナジェージダ・ウェインベルグ (2016). 日本のビジネス場面のほめ言葉 ―日露ビジネス関係者の視点から　― 日本語・日本学研究(6) ,pp.163-182 東京外国語大学国際日本研究
西原鈴子(1994). 感謝に関する一考察 日本語学(7)　明治書院
西阪仰・串田秀也・熊谷智子 (2008). 相互行為における言語使用: 会話データを用いた研究 日本社会言語科学(10)2),pp.13-15.
野元菊雄 (1985).あいさつ言葉の原理　日本語学(4)8
生天目知美・劉雅静・大和啓子 (2012). 日中韓の友人会話における依頼の談話展開 筑波応用言語学研究(19),pp.15-29.
任麗潔 (2012). 話し言葉における「~てさしあげる」に関する考察 : 映画・テレビドラマの使用例と母語話者への調査に基づいて 早稲田日本語研究(21), pp. 25-36.
――― (2014). 中国の大学専攻日本語教育における敬語教育に関する研究 : 敬語に関する新たな記述を改善の第一歩に 日本語教育研究 (60), pp.72-96.
岡部悦子(2001). 別れの『あいさつ』に関する一考察：日本語教育の視点からー 国語学研究と資料(24), pp.29-42.
――― (2001). 口頭発表場面における敬語の機能－日本語母語話者と日本語学習者との比較からー 早稲田大学研究(9),pp.25-36.
Ohno,M.(1981).*Iran no sekai:Iran Noson no Seikatsu* 小玉社
岡本能里子 (1990). 電話による会話終結の研究　日本語教育(72)　日本語教育学会
岡野喜美子 (1999). 初級および中,上級における待遇表現教育―Total Japanese を中心にして―　講座日本語教育(35), pp.1-18.
―――――(2000). 留学生の待遇表現使用－発話調査の結果からー　早稲田大学日本語教育センター紀要(13),pp.1-13.
小川誉子美・前田直子 (2003). 日本語文法演習　敬語を中心とした－待遇表現－ スリーエーネットワーク
大野敬代(2002). Politness ストラテジーとしての「ほめ」とその後続要素について 早稲田大学大学院教育学研究科紀要別冊(9),pp.187-197. 早稲田大学大学院教育学研究科

――――(2003). 人間関係からみた「ほめ」とその工夫についてーシナリオにおける「働きかけ表現」として 早稲田大学大学院教育学研究科紀要別冊(10)2,pp.187-197. 早稲田大学大学院教育学研究科

――――(2003).シナリオ談話における「形式ほめ」の特徴 日本語論叢 (4) 日本語論叢の会

――――(2010). 日本語談話における「働きかけ」と「わきまえ」の研究：目上に対する「ほめ」と「謙遜」の分析を中心に 早稲田大学博士学位論文

王玉明 (2006). 接触場面における不一致への応答ー中国人学習者と日本語母語話者の相違". 多文化共生社会における言語管理 ― 接触場面の言語管理研究 (4) 村岡英裕編 千葉大学大学院社会文化科学研究科研究プロジェクト報告書(129), pp.69-78. 千葉大学人文社会科学研究科.

尾崎明人・青木直子･土岐哲(2001). 日本語教育学を学ぶ人のために 世界思想社

尾崎学 (2004). 外国人に対する待遇表現教育の理論ー表現にいたる仮定の重要性についてー日本語学(30) ,pp.47-57.

小野和信(2010). 日本人とブラジル人における依頼表現の対照研究: 非母語話者と母語話者の接触場面　葛野(14) ,pp.18-45. 京都外国語大学

Radcliffe-Brown,A.R. (1922). *The Andaman Islanders*. Cambridge:The University Press.

Rafee,P(1992).B*arkhi didgah dar baraye Masaelle Melli*.(訳:国に関するいくつかの事情).Entesharate Andishe No.

Rawls,A.(2002). Editors introduction, in H.Garfinkel(ed.),Ethnomethodologys Program:Working out Durkheims Aphorism. Lanham,MD: Rowman and Littlefield.

Rezaei bagh bidi, H. (2009).Iranian and Indian Languages in Contact. *Journal of the Research Institute for World Languages* (1) 1,pp.5-48.

Rezai,N.(2012).A contrastive study of compliment responses among Australian English and Iranian Persian speakers.Social and behavior . *Sciences*(70),pp.61-66.

劉佳 (2012). 会話における割り込みについての分析：日本語母語話者と中国人日本語学習者との会話の特報 異文化コミュニケーション研究(24),pp.1-24.

李欣 (1993).日本語の敬語について―中国の日本語学習者と中国で日本語を教える人のために― 言語学論叢(12),pp.79-91.

林春 (2011). 敬語教育における学習者の現状分析--中国の大学における日本語学習者を対象に　滋賀大国文 (48), pp.25-40.

Sacks,H. Schegloff, E. A. ,& Jefferson, G. (1974). A simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation. *Language*(50). pp.696-735.

Sacks,H.&Schegloff,E. A. (1979).*Two Preferences in the Organization of Reference to Persons in Conversation and Their Interaction*. NewYork: Irvington Publishers.

Scheglof,E.& Sacks,H. (1972). Opening upclosings. *Semiotica*(8),pp.289-327.

Safarmighadam,A. (2010). Moghayese ye adab dar zabanhaye Kore i va Farsi. *Faslname tahghighate farhangi*(2) 1,pp.77-97.

サーサス・ジョージ&サックス・ハーヴィー&ガーフィンケル・ハロルド他 (1989). 日常性の解倍学ー知と会話 北澤裕・西阪仰(訳) マルジュ社

サジーワニー ・ディサーナーヤカ(2008). 家庭訪問における挨拶行動 --日本語母語話者とシンハラ語母語話者の別れの場面の事例-- 千葉大学人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書(6) ,pp.47-51.

Sahragard,R. (2002). A cultural Script Analysis of Politeness feature in Persian, pp.399-423.

Salmani,M.A.(2006).A comparative sociopragmatic osensible invitations in English and farsi. *Speech Communication*(48),pp.903-912.

Sarukhani,B.(1995).*Moghadamei bar Jameshenasiye Khanevade*.(訳 : 家 族 社 会 学 の 基 礎).Tehran:Nashre Surush.

佐藤郁哉(1992). フィールドワーク―書を持って街へ出よう 新曜社

榊原佳苗 (2001). 共通言語接触場面における帰国生の挨拶行動 千葉大学日本文化論叢 (2)

坂本勉(1996).トルコ民族主義 講談社現代新書

坂本蕃 (1999). 待遇表現としての「あいさつ」森田良行教授古希記念論文集刊行全編 El 本番研究と日本語教育

坂本 清恵 (1997).「いらして」の使用について 埼玉女子短期大学研究紀要(8), pp.39-45.

坂本惠・蒲谷宏 (1995).「申し出」表現について 国語学研究と資料(19) , pp.25-35.

沢木幹栄･杉戸清 (1999). 世界のあいさつ言葉の対照研究に向けてーあいさつ言葉への視点 国文学解釈と教材の研究(44)6,pp.126-138.

Searle,J. (1975). Indirect speech acts. In *Syntax and Semantics3: Speech Acts*, P. Cole & J. L. Morgan(eds.). New York: Academic Press

Selinker,L.(1972) .Interlanguage. *IRAL*, 10 (3), pp.209-231. (Reprinted in J.C. Richards (ed.) 1974, Error analysis: Perspectives on second language acquisition. Longman.)

鈴木孝夫 (1975). ことばと社会 中央公論社

Simin,D.(2001). *Be ki Salam konam?* . Entesharate Kharazmi(5)

Shamloo,A.(2001).Ketabe kuche (jamme loghat,estelahat va zarbolmasal haye farsi),daftare avval,harfe te,entesharate maziyar,chape 1

Shayli, A.(2003). *Taarof dar farhange mardome Iran*, Payanname.

清水昭俊(1988). 儀礼の外延 儀礼ー文化と形式的行動 青木保・黒田悦子（編）東京大学出版会

島田裕巳 (1991). 異文化とコミュニケーションーオタク国家・日本の危機 株式会社日本評論社

鈴木聡志(2009). 会話分析･ディスコース分析 新曜社.

住田 幾子(1992). 日本語のお詫びのあいさつことば：女子学生の言語生活における談話資料をもとにして 日本文学研究(28) 梅光学院大学,pp.235-243.

高田久美子(1998). 詫び表現からみた日本人の言語行動ー詫びと感謝の心理的接点 福岡YMCA 日本語教育論集, pp.87-113.

Tambiah, Stanley Je yaraja. (1985). *Culture, Thought, and Social Action: An Anthropological Perspective*. Cambridge: Harvard University Press.

竹沢尚一郎 (1987). 象徴と権力―儀礼の一般理論 勁草書房

谷口貢・板橋春夫(2014). 日本人の一生――通過儀礼の民俗学 八千代出版

谷智子(2016). 初対面からの縦断的会データにみる相互行為的ディフォルトの構築―ディスコースレベルのポライトネスの観点からー 三牧陽子他(編) インターカルチュラル・コミュニケーションの理論と実践 くろしお出版

田辺洋二.(1996). 褒め言葉の日・英語比較 日本語学(15)5 明治書院

滝浦真人 (2008). ポライトネス入門 研究社

トリアンデイス,H. C. (2003) .個人主義と集団主義: 二つのレンズを通して読み解く文化 (神山貴弥・藤原武弘 (訳) 2002 , 北大路書房),社会心理学研究(18)2.

土屋頼子 (1998). 言語行動を構成する要素とその機能：出会いのあいさつを中心 筑波応用言語学研究(5),pp.57-96.

辻村敏樹 (1989). 待遇表現(特に敬語)と日本語教育 日本語教育(69), pp.1-10.

唐瑩(2014). 初対面場面における中日母語話者の話題選択の対照研究 言語と文明(12) ,pp.113-130.

鄭賢児(2011). 謝罪行動とその反応に関する日韓対照研究―ポライトネス理論の観点 から― 言語･地域文化研究(17), pp. 95-112.

鄭加偵(2006). 謝罪行為における差異―日本語母語話者と中国語母語話者の事例研究アジア社会文化研究会 ,pp.57−73

宇佐美まゆみ (2003). 異文化接触とポライトネスーディスコース･ポライトネス理論の観点から(特集:異文化接触と日本語) 国語学(54)3, pp.117-132.

――――― (2011). 基本的な文字化の原則(Basic Transcription System for Japanese:BTSJ) 2011 年改訂版

宇佐美洋 (2005). 友人間での謝罪時に用いられる語用論的方策―日本語母語話者と中国語母語話者の比較 語用論研究(7), pp.31-44.

渡辺友左 (1977). 「あいさつ」 佐藤喜代治編 国語学研究辞典 明治書院,pp.189-199.

Willber,D.(1976). *Iran:Past and Present* 8th editor, Princeton University Press.

山田富秋 (1999). 会話分析を始めよう 好井･山田･西坂他(編) 会話分析への招待 正解思想社,pp1-35.

山本千津子(2005). 実践的なコミュニケーション能力向上のための待遇表現教育－「言いにくい場面」への取り組みを例にー 日本語教育(126),pp.84-93.

山本もと子 (2004). 社会的相互行為としての謝罪表現－言語表現選択の背景には何があるのか―　信州大学留学生センター紀要(5),pp.19-31.

山岡政紀 (2008). 発話機能論 くろしお出版

山崎敬一･好井裕明 (1984). 会話の順番取りのシステム―エスノメソドロジーへの招待 月刊言語 (13)7, pp.86–94. 大修館書店

古田暁・石井敏・岡部朗一・平井一弘・久米昭元 (2001). 異文化コミュニケーション・キーワード 株式会社有斐閣

吉村慎太郎(1995). イラン・イギリス協定 - マクマホン・ライン、レザー・シァー・パフラヴィー 平凡社・世界民族問題辞典

吉枝聡子(1994). Ta'arof 研究の現状とその問題点―社会言語学的視点から― オリエント 37-1(19),pp.87-103.

吉川香緒子 (2009). 発表を扱う授業における待遇コミュニケーション教育の試み―スピーキングクラスの実践から― アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター紀要(32),pp.108-133.

楊晶(1997). 中国人学習者の日本語の相づち使用に見られる母語からの影響－形態、頻度、タイミング を中心に　言語文化と日本語教育 平田悦朗先生退官記念号(13),pp. 117-128.

ザトラウスキー,ポリー(1993). 日本語の談話の構造分析―勧誘のストラテジーの考察 くろしお出版